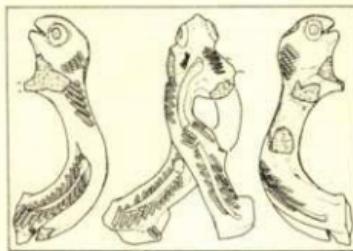


成田新住宅市街地内埋蔵文化財調査報告

山口雷土遺跡



1 9 8 7

千葉県企業庁

財団法人 千葉県文化財センター

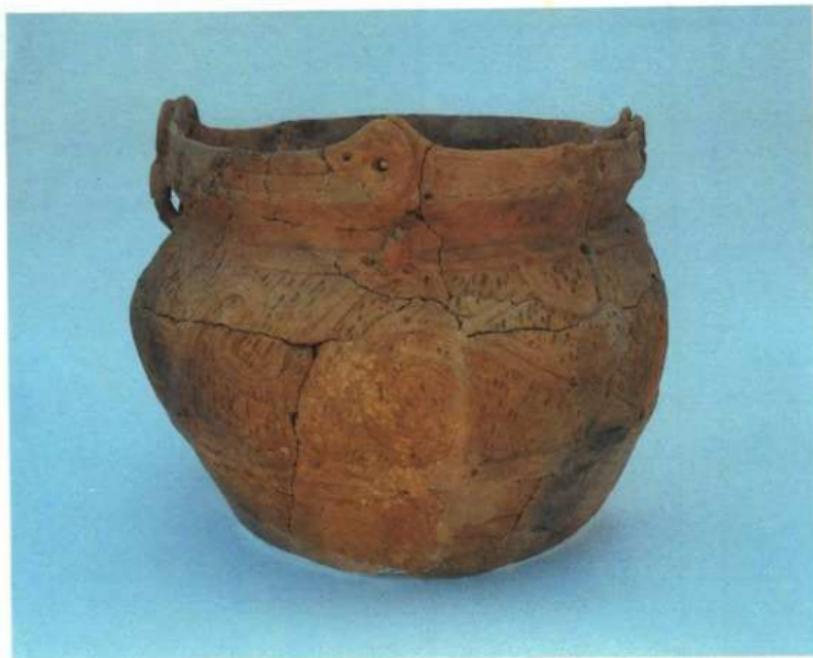
成田新住宅市街地内埋蔵文化財調査報告

山口雷土遺跡

1 9 8 7

千葉県企業庁

財団法人 千葉県文化財センター



38号土塙出土土器



48号土塙出土土器



包含層出土土器把手

序 文

千葉県北部は、広大な下総台地と印旛沼、利根川などが造りだす恵まれた自然環境により、先土器時代から歴史時代に至る数多くの遺跡が残され、この地が古代房総における一つの中心地として繁栄したことを物語っています。また、成田市は、新東京国際空港の開港により、新しい日本の玄関として、近年その発展は目覚しく、古来の文化遺産と国際都市との調和も図られています。

千葉県開発庁（現千葉県企業庁）では、新東京国際空港の開港による成田市及び周辺地域の急激な人口増加を受け入れるため、成田市西部の台地上に成田ニュータウン建設を計画しました。このため千葉県教育委員会では、文化庁、建設省、県開発庁と度重なる協議を行い、八代玉作遺跡をはじめ、船塚・天王塚・瓢塚古墳群などの重要な遺跡を極力公園緑地として現状保存する一方、現状保存が困難な遺跡については、止むを得ず事前に発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずることで協議が整い、昭和44年9月から昭和46年8月にかけて財団法人千葉県北総公社によって発掘調査が実施されました。

ここに報告書を刊行する山口雷土遺跡は、成田ニュータウン内において最後まで造成に着手されずに残されていた地域であります、ニュータウンの入居も進み、ニュータウン建設の進捗により、昭和60年度当センターが発掘調査を行いました。発掘調査の結果、先土器時代から奈良・平安時代に及ぶ遺構・遺物が発見され、特に縄文時代では、後期初頭に位置づけられる土器捨て場と土壙の調査から、居住域の外における人々の活動の一端が明らかにできました。

このたび、整理作業も終了し、「山口雷土遺跡」としてその調査成果を報告する運びとなりました。本書の刊行が、学術的資料としてはもとより、文化財の保護・普及のため、広く一般の方々に活用されることを望んでやみません。

終りに、千葉県企業庁の御協力と千葉県教育文化課、成田市教育委員会の御指導、助言にお礼を申し上げるとともに、酷暑のなかで調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和62年5月

財団法人千葉県文化財センター

理事長 山本孝也

例　　言

1 本書は、千葉県企業庁による、成田地区新住宅市街地内「成田ニュータウン」における、埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2 本書に所収した遺跡は、昭和60年度に調査を実施した山口雷土遺跡である。なお、当センターで使用している遺跡コードは211-033である。

3 調査は、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが行った。

調査部長 鈴木道之助

部長補佐 岡川宏道

班長 矢戸三男

主任調査研究員 及川淳一、調査研究員 郷原英司

4 整理作業、並びに執筆は調査研究員大野康男が、編集は矢戸三男、大野康男が行った。

5 発掘調査から本書の刊行に至るまで、千葉県企業庁、千葉県教育文化課、成田市教育委員会の関係各位をはじめ、多くの方々から御指導、御助言を頂いた。

6 第1章第1図に使用した地形図は、国土地理院発行の1:25000成田である。また、第2図に使用した地形図は、大正14年版の大日本帝国陸地測量部発行の1:25000成田を使用した。

7 本書に使用した方位は、座標北である。

8 遺構番号は、調査時の番号をそのまま使用し、全ての遺構が通し番号となっている。

目 次

序 文

例 言

第1章 序 章 1

第1節 遺跡の位置と環境..... 1

第2節 調査の方法と経過..... 5

第2章 発見された遺構と遺物 9

第1節 先土器時代..... 9

第2節 繩文時代..... 13

1 住居跡..... 13

2 炉穴..... 17

3 土塙..... 28

4 陥し穴状土塙..... 49

5 包含層出土の遺物..... 57

第3節 古墳時代..... 100

第4節 歴史時代..... 106

第3章 調査の成果 -繩文時代の土器- 139

1 土器廃棄の場として..... 139

2 土塙と土器廃棄..... 150

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図 遺跡位置図	3
第3図 遺跡周辺地形図	4
第4図 グリッド設定図	5
第5図 確認調査設定図	6
第6図 遺跡全体図	7
第7図 土層柱状図	9
第8図 遺物出土位置図	10
第9図 石器実測図	11
第10図 石器実測図	12
第11図 13号住居跡及び出土遺物実測図	14
第12図 26号住居跡実測図	16
第13図 26号住居跡出土遺物拓影図	17
第14図 12号炉穴実測図	19
第15図 12号炉穴出土遺物実測図	21
第16図 12号炉穴出土遺物拓影図	22
第17図 12号炉穴出土遺物拓影図	23
第18図 16号炉穴及び出土遺物実測図	26
第19図 37・54号炉穴実測図	27
第20図 8号土塙及び出土遺物実測図	28
第21図 8号土塙出土遺物実測図	29
第22図 8号土塙出土遺物拓影図	31
第23図 18号土塙及び出土遺物実測図	32
第24図 28号土塙及び出土遺物実測図	33
第25図 30号土塙実測図	34
第26図 38号土塙実測図	34
第27図 38号土塙出土遺物実測図	35
第28図 38号土塙出土遺物拓影図	37
第29図 40号土塙及び出土遺物実測図	39
第30図 41号土塙及び出土遺物実測図	41
第31図 42・43・44号土塙実測図	42

第32図	42・44号土塙出土遺物拓影図	43
第33図	45号土塙及び出土遺物実測図	43
第34図	47号土塙及び出土遺物実測図	44
第35図	48号土塙及び出土遺物実測図	45
第36図	51号土塙及び出土遺物拓影図	46
第37図	52号土塙及び出土遺物実測図	48
第38図	4号土塙実測図	49
第39図	14・22号土塙実測図	50
第40図	29・33号土塙実測図	52
第41図	36・39号土塙実測図	53
第42図	46・49号土塙実測図	55
第43図	50・53・55号土塙実測図	56
第44図	遺物出土範囲図	57
第45図	1群土器実測図	58
第46図	2群土器拓影図	59
第47図	3群土器拓影図	61
第48図	4群土器拓影図	63
第49図	5群土器拓影図	65
第50図	6群土器拓影図	67
第51図	7群土器拓影図	69
第52図	8群1類土器拓影図	71
第53図	8群1類土器拓影図	72
第54図	8群1類土器拓影図	74
第55図	8群2類土器実測図	75
第56図	8群2類土器拓影図	77
第57図	8群2類土器拓影図	79
第58図	8群2類土器拓影図	81
第59図	8群3類土器拓影図	83
第60図	8群3類土器拓影図	85
第61図	8群土器拓影図	87
第62図	8群土器把手実測図	88
第63図	8群土器把手実測図	89
第64図	9群土器拓影図	91

第65図	8・9群土器拓影図	93
第66図	10群土器実測図	94
第67図	10群土器拓影図	95
第68図	11群土器拓影図	96
第69図	土器片鑑実測図	97
第70図	石器実測図	98
第71図	石器実測図	99
第72図	27号住居跡実測図	101
第73図	31号住居跡実測図	103
第74図	27・31号住居跡出土遺物実測図	104
第75図	1号住居跡及び出土遺物実測図	107
第76図	2号住居跡及び出土遺物実測図	109
第77図	3号住居跡実測図	111
第78図	3号住居跡出土遺物実測図	112
第79図	5号住居跡実測図	114
第80図	6号住居跡及び出土遺物実測図	115
第81図	10号住居跡及び出土遺物実測図	117
第82図	15号住居跡及び出土遺物実測図	118
第83図	17号住居跡及び出土遺物実測図	120
第84図	19号住居跡実測図	122
第85図	19号住居跡出土遺物実測図	123
第86図	21号住居跡及び出土遺物実測図	125
第87図	35号住居跡及び出土遺物実測図	127
第88図	7号土塙実測図	128
第89図	9・11号土塙実測図	129
第90図	20・24・25号土塙実測図	130
第91図	遺物実測図	132
第92図	遺物実測図	133
第93図	砥石実測図	134
第94図	時期別土器の出土量	140
第95図	土器片の型式別比率	142
第96図	7群土器出土範囲図	143
第97図	8群1類土器出土範囲図	144

第98図 8群1類土器個体資料出土位置.....	145
第99図 8群2類土器出土範囲図.....	146
第100図 8群2類土器個体資料出土位置.....	147
第101図 8群3類・9群土器個体資料出土位置.....	148
第102図 9群土器出土範囲図.....	149

表 目 次

第1表 石器計測表.....	12	第3表 歴史時代土器観察表.....	135
第2表 古墳時代土器観察表.....	105	第4表 造構一覧表.....	154

図版目次

図版 1 航空写真	3. 52号土塁全景
図版 2 航空写真	図版 10 1. 22号土塁全景
図版 3 1. 13号住居跡全景	2. 29号土塁全景
2. 26号住居跡全景	3. 36号土塁全景
3. 12号炉穴全景	図版 11 1. 39号土塁全景
図版 4 1. 16号炉穴全景	2. 46号土塁全景
2. 54号炉穴全景	3. 49号土塁全景
3. 8号土塁全景	図版 12 1. 50号土塁全景
図版 5 1. 18号土塁全景	2. 53号土塁全景
2. 28号土塁全景	3. 55号土塁全景
3. 30号土塁全景	図版 13 1. 27号住居跡全景
図版 6 1. 38号土塁遺物出土状況	2. 27号住居跡遺物出土状況
2. 38号土塁全景	3. 27号住居跡遺物出土状況
3. 40号土塁遺物出土状況	図版 14 1. 27号住居跡のカマド
図版 7 1. 40号土塁全景	2. 31号住居跡全景
2. 41号土塁全景	3. 31号住居跡のカマド
3. 42号土塁全景	図版 15 1. 1号住居跡全景
図版 8 1. 43号土塁全景	2. 2号住居跡全景
2. 44号土塁全景	3. 2号住居跡のカマド
3. 45号土塁全景	図版 16 1. 3号住居跡全景
図版 9 1. 47号土塁全景	2. 3号住居跡遺物出土状況
2. 48号土塁全景	3. 5号住居跡全景

図版 17	1. 6号住居跡全景 2. 6号住居跡遺物出土状況 3. 10号住居跡全景	2. 52号土塙出土土器 3. 45号土塙出土土器
図版 18	1. 10号住居跡のカマド 2. 15号住居跡全景 3. 17号住居跡全景	図版 30 1. 1群土器 図版 31 2. 2群土器 図版 32 1. 3群土器 図版 33 1. 4群土器
図版 19	1. 17号住居跡のカマド 2. 19号住居跡全景 3. 19号住居跡遺物出土状況	図版 33 1. 5群土器 図版 34 1. 6群土器 図版 35 2. 7群土器
図版 20	1. 19号住居跡のカマド 2. 21号住居跡全景 3. 21号住居跡遺物出土状況	図版 35 1. 8群1類土器 図版 36 2. 8群1類土器 図版 37 3. 8群1類土器
図版 21	1. 35号住居跡全景 2. 7号土塙全景 3. 20号土塙全景	図版 38 1. 8群2類土器 図版 39 2. 8群2類土器 図版 40 3. 8群2類土器
図版 22	1. 先土器時代石器 2. 13号住居跡出土土器	図版 41 1. 8群3類土器 図版 42 2. 8群3類土器
図版 23	1. 26号住居跡出土土器 2. 12号炉穴出土土器	図版 43 1. 8群土器 図版 44 2. 8群土器把手
図版 24	1. 12号炉穴出土土器	図版 45 1. 9群土器
図版 25	1. 12号炉穴出土土器 2. 16号炉穴出土土器 3. 8号土塙出土土器	図版 46 1. 8・9群土器 図版 47 2. 10群土器 図版 48 3. 11群土器
図版 26	1. 8号土塙出土土器 2. 28号土塙出土土器 3. 8号土塙出土土器	2. 石器 図版 49 1. 古墳時代の土器 図版 50 2. 3号住居跡出土土器
図版 27	1. 38号土塙出土土器	図版 51 1. 3・6・10・15・17号住居跡出土土器
図版 28	1. 40号土塙出土土器 2. 42号土塙出土土器 3. 40号土塙出土土器片鍬 4. 41号土塙出土土器 5. 41号土塙出土土器	図版 52 1. 19・21号住居跡出土土器 図版 53 2. 35号住居跡・グリッド出土土器 2. 鉄製品 3. 磁石・土製品
図版 29	1. 48号土塙出土土器	

第1章 序章

第1節 遺跡の位置と環境

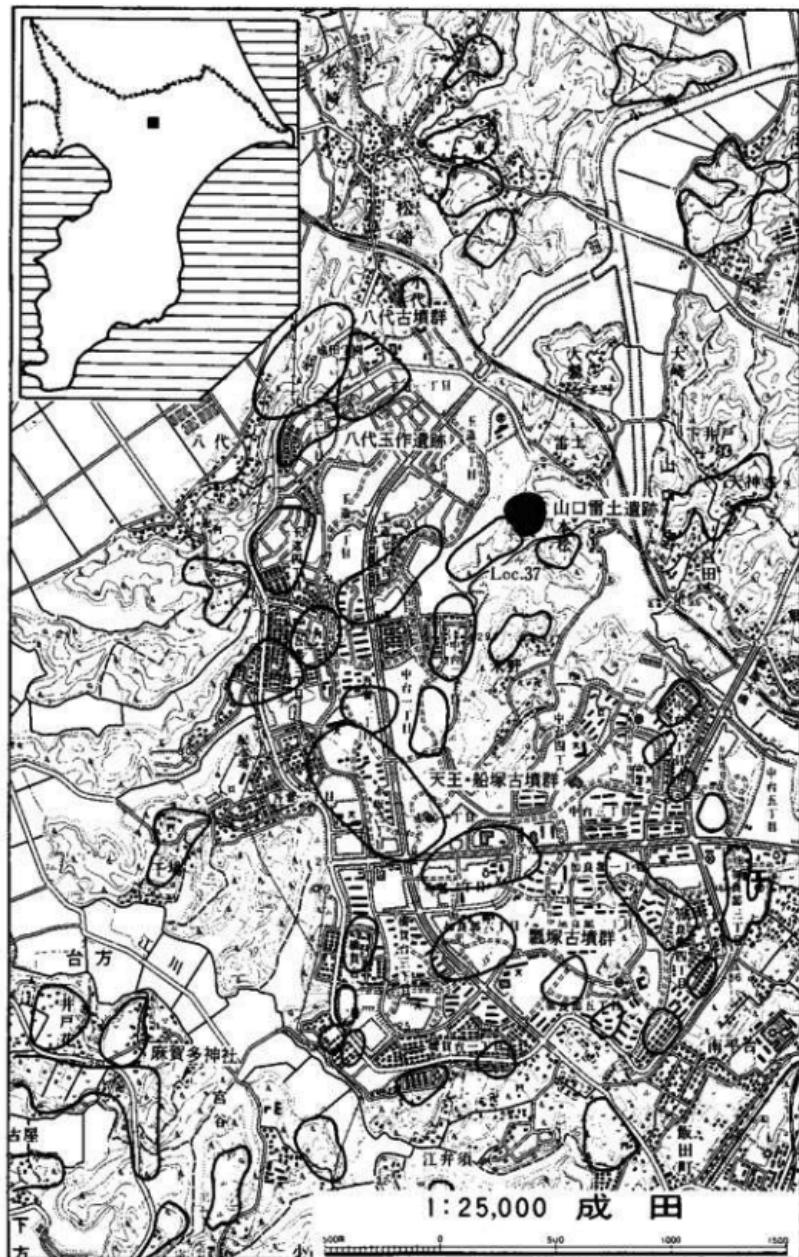
山口雷土遺跡は、千葉県北部の新東京国際空港にほど近い成田ニュータウン内に位置し、地番は成田市玉造5-1280、他となる。成田ニュータウンの建設計画は、新東京国際空港の開港による成田市周辺の急激な人口増加を受入れるために、昭和43年新住宅市街地開発法に基づいて決定した。このためニュータウン建設に伴う埋蔵文化財の取扱について、文化庁と建設省、県教育庁と県開発庁において保存対策について協議が行われ、八代玉作遺跡をはじめ船塚、天王塚、瓢塚等の大形古墳群等重要な遺跡については公園緑地として現状保存することとなった。しかしながら、度重なる協議の結果現状保存が困難な遺跡については発掘調査を行い、記録保存の処置を講じざるを得なかった。このため昭和44年9月から同46年8月にかけて財団法人千葉県北總公社によって発掘調査が実施され、既に「公津原」・「公津原II」として報告書も刊行されている。この間の状況については前記2冊に詳しいので、併せて参照されたい。

さて、今回調査を行った山口雷土遺跡は、成田ニュータウン内でも最後まで造成に着手されずに残されていた地域であり、既に調査が行われているLoc37に隣接し、Loc36とも連続する台地上に当る。地形的には印旛沼東岸の台地上であり、利根川に注ぐ根木名川と印旛沼に注ぐ江川によって開拓されており、標高は約30mの平坦な台地が広がっている。遺跡は根木名川支谷の小橋川奥部に当り、北側に谷を臨む舌状に張り出した台地上である。成田ニュータウン内では利根川側、印旛沼側とも遺跡数には大きな違いはないが、八代玉作遺跡や天王塚・船塚・瓢塚をはじめとする大形古墳は悉く印旛沼ないしその支谷に面している。現利根川までは直線距離で約6kmと近く、繩文時代では小橋川低地遺跡の存在からも小橋川を利用した交通路は重視できる。しかし前記の古墳時代の遺跡の在り方は印旛沼を意識したものであり、印旛沼を生産活動の基盤にしていたのであろうか。但し、印旛沼周辺が水田化したのは佐々木慶一氏の指摘するとおり近世に至ってからであり、古墳時代においてこの広大な沼地を大規模に生産活動、特に水田として利用していたとは考えられない。それにも関わらず古代令制下において、本地域から現栄町にかけては下総国埴生郡の中心的な地域であり、岩屋古墳や龍角寺などは古代下総国においても屈指の勢力の象徴であり、この地における氏族の勢力が非常に強大であったことを物語っている。

* 白石竹雄他「公津原」1975 勅千葉県企業庁

** 白石竹雄他「公津原II」1981 勅千葉県文化財センター

*** 佐々木慶一「龍角寺古墳群調査の意義」『千葉県立房総風土記の丘年報8』



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



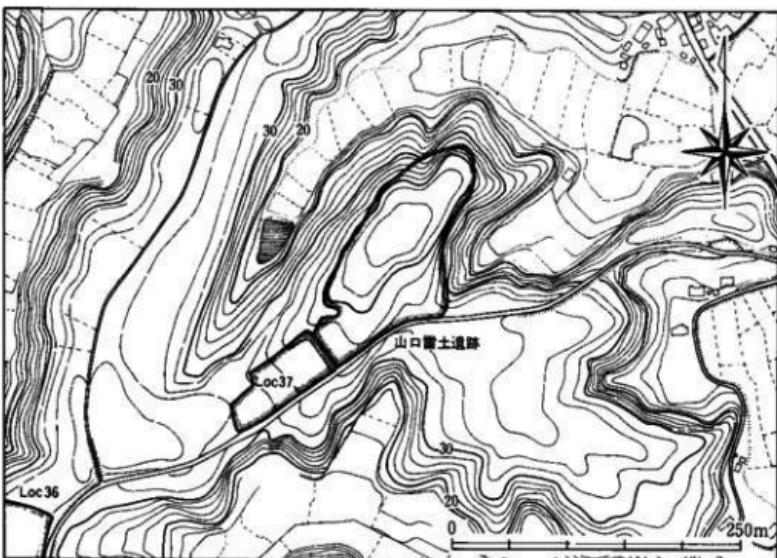
第2図 遺跡位置図 (1:25000)

既に周知のとおり印旛沼周辺地域は先土器時代からの連続とした人々の生活の跡が残され、県内においてもとくに注目される遺跡が数多く位置している。先に触れた八代玉作遺跡や公津原古墳群もその1例であるが、本遺跡と密接な関係にあったと思われる部分について簡単に紹介しておきたい。の中でも看過できないのは縄文時代後期である。「公津原」でも指摘されていることであるが、後期に至り三里塚地区から根木名川以東の台地に遺跡の分布の中心が移動してきている。これらの遺跡は根木名川の支流の宝田川・荒海川・小橋川・取香川等によって開拓された台地縁辺に集中し、或は遺跡の在り方を単位集団ないし、群として捉えられるような解釈も成立立つ可能性が指摘されている^{**}。具体的に小川氏は各支流に対応した群の設定を考えられているようで、上記の支流の他に、印旛沼に直接注ぐ江川も加えられている。これらの中で、後期から晩期まで継続して営まれる遺跡はやはり少なく、荒海貝塚・花輪貝塚・右田遺跡等数えるほどしかない。さらに後期初頭から継続する集落は殆ど皆無に近い状況である。

さて、本遺跡周辺の小橋川地域では郷部加定地遺跡が後期初頭の遺跡として掲げられる。また中期末に遡る遺跡としては中団護台遺跡等も位置している。時期的には郷部加定地遺跡が本

* 堀越正行「縄文時代の集落と共同組織」『駿台史学31』1972

** 小川和博「成田における縄文時代後期の遺跡群」『奈和14』1975



第3図 遺跡周辺地形図

(1 : 5,000)

遺跡と殆ど一致するもので、直線距離にしても2kmと近く、かなり密接な関係を想起させる。しかし、地形的に加定地遺跡は根木名川に臨む位置であり、どのようなものであろうか。

奈良・平安時代の遺跡は成田ニュータウン内にも多く発見され、Loc15・20では四面廂の建物も検出されている。その他近隣地域には前述した龍角寺、埴生郡衙跡と推定される大烟I遺跡等重要な遺跡が位置している。古代令制下において公津原の殆どの部分は埴生郡に属しており、前代の古墳群の分布からも比較的大きな勢力の存在を窺うことができる。それとともに成田は印旛郡から埴生郡、香取郡を結ぶ交通路であり、「後紀」延暦24年10月25日条に山方驛が見える。山方驛は現成田市街に比定できるもので、現在の国道51号線と程近い街道が存在した。しかし「後紀」の記述は鳥取・山方・真敷・荒海の4驛の廃止記事であり、その後の状況は不明である。

* 寺内博之他『成田市郷部北遺跡群調査概要』1984 成田市郷部北遺跡調査会

** 石田広美『主要地方道成田安食線道路改良工事地内埋蔵文化材調査報告』1985 千葉県文化財センター

大野康男『埴生郡衙跡確認調査報告書』1986 千葉県教育委員会

*** 江川を隔てて位置する式内社の麻賀多神社は印旛郡に属する。

**** 杉山晋作『古墳群形成にみる東国の地方組織と構成集団の一例—公津原古墳群とその近隣—』「国立歴史民俗博物館研究報告1」1982

第2節 調査の方法と経過

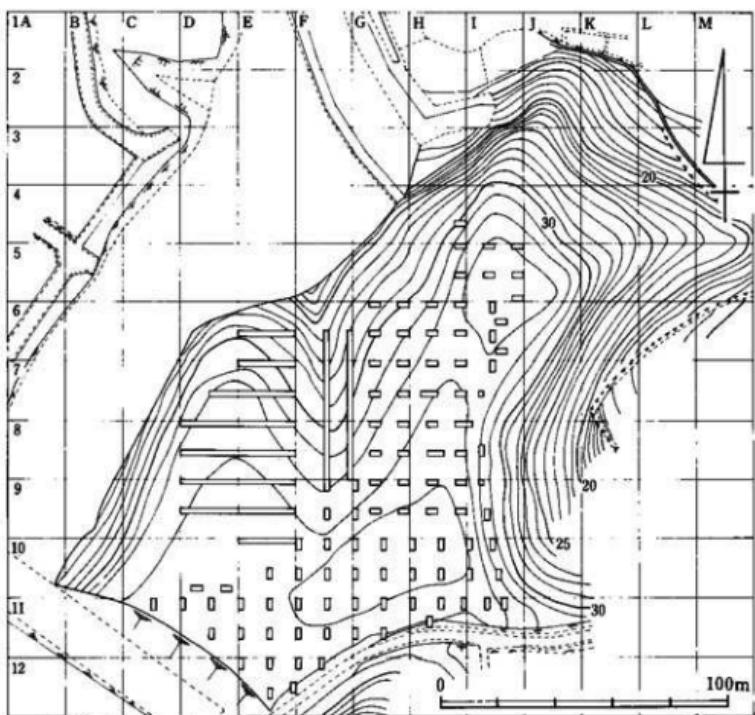
本遺跡の調査は昭和60年度事業の当初計画に含まれていなかったが、千葉県都市公社と千葉県教育庁文化課との協議の結果、急速調査の要請があり、昭和60年6月1日に調査に着手した。隣接する Loc37は「新東京国際空港関係予定地区遺跡分布調査報告書」に早期・土師器と報告されており、昭和43年からの調査でも対象地となつたが、遺構は検出できていない。調査においては公共座標系第IV系に基づくグリッドを設定し、第5・6図に示したように20mメッシュのグリッドを設定した。各グリッドは第4図に示したようにさらに2m間隔の小グリッドに分割し、各グリッドの呼称はX軸に数字を、Y軸にアルファベットを当て、小グリッドは00～99とした。調査は6月1日から確認調査に着手したが、現状は部分的に著しく擾乱を受けており、労働力を考えて重機を使用した箇所もある。第5図に確認調査の実施グリッドを示し、対象範囲15000m²について上層1500m²、下層600m²を実施した。確認調査では基本的に遺物の包含の状況、遺構の有無並びに、遺構の性格が充分把握できない場合は、若干の拡張ないし掘り下げを行っている。さらに、西側斜面については比較的緩斜面を形成しているため、かなり下位にまでトレーンチを設定し、特に第5図でも分かるように浅い谷の周辺を重点的に行った。その結果斜面上位では、2軒の住居跡を確認することができたが、斜面下位では遺構は存在せず、また谷についても遺物の廃棄等は認められなかった。確認調査の結果、千葉県教育委員会から上層10000m²、下層200m²の範囲の指示を受けた。なお上層の調査には、包含層調査2000m²が含まれている。この指示を受けて9月1日から本調査に着手した。調査は重機を使用して表土を除去することから開始したが、包含層調査区については全く表土を除去するだけで、多くの部分を入力で行なうこととした。包含層調査区は9F・9G・10F・10Gグリッドに及び、分層を試みたが、基本的には堆積状況から全体的な分層は不可能であった。遺物の取り上げは2mメッシュの小グリッドで一括し、また遺物の比較もグリッド単位で行なうこととした。これは2mメッシュという単位の設定で、遺物廃棄の状況を充分復原できるとの予想に立っている。従って遺物のドットは行っていない。

先土器時代の調査は、確認調査において遺物が検出されたグリッドを中心に拡張を行った。全体で5ヶ所を拡張したが、その殆どがIII層において遺物を検出しており、作業量としてはあまり大きなものではない。調査の結果あまり大きな広がりを持つものはなく、殆どが比較的狭い範囲の拡張で調査を終了した。

00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11								
20		22							
30			33						
40				44					
50					55				
60						66			
70							77		
80								88	
90									99

第4図 グリッド設定図

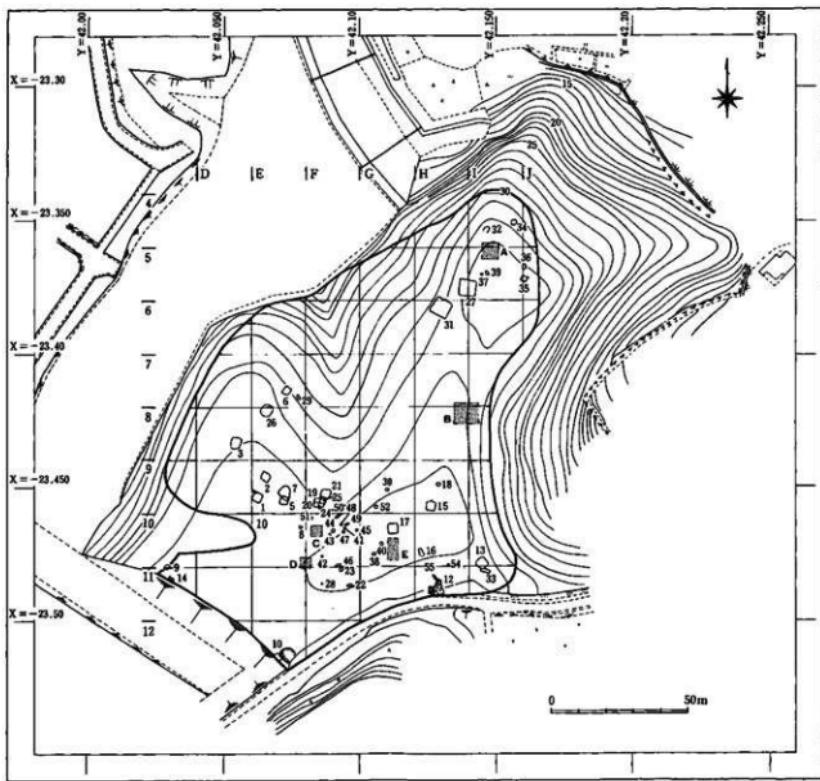
* 滝口 宏他「新東京国際空港関係予定地区遺跡分布調査報告書」1970 千葉県教育委員会



第5図 確認調査設定図

遺構の調査は包含層調査を行った都合、II層中で殆どのプランを確認している。しかし住居跡においても覆土と地山の識別は容易ではなく、プランを確定しにくく遺構の検出に手間取った。なお遺構番号は調査順に1から付けており、遺構ごとのナンバリングはしていない。精査は基本的に住居跡は十字、土塁等は半載により土層断面の観察を行い、断面図はその都度作成している。

遺構精査後、平面図、遺物出土状況図、写真等による記録を行い、縮尺は土塁が $1/10$ 、住居跡は $1/50$ で実測した。なお平面図の実測には平板を使用している。カマドは基本的に十字の断面観察の後、袖を残して埋土を除去し、その時点で平面図を作成している。また遺存状況が悪く、殆ど袖が崩れているものが多く、そのようなものについては、敢えて袖を残すことはしなかつた。11月30日器材を撤収し、現場での作業を終了した。



第6図 遺跡全体図

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 先土器時代

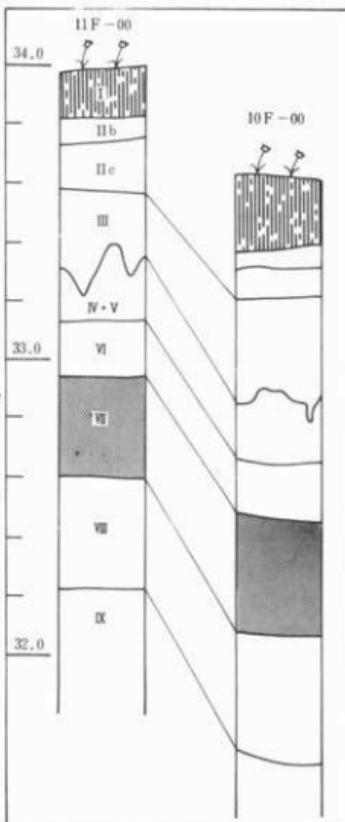
先土器時代の調査は、前述した確認調査の結果A～Eの5地点で遺物が出土したため、本調査として遺物を検出したグリッドを中心に調査区を拡張して行なった。それぞれの地点とも数点の遺物が追加されただけで、大きな広がりや石器の集中は見られなかった。また基本的に殆どの遺物がIII層からの出土である。

A 地点 4 I-94グリッドにおいて3点の石器が出土した。いずれもIII層の遺物と考えられるが、一部II層から出土したものも含まれる。また、1はIII層に包含されていたが、縄文期の石器の可能性も考えられるものである。形状は自然礫をそのまま使用した敲石で、端部に敲打痕が観察できる。使用の状況はそれほど顕著なものではない。石材は安山岩である。

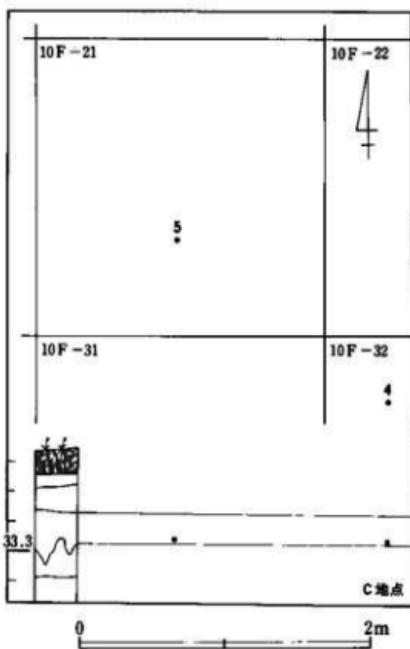
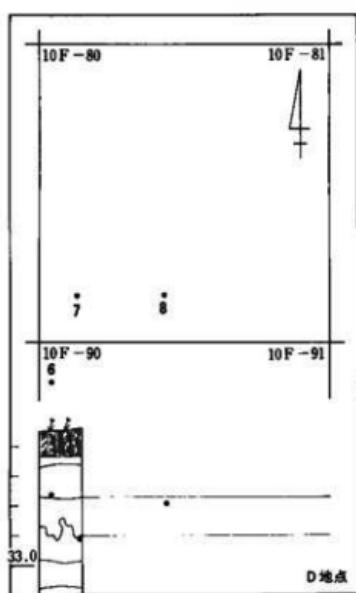
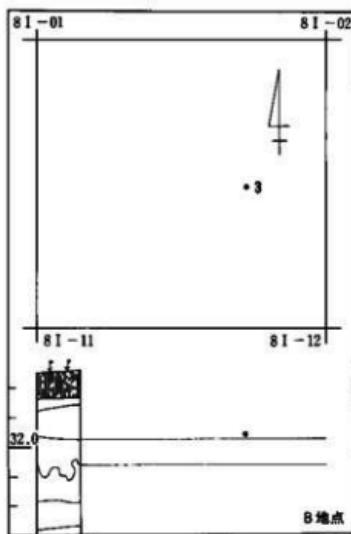
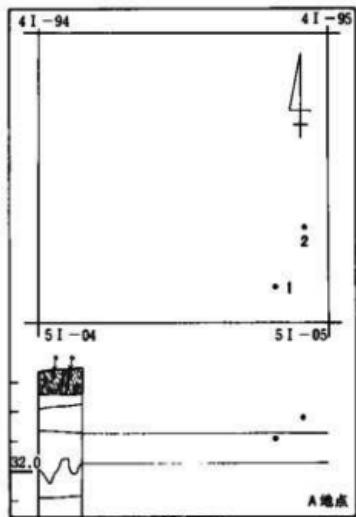
B 地点 8 I-01グリッドから1点だけであるが石器が出土している。出土層位はIII層直上であるが、恐らくはIII層中に包含されていたものと考えられる。器種はナイフ形石器で、約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。素材の縦長剝片の一側縁にプランティングを施しただけで、基部にはプラットホームを残し、基部調整も行われていない。石材は比較的気泡の多い黒耀石である。

C 地点 10 F-21・31において2点の石器が出土している。2点ともIII層下部からの出土であり、石材はとともに珪質頁岩である。但し、同一母岩から剥離されたものではない。5は削器である。やや不定形な剝片の側縁にかなり細かい調整が施されており、また調整が施されていない部分にも僅かながら使用痕が観察できる。4は縦長の剝片の一部にリタツチが観察できる。

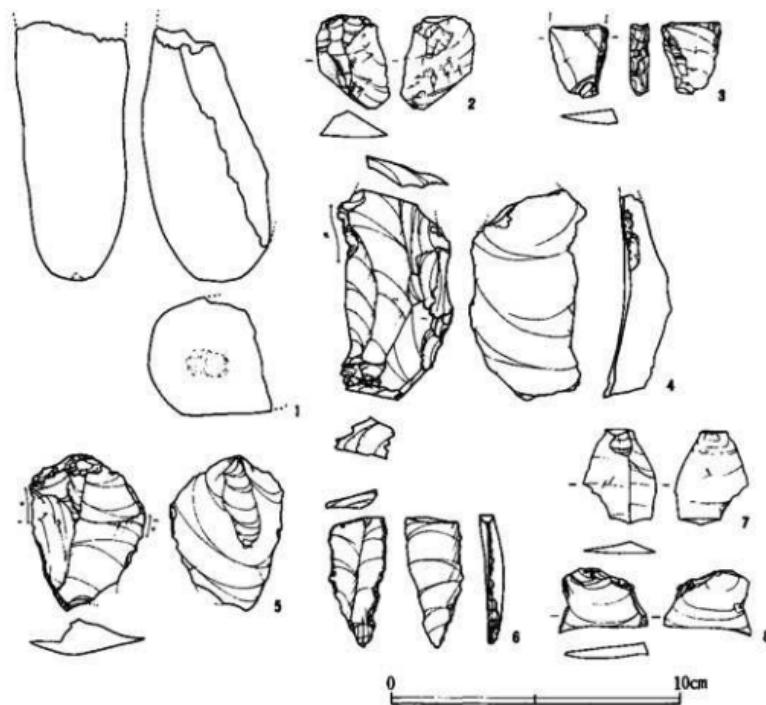
D 地点 10 F-80・90において3点の石器が出土している。このうち2点の剝片は同一母岩から剥離されたもので、やはり珪質頁岩である。6はナイフ形



第7図 土層柱状図



第8図 遺物出土位置図

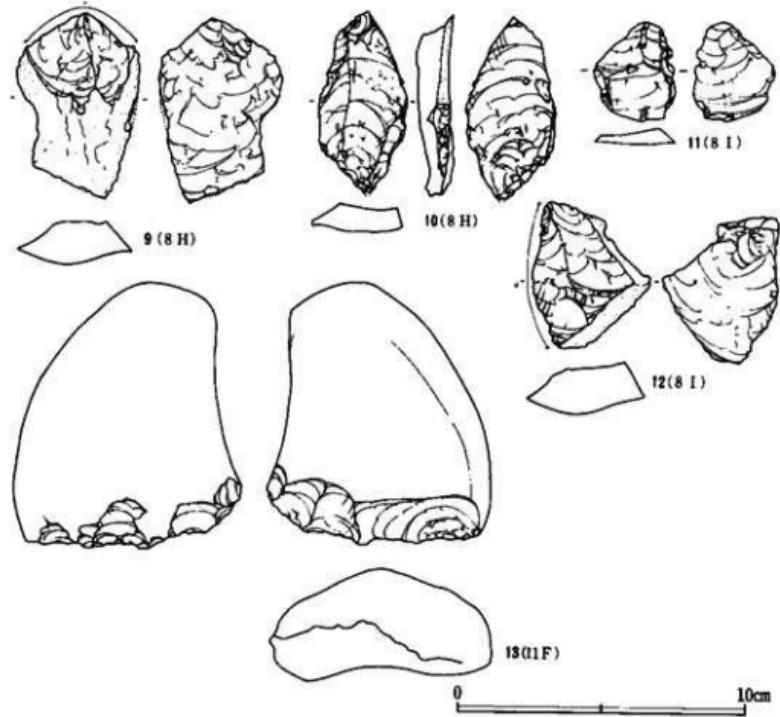


第9図 石器実測図

石器で刃部を欠損している。素材が良いため形状は整っており、さらに打点に近い部分を削除し、バルブは残されていない。プランティングは両側縁に施され、基部は特に入念であるが、裏部の基部調整はない。石材は黒耀石で、気泡も少なく半透明である。

以上が先土器時代の本調査によって得られた資料であるが、この他にも上層の遺構調査等によって出土した数点の石器がある。第10図にまとめて紹介した。11・12は出土位置からB地点に含まれる可能性があり、石材も比較的気泡の多い黒耀石である。また9・10も気泡の多い黒耀石である。

10はナイフ形石器で、大形の剣片の基部に近い一侧縁にプランティングが施されている。バルブは取り除かれることはなく、また素材自体がやや厚めであるため、刃部は角度がある。9・12は自然面を残す不定形な剣片であるが、使用痕が観察できる。ともに再調整を加えることはなく、素材をそのまま使用している。13は櫛器で両側から刃部が形成されている。また、刃部左側は使用のためか先端に丸みを帯びている。石材は珪質頁岩である。



第10図 石器実測図

第1表 石器計測表

No	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
1	敲石	89	40.5	38	169.4	安山岩
2	剥片	33	23.4	9	5.6	黑耀石
3	ナイフ形石器	25.4	20.5	6.5	3.2	黑耀石
4	剥片	72	38	17	38.4	珪質頁岩
5	剥片	54	40	12	14.5	珪質頁岩
6	ナイフ形石器	44	20	5	4.8	黑耀石
7	剥片	32	25	4	2.8	珪質頁岩
8	剥片	21	30.5	4	3.1	珪質頁岩
9	剥片	64	42	14.5	34.6	黑耀石
10	ナイフ形石器	63	31	9	18.8	黑耀石
11	剥片	34	28	5	5.8	黑耀石
12	剥片	50	41	15	25.2	黑耀石
13	砾器	88	78	32	286.4	珪質頁岩

第2節 繩文時代

繩文時代の遺構は、住居跡・炉穴・土塙を検出した他、後期初頭を中心とする良好な包含層を調査することができた。包含層は9F・9G・10F・10G・11F・11Gにかけての範囲に見られ、また土塙もほぼ重複する範囲で検出されている。しかし、これらの包含層を形成する原因者の居住域は確認することができず、発見された2軒の住居跡も、時期的に一致するものではない。包含層からはこの他にも繩文時代各期にわたる遺物が出土しており、その様相はかなりバラエティーに富んでいる。

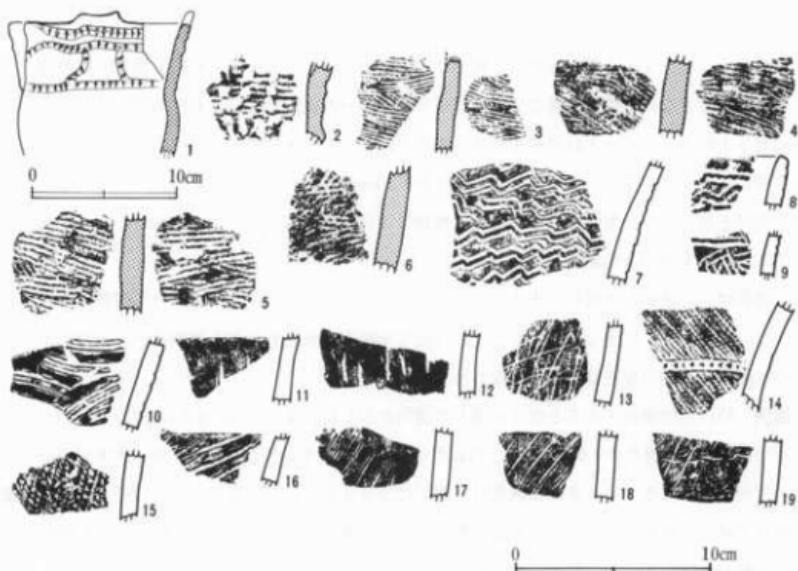
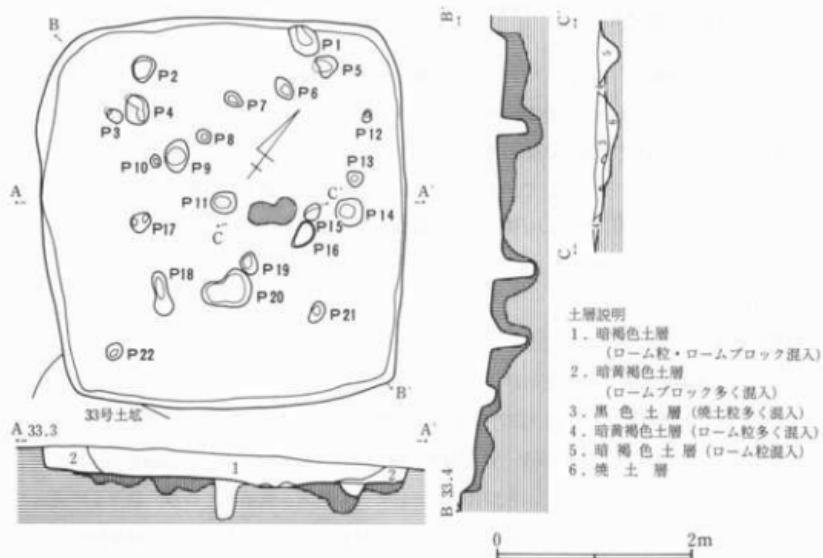
1 住居跡

13号住居跡(第11図、図版3・22)

調査区南東隅に検出された住居跡で、33号土塙と重複している。33号土塙は所謂陥穴状を呈するもので、土層断面からも33→13の先後関係が確認されている。住居跡の規模は4×3.8mの方形を呈し、主軸の方向はN-63°-Eを指す。掘り込みは確認面から20~30cmを測り、ソフトロームを主体とし、ハードロームを混入した土によって貼床を構築している。貼床を除去した後の掘方はかなりの凹凸があり、基本的にピットに対応している。即ち、住居構築開始時において柱の位置を考慮していたようで、掘方の凹凸と対応するP-5・9・11・14・18・21の6ヶ所を主柱穴と考える。これらのピットは床面から20~30cmの深さを有している。住居跡の覆土は2層に分層したが、1層とした暗褐色土層が殆ど主体となり、2層は壁付近に僅かに堆積するだけである。また1・2層ともローム粒やロームブロックの混入が見られ、一概に自然堆積とする事はできない。炉は住居の中央よりやや東に寄った位置に設けられており、炉の東西両側にピットがある。ピットは先の主柱穴と推定されるP-11・14が含まれており、炉に対する南北壁に出入入口部が想定できる。炉の規模は30×50cmの精円形を呈しており、このことも出入口の方向を想定する一要因となる。焼土の堆積はさほど厚くはないが、炉底面はかなり加熱されており、炉東側がより顯著である。

遺物はごく僅かに土器片が出土しただけで、住居の時期を明確に決定付ける資料は得られていない。しかし、出土した僅かな土器片は統て早期末の条痕文土器と前期後半の土器であり、それ以降の土器の存在は確認できなかった。

遺物 特に取扱選択することなく一通りの遺物を示した。1は全周の約1/4が遺存しており、推定口径12.5cm、現存高9.6cmを測る。口縁部は現存部分で1ヶ所波状となるが、本来何単位であったかは復原できない。また口縁部は、頂部にスリットを施す隆帯により文様帯を構成し、隆帯は窓状の区画を描いている。胴部は無文であり、隆帯の区画内とともに横位ないし縦位のナデ調整が施されている。胎土には大粒の石英粒・白色の粒子とともに僅かながら植物纖維を混入している。この土器は入海1ないし2式に類例が求められるが、胎土等において入海式とは



第11図 13号住居跡及び出土遺物実測図

やや異質な感がある。

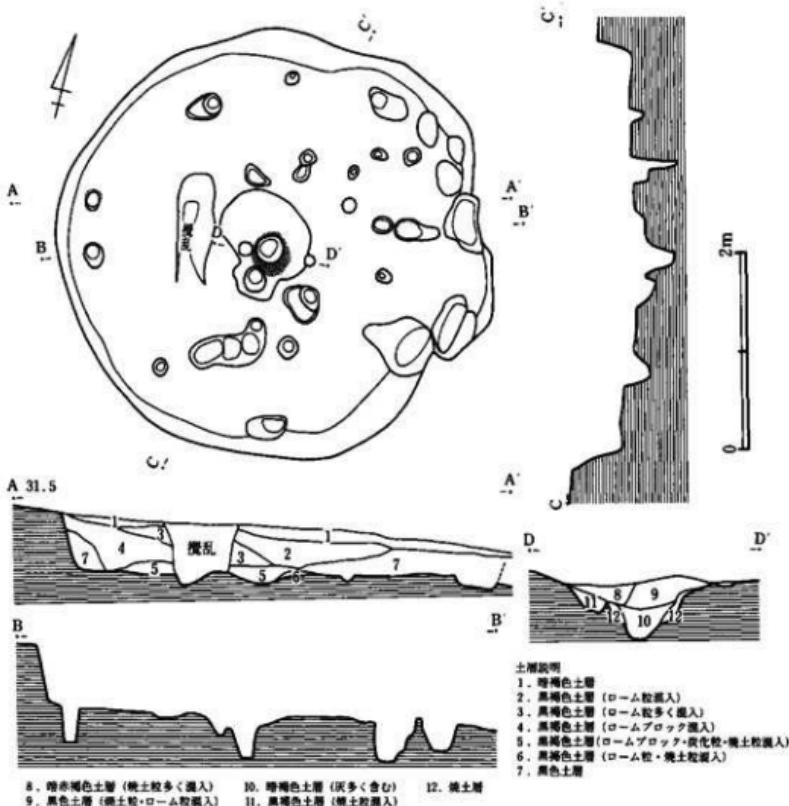
2～5は早期末の条痕文土器である。本住居跡に伴うものとは考えられず、12号炉穴が近いことから混入したものであろうが、本住居跡の時期が明確にできないため、一応図示した。2は低平な隆起の区画と竹管刺突の文様帶を構成し、後述する12号炉穴においても類似した土器が出土している。内面は剥落が著しいため拓影を省いたが、内面にも同様な刺突が施され、あまり例を見ないものである。他の破片は文様帶を含まないが、共通して胎土への纖維の混入はあまり多くない。

7～19は前期後半の土器である。これらより新しい時期の土器が見られないことから、本住居の構築もこの時期に近いと推定できるが、あまり積極的なものではない。7～14は半載竹管を用いた施文が行われている。7・8・9等は諸磯a式土器に一般に見られるように、鋸歯状に連続する平行沈線で、7は若干崩れているが同類であろう。8・9は遺存状況が悪く詳述できないが、7については胎土に大粒の石英粒を混入し、やや粗いものである。10はモチーフが異なり、弧状の平行沈線を配している。7に比べ混合剤は少ないが胎土はさらに粗く、内面が入念に磨かれている。11・12も半載竹管を用いているのであるが、側縁を使用したものと考えられ、断面はかなり鋭い。14～19は繩文が施されている。14は連続爪形文が伴い、10とともに、諸磯b式の特徴を表している。原体はR¹で、胎土は7にかなり近い。15～19は繩文だけしか観察できず、原体は15がL¹、16は撚糸であろうか。17・18・19は同一個体で19に見るよう結節を伴うものである。

26号住居跡(第12・13図、図版3・23)

8E基準点の近くで検出された住居跡で、僅かであるが西側の斜面にかかる構築されている。規模は直径約4.5mで、ほぼ円形のプランを呈している。確認面からの深さは、斜面上位で60cmと比較的深いが、斜面下位では壁も不明確な部分もあった。覆土は住居廃絶後かなり短期間に全体が堆積している。5層は焼土や炭化粒の混入が多く、また斜面上位からの流入という状況も見られず、上屋の焼失ないしは廃棄によるものであろう。覆土の大部分はローム粒・ロームブロックの混入が見られるが、基本的に斜面上位からの堆積である。床面はほぼ平坦に構築されており、ピットの配置を考えると東側に張り出しがあったものと理解できる。また張り出し部の両側にピットも配されており、そのまま入口と考えてよさうである。ピットは小さいものも含めるとかなり多く発見することができ、33ヶ所を数える。浅いものについては下場のラインを入れなかったが、一応壁に沿って並ぶ様子が観察できる。炉は住居のほぼ中央に設けられ、炉の周辺を含め約1mの範囲が浅くほんでいる。焼土の堆積はあまり厚くなく、灰を多く含む10層が主体となる。

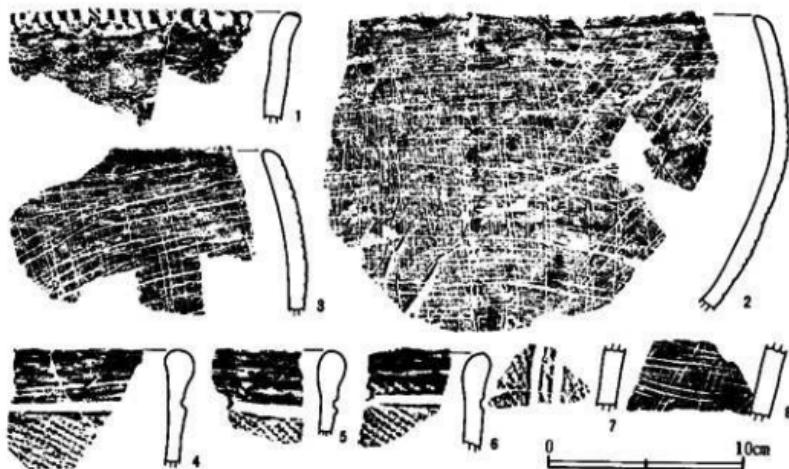
遺物は極めて少なく、住居跡との関係もあまり深く考えられない。但し2・3は床面直上から出土しており、またこの時期の土器が主体となることから住居の廃絶に近いものであろう。



第12図 26号住居跡実測図

また1は明らかに伴わないのであるが、一応紹介しておく。

遺物 1は早期末の条痕文土器である。内外面とも条痕は施されず、横位の擦痕が見られる。口唇部は僅かに外反し、端部は棒状工具で刻んでいる。2・3は同一個体である。口縁部は大きく内湾し、さほど深くない鉢になると思われる。器面は条線を縦横に密に施し、それ以外の施文はない。内面はかなり良く磨いており、やはり中期末とすることが妥当であろう。4～7も同一個体である。口縁部は直立し、沈線区画の無文帯が残る。無文帯は際立って丁寧な調整ではないが、口唇端部に限って入念に磨いている。沈線には円形の刺突が伴い後期初頭の様相を呈している。なお原体はL型の複節である。8も条線文であるが、原体も幅がやや太く先端の加工が無いものを使用している。



第13図 26号住居跡出土遺物拓影図

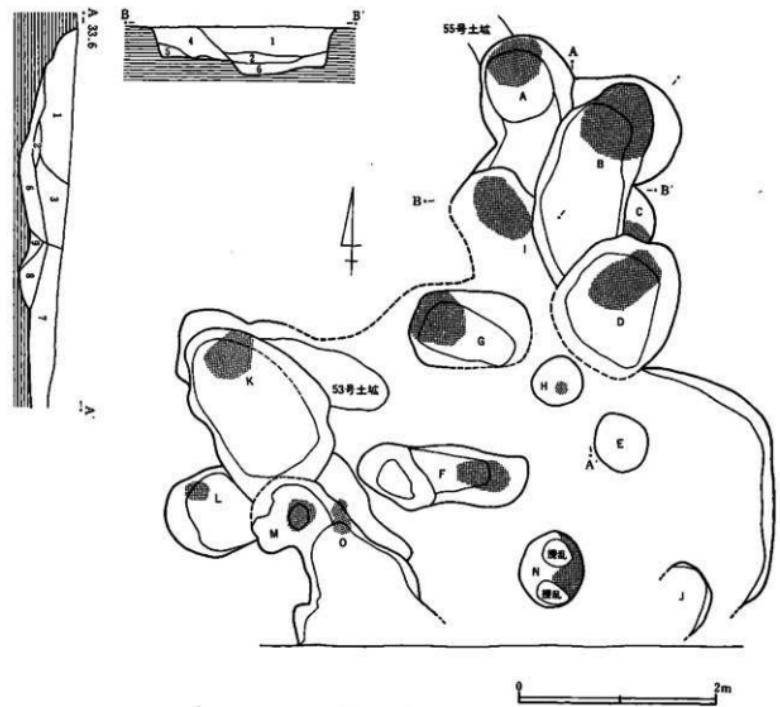
2 炉穴

12号炉穴(第14, 15, 16, 17図、図版3・23~25)

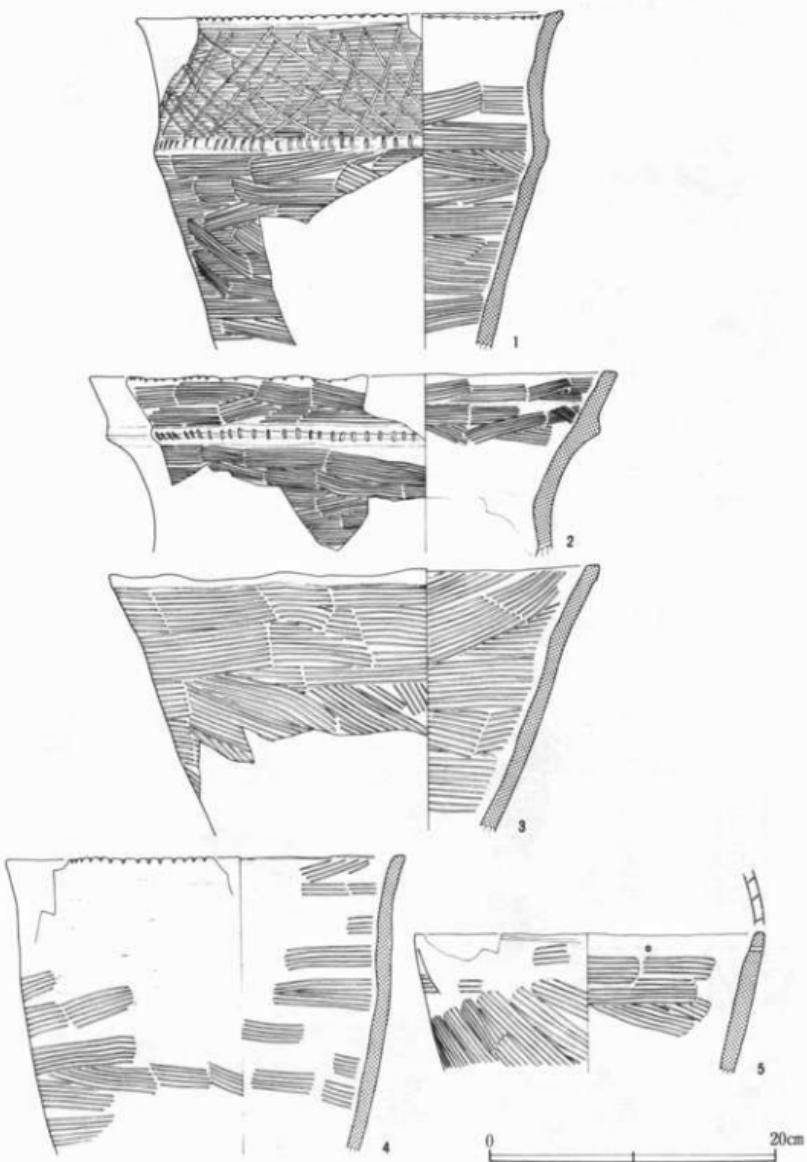
調査区南端に検出した炉穴で、53・55号土塙と重複している。本炉穴A・Kと土塙の関係は明らかで、12号炉穴全体としてもこの2基の土塙より新しいものである。さて、本炉穴はかなり複雑に重複しており、各炉穴を具体的に分離することはできなかった。残された火床だけを見ても13ヶ所を数え、それぞれ便宜的にA～Oのアルファベットで示した。この中には火床が明らかでないものも含まれるが、掘方が明確なため数に含めたものもある。全体的な規模は6m四方に広がり、全体がごく浅い掘方内に納まっている。各炉穴の主軸方位には若干の相違が認められるが、F・Gを除けば掘方北側に火床が位置するという構造をとる。また、K・Oの上面にはこの2基よりも広い範囲に貼床が構築されていて、KないしOを使用するに当たり、掘方自体よりもかなり広い範囲が使用に際して必要な空間であったことを物語っている。なお、貼床上には新たにM・Fが構築されている。この他に確認されている先後関係は、I→B, C→D→B, K→M, O→Mである。個々の炉穴の中で全体形が復原できるものはB・D・F・G・Kの5基である。それぞれの規模は、B 1.0×2.5m, D 1.3×1.2m, F 1.7×0.6m, G 1.3×0.8m, K 2.1×1.1mとなる。

A 北端に位置しI・Bと重複している。前述したように、I→Bは確認されているが、Aとの関係は不明である。長軸は1.5m以上あり、ほぼ方位に沿っている。確認面からは約40cmの深さを有し、焼土の堆積は北側の壁にかかっている。

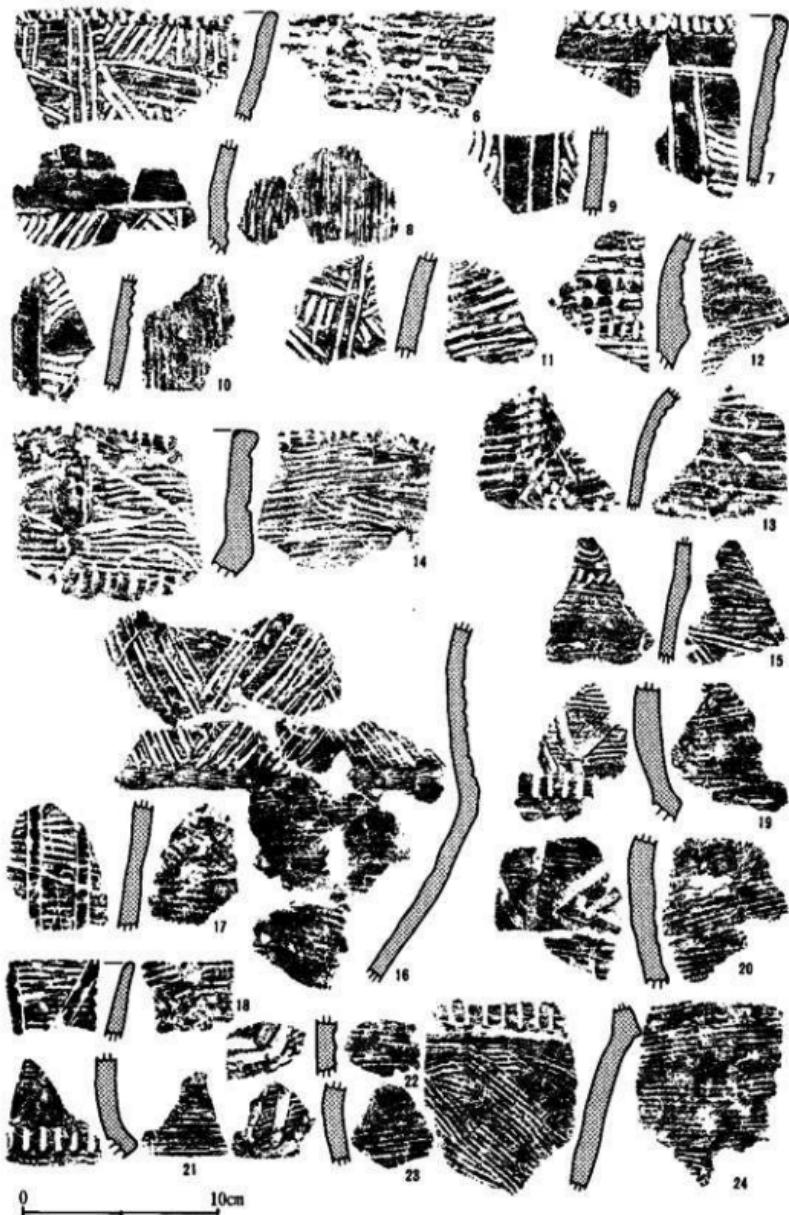
- B A・C・D・Iと重複し、Aを除く他の3基より新しい。方向はAと一致し、火床は約20cm下位に構築されている。焼土はやはり壁にかかって堆積している。
- C B・Dに挟まれて火床を含む極一部が遺存している。全体形は全く復原できないが、恐らくDとほぼ重なる位置であったと推定できる。
- D B・C・Iと重複している。確認面からは約40cmの深さを有し、火床はBの足場の10cm下位に構築されている。
- E 焼土の堆積は見られないが、径50cmの範囲が火熱を受けており、火床として認識できる。足場の方向も明らかにできていないが、南ないし東に設けられていたのではないか。
- F 重複が無く全形が明らかである。唯一掘方の東側に火床が位置し、足場に向って下っている。焼土の堆積も厚くはなく、また火床とした範囲もあまり火熱を受けた様子はない。
- G Gも重複がなく全形が明らかである。GはFと逆で、掘方の西側に火床が設けられている。かなり急に掘り込まれていて、Iの足場からさらに25cm下位に位置する。
- H Eと並び径50cmほどが浅くくぼんでいる。やはり焼土の堆積は殆どないが、底面に火熱を受けており、火床とすることができる。
- I A・B・Dと重複しており、I→Bの関係が確認されている。火床はBの足場より約10cm上位に構築され、南北に長い焼土の堆積を見ることができる。
- J 南東端に位置し、径50cmの範囲が浅くくぼんでいる。焼土の堆積は全く見られず、底面に僅かな火熱を受けた痕跡が残る。
- K M・Lと重複しているが、かろうじて全形を窺うことができる。確認面からの深さは約40cm、足場はそれより10cm上位となる。焼土は東側の壁にかかって堆積し、その中心は53号土塙の上面に当る。
- L K・Mと重複し全形は復原できないが、Gと同じく掘方西側に火床が位置している。焼土は径20cmと狭い範囲であるが、10cmの厚さを有する。
- M K・L・Oと重複する位置に当るが、前述したように貼床の上に構築されており、この部分では最も新しい構築である。掘方体はあまり明瞭でなく、南側の部分を含めてよいか判然としない。
- N J・Eと並び約60cmの範囲が浅くくぼんでいる。またその大部分に擾乱をうけており、僅かに焼土の堆積が見られるだけである。
- O Mと並び僅かな焼土と底面に火熱を受けた部分がある。底面の状況から火熱を受けた部分は2ヶ所と見られ、或は2基が重複しているのかもしれない。
- 遺物 土器はかなり多く出土しており、うち5個体を実測した。また、図示しなかったが1~2cmの小石が20点ほど出土している。これらの小石は覆土に包含されていたもので、特に火熱を受けたような痕跡はない。土器はF・K付近に特に集中し、その他B、E・Jにも比較的集



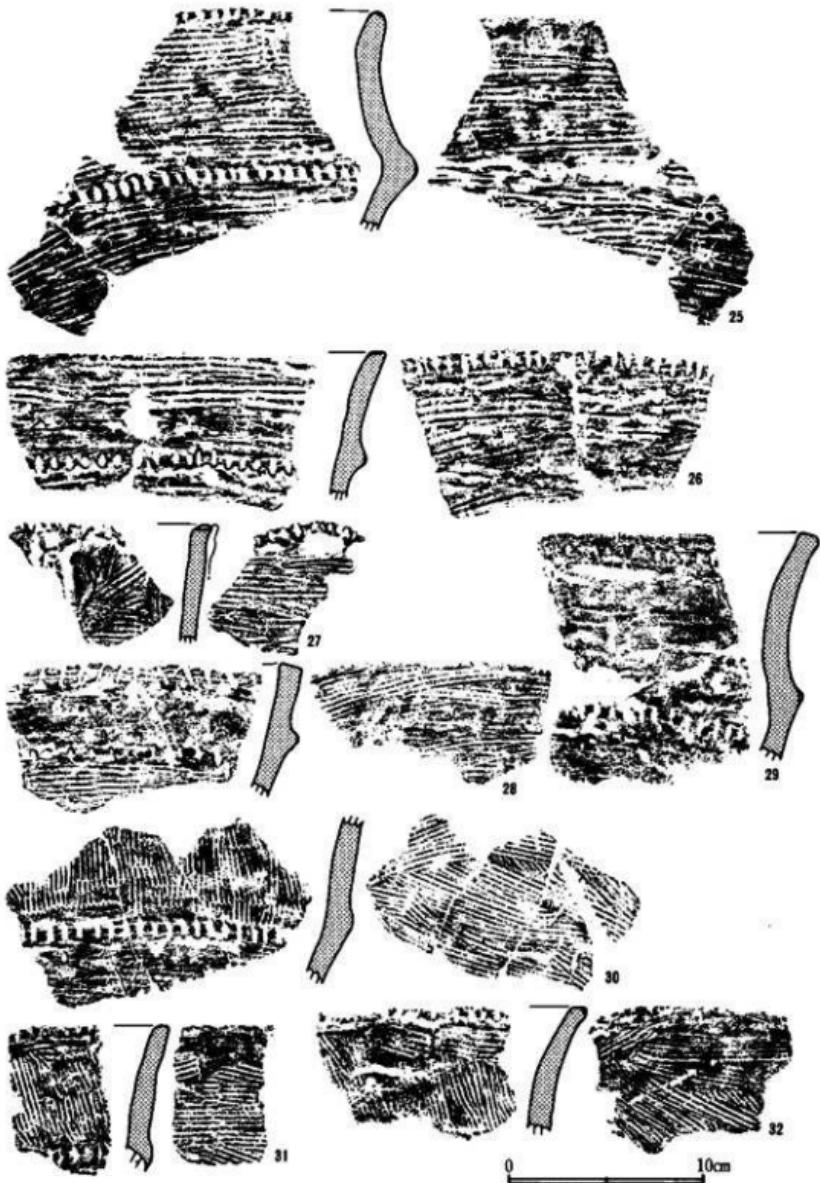
第14图 12号炉穴实测图



第15図 12号炉穴出土遺物実測図



第16図 12号炉穴出土遺物拓影図



第17図 12号炉穴出土遺物拓影図

まっている。

1はBから出土したもので、全周の約 $\frac{1}{4}$ が遺存している。推定口径は29.4cmを測り、口縁部に隆帯で区画した文様帶を構成している。口唇部は面を有して納められ、隆带上と同一工具で内外両面から刻んでいる。隆帯は低平で、区画された文様帶には沈線を施している。なお条痕は内外面とも横位で、口縁部内面は施されていない。2はFから出土したもので、やはり全周の $\frac{1}{4}$ 程度しか遺存していない。口径は36cm前後と推定され、かなり大形であるが、口縁部での外反が大きく、全体としてさほど大きく感じない。器面の構成は基本的に1と同じで、1に比べ文様帶の幅が狭く、また文様帶内に施文が行われていない。口唇部は面を有して納められ、外側から刻んでいる。工具は隆带上と同一であるが、やや仕上がりが異なっている。なお、隆帯は1に比べてシャープである。3はE・F・H・Kから出土したもので、特にF・Eから大部分が出土した。やはり全周の $\frac{1}{4}$ 程度しか遺存していないが、かなり大きく開く器形で、口径は34cm前後と推定できる。口唇部は面を有して納められ、口縁部には目立った文様帶は構成していない。ただ、幅1cm程度のかなりはっきりした無文帶が廻らせてある。現存部分での条痕は横位であるが、外面下半で斜位から縦位となるようである。4も3に近くF・H・Kから出土しているが、その大部分はFからの出土である。部分的にかなり欠損しているが、底部を除きほぼ全形が復原できた。口径は27.5cmを測り、端部はかなり鋭利に刻んでいる。文様帶は構成されず、内外面とも横位の条痕を基本とするが、口縁に近い部分で擦痕となる。5はEから出土したもので一部Jの覆土にも包含されていた。全周の約 $\frac{1}{4}$ が遺存しており、口径は24.3cmと小形である。端部はやはり面を有して納められ、鋭利に刻んでいる。文様帶は構成されないが、外面は条痕の施しかたに違いが見られ、口縁部は幅3cmを横位、それ以下を斜位に施している。また現存部では、1ヶ所だけであるが、口縁部に焼成前の穿孔がある。以上5点が実測可能であり、この他特徴的なものを拓影図に示した。この5点の中では4が比較的焼成が良いものの、他はやはり脆弱である。また共通して纖維の混入はあまり多くなく、微細な長石粒が目立つ。

第16図は口縁部に文様帶を構成し、尚且つ文様帶内に条痕以外の施文があるものである。6～11はほぼ同じモチーフを描くもので、7・8・10は同一個体である。文様帶は主要な部分を縦横の沈線で区画し、区画内にさらに沈線を充填するというもので、茅山下層式でもやや古い様相を呈している。また、7・8に見るように、口唇部は沈線と同一工具で細かく刻んでいる。12以降は隆帯で区画された文様帶を構成しているもので、19～24は同一個体である。12は文様帶に竹管刺突を充填しており、6～11と同類である。この他竹管刺突があるのは13で、かなり薄い仕上りで異質である。これ以外の土器は基本的に第15図1と同じ構成となるもので、16のように工具の使い方等に細かい相違点は認められるものの、文様帶に描かれる沈線は大きく変わらない。このうち14は縦位の文様区画に極めて低い隆帯を使用し、4単位程度と考えられる。

また、17～24は沈線の幅がかなり広く描かれているが、やはり竹管を使用したものであろう。ここで注意が必要なのは15・16である。15は文様帶内に蛇行する条痕を施し、16は隆帯上に貝殻背压痕を連続させている。背压痕は条痕に使用したものとは別の貝を用意している。

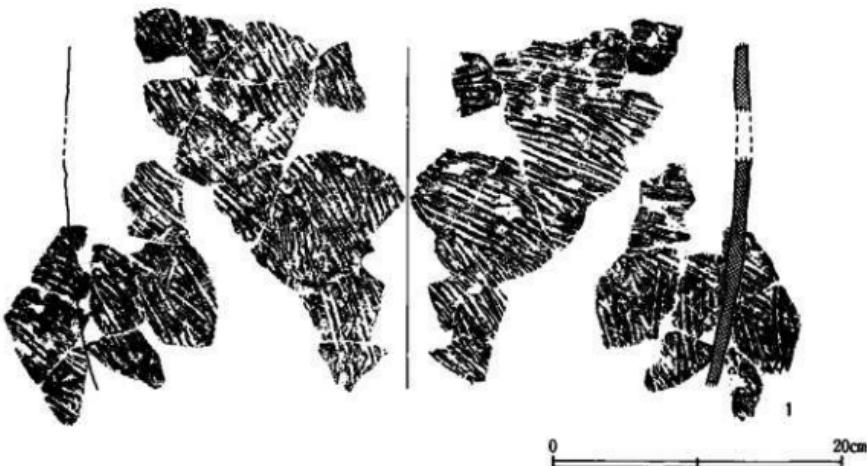
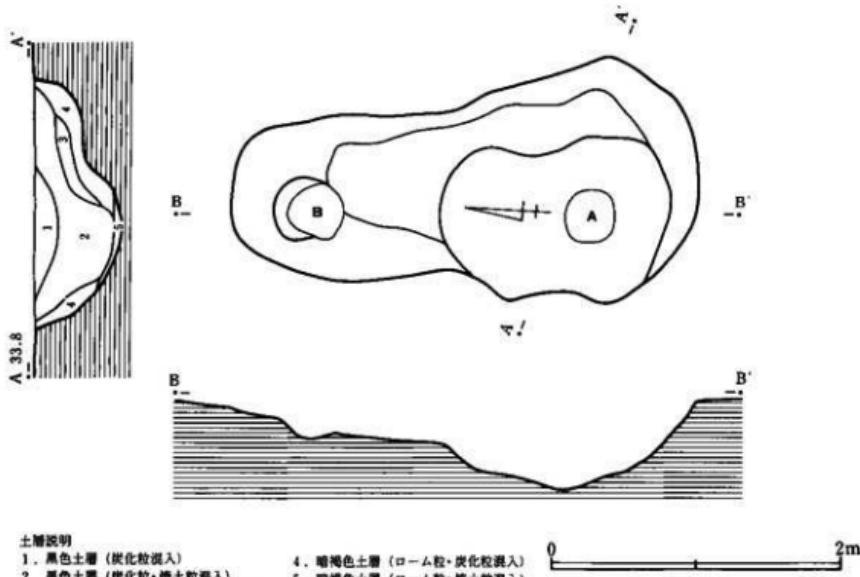
第17図も隆帯によって文様帶を区画するが、文様帶に条痕以外の施文がなされないものである。文様帶の幅については個体ごとにかなり違いが見られ、25・29は比較的広いのに対し28は3cmほどしかない。隆帯はとりたてて言うほどのことではないが、比較的鋭く表現されており、むしろ30～32のような低平な隆帯は例外である。しかし共通して口唇部と隆帯上を竹管で刻んでおり、竹管も表裏使い分けている。口唇部は本炉穴で多く見られるような面を有して納められるもの(26～29)の他に、丸く納められるもの(25・31・32)も見られ、時期的に区別できるものか明らかではない。文様帶については、27に垂下する隆帯が付されている他は条痕で覆われ、横位と縦位の2種が存在している。胎土については2～3点纖維の混入が多いものも含まれているが、全体的に見て纖維の混入は少なく、逆に砂粒や微細な長石粒の混入が多い。

16号炉穴(第18図、図版4・25)

12号炉穴の北約15mに検出した炉穴である。12号炉穴と近距離にあるためか、構築される方向も12号炉穴で大部分が指していたように、方位に近い長軸方向を示す。規模は南北3.2m、東西は最大で1.7m、最短で1.1mを測る。火床は南北両端に検出され、2基が重複していることが知られる。そうなるとこの2基は掘方に対する火床の位置が全く逆に構築されていることに気付く。それぞれ便宜的にA・Bとしたが、両者の先後関係は明らかにできていない。確認面はII層中で、確認面からの深さはAの火床が65cm、Bの火床が30cmを測り、35cmのレベル差がある。覆土の状態には特に目を引くような事実はないが、かなり上層まで焼土粒・炭化粒が含まれている。火床はA・Bともに直径40cmの範囲であり、かなり火熱を受けているようであるが、焼土の堆積はごく薄く5cmを測るに過ぎない。火床側の壁の立ち上りはAが良好で、かなり急角度で立ち上るが、Bについては掘り込みが浅いことも手伝ってかなり緩やかに立ち上り、上場の認定もしにくい部分であった。

遺物の出土状況はBの火床上面からかなりまとまって土器が出土したが、それ以外ではそれほど多くの遺物が出土しなかった。またBの掘り込みが浅いためであろうが、同一個体と認識できる土器は、表土除去後の精査でも出土している。

遺物 第18図に1点だけを図示した。本炉穴から出土した土器は殆どがこの個体であるが、かなり脆弱となっており、充分に接合しなかった。なお、口縁部が含まれていなかつたため、口縁部の形態は不明である。現存する部分から器形を復原すると、胴部上半がほぼ直立するかなり大形の土器で、直径は現存部分で47cmを測る。器面は内外面とも条痕に覆われ、文様帶も見られない。条痕は外面で斜位から縦位へと変化し、内面では横位から斜位へと変化する様子が観察できる。内面の条痕が横位に施されていることを考えれば、口縁にかなり近い部分の破片



第18図 16号炉穴及び出土遺物実測図

であると想像でき、本来文様帶がなかったようである。また条痕は12号炉穴の土器と比較してかなり太く、また粗雑である。

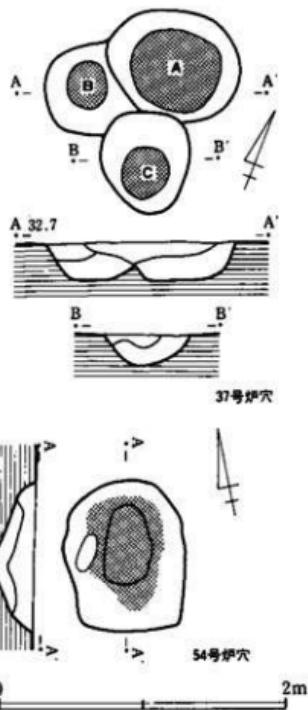
37号炉穴(第19図)

調査区北隅 5 I グリッドで検出した炉穴である。III層上面の精査で確認され、遺存状況はかなり悪い。確認面において3ヶ所に焼土粒を含む部分が明らかとなっており、近接しているが3基の重複が確認されている。これらを便宜的にA・B・Cとしたが、1.2m四方に全体が納まるほどで、火床部分しか遺存していないことも予想できた。火床の先後関係はA→Bは確実なところであり、恐らくCが最も新しいと考えられる。残されている掘込みは、A=0.9×0.7m, B=0.6×0.5m, C=0.7×0.6mで、火床は確認面から20cmほど下位にある。覆土は殆ど焼土からなり、1・3層も暗褐色土中にかなりの焼土粒が含まれている。従って、予想通り火床部分が調査できただけで、炉穴全体の構造を知ることはできなかった。なお遺物は全く出土しなかった。

54号炉穴(第19図、図版4)

12号炉穴の北6mに検出した炉穴である。やはり12号炉穴で主体的であった長軸方向を指し、ほぼ方位に沿った方向で構築されている。規模は0.5×0.4mを測り、火床は掘方の北側に位置している。また、確認面からの深さは30cmほどで、足場となるテラスは殆ど失われているようである。火床はかなり火熱を受けしており、焼土の堆積も掘方に沿って南北に長い。また1層にもかなりの焼土粒が含まれている。なお遺物は全く出土しなかった。

本遺跡で検出された炉穴は以上であり、12号炉穴から比較的良好な資料を得ることができた。これらは基本的に隆帯により口縁部文様帶を区画し、文様帶内には竹管を使用した沈線を描いている。これらの中には6~11のように区画内に沈線を充填するという手法を残すものも含まれるが、量的に多いものではない。口唇部は内刺ぎに近いもので、殆どが端部に面を有して納められている。第15図1等は、高根北遺跡013遺出土土器にかなり良く似るもので、高根北遺跡例では貝殻背圧痕も伴っている。本遺跡でも第16図16に貝殻背圧痕が施されており、茅山上層式より古く位置付けることが可能となる。第16図に示した文様帶内の太い沈線も茅山貝塚で見ることができ、やはり茅山下層式の範疇を出るものではない。



第19図 37・54号炉穴実測図

* 中山吉秀 「高根北遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化調査報告書 IV』1976

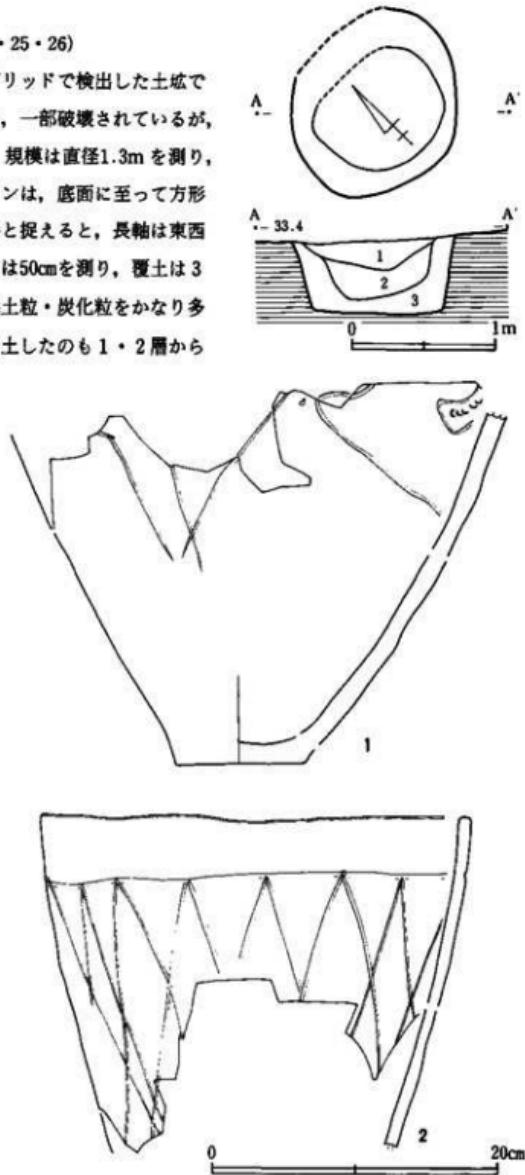
** 赤星・岡本「茅山貝塚」『横須賀市博物館研究報告1』1957

3 土 塚

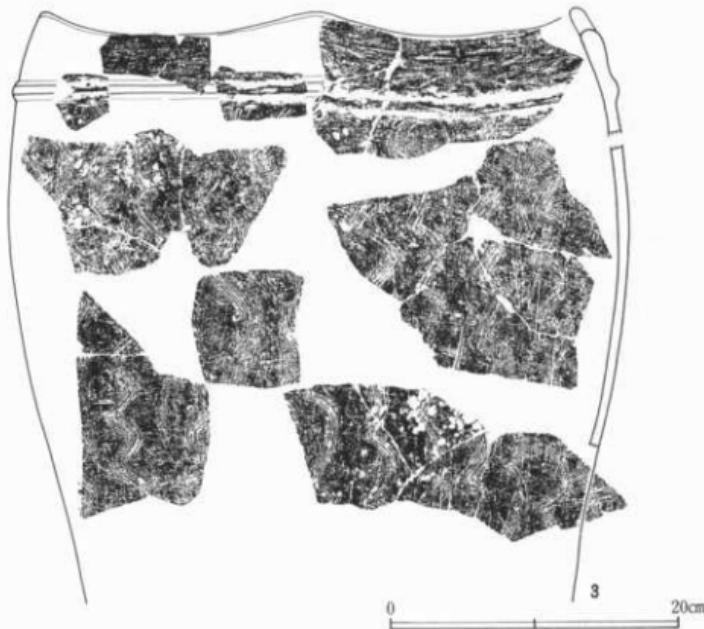
8号土塚(第20~22図、図版4・25・26)

包含層調査区の外側、10Eグリッドで検出した土塚である。地山に達する擾乱があり、一部破壊されているが、おおよその形状は復原できる。規模は直径1.3mを測り、確認面では略円形であったプランは、底面に至って方形に近いものとなる。底面を方形と捉えると、長軸は東西方向を指す。確認面からの深さは50cmを測り、覆土は3層に分層したが、1・2層で焼土粒・炭化粒をかなり多量に含んでいる。また遺物が出土したのも1・2層からである。3層からは殆ど

遺物が出土することはなく、またロームを主体とした土層で、堆積も不自然である。3層の堆積状況は明らかに人為的で、しかもかなり特殊な状況の下に行われていると考えられる。また、1・2層についても多量に焼土粒・炭化粒を含むこと、この2層から出土した土器は完形に復原できるものはないものの200点を超えるものであり、自然の流入とは考えられない。またこれだけの土器量がありながら、埋没時において完形であったものが含まれていなかったことも一つの特徴として捉える可きで、他の土塚と併せて考えたい。



第20図 8号土塚及び出土遺物実測図



第21図 8号土塚出土遺物実測図

遺物 先にも触れたように、1・2層から約200点の土器が出土している。このうち3個体がある程度復原できた。全体の傾向は、称名寺II式が80%を占め、称名寺I式は10点前後しか含まれていなかった。

1は胸部上半を全く欠失しているが、胸部下半はほぼ残っている。器形は称名寺II式に一般的なもので、現存部分は器高にして $\frac{1}{2}$ 以下である。この部分での直径は34cmを測り、器高は少なくとも70cmはあったものと推定できる。施文は底部に近いため次第に消滅してきているが、意匠としてはかなり壊れたもので、一応意匠内に竹管の刺突文が施されている。第22図に示した9~15もかなり意匠が壊れてきているが、それよりも壊れた形になるかもしれない。器面は底部から20cmを縦位に磨き、調整は丁寧に施されるが、焼成は悪く幾分脆弱である。2は胸部上半が約 $\frac{1}{4}$ 遺存している。器形は直線的に開く深鉢形を呈し、口径は29.5cmを測る。口縁部は幅約4cmの無文帯が廻り、胸部は斜位に交差させる沈線を施すだけである。口縁部の無文帯は、内外面とも横位に磨き、内面はその下位を縦位に磨いている。外面は斜位ないし縦位のナデで、砂粒が動くほどの調整である。3は器形を復原したもので、口径は推定38cm前後を測り、比較的大形の土器である。口縁部は内傾し、恐らく4単位の波状になると思われる。また隆帶で区

画した無文帯を廻らせ、2と同様横位に磨いている。さらに波頂部からはC字状の隆帯が貼付されていたようであるが、現存部分で確認することはできない。胸部は8～9本単位の条線文を施し、やはり砂粒が動くほどの調整を施している。これらは3点とも胎土に砂粒を多く混入し、また微細な長石粒もやや目立つ。

この他の破片は第22図に示した。4は口縁部の破片で、C字状の貼付がある、口縁部に無文帯を配し、沈線区画の意匠文内にL¹_xの繩文を充填している。

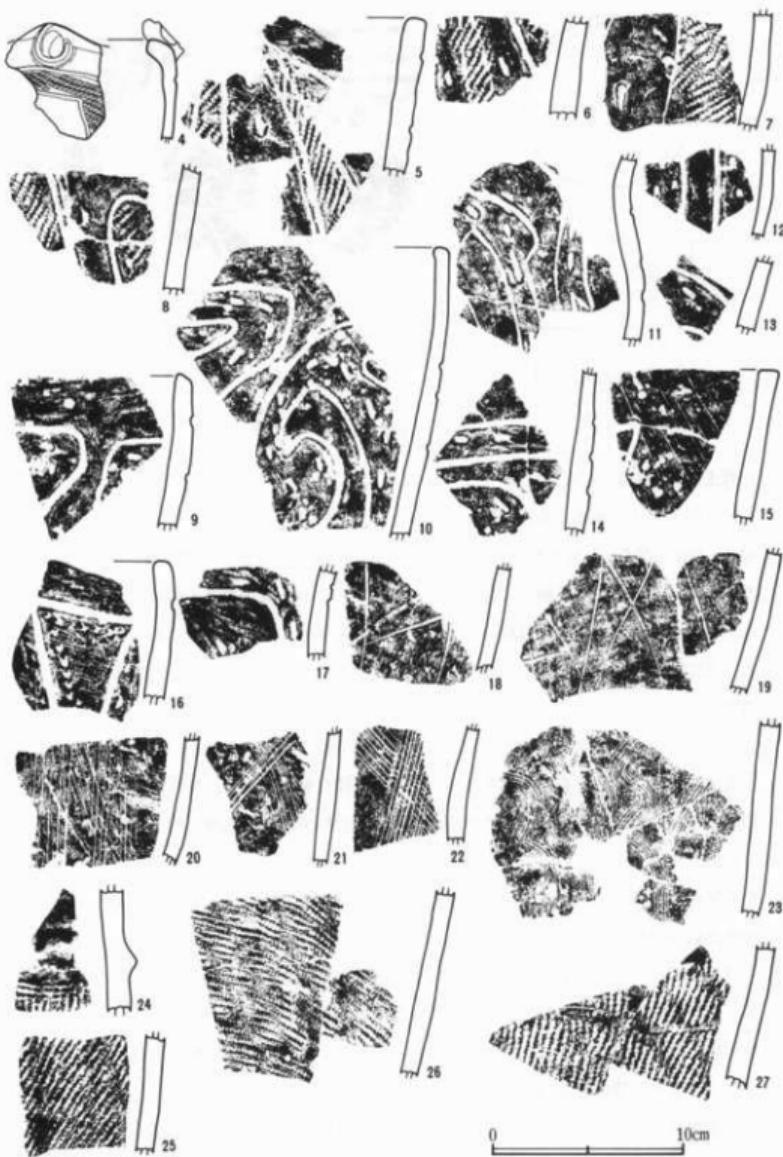
5～8は意匠文内に繩文を施すとともに、反転して列点文も施している。原則的に繩文と列点文とを区別して施すよう努めており、6はやや不鮮明であるが、一応沈線で区画されている。包含層調査でも数点出土しており、意匠文の状態から称名寺I式の範疇に含めるには疑問があり、称名寺II式として捉えた。

10～17は沈線で表出した意匠文内に列点文を施すもので、刺突は半載した竹管を使用している。列点文は通常工具をかなり斜めにして施文することが多いが、16は工具を立てた状態で刺突している。文様の構成は破片が小さいため明らかでないが、10はJ字文の一部を窺うことができる。その状況は既に指摘したように、J字文自体がかなり崩れてきたものである。しかし、11などは胸部のくびれを境にする文様の変化が僅かではあるが残されている。これらは共通して無文となる部分を磨いており、さらに列点文を施す区画内も磨くことが多く、その部分を磨かないのは12・16の2点である。また、内面は総て横位に磨いている。

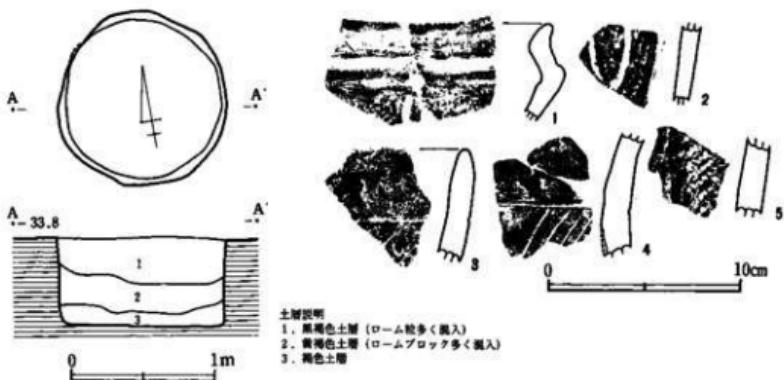
18・19は第20図2と同じ器面の構成をとるもので、沈線を斜位に交差させている。沈線は前記のものに比べかなり浅い施文で、底部に近い部分のため徐々に細くなっている。内面は斜位にナデを施した後に縦位の磨きを施している。なお、施文具の違いはあるが、後述の条線文と同じ器面構成をとる。

20～23は条線文を施すものである。4点とも口縁部は不明で、包含層出土の土器から隆帯ないし沈線区画の無文帯が廻らせてある可能性が高い。条線は20～22のように直線的で斜位に交差させるものと、23のように蛇行させるものがある。内面は他のものと同じくかなり丁寧に磨かれており、また焼成も22を除いて良好である。

24～27は繩文だけが施されているものである。このうち24は隆帯が伴い、口縁部に無文帯を有するもので、3と共に綱取式土器の影響が考えられる。無文帯は横位に磨かれており、内面も同様である。繩文は隆帯直下を横位に転がすが、他は原体R¹_Lを縦位に回転している。25も縦位回転の繩文であるが、原体R¹₁である。26も繩文を縦位に回転しているが、原体はL¹_xである。これは24に比べかなり規則的に施文を行っており、懸垂文の効果を狙ったものであろうか、その様子は拓影からも観察できる。福島県大畑貝塚でも縦位回転の繩文施文が見られる。



第22圖 8號土塚出土遺物拓影圖



第23図 18号土塙及び出土遺物実測図

18号土塙(第23図、図版5)

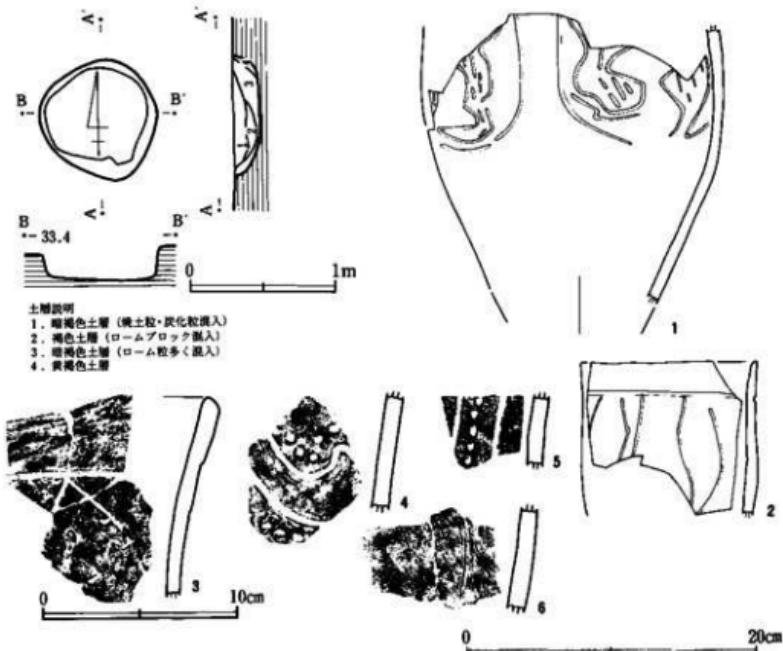
包含層調査区の東側、9Hグリッドで検出した土塙である。規模は直径1.2m、確認面からの深さ0.6mを測り、かなり整った円形を呈している。覆土は3層に分層でき、それぞれが平行に堆積している。しかし2層には径5mm～30mmのハードローム塊を多く混入しており、壁の崩落土とは考えられない。遺物は極めて少なく、それも殆どが1層に包含されていた。これらは恐らく意識的に含まれたものではなく、偶然の機会に混入したものと考えられる。

遺物 1は口縁部が屈曲し、無文帯を廻らせており。胸部は沈線により施文が行われるが、細片のためモチーフの全体像は不明である。2も部分的な破片であるが、同じような構成をとると考えられる。両者とも器面が荒れているため原体は解らないが、繩文を施している。なお、網取C貝塚3類に共通する土器である。3・4は口縁部に沈線区画の無文帯を廻らせ、胸部には斜位の沈線を施している。5は時期的に見ても混入したもので、やや崩れた陸帶により懸垂文を区画している。繩文ではR₁¹で縦位に回転している。

28号土塙(第24図、図版5・26)

11F-23グリッドで検出した土塙である。規模は直径0.9m、確認面からの深さ0.2mを測り、やや不整であるが円形を呈している。覆土は4層に分層したが、8号土塙同様1層に焼土粒・炭化粒を含んでいる。底面はほぼ平坦で、ソフトローム層中に構築され、特に床を構築するような性格の遺構でないため状況は必ずしも良いとは言えない。このように浅い土塙であるが、遺物はかなり多く出土し、その90%は称名寺II式土器である。多くは破片であり、1がある程度復原できたが上半を欠失している。土塙自体が浅いため、本来は完形であったのかもし

* 金子浩昌他「網取C地点貝塚の調査」1968 「小名浜」



第24図 28号土塚及び遺物実測図

れないが、部分的に破損部の摩耗が観察でき、本土塚との間に関係が成立した時点において既に用に供されなくなっていた可能性もかなり高いと言える。

遺物 1は胸部上半を全く欠失しており、現存部での最大径は21cmを測る。モチーフはやはり崩れてきており、胸部下半のためもあるが、意匠文の組形は見えないほどである。また列点もかなり粗雑に施され、表出方法は沈線との差異がない。しかし文様帶下端は、底部に至る無文帶とそれをなりに意識し区別している。2は全周の約 $\frac{1}{3}$ が遺存しているもので、口径は12cm前後と推定される。口縁部は沈線で区画した無文帶を廻らせ、胸部も粗雑に沈線を施すだけである。器面の構成は8号土塚で出土した2に共通するようであるが、或は意匠文の簡略化が進み、列点文も伴わなくなったものと考えられる。逆に3は胸部を斜位に交差する沈線で覆うようであるが、その空間に列点を施している。ともに器面の調整は粗雑で、2は僅かに磨きを加えているが、内面に凹凸が目立つ。4・5は列点文が伴うもので、4は丁字文の一部であろうか。ともに施文具は棒状工具で、沈線とも同一の工具である。5はやや遺存が悪いが、4は内外面とも丁寧に磨いている。6は6~7本単位で蛇行する条線文を施している。

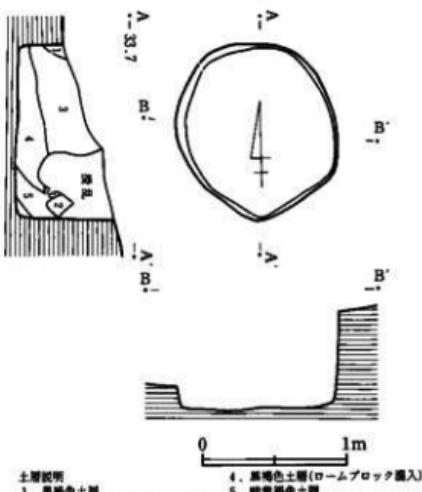
30号土塙（第25図、図版5）

包含層調査区の北端、9 Gグリッドで検出した土塙である。規模は直径1.2mを測り、ほぼ円形のプランを呈するが、やや攪乱を受けている。壁は南東側で遺存が良くこの部分での深さは0.6mである。覆土はその大部分を占める2～4層にローム粒・ロームブロックの混入が認められ、最下層の5層とともに南東側から堆積している。壁は田層からハードローム最上部にかけており、これらの層が自然に流入したとは考え難い。なお、遺物は全く出土していない。

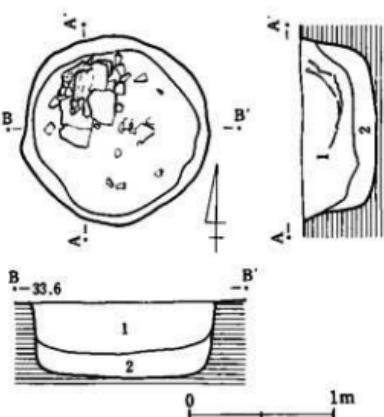
38号土塙（第26～28図、図版6・27）

9 Gグリッドで検出した土塙である。規模は直径1.3m、確認面からの深さは0.5mを測る。プランは整った円形を呈し、底面も平坦に構築されている。覆土は2層に分層でき、1層には若干の炭化粒を含んでいる。また2層は3～4cmのハードローム塊を含み、かなりしまった堆積である。2層は短期間に埋め戻されたことは確実で、1層についても2層に引き続き埋め戻されたものであろう。

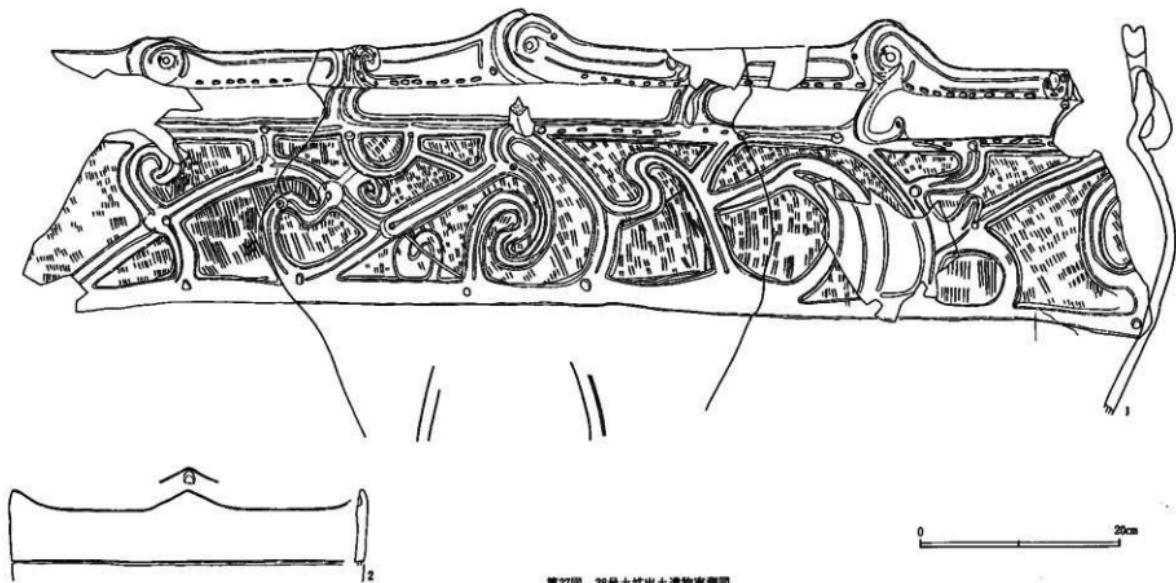
遺物は2層の上面からやや浮いた状態で出土している。これらは殆どが第27図1に示した個体で、この出土状況から2層が埋め戻された直後に横位に置かれたものと考えられるが、本来対峙する部分の破片が内側に滑りこんでおり、1層を入れる段階で既に破損していた可能性も全く否定できない。しかし、この場合でも本個体の殆どの部分は崩っていたことに変わりはない。いずれの場合も注意が必要である。



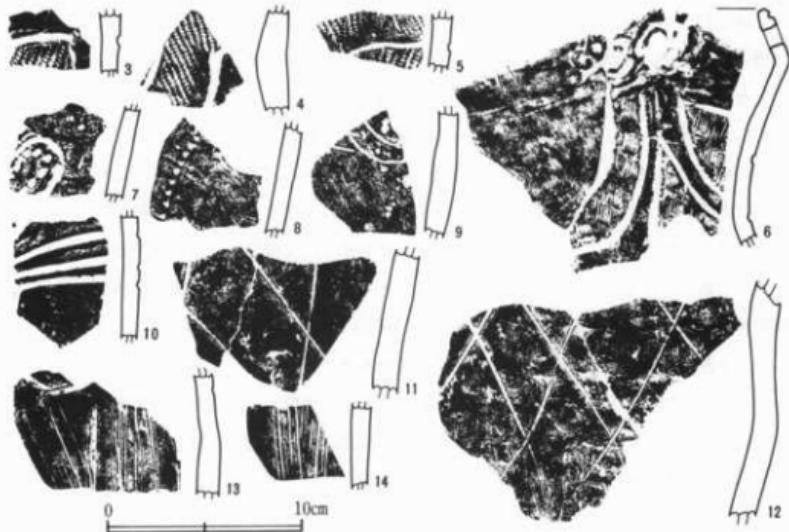
第25図 30号土塙実測図



第26図 38号土塙実測図



第27图 38号土坑出土遗物夹商图



第28図 38号土塙出土遺物拓影図

遺物 第27図1を除くと30点ほどの土器が出土している。1はほぼ完形で、底部及び胴部の一側面がかなり脆弱となっており、充分接合しなかった。口径は41cmを測るかなり大形の土器で、器高も60cm前後はあったと推定できる。器形は口縁部に屈曲を有し、胴部がかなり張っている。また文様帯も器形に即して構成されており、それぞれ口縁部・頸部・胴部・底部の4帶に分けられる。口縁部は4単位で孔が貫通する把手を設け、渦巻状の装飾を施しており、胴部文様帯へと繋がる。把手間は各1ヶ所にC字状の隆帯を配し、その間に沈線の窓状区画文を施している。頸部は無文帯となり、把手間のC字状文から同じくC字状に隆帯が垂下している。胴部は沈線を組入れた低平な隆帯によってモチーフを描き、上下両端も明確に区分され文様帯を形成している。基本的に主要な意匠文は口縁部の単位に合せて位置付けられているが、文様の流れは二度と同じものを繰り返していない。個々の意匠文を観察すると、それがJ字文やスペード文から変化したのであろうと想像できるが、もはや個々の意匠文はあまり意味のないものとなっている。意匠内には半截竹管による平行沈線を充填しているが、このような表出方法は、あまり例がないもので、列点文から変化したものであろう。胴部下半は無文帯となり、まばらであるが竹管を用い条線様に沈線を施している。

* 通り地A遺跡SI094出土遺物は繩文地であるが、器面の構成は酷似している。なお壺之内1式土器を伴っている。(瓦吹 堅他『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化材調査報告7』1982)

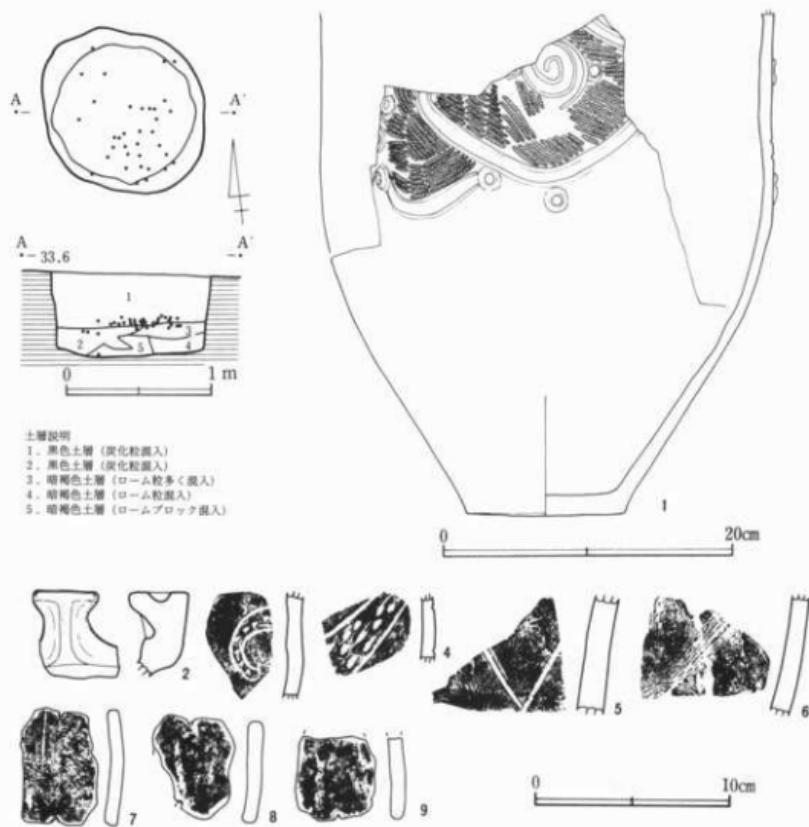
2は口縁部だけが全周の約 $\frac{1}{4}$ 遺存している。推定口径は35cmを測り、特に大形でもない。口縁部は恐らく4単位の波状となるよう、波頂部は内面にも施文がある。口縁部は沈線で画して無文となり、内外面とも横位に磨いている。胴部は欠失しているが、斜位に交差する沈線が施されていたと思われ、或は第28図11・12が同一個体かもしれない。

その他の破片は第28図に示した。3～5は繩文を充填しているもので、本土埴では極めて少ない存在である。いずれも細片で、意匠文全体を窺うことはできないが、3は口縁部直下の破片で、J字文の一部であろう。また4は胴部の緩い屈曲部で、文様帯に上下の区分がない、称名寺I式でも新しい様相を呈している。原体は3点ともL^Rである。6は沈線の区画内に条線文に使用する工具の施文を充填するものである。口縁部は外傾するが、端部で内傾し2孔が貫通する把手を設けている。また把手にはC字条の装飾を施すとともに、円形の貼付文も伴っている。把手部分からはJ字文に由来すると思われる意匠文を展開し、空白部分は丁寧に磨いている。意匠文がかなり崩れてきているにも関わらず、胴部の屈曲ははっきりしており、或は胴部がやや膨らむ器形かもしれない。沈線の区画内の施文は、やはり列点文から変化したもので、網取C貝塚で類例が知られる。7～9は列点文が伴うものであるが、細片であるため意匠文の全体は明らかでない。3点とも竹管を使用しているが、7は竹管の円形刺突となっている。10は列点文を伴わなくなったもので、沈線だけで施文している。器面は極めて丁寧に磨き、沈線内にまで及んでいる。沈線は3本単位であり、堀之内I式に含まれるかもしれない。11・12は斜位に交差する沈線を施すもので、前述したように第27図2と同一個体の可能性が高い。沈線はやや細く、また断面が鋭く施されている。ともに調整は難で、11の外面に炭化物が付着している。この2点の胎土は微細な長石粒の混入が特に多い。13・14は条線文で、13には太い沈線での施文がある。この沈線は曲線で描かれており、器面全体を条線で覆うのではなく、口縁部には沈線区画の文様帯を構成していたようである。条線はともに5～6本単位で直線である。

40号土塚(第29図、図版6・7・28)

包含層調査区の中央10Fグリッドで検出した土塚である。規模は確認面で1.2×1.1mの橿円形を呈するが、底面では直径1mの円形となる。確認面からの深さは0.6mを測り、底面はやや凹凸がある。覆土は5層に分層したが、その様相は大きく上下に分けられる。即ち1層と2～5層であり、この境はほぼ水平に堆積している。しかし1層と2層は内容に大きな違いはない、同じように炭化粒を含んでいる。3～5層はロームの混入が多く、分層はしてあるが、ロームの混入の差異によるものであり、この3層は比較的短期間に埋め戻されたものである。そうなると、2層についても同時に堆積したこと間に違ひがなく、2・3層上面で一旦埋め戻し作業に区切りがあったことを物語っている。さて遺物であるが、若干2・3層中に沈むものも

* 金子浩昌他「網取C地点貝塚の発掘」『小名浜』1968



第29図 40号土塙及び出土遺物実測図

あるが、見事に2・3層上面に集中しており、埋め戻し作業の区切りとはこれらの遺物を土塙の中に入れる作業であった。しかしこれらの遺物とはある程度復原できた1を見てもわかるように、既に用に供されなくなったものであり、また図版6をみてもその出土状況はかなり散在した状況が窺える。これらの遺物の中には3点の土器片錐が含まれており、さらにこの3点が同一個体から得られたものであり注意が必要である。これらの遺物を土塙内に入れた後は再び一気に埋め戻している。

遺物 出土した遺物の約80%は1の個体であり、その他の破片も殆どが称名寺II式である。1は胴部上半を欠失しており、現存部での最大径は31cm、現存高34cmを測る。施文は比較的太い沈線で行われ、基本的に2本単位としている。区画内には原体L^Rの縄文を施し、また円形の

貼付文が伴っている。文様帯は底部に至る無文帯と沈線で区画され、無文帯は縦位に磨いている。モチーフは斜位の区画と渦巻文が観察できるが、全体の構成は明らかではない。実測図左端には縦に円形貼付文が並んでおり、この部分が口縁部の単位と一致すると考えられ、器面も同様4単位の構成が考えられる。胎土は砂粒の混入が多く、また長石粒もかなり目立つもので、焼成はやや不良である。このようなモチーフは高井東遺跡で類例が知られ、この他文様帯下端をこのように区画する例は堀之内I式でも古い段階に見られる。千葉県内では文様帯のモチーフに違いがあるが權現原貝塚・木戸作貝塚にみることができる。2は把手で、頂部は円形となる。口縁部はかなり大きく開き、端部で内傾するもので、実に丁寧に磨いている。3・4は列点文を施すもので、やはり細片のため意匠文の全体は把握できないが、3はJ字文の一部であろう。3は胎土も精緻で焼成も良好であるが、4は砂粒とともに微細な長石粒が多く混入され、焼成も不良である。ただ両者とも内面を入念に磨いている。5は斜位に交差する沈線を施すもので、沈線の断面は鋭い。胎土には4同様微細な長石粒を多く含み、焼成もあまり良くない。6は条線文で、曲線を描いている。胎土は比較的精緻であるが、焼成は悪くやや脆弱となる。7～9は土器片錐で、先にも触れたように同一個体から得たものである。いずれも胸部下半の破片を使用しており、7に僅かに沈線が見られるが、他は無文である。また使用した破片も個体に対して横位に刻み目を入れている。重量は7が22.2g、8・9は欠損しているが現存で18.3g、16.7gを量る。

41号土塚(第30図、図版7・28)

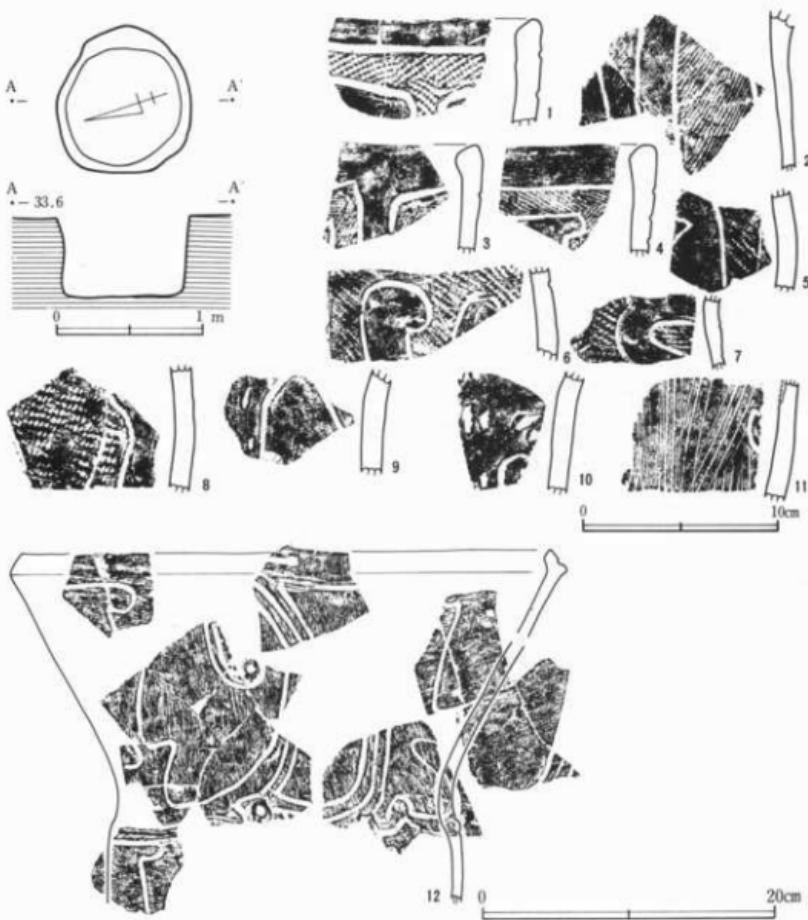
包含層調査区の中央10Fグリッドで検出した土塚である。規模は直径0.9m、確認面からの深さ0.55mを測り、ほぼ円形のプランを呈している。覆土は黒褐色土がベースとなり、上部ではローム粒を僅かに含み、また下部ではローム粒が主体となる。しかし一様に変化するのではなく、黒色土・ハードロームがブロック状に含まれ、全体的な傾向として前記の如き状況を呈しているのである。恐らくは黒褐色土とロームが混じった土によって埋め戻されたのであろう。遺物は特にまとまっては出土していないが、その中で12はやや破片が揃っている。

遺物 約100点の遺物が出土しているが、12を除くと、70%が称名寺I式である。1～8は充填繩文を施している。口縁部は3・4のように端部が肥厚し、無文帯となっている。1・4にはスペード文が見られ、また3・4は同一個体であることから、意匠文はあまり崩れていないようである。繩文は3・4がかなり細く原体はR^L, 1はL^Rとなる。胸部の破片でも5～7は比較的意匠文が残されており、反転した意匠文を構成するものと思われる。その他の2・8はこれらのモチーフを繋ぐものであり、特に区別されるるものではない。繩文は2がかなり密で、

* 市原 他「高井東遺跡」1974

** 杉原莊介他「市川市史」第1巻197

*** 郷田・小宮「千葉東南部ニュータウン7」1979 効千葉県文化財センター



第30図 41号土壙及び出土遺物実測図

原体は R^L_L 、他は L^R_R である。9・10は列点文である。10の刺突は2コを1組としており、刺突も雑である。胎土はともに砂粒を多く混入し、10は更に微細な長石粒を多く含んでいる。11は条線文で、直線的な施文である。拓影図でも明らかなように、やや太い沈線でモチーフを描くようで、この破片が胸部下半であることから注意を要する。12は図上復原であるが、口径は36cm前後と推定できる。器形は胸部から口縁部にかけて大きく開き、端部が内傾するもので、胸部はあまり膨らまないようである。施文は沈線によって行われ、主要な部分に円形の貼付文を施している。また文様体は胸部の屈曲部で上下に二分されているよう、その部分では沈線が横走している。しかし既に列点文ではなく、また意匠文も形骸化されたものとなり、3本単位の沈線も出現している。胎土はかなり精緻であるが、残念なことに遺存状態が悪く脆弱である。

42号土塙 (第31・32図、図版7・28)

10Fグリッドで検出した土塙である。規模は直径0.8m、確認面からの深さ0.3mを測り、円形のプランを呈している。底面にはやや凹凸があるが、壁とともに状況は悪くない。覆土は単一土層で、暗褐色土をベースとしローム粒が多く含んでいる。

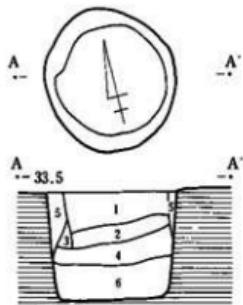
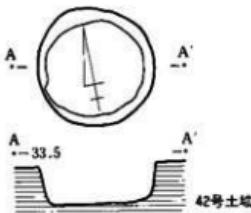
遺物 遺物は図示した1点だけである。1は口縁部の破片で、波状を呈している。文様は波頂部を中心展開し、太い沈線で反転した意匠を描き、列点文を施している。施文全体は粗雑さを免れないが、列点文はかなり深く刺突している。器面は内外面とも調整が難で、磨きが施されているのは口唇部・無文部の一部である。胎土には砂粒・微細な長石粒を多く混入するが、焼成は比較的良好である。

43号土塙(第31図、図版8)

42号土塙の北約10mで検出した土塙である。規模は直径1m、確認面からの深さ0.7mを測り、円形のプラン呈している。覆土は6層に分層したが、5層は地山層の可能性が高く、そうなるとやや袋状を呈したことになる。その他の層はほぼ水平に堆積し、下層ではやはりロームを混入し、5層では径2~5cmとなる。また1・2層では焼土粒が見られ、特に2層ではかなり多い。なお遺物は出土しなかった。

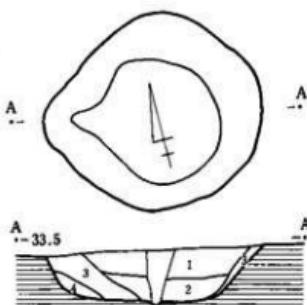
44号土塙(第31・32図、図版8)

43号土塙と隣接して検出された土塙である。規模は1.3×1.5mのやや不整な円形を呈し、確認面からの深さは0.4mを測る。底面のプランは確認面よりも不整で、かなり凹凸があり西側に少し出ている。覆土は中央に植物根の擾乱があるが、本来の状況を崩すほどのものではない。全体にローム粒の混入が見られ、特に上層に多いが、堆積状況は自然堆積とも捉えられる。遺物は土器片が僅かに出土しただけで、混入したものである。



- 土層説明
 1. 黒色土層(焼土粒混入)
 2. 黒褐色土層(燒土粒・ローム粒混入)
 3. 黑色土層(ローム粒混入)
 4. 暗褐色土層(ローム粒多く混入)
 5. 黑色土層
 6. 黄褐色土層

43号土塙



- 土層説明
 1. 黄褐色土層(ローム粒多く混入)
 2. 黑褐色土層(ローム粒混入)
 3. 黄褐色土層(ローム粒混入)
 4. 暗褐色土層

44号土塙



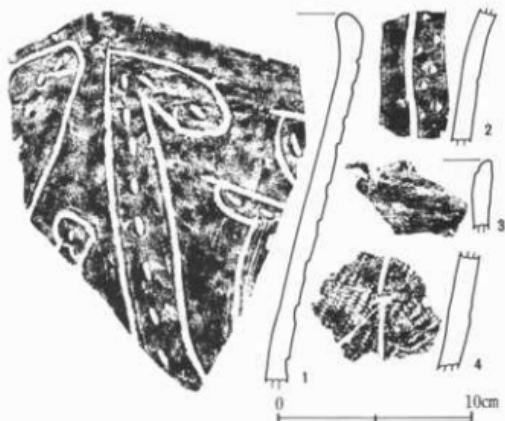
第31図 42・43・44号土塙実測図

遺物 遺物は絶て細片で、遺構に直接伴うものではない。この中には2のように列点文を施すものも含まれ、列点は比較的丁寧に施文する。意匠文はJ字文となる。4は原体L(^R)の繩文地に沈線を施しており、堀之内I式とすることができる。3も調整は難であるが、内面に沈線を廻らせている。

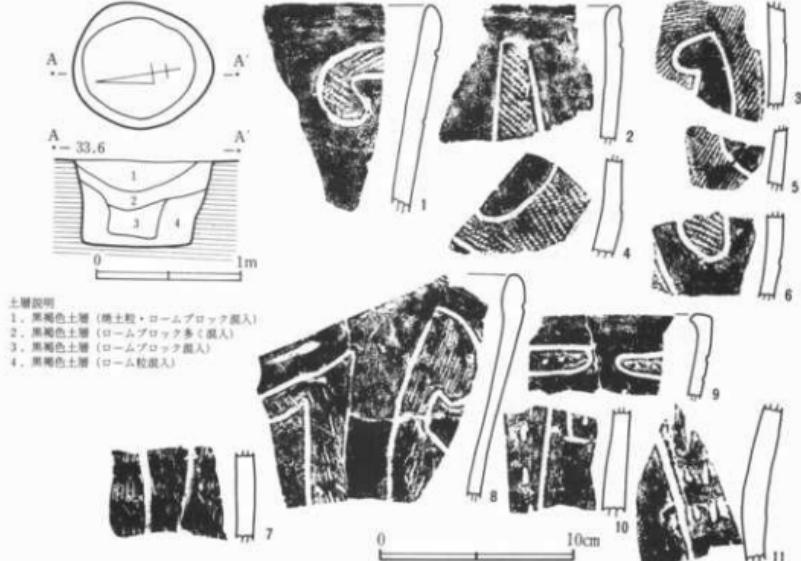
45号土塙(第33図、図版8・29)

10Fグリッドで検出した土塙である。規模は直径1m、確認

面からの深さ0.6mを測り、円形のプランを呈している。底面は平坦であるが、壁は上部でやや開いている。覆土は4層に分層したが、4層の堆積が極めて不自然で、4層堆積後3層の部分を掘り返したのではないかと考えられる。全体的にローム粒・ロームブロックの混入が多く、



第32図 42+44号土塙出土遺物拓影図



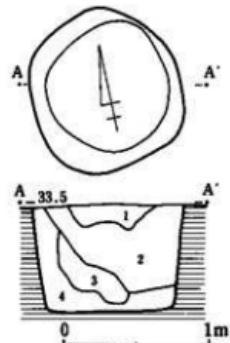
第33図 45号土塙及び出土遺物実測図

1層では焼土粒も含んでいる。遺物は1～3層に包含され、特に1・2層からの出土が多かった。これらは総て土器片で、約80点を数えるが、出土状況からは特別な意識は認められず、してい言うならば1・2層の埋め戻しと同時にこれらの土器片を投入されたと理解できる。なお土器片は称名寺I式と同II式がほぼ同数となる。

遺物 1～6は充填縄文を施すものである。1・2は口縁部で、端部は共に丸く納めている。口縁直下は無文となり、内外面とも横位に磨いてある。口縁部の無文帯がそのまま意匠文内にまで連続しており、沈線区画の意匠文はJ字文が反転している。なお原体L¹の縄文を充填している。3～6は胴部の破片であるが、いずれも上半部である。3は縄文帯が反転しているよう、J字文と組合わせる部分が無文となっている。5も同一個体で原体はR¹である。また4・6はL²である。7～11は列点文を施すものである。7・8は条線文に用いる工具で施文しており、本質として列点文と区別できるものではなく、中野僧御堂遺跡での例を見ても少ないながら称名寺II式に伴うようである。8は口縁部の破片で、かなり大きな波状を呈するものの把手はない。意匠文はJ字文を基本としているようで金橋台遺跡の例を見る限り、意匠文はかなり崩れたものになるようだ。9は口縁部の破片で、内側が肥厚している。やはり口縁直下は無文帯となり、一見窓状となる意匠文がある。また11は一つの沈線区画内に2列の列点文を施している。胎土はいずれも微細な長石粒を多く含み、また8・9は砂粒の混入もかなり多い。

47号土塗(第34図、図版9)

45号土塗の東約5mで検出した土塗である。規模は直径1m、確認面からの深さ0.7mを測り、ほぼ円形のプランを呈している。底面は平坦で、壁も直線的に立ち上り、かなり整っている。覆土は4層に分層したが、全体にローム粒・ロームブロックの混入が多く、3層では粒径3～5cmとなる。他の数基の土塗で見られるような焼土粒・炭化粒の混入はないが、2～4層の状況は短期間に埋め戻されたものである。また2・3・4層と分層してあるが、詳細に観察すると部分的にかなりの違いが見られ、同一層内においても1回の作業毎で異なる土が混入しているようである。しかしこの違いを基準に分層することはできず、図に示した層序が埋め戻しの行程を示していると考える。なお、遺物は覆土から15点ほどの土器片が出土したが図示するには及ばなかった。

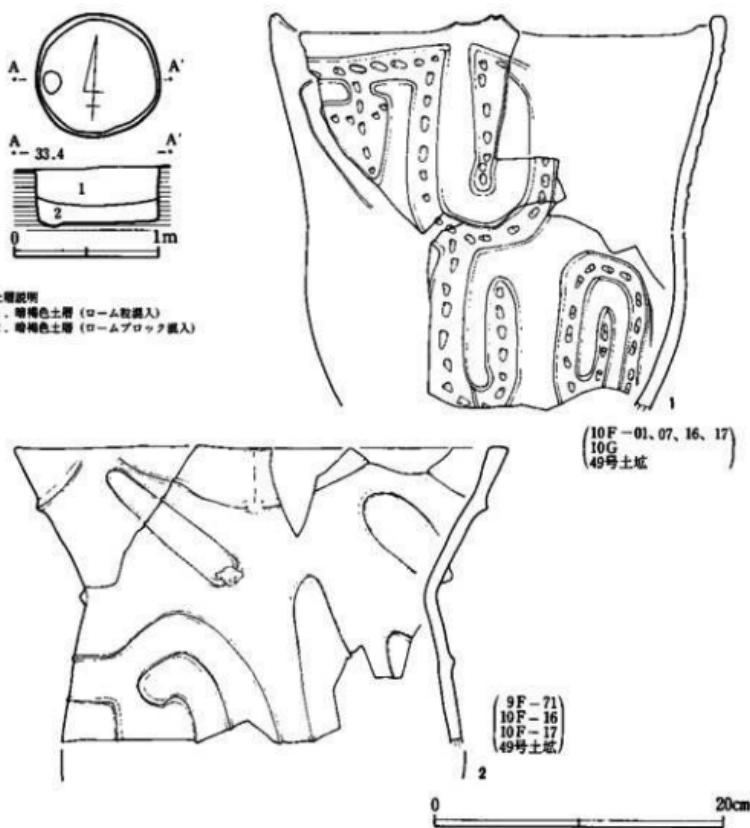


土層説明
1. 單純色土層（ローム粒混入）
2. 單純色土層（ローム粒・ロームブロック混入）
3. 單純色土層（ロームブロック混入）
4. 單純色土層（ローム粒多く混入）

第34図 47号土塗及び出土遺物実測図

* 中村恵次他「中野僧御堂遺跡」1976 錦千葉県文化財センター

** 沼沢 豊「松戸市金橋台遺跡」1974 錦千葉県都市公社



第35図 48号土壇及び出土遺物実測図

48号土壇(第35図、図版9・29)

47号土壇の北側に隣接して検出された土壇である。規模は直径0.9m, 確認面からの深さ0.4mを測り、プランはかなり整った円形を呈している。底面は平坦であるが、西側の壁に接して径20cmほどの浅い窪みがあり、平面図にも示してある。また壁は垂直に近い角度で立ち上っている。覆土は2層に分層したが、ともにローム粒・ロームブロックを含み、水平に堆積しているが、自然堆積ではない。遺物は2点を図示してあるが、本土壇から出土したのはこの個体の内の一一部であり、殆どは包含層から出土している。また、本土壇の遺物はこの2個体の破片が殆どである。

遺物 カッコ内に示したのが包含層での出土地点である。ともに本土壇に近い地点から出土しているが、本土壇と重なるものではない。このグリッドは49号土壇と重なり、49号土壇からも

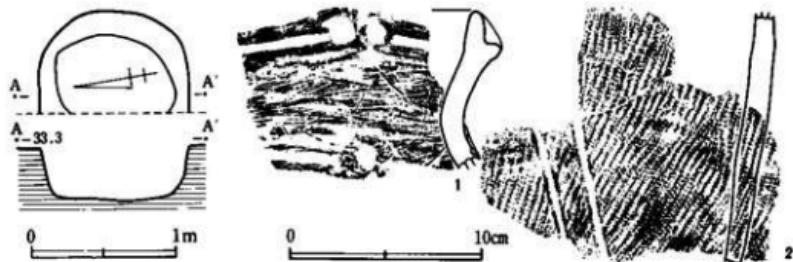
この個体の破片が出土している。しかし49号土塚は陥穴状の土塚である。

1は図上復原である。口径は31cm前後と推定でき、胸部中位に緩い屈曲をもつ土器である。口縁部は4単位の波状を呈し、文様帶も波頂部を中心展開している。文様帶は屈曲部で2分されるが、その区分はあまり明確なものではなく、意匠文の結合によって表現されている。意匠文内には列点文が施され、スペード文と反転したようなJ字文を組合せている。内面は胸部下半に至るまで良く磨かれており、外面も列点文が施されない空間は同様磨かれている。2は胸部下半を欠失しており、現存部分 $\frac{1}{4}$ ほど遺存している。口径は34cmを測り、胸部の屈曲は1よりも大きい。破損部下端はかなり摩滅しており、破損後も使用したことが窺え、胸部下位に火熱を受けていることから、或は逆位にして炉体としたのかもしれない。口唇部は内側が肥厚し、称名寺II式の特徴を示すが、器面は微隆帯によってモチーフを描き、また僅かではあるがコブ状の貼付文も伴っている。器面の構成は、口縁部に帯状の空間を設け、口縁に直交する隆帯を垂下し窓状区画と繋いでいる。胸部はやはり屈曲部で上下に2分されており、上半には斜位の窓状区画を配し、下半には渦巻状を呈する区画も見られる。微隆帯を施す土器は、中期末の注口土器や有孔鍔付土器に多く見られるが、本例は後期初頭に位置付けられるものである。

51号土塚(第36図)

8号土塚の北約5mで検出した土塚である。規模は直径1.1m、確認面からの深さ0.4mを測り、円形のプランを呈していたと考えられるが、西側を擾乱により破壊されている。底面は平坦で、現存する底面は楕円形のプランが予想できる。覆土は單一層で、ローム粒とともに他の数基の土塚で見られるように炭化粒を含んでいる。遺物は20点の土器片があり、殆どが覆土中位から出土した。

遺物 1は外反して無文帶となる口縁部である。胸部の破片は含まれていなかったが、緩く膨らんで底部に至る器形となるもので、或は2のような破片が胸部に位置するのかもしれない。口唇部は内傾し、1条の太い沈線を廻らせていている。現存部では緩い波状となっており、この時期では4単位になるのが普通である。波頂部には円形の装飾が施され、また胸部と区画する沈線上にも円形の貼付文を施している。内外面とも横位に磨いているが、無文帶は特に入念に行



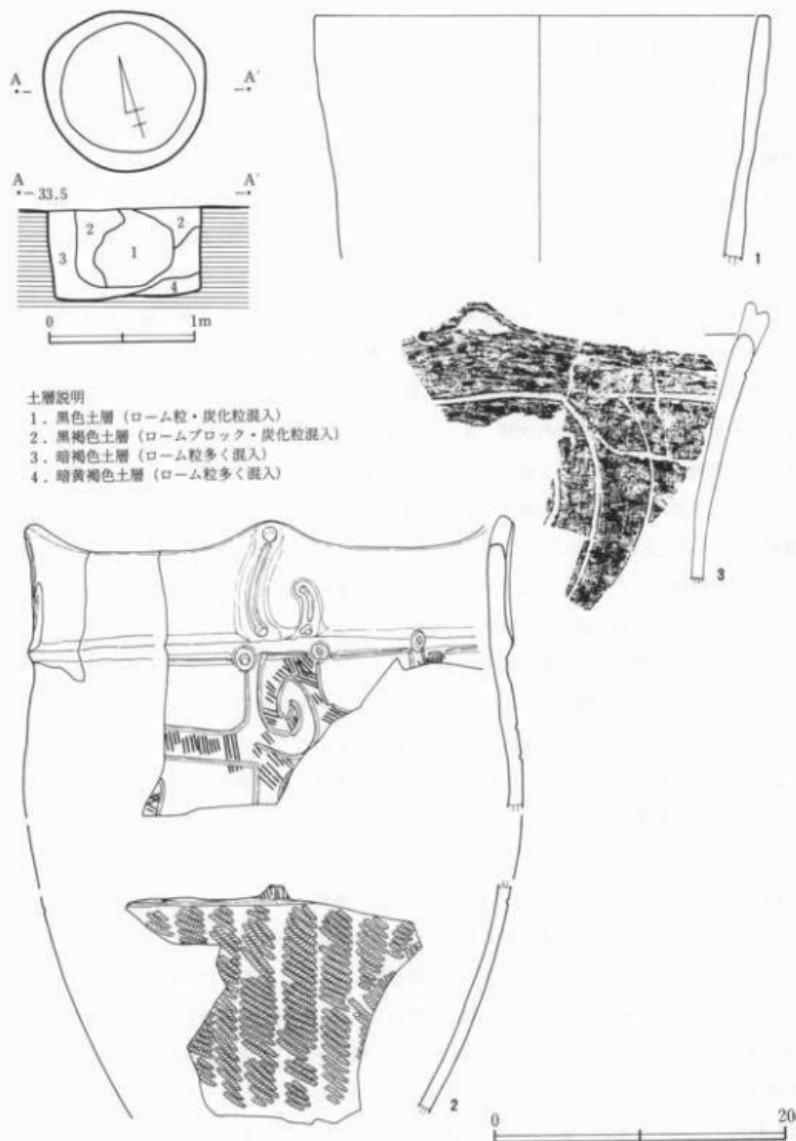
第36図 51号土塚及び出土遺物拓影図

っている。2は胸部の破片で、器形は前述したように口縁部は1の如くなると思われる。施文は全面にL^X_Rの繩文を施した後に2本の沈線を垂下させ、さらに網取式土器の影響を受けたようだ、2本の沈線内は繩文を消そうとしている。しかし、拓影からも解るように充分に消えていない。なお、内面は縦位に磨いている。

52号土塙(第37図、図版9・29)

30号土塙の南約8mで検出した土塙である。規模は直径1.1m、確認面からの深さ0.6mを測り、整った円形のプランを呈している。壁はほぼ垂直に立ち上り、底面も平坦で断面は円筒形となる。覆土は4層に分層したが、かなり特異な状況を示している。全体的にローム粒・ロームブロックの混入が多く、2層での粒径は1~3cm程度である。また1・2層には炭化粒も含まれ、2層でかなり多い。特異な状況とは1~3層の堆積状態が、遮蔽物の存在ないし最低2度の掘り返しがなくては考えられることであり、本土塙の場合、遺物のほとんどが2層から出土した事実はあるが、遺物の状態、量とも遮蔽物となり得るだけのものはない。図示した1・3とも完形に復原できず、2層については部分的に補うことも可能であろうが、1層については3層を一気に埋め戻した後の掘り返しと理解するのが妥当のようである。

遺物 約100点の土器片が出土しているが、殆どが図示した個体の破片である。1は図上復原で、完形に復原することはできなかったが、口縁部は約1/4の破片がある。口径は31cm前後と推定でき、現存高は17cmを測る。口縁部は直線的に立ち上り、端部を丸く納め実に丁寧に磨いている。器面は全く無文で、外面は粘土組接合痕に沿って凹凸がある。内面は外面に比較して平滑で、剥落が著しいが、横位に入念に磨いている。また外面も胸部にかけて縦位に僅かに磨いている。胎土には細砂粒を多く混入し、微細な長石粒もかなり目立つ。焼成は不良である。なお、数片ずつが接合しているが、接合しなかった破損部はかなり摩滅しており、用に供されなくなった個体を廃棄したものである。2もかなりバラバラな状態で、図上復原である。またごく僅かではあるが、8号土塙からも同一個体が出土している。器形は胸部に僅かな丸味を帯び、口縁部に向けて緩く括れるもので、口径は33cm前後、器高は45~50cmはあったと推定できる。口縁部は隆帯区画で幅6~8cmの無文帯となり、4単位の波状を呈する。このうち3ヶ所が遺存しており、総てに沈線を組入れたJ字の隆帯を配している。また、沈線の端部には円形の刺突を施している。口縁部は内外面とも横位に磨いており、外面が特に顯著であり、隆帯上も充分ではないが磨いている。胸部は2段の文様帯から構成され、上部は沈線区画の意匠文である。文様は口縁の波頂部をメインに展開し、波頂部の中間にもう一つピークがある。それぞれ上端は口縁部を区画する隆帯に接し、同時に円形の貼付文を施している。意匠文は2本単位の沈線で描かれ、反転したJ字文となる。さらに意匠文は横への展開が見られ、条線様の沈線を充填している。無文となる空間は口縁部同様丁寧に磨いている。胸部下端は一転して縦文で覆われ、L^X_Rを縦位に回転している。内面は丁度口縁部を区画する隆帯から下位がかなり荒れていて、



第37図 52号土塙及び出土遺物実測図

調整は観察できない。胎土には若干砂粒を含むが、焼成は良好である。3は口縁部の破片で、緩い波状を呈している。器表面は沈線により意匠文が描かれているが、既に列点文は施されていないよう、施されている沈線の両側とも無文である。ただ一応總てに磨きが施されているが、本来列点文が施される可き空間はかなり粗雑である。なお焼成はやや不良である。

4 陥し穴状土塙

4号土塙(第38図)

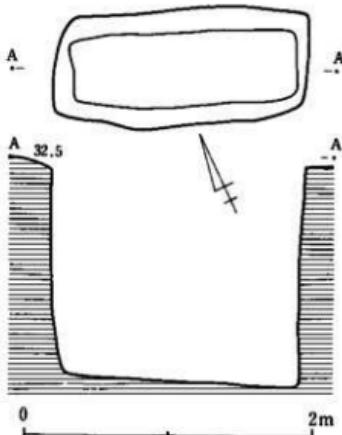
1号住居跡と重複する土塙で、9Eグリッドに位置している。また、4号土塙→1号住居跡の先後関係が両遺構から確認されている。規模は $1.7 \times 0.8m$ 、確認面からの深さは1.4mを測り、長方形のプランを呈している。長軸方向はN-65°-Wを指し、北側の浅い谷のコンタと平行している。底面は平坦で、その規模は確認面と大きな違いはない $1.5 \times 0.5m$ を測り、やはり長方形となる。各壁もほぼ垂直に立ち上り、両断面とも箱形となる。土層断面図は図示しなかったが、最下層に暗褐色の軟質な土が堆積し、全体的にはローム粒・ロームブロックの混入が多く、比較的短期間に埋まったものである。なお、遺物は出土していない。

14号土塙(第39図)

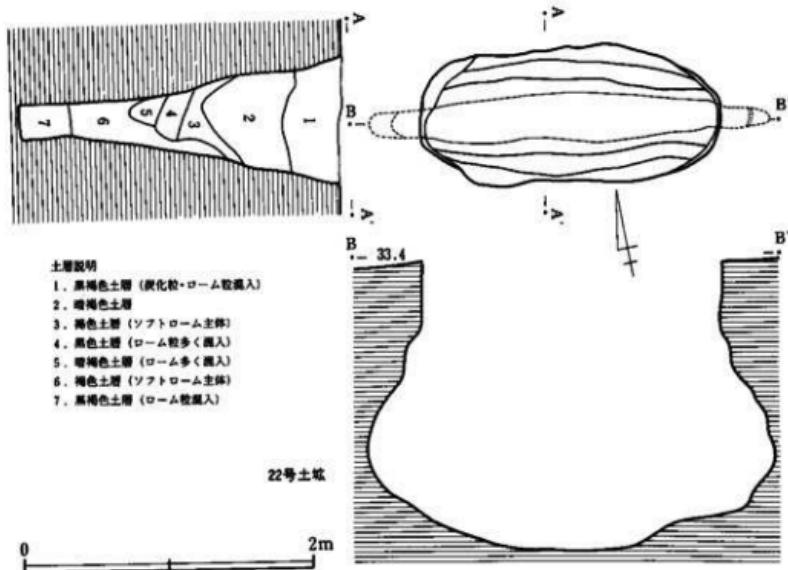
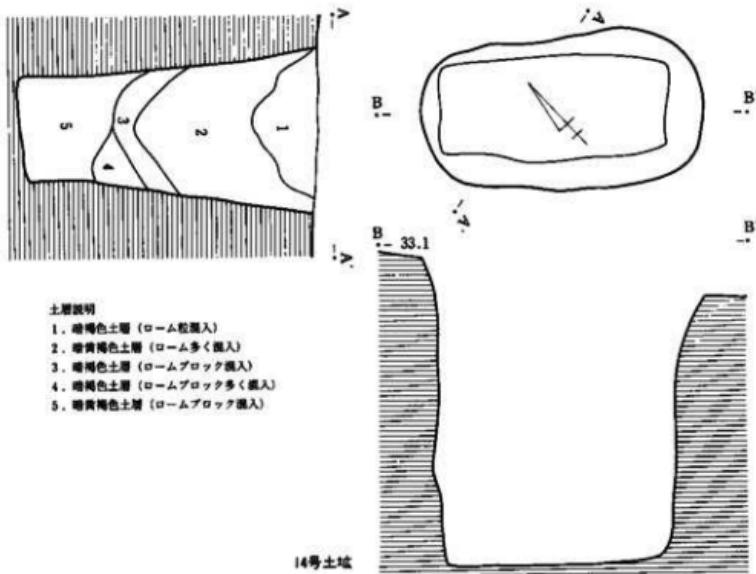
調査区の西端、11Dグリッドで検出した土塙で、III層上面ではプランが不鮮明であり、III層を若干掘り下げた段階でプランを確認することができた。規模は $2.0 \times 1.0m$ 、確認面からの深さ2.1mを測り、ほぼ長方形のプランを呈している。長軸方向はN-45°-Wを指し、コンタと直交している。底面はやはり平坦で、規模は $1.6 \times 0.8m$ を測り、確認面よりも整った方形となる。壁は至極当然であるが、ほぼ直角に立ち上り、両断面とも箱形となる。覆土は全体に軟質で、また總ての層にローム粒ないしロームブロックを含んでいる。特に2層はかなり厚く堆積しているので、ソフトロームが主体となる。なお4号土塙に見られたような最下層の暗褐色土の堆積はない。遺物は1層から土器片が僅かに出土したが、図示するには及んでいない。

22号土塙(第39図、図版10)

調査区の南端、11Fグリッドで検出した土塙である。規模は $2.0 \times 0.9m$ 、確認面からの深さ2.2mを測り、梢円形のプランを呈している。長軸方向はN-80°-Wを指し、コンタと平行している。底面は長軸端部が大きくオーバーハングするもので、長軸長は2.8mと確認面での長さをかなり上まわり、これに対して幅は0.3mしかない。覆土は最下層に厚く黒褐色土が堆積し、開口



第38図 4号土塙実測図



第39図 14・22号土塙実測図

期間がかなり長かったことを物語っている。また全体にローム粒が多く含まれており、1層では僅かに炭化粒も含んでいる。基本的に自然堆積と考えているが、6層とそこに填り込む3～5層の在り方は不自然で、通常の堆積ではあり得ないのでないだろうか。密かに上部を覆っていたものが、廃絶後に内部に落下したのではないかと考えている。

29号土塙(第40図、図版10)

調査区北西端の7Eグリッドで検出した土塙で、北側の深い谷に向う斜面に位置する。規模は $2.0 \times 1.1m$ 、確認面からの深さ2.2mを測り、規模を考えるとかなり深いものである。プランはほぼ長方形で、長軸方向はN-30°-Wを指し、コンタと平行している。底面は平坦で、 $1.4 \times 0.5m$ を測り、確認面のプランに比べてかなり整った方形となる。覆土はかなり細かい分層が可能であったが、相対的に下層で軟質でロームブロックを多く含み、8層では粒径が5～8cmとなる。

33号土塙(第40図)

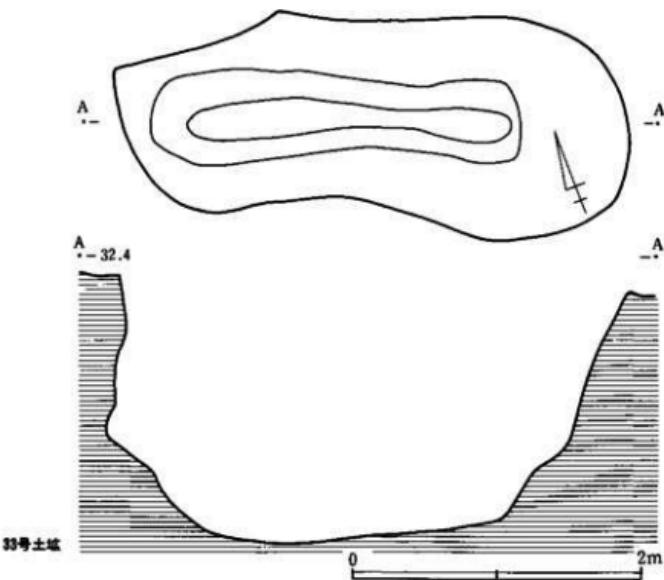
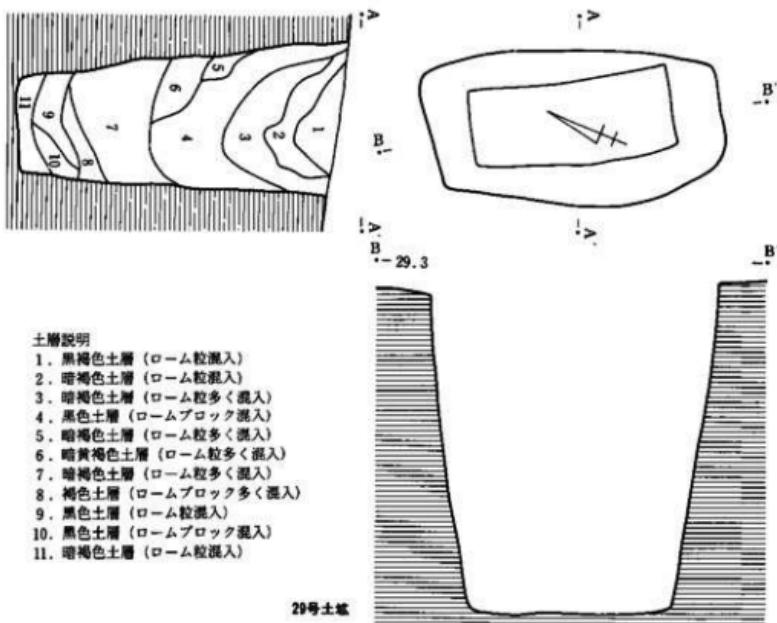
調査区東南端で13号住居跡と重複して検出した土塙である。13号住居跡も縄文時代の遺構であり、33号土塙→13号住居跡の先後関係が確認されている。規模は $3.5 \times 1.3m$ 、確認面からの深さ1.7mを測り、横円形のプランを呈している。長軸方向はN-70°-Wを指し、コンタと平行している。底面は幅0.2mとかなり狭く短軸断面はV字状になるが、長軸端部はオーバーハングしていない。さらに、南側の端部はやや開いて立ち上っている。土層断面図は図示しなかったが、あまり細かく分層できず、覆土は壁際でロームブロックを多く混入し、その他殆どの部分でローム粒が含まれている。

36号土塙(第41図、図版10)

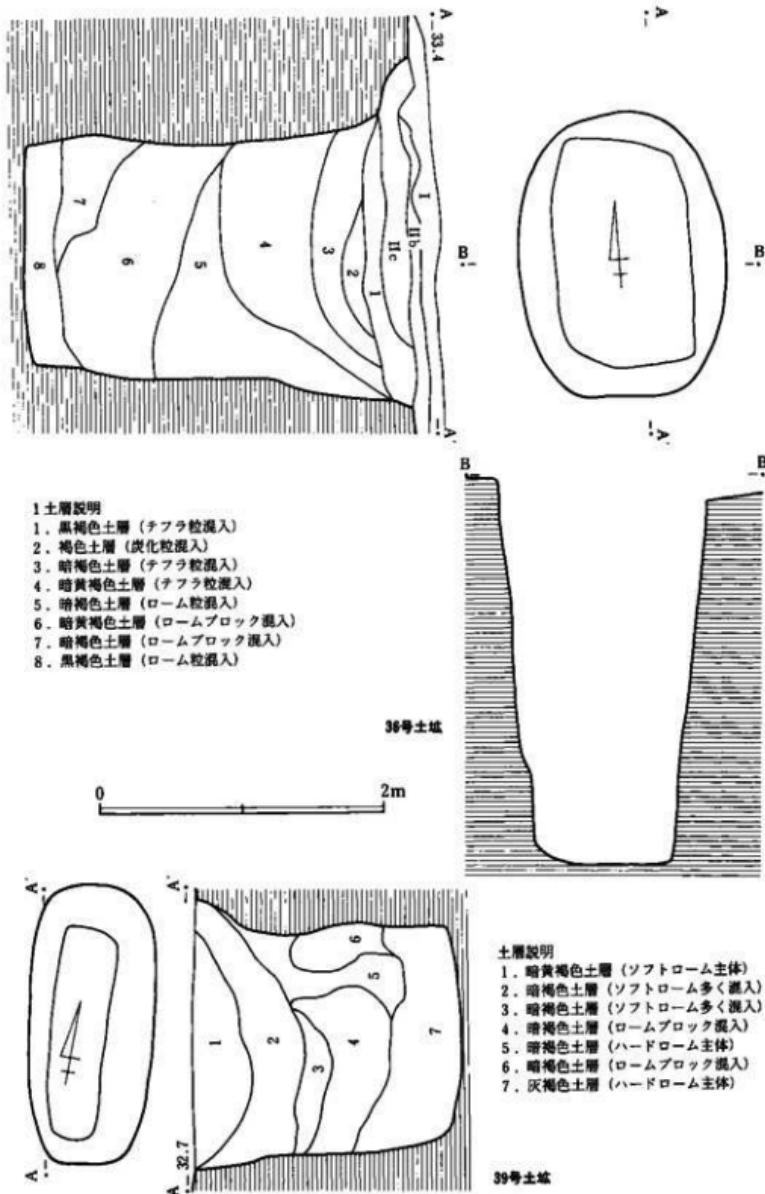
調査区の北端5Iグリッドで検出した土塙である。規模は $2.0 \times 1.5m$ 、確認面からの深さ2.6mを測り、プランは隅丸の方形を呈し、他の同様な土塙に比べてかなり幅広である。長軸の方向はほぼ方位に沿って、コンタとも平行している。底面は平坦で、 $1.5m \times 1.0m$ を測りかなり整った方形となる。2.6mもの深さがあることを考えれば、底面は狭くなく、壁も直線的に立ち上っている。覆土は基本的に両側から流入した様子が観察できる。最下層には黒褐色土が約20cm堆積しており、かなり長く開口していたようで、8層上面は水平に近い。4～7層は土質が似ており、ほぼ同時に堆積したと考えられる。個々について6・7層にロームブロックを、5層にはローム粒を含んでいる。また、所謂新期テフラ層が土塙上面を覆っており、漸移層であるII C層は土塙内に落ちている。

39号土塙(第41図、図版11)

36号土塙の西約15mで検出した土塙である。規模は $1.9 \times 0.9m$ 、確認面からの深さ1.9mを測り、長方形のプランを呈している。長軸方向はN-5°-Wを指し、概ね方位に沿っている。また36号土塙とも近い方向であるが、台地の端部に位置し、三方に谷を臨んでいる。台地全体の



第40図 29・33号土塚実測図



第41図 36・39号土塙実測図

方向からみればコンタに平行している。底面は $1.5 \times 0.4\text{m}$ を測り、確認面と殆ど同じプランとなる。覆土は土層断面図の位置がやや壁に寄っていたため、5・6層のように不自然に見える部分もある。上層は1～3層までが殆どソフトロームを主体とした土層で、4層も同様であるが僅かにロームブックを含んでいる。

46号土塙(第42図、図版11)

包含層調査区の中央10Fグリッドで検出した土塙で、台地の最高所にある。規模は $2.4 \times 1.0\text{m}$ 、確認面からの深さ2.1mを測り、梢円形のプランを呈している。長軸方向はN-70°-Eを指し、コンタと平行している。底面は幅20cmとかなり狭く、長軸端部は僅かにオーバーハングしている。また底面には凹凸があり、中央には径30cm程度の浅いピットを検出した。覆土は上層がやや軟質であるが、下層では比較的しまって堆積しており、底面から1mまでがハードロームを主体とする单一土層である。なおハードローム塊の粒径は3～5cm程度が一般的であるが、10cm程度のものまで含まれている。

49号土塙(第42図、図版11)

包含層調査区の中央10Fグリッドで検出した土塙である。規模は $2.0 \times 0.7\text{m}$ 、確認面からの深さ2.2mを測り、両端が尖った梢円形のプランを呈している。長軸方向はN-60°-Eを指し、コンタと直交している。底面は $1.4 \times 0.4\text{m}$ を測り、確認面と同様のプランで、長軸端部はオーバーハングしていない。断面形は短軸がV字状、長軸が箱形となる。覆土は全体的にローム粒・ロームブックを多く含み、5層では粒径が3～5cmとなる。また、最下層に軟質な黒色土が堆積しているが、7層を挟んで6層も8層と酷似している。8層堆積後僅かな崩落があり、再び7層上面を底面として使用したのであろう。

50号土塙(第43図、図版12)

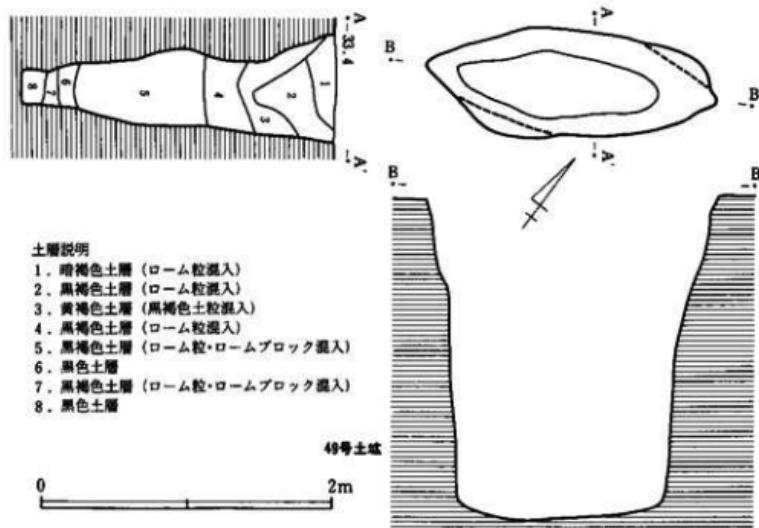
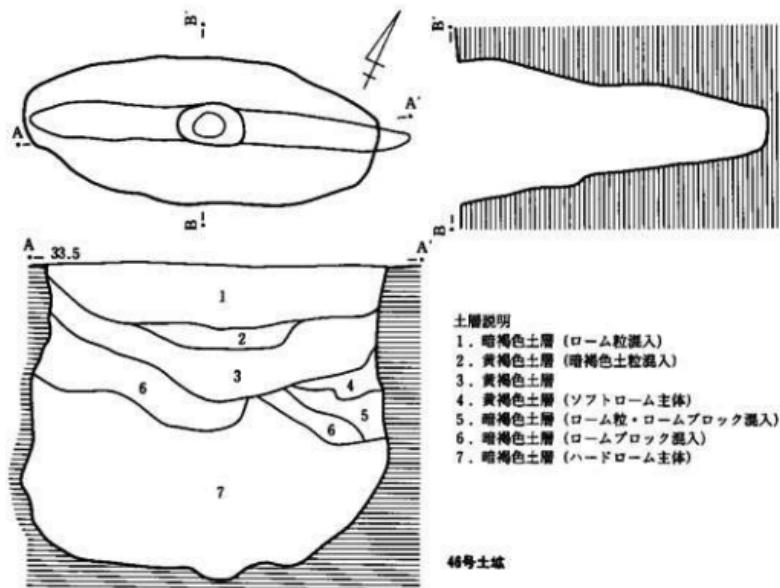
49号土塙の北約3mで検出した土塙である。規模は $2.7 \times 0.9\text{m}$ 、確認面からの深さ1.7mを測り、プランは不整な梢円形を呈している。長軸方向はN-65°-Eを指し、コンタと平行している。底面は幅15cmと狭く、端部のオーバーハングは少ない。覆土はやはり最下層に軟質な黒色土が堆積しており、また全体的にローム粒・ロームブックを含んでいる。

53号土塙(第43図、図版12)

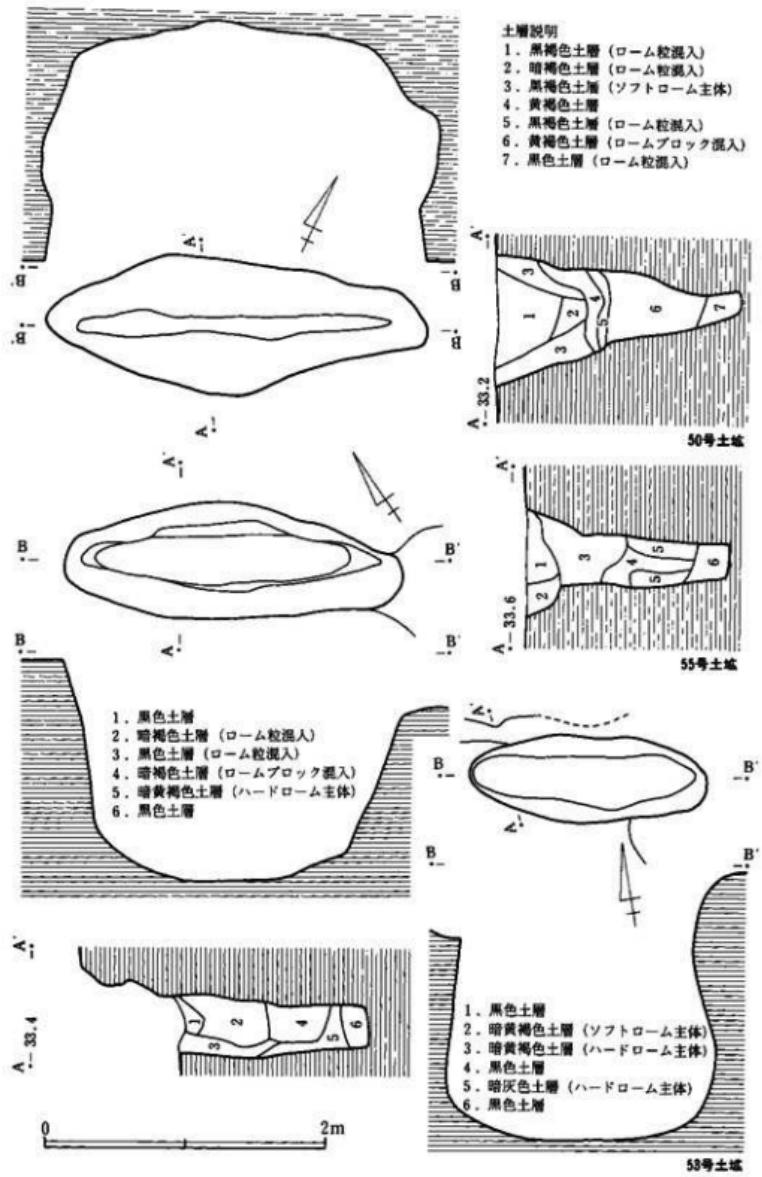
12号炉穴の北側に重複して検出した土塙で、55号土塙→12号炉穴の先後関係が確認された。規模は $2.4 \times 0.8\text{m}$ 、確認面からの深さ1.5mを測り、梢円形のプランを呈している。長軸方向はN-60°-Wを指し、コンタと直交している。底面は幅30cmを測り、長軸端部はオーバーハングしておらず、逆にやや開いて立ち上っている。覆土は最下層に軟質な黒色土が堆積し、その上部にハードロームを主体とする土が遮蔽物が存在したかのような堆積をしている。

55号土塙(第43図、図版12)

12号炉穴と重複して検出した土塙であるが、やはり55号土塙→12号炉穴となる。規模は $1.7 \times$



第42図 46・49号土塙実測図



第43図 50-53-55号土塚実測図

0.6m、12号炉穴底面からの深さ1.4mを測り、横円形のプランを呈している。長軸方向はN-90°-Eを指し、コンタと平行している。底面は幅30cmを測り、僅かに端部がオーバーハンプしている。覆土はやはり最下層に軟質な黒色土が堆積し、壁際には垂直にハードロームを主体とする層が見られる。

5 包含層出土の遺物

遺構外からは整理箱にして約30箱の遺物が出土した。これらは縄文時代各期に及ぶものであるが、特に第44図に示した範囲の包含層調査で、後期初頭を中心とする遺物が出土している。これはほぼ重複して存在する土塗との関係に興味を持たれるところであるが、後期初頭の遺構・遺物については第3章で詳しく述べることにして、ここでは個々の遺物の紹介に留めたい。

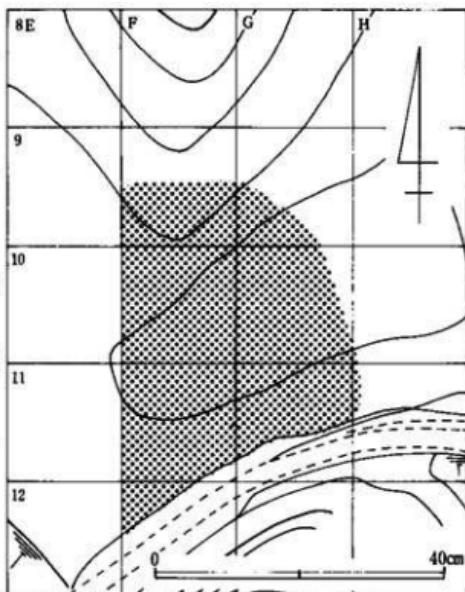
土器 縄文時代各期に属するもので、説明をするにあたり時期的に次のように分類した。

- 1群 早期の燃糸文土器を一括した
- 2群 早期の沈線文系土器を一括した
- 3群 早期末の条痕文土器を一括した
- 4群 前期前半の土器を一括した
- 5群 前期後半の土器を一括した
- 6群 前期末から中期初頭の土器を一括した
- 7群 中期末の土器を一括した
- 8群 後期初頭の称名寺式土器を一括した
- 9群 後期前半の堀之内式土器を一括した
- 10群 後期後半の加曾利B式土器を一括した
- 11群 晩期の土器を一括した

なお、中期末から後期にかけては、包含層を形成する中心的時期であるため、やや細かい群設定を行った。また必要に応じて細分をしたものもある。

- 1群(第45図、図版30)

全体で約50点ほどの破片があり、殆どが5 I グリッドから出土し、多くは同一個体で第45図1になる。口径は28cm前後と推定でき、現存高は17cmを測る。器形は砲弾形を呈するもので、口唇部は外反し著しく肥厚する。施文は縄文で、口唇部外側及び胴部全面に施している。しか



第44図 遺物出土範囲図

し口縁部には横位調整の無文帯を配し、井草II式の特徴を備えている。原体は口唇部がR¹/₁、胴部がL¹/₄である。内面は本来の器壁が残っていないため調整は不明であるが、口縁に近い部分は横位の調整である。胎土には砂粒をかなり多く混入するが、焼成は比較的良好で、色調は褐色を呈している。

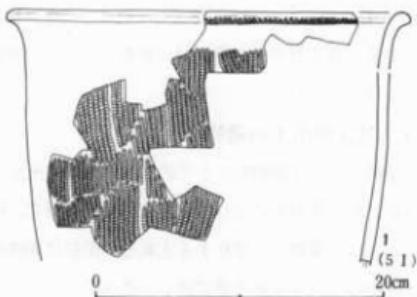
2群（第46図、図版30）

a類（1～9） 太く明瞭な沈線を横位に施すもので、沈線は長さ3cm前後、間隔は3～8mmで器面を覆っている。口唇部の形態は3が丸く納めているが、5～7は端部に横位の調整が明瞭で、面を有して納めている。5は沈線がかなり長く続くようであるが、共通して器面に横位の砂粒の動きが観察でき、3だけは内面に磨きを加えている。1・2は同一個体で、12mmと厚手である。外面はやはり砂粒の動きが観察でき、内面にかなり強い縦位の調整とともに、僅かではあるが磨きが施されている。胎土・焼成とも3と酷似し、3も同一個体の可能性が高い。そうなると、少なくとも口縁部から胴部中位までは横位の沈線で覆われている。胎土には細砂粒を多く混入するが、あまり粗さは感じられず、焼成は良好で赤褐色を呈している。8・9はそれぞれ別個体で、胴部下位の破片である。ともに施文は難で、9は摩滅のため施文が消えかかっている。胎土並びに焼成は8が前記のものにかなり近いが、9は石英粒を多量に含み、焼成もあまり良くない。

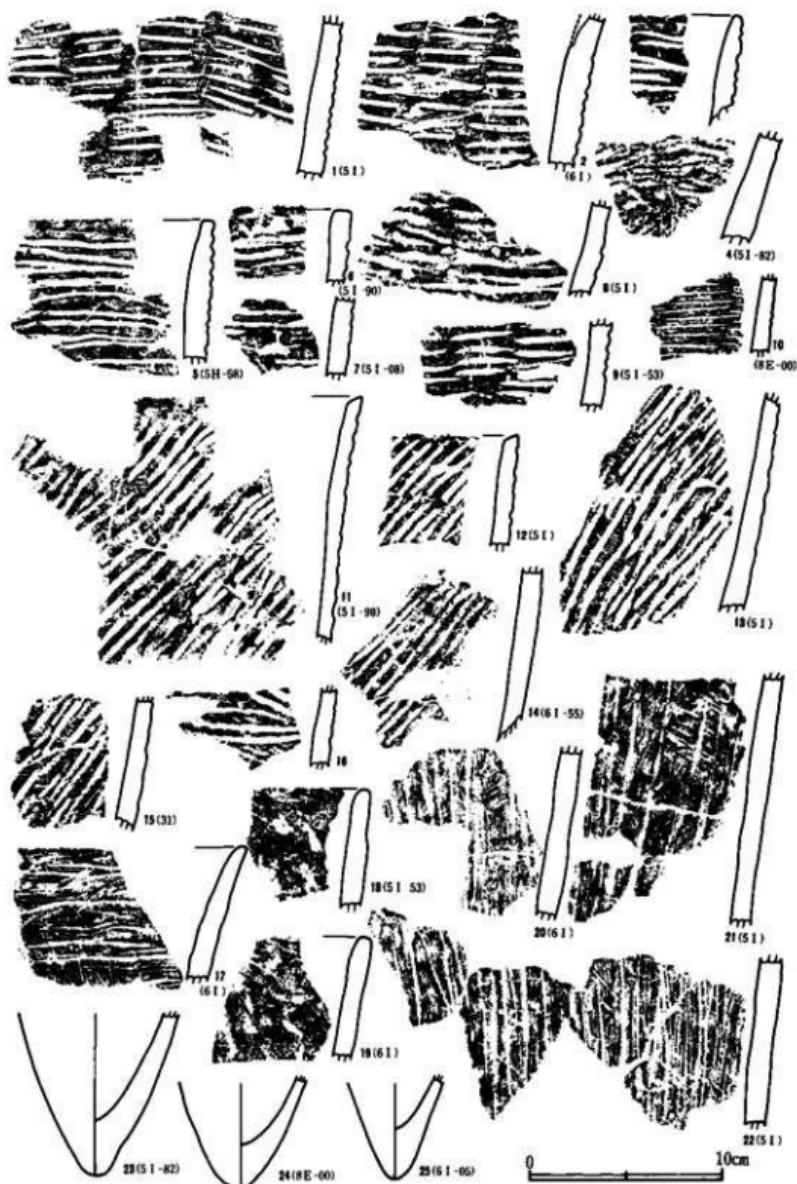
b類(10) 基本的構成はa類と変わらないが、沈線が細く幾分鋭いものである。やはり沈線は3cm前後の長さに重層させ、沈線端部を縦に揃えている。胎土は9同様石英粒を多く含むが、焼成は良好である。

c類(11～16) 太く明瞭な沈線を斜位に施文するもので、沈線自体はa類よりも太いものである。口唇部の形態は11・12がともに内側ぎである。内面は口縁下3cmほどが横位、それ以下は縦位の調整で、底部から口縁に向けて行っている。外面は比較的下位の破片である13においても同様な施文であり、やはり器面全体を覆っていたと思われるが、16に横位の沈線を組み合せている。また13・14を見ても分かるように沈線は長く続き、また端部を揃えるのは12だけである。胎土はa類に比べてやや粗く、極めて僅かではあるが微細な雲母粒を混入している。

d類(17～22) 浅い沈線とともに擦痕様の調整が明瞭に観察できるものである。口唇部の形態は17・18・19ともに丸く納められている。浅い沈線は拓影図で擦痕様の調整と区別できない部分もあるが、口縁部では5～6cm幅で横位、胴部は縦位に施し、器面の調整も内外面ともにこ



第45図 1群土器実測図



第46図 2群土器拓影図

れと方向を同じくする。また、胴部での調整は内外面ともかなり強く行われ、22に見えるのは殆ど調整であり、沈線ではない。これとは逆に18・19は雑な整形で、調整もあまり行われていない。胎土は砂粒を多く混入するが、特に微細な長石粒が目立ち、また僅かに纖維の混入も見られる。焼成は比較的良好で、色調は明褐色を呈している。

23~25は底部である。3点とも銳角に仕上られ、23は上部に横位の調整が施されているが、24・25は縦位で、24は先端に向けて行っている。胎土は25が比較的精緻であるが、23・24は粗く、特に23には大粒の石英粒を混入している。

これらの土器は今郡カチ内遺跡I群5・6・7類に共通する内容で、常陸伏見遺跡でも僅かに出土例が知られる。本遺跡では三戸式に特徴的な口縁部に緻密な文様帯を構成する土器を見られず、小野真一氏、小宮孟氏の指摘するように三戸式に伴うものではないらしい。やはり小宮氏・馬目順一氏の言うように田戸下層式に近いものとするのが妥当のようである。

3群(第47図、図版31)

早期末の条痕文土器で、文様表出方の違いにより5類に細分した。

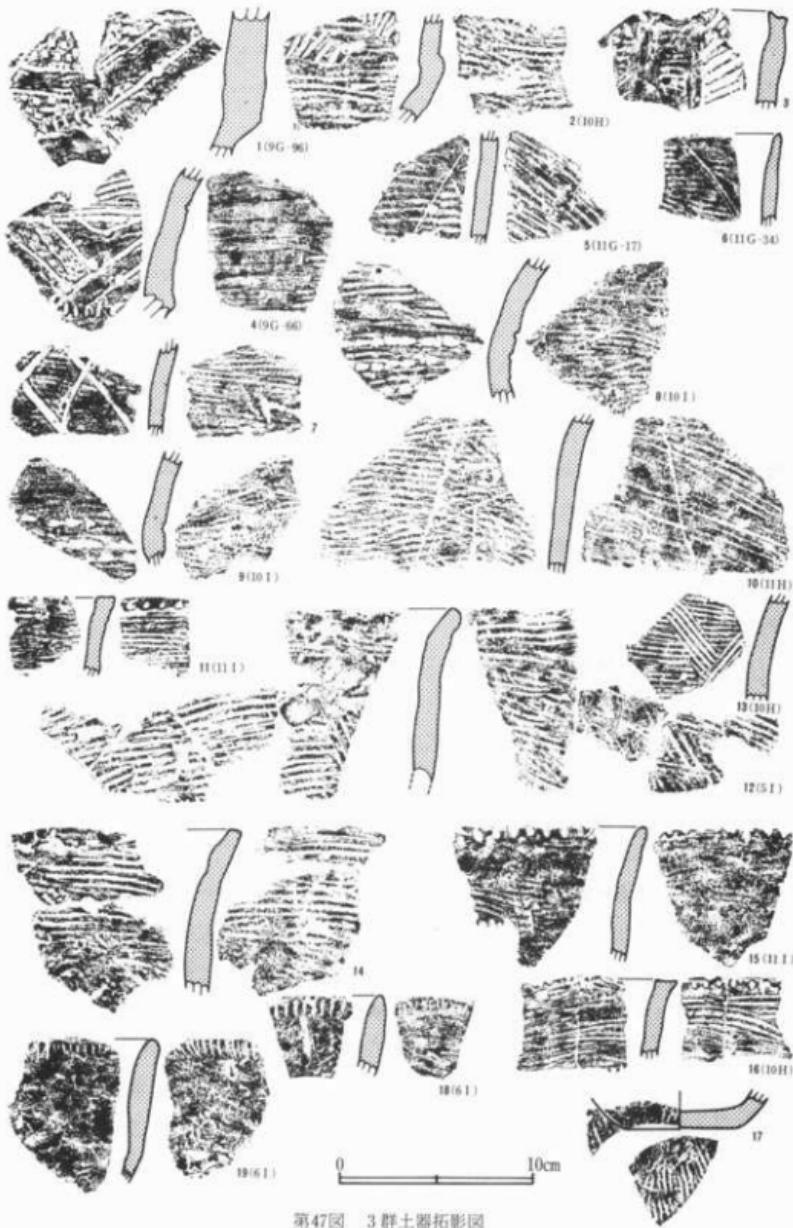
a類(1~4) いずれも口縁部の破片であり、隆帯で区画された口縁部文様帯は、沈線の区画文内に竹管の刺突ないし沈線を充填している。しかし口唇部が遺存するのは3だけで、3は波状を呈し、端部にも直交する沈線を施し、面を有して納めている。文様帯は基本的に縦位の主要な区画内をさらに斜位に細かく区画しており、縦位の区画は1が太い隆帯、3は細い2列の隆帯によって表されている。斜位の区画は竹管を使用した沈線で、断面は鋭く、また沈線の交点には竹管の刺突を施している。区画内は1・4が竹管刺突、2・3が沈線をそれぞれ充填している。内面は区画内に沈線を充填する2・3が横位の条痕で、竹管刺突の1・4は横位の擦痕である。胎土はいずれも纖維の混入があり多くなく、微細な長石粒の混入が多い。焼成は1・4が良好で、赤褐色を呈している。

b類(5~7) 斜位に交差する沈線を施すものである。5・6は浅く鋭い沈線で、幅も狭く、同類に含めたが7とは区別される。5は文様の構成がa類にかなり近いもので、区画内に充填文はないが、沈線上に竹管の円形刺突を伴っている。条痕は外面が横位に、内面は斜位に施される。6は口縁部の破片で、端部の調整は丁寧ではないが内剥ぎである。沈線は竹管で表出し、沈線施工後に器面をナデている。なお内面は縦位の条痕のようであるが、殆ど消されている。7は太く明瞭な沈線で、12号炉穴出土の土器に近い様相を呈している。また内外面とも横位の条痕が施されている。胎土は3点とも砂粒の混入が多く、5・7は纖維も多く含まれているが、6はかなり少ない。焼成はやや不良で、断面が黒色を呈している。

* 小宮 孟「東経用水」1984 勝千葉県文化財センター

** 小野真一「常陸伏見」1980 伏見遺跡調査団

*** 馬目順一「竹之内遺跡」1982 いわき市教育文化事業団



第47図 3群土器拓影図

c類(8・9) 口縁部の文様帯を区画するために竹管の刺突列を廻らすもので、文様帯内にはモチーフは描かれていない。2点とも同一個体で、現存部分では3列の刺突列が確認でき、内外面とも横位の条痕を施している。胎土はかなり多量に砂粒を含み、石英粒も多く混入されている。焼成は不良で、色調は灰褐色を呈している。

d類(10~17) 条痕以外の施文がないものである。11~16が口縁部の破片で、端部でやや開いている。端部はスリットを入れたものも含めたが、その形状は11・14・16が口唇部に調整を加え、整った面をもって納めている。なお12・16は丸く納める。スリットは口唇端部が丸い15が頂部に棒状工具を押圧し、11・16は両側からそれぞれ行っている。器面は内外面ともほぼ一様に横位から斜位の条痕で、15は内面の条痕を統て消している。特殊なものとしては13が鋸齒状に条痕を施す。17は底部で平底となる。底径は6cm前後で、内外面とも条痕を施すが、外面は特に強く施文している。胎土は概して纖維の混入は多くなく、纖維の混入が多いのは13だけである。また砂粒の混入が多く、12・14には微細な長石粒、15にはごく僅かに雲母粒を含んでいる。

e類(18・19) 内外面とも条痕が施されないものである。2点とも同一個体で、口縁部の破片である。端部は丸く納められ、内外面にそれぞれ爪形スリットが施される。器面はやや凹凸があり、外面はナデで明瞭な調整痕は見えないが、内面には横位の砂粒の動きが観察できる。胎土には長石粒を多く混入し、また纖維も比較的多く含まれている。焼成は良好で、色調は黒色を呈している。

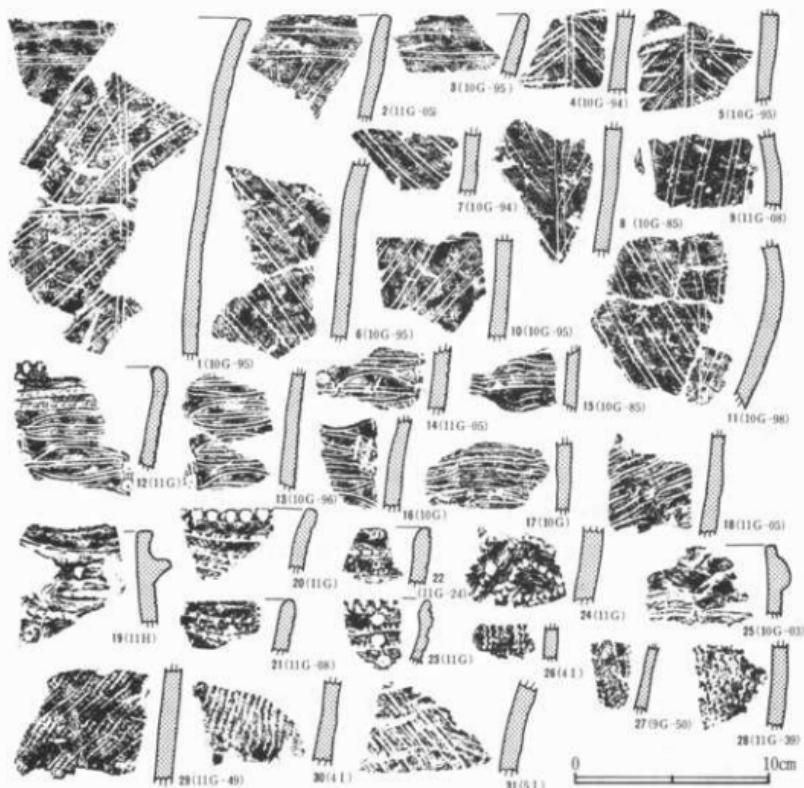
これらの土器は12・16号炉穴出土の土器に時期的に近いものが殆どであるようだが、a類としたものは両炉穴には含まれていなかった。a類は言うまでもなく鶴ヶ島台式に比定でき、またb~e類も27頁で触れたように茅山下層式の範疇を出るものではない。

4群(第48図、図版32)

本群は前期前半の土器で、胎土に纖維の混入が見られるものを一括してある。器面装飾の違いにより細分した。

a類(1~18) 半載竹管を使用した平行沈線でモチーフを描くものである。1~11は所謂肋骨文となる。口縁部はあまり開かないで立ち上り、筒形の器形を呈すると考えられる。やや湾曲の強い破片(9・11)もあるが、これは1とは別個体である。口縁部は丸く納められ、横位に2条の沈線を廻らす。胴部は縦位の沈線を軸に文様が展開し、1・5・10には横位に区画する沈線も観察できる。こうしてできた区画内に斜位の沈線を充填しており、基本的に隣接する区画では沈線の方向を違えているが、1だけは確認できる4区画のうち3区画が同じ方向に施している。また拓影図では充分観察できないが、1は僅かに纏文を施している。胴部下半は飯山溝東遺跡等で纏文が施される例が知られるが、8は底部に近い部分で、器面全体を肋骨文で覆

* 清藤一順『飯山溝東遺跡』1976 千葉県都市公社



第48図 4群土器拓影図

っているようである。内面は横位に磨き、口縁部に近いほど丁寧に行われている。胎土は纖維の混入が多く、また微細な石英粒も含まれている。

12~16は所謂木ノ葉状文となる。口縁部は端部で内傾し、2条の有節平行沈線を廻らせていく。また端部は棒状工具の押圧によるスリットが施されている。器面の基本的構成は肋骨文と変らず、縦位の区画を設けた後に区画内に沈線を施し、縦位の区画は平行沈線→竹管の円形刺突となる。この刺突を見るかぎり、原体は肉厚で端部に細工は施されていない。内面はやはり横位に磨いている。17・18は底部に近い部分で、横位にかなり難に沈線を施している。18には僅かに竹管の円形刺突が見られるが、上部の文様構成は不明である。

b類(19~25) 半截竹管により有節平行沈線ないし刺突列を施すものである。19はタガ状の突出した隆帯を廻らせ、隆帯下に刺突列を廻らせている。口縁部は波状を呈し、また隆帯頂部に棒状工具を押圧している。20~23は有節沈線となるが、刺突に近いものである。4点とも口縁

部の破片で、端部は丸く納めるが、20・23は端部にスリットがある。また20だけが波状を呈するようである。施文は終て横位で、12等を考えれば胴部のモチーフは概に復原できない。なお22・23は竹管の円形刺突を縦に並べ、20は繩文を施している。胎土は砂粒を多く含み、繊維の混入はあまり多くない。24は口縁に近い部分であるが、竹管刺突を三角形に連続させている。器面の調整は難であるが、内面には僅かに磨きが施されており、本類に含めた。25は口縁部に蛇行する隆帯を貼付け、隆帯下に節の長い沈線を施している。口唇部は面を有して納められ、部分的で明らかではないが、葉脈状の痕跡が残されている。内面は横位に丁寧に磨くが、外面の調整は難である。

c類(26~28) 貝殻腹縁文を施すものである。3点とも細片であり、拓影図からは充分観察できないと思うが、いずれも器面に対し縦位の刺突を横に連続させており、28はかなり成長した大形の貝を用いる。胎土は3点とも砂粒の混入が多く、焼成も不良である。

d類(29~30) 繩文を施すものである。出土量は多くなく、2点を図示した。29はL^(R)+Lの附加条で、原体はかなり短く施文の幅は2cm程度である。30はL^(R)の多条である。ともに繊維の混入が多く、僅かに微細な長石粒を含んでいる。

e類(31) 1点だけであるが条痕を施すものである。条痕は斜走し、原体は具体的ではないが、或は竹管を使用したものかもしれない。胎土は繊維の混入が多く、また微細な長石粒・石英粒も多く含んでいる。

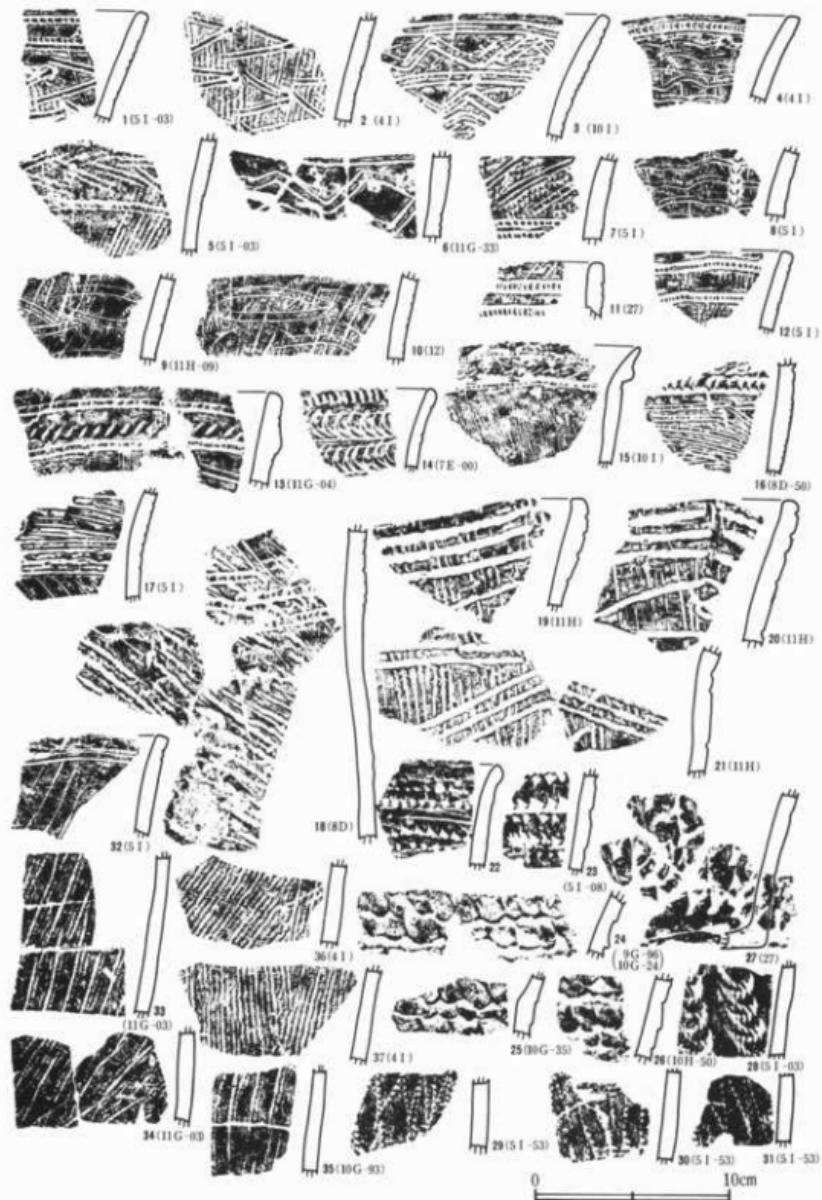
以上が4群土器で、黒浜式土器に比定できるものである。個体数としてはさほど多いものではなく、ごく短期間の遺物である。内容的には肋骨文や木ノ葉状文など諸磯式に繼承されるモチーフが主体であり、黒浜式土器でも新しい様相である。また19の突出するような隆帯も若葉台貝塚等に出土例が知られ、時期的に大きな隔たりはない。

5群(第49図、図版33)

前期後半の土器を一括してある。胎土に繊維を含むものはなく、數型式に及ぶ内容であるが、悉く一括した。

a類(1~10) 半截竹管の平行沈線でモチーフを描き、4群の系統を引くものも見られる。1・2・5は木ノ葉状文の系統であろうか。口縁部には2条の有節沈線を廻らせ、その下位に>状に平行沈線を施文している。5は別個体で、モチーフの下位にも有節沈線を廻らせ、ともにR^(L)の繩文を地文に施している。内面は入念に磨き、胎土には微細な長石粒をかなり多量に含んでいる。3・4・6も同様な構成となるもので、横位に蛇行する平行沈線を廻らせ、4は重層させている。3・4は口縁部の破片で、ともに大きく開き、端部の調整も丁寧である。4は上部に有節沈線を廻らし、3・6は平行沈線で区画している。また3・4は地文にまばらな

* 田村・原田「常陸自動車道埋蔵文化財調査報告書V」1976 勅千葉県文化財センター



第49図 5群土器拓影図

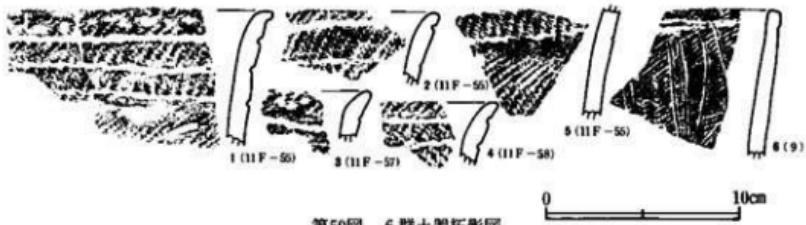
撲糸文を施し、6とは区別される。内面はやはり丁寧に磨くが、胎土は前記のものに比べ砂粒の混入が著しく多い。7は斜位の平行沈線で、沈線の空間には端部に細工を施した竹管を2列1単位で刺突している。8は肋骨文を祖形とするもので、縦位の区画は竹管の刺突に置き換えられている。地文はまばらであるが、原体L¹_nの繩文が施されている。9・10は同一個体で、弧状の沈線を組合せたものである。地文は原体L¹_nのややまばらな撲糸文を施す。胎土には石英粒を多く混入し、また僅かに微細な雲母粒も含まれる。

b類(11~21) 有節平行沈線若しくは爪形文を主体とするものである。11・12は口縁部の破片で、現状では2条の有節平行沈線が確認できる。口唇部から内面にかけて丁寧に磨き、外面はL¹_nの繩文を地文に施している。また12は沈線外にも竹管の連続刺突を施す。13・15はさらに低平な隆帯が加わり、隆帯上は棒状工具を斜位に押圧している。胸部はともに沈線による施文で、13が弧状に、15は縦位に密に施す。胎土は11・12が比較的緻密で、11にはやや大粒の長石粒を含んでいる。14・16は所謂変形爪形文で、17も沈線だけであるが口縁部には同様に施されていたと思われる。口縁部の形状が分かるのは14だけで、竹管刺突のスリットを有し、また施文の幅もやや広くなっている。胸部は16のように平行沈線をかなり密に施している。14はかなり多量の砂粒を含むが、内面は丁寧に磨いている。18は胸部中位の破片で、口縁部の文様体と胸部下位とを区画するのに有節沈線を用いている。拓影図からも分かるように、起点と終点がズレてしまっている。有節沈線の上位は斜位の平行沈線が、下位にはL¹_nの繩文がそれぞれ施される。内面はやはり磨いており、現存部分では縦位・横位区別なく行っている。胎土には砂粒を多く含み、遺存状態がやや悪い。19~21は同一個体である。口縁部は緩い波状を呈し、2ヶ所が現存している。端部は僅かに面を意識して納められ、内面を丁寧に磨いているにもかかわらず、口唇部は磨かれない。器面は竹管を使用したと思われる条痕様の施文で覆い、後に端部に細工を施した竹管の背を利用した有節平行沈線を3本単位で廻らせている。胎土には砂粒を多く含むが、その他に目立った混和剤はなく、焼成も良好である。

c類(22~23) 所謂三角文である。22は口縁部で端部がやや肥厚するが、縦位の密なスリットではなく、口縁直下まで三角文を施している。器面には横位の砂粒の動きが観察でき、内面は横位に磨いている。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良好である。

24~31はb類ないし c類の底部に近い部分の破片である。24~26は粘土紐接合痕を意識的に残すものである。3点ともやや開いて立ち上り、25は内面に屈曲がある。27~31は縫縫縁文である。27は底部で施文具はハマグリであろうか。他はアルカ属で、28は縦位にやや引きながら施文している。

d類(32~37) 繩文を施すものである。32は口縁部の破片で、端部に1条の平行沈線を廻らすが、以下縞条体压痕となり、33~35も同様である。胎土には砂粒の混入が多いが、焼成は比較的良好。36・37は別個体であるが、胎土は殆ど同じである。繩文はともにL¹_nの多条で、内面



第50図 6群土器拓影図

は縦位に細かく磨いてある。胎土には微細な長石粒を多く含み、また僅かに石英粒も見られ、焼成は良好である。

以上が5群としたものである。個々に見ていくばく問題点もあるだろうが、諸磯a式から浮島式にかかるものである。a類は4群から継承されるモチーフを含み、諸磯a式に比定できる。またb類としたものの中でも、11・12は諸磯a式としてよい。その他のb類は浮島I・II式であり、諸磯b式に共通する要素も多く含んでいる。また地文にまばらな撚糸文が施されるものも含まれ、所謂八幡脇類に近いものである。また、19~21の地文は撚糸文ではなく、竹管を使用したと思われる条痕様のもので、撚糸文から転化したものであろう。浮島I式のカテゴリ一に収まるものではない。c類の三角文は単独で施される可能性もあり、興津式に近いものであろう。

6群(第50図、図版34)

前期末から中期初頭に属すると思われる土器である。出土量は少なく、図示したものが總てである。6を除いて同一個体で、出土地点も近い。器形は口縁部がやや開くが、円筒形に近いものになると考えられる。口縁部にはL-Rの側面圧痕を3条廻らせ、地文にもL-Rの繩文を施している。内面は横位に磨いてある。胎土は砂粒の混入が多いが、焼成は良好である。6も口縁部に側面圧痕を廻らせ、地文にも繩文を有するが、さらに縦位に浅い沈線を施している。口唇端部はやや角があり、剥落して殆ど確認できないが、端部にも側面圧痕を施している。新東京国際空港内 NO 6遺跡IV群土器に酷似し、やはり下小野式としてよいであろう。

7群(第51図、図版34)

中期末の土器を一括してある。1~3は同一個体であるが、やや離れて出土している。口縁部は4単位の緩い波状となり、僅かに内湾している。胴部は欠失しているが4の如き形状となり、括れの位置は低いものの加曾利E III式でだらしなくなったキャリバー形が復活している。しかし口縁部文様帶は殆ど消失し、微隆帶によって区画された幅2cm程度の無文帶が残るだけ

* 遠原貝塚(川崎・鶴志田「遠原貝塚の研究」1980 勝田文化研究会)ではまばらな撚糸が施される土器の胎土に纖維を混入なるものが見られるというが、本遺跡では纖維を混入するものはない。

** 杉山晋作他「木の根」1981 千葉県文化財センター

で、胸部も無文帯を伴う2本1単位の微隆帯を緩やかなカーブを描いて配している。これは括れ部を境に幾つかの構成の変化が見られるようであるが、まだあまり明瞭な違いには発展していない。微隆帯によって区画された空間にはR¹_Lの粒の粗い繩文が施され、施文順序は繩文が先である。内面は横位に磨いている。胎土には砂粒が多く混入するほか、黒色を呈する雲母粒も僅かに含まれる。4・5は胸部下半で同一個体である。先にも述べたように胸部上半は1の如きになる。器面はやはり無文帯を組み入れた2本1単位の隆帯を懸垂文とし、隆帯に区画された空間には繩文が施されている。原体はL¹_Rで施文順序は繩文が後になる。なお現存部下端では隆帯・繩文とも縦位の調整で消されており、底部に近いことを物語っている。内面の調整はあまり丁寧ではないが、縦位に磨きを施す。6~12は断片的な破片である。7はやはり隆帯を伴うが、10には沈線の懸垂文が見られる。繩文は全て縦位回転で、7・10がR¹_L、他はL¹_Rとなる。胎土には砂粒の混入が多く、7・8には微細な長石粒、6・9には微細な雲母粒が僅かに含まれる。

これらは統く8群との連続性について議論もあるところであるが、本遺跡では直前型式となり関係は無視できないと考える。

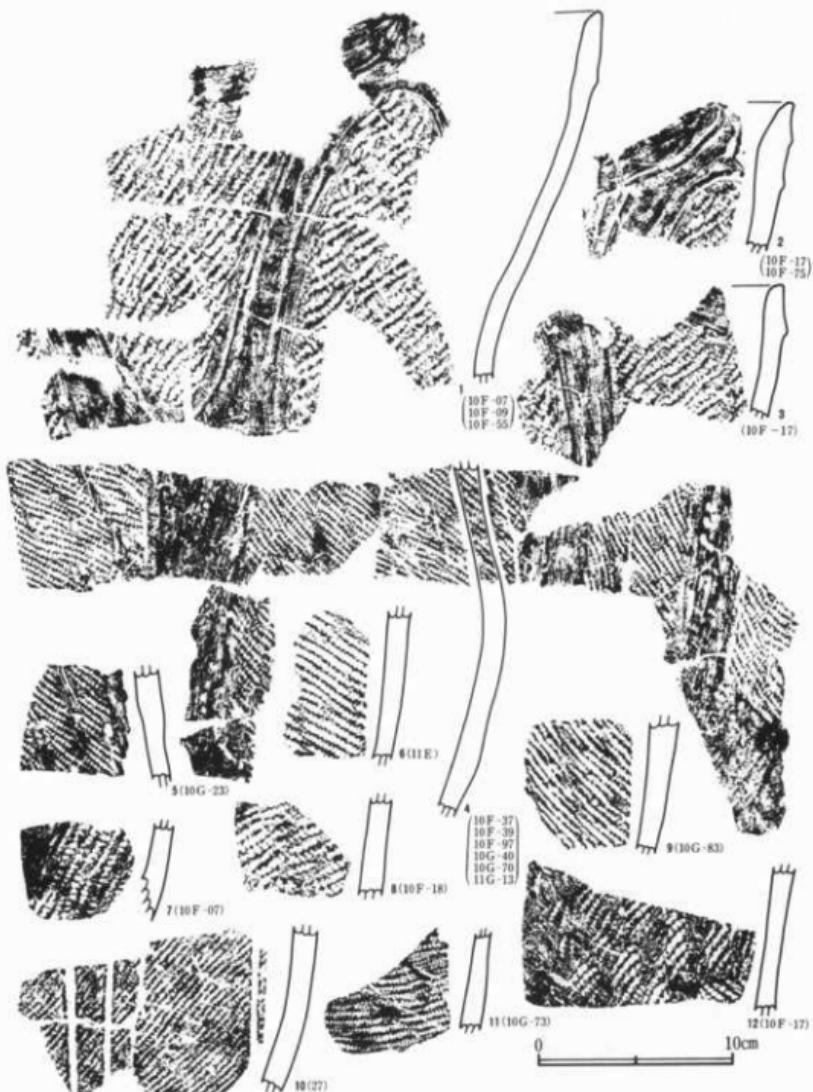
8群(第52~64図、図版35~43)

後期初頭の土器で、称名寺I・II式ないしそれに並行するものである。包含層を形成する中心的な時期で、遺物の量は約6000点に近いが、完形に復原できたものは殆どない。個体識別も行ってはみたが、決して充分なものではない。現在の編年観と文様表出法の違いにより細分した。なお第3章にて若干の私見を述べることとし、本章では事実記載に留めたい。また、利用の便は悪いが、個体資料の出土地点は第3章の第98~101図を参照していただきたい。

a類(第52~54図) 沈線区画の意匠文内に繩文を充填するものである。第52・53図は個体識別を行った結果、同一個体に帰属すると認められた破片数が比較的多いものを図示した。

個体01(1~12) 破片数が多いが殆ど接合しない。口縁部は4単位の波状となり、かなり急激に頂部を迎える。また端部は内側に肥厚し、胸部も10のように大きく屈曲するもので、充填繩文が観られる土器では新しい様相である。波状頂部は2ヶ所が現存し、端部は益々肥厚し、幅は2cm近くになる。また1では端部に円形貼文と沈線を施し、2には見られないことから対峙する2ヶ所が対になるようだ。ただ波頂部は2点とも欠失しており、その形状は不明である。文様の構成は口縁部に最大1cmの無文帯を挟んで意匠文が展開し、J字文を基調とし4・9ではスペード文を組入れる。屈曲部では10のように意匠文の末端部分が位置するが、上下に文様

* 称名寺I・II式とも2~3期の細分案が提出されており(下村1973・今村1977・青木1977・谷井1977・柳沢1979・中島1981・柿沼1981)、本遺跡でも同様の状況が観れる。しかし取り敢えずは充填繩文・列点文の2大別とした。



第51図 7群土器拓影図

構成上大きな違いは認められないと思われ、11のように連続する。意匠文内には比較的細かなL(左)の縄文を施し、無文となる部分は意匠文の方向に沿って磨いている。内面は横位の調整で、磨きは施されていない。胎土にはやや大粒の粒子を含むが焼成は良好である。

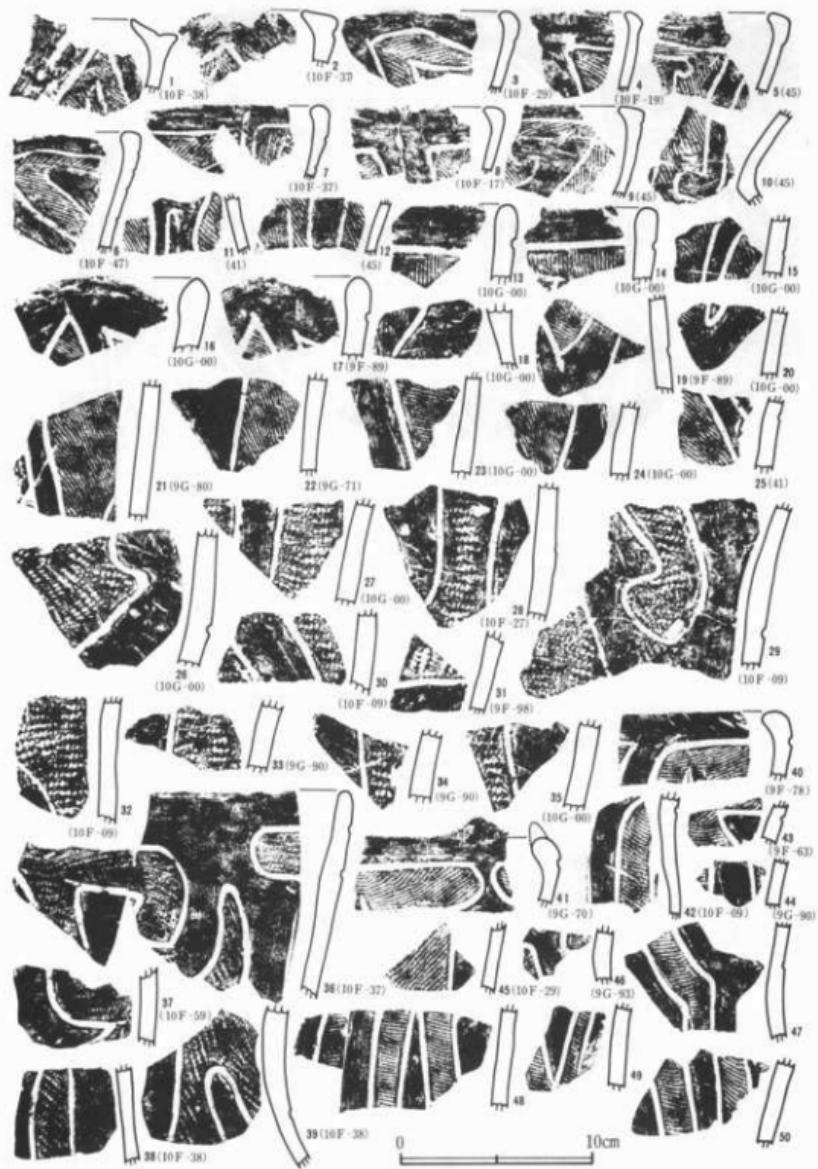
個体02(13~25) 口縁部は緩やかな波状を呈し、4単位の可能性が高く、このうち2ヶ所が遺存している。胴部の形状は具体的ではなく、破片を総合するとあまり強くは括れないようである。口唇部は丸く納められ、波頂部で幾分肥厚する程度で、意匠文は波頂部を中心に展開している。これらの破片から意匠文全体を把握することはできないが、16・17・19を見るとJ字状の意匠文が想定でき、また14のようにスペード文も組入れられている。沈線は深く明瞭で、区画内にL¹の繩文を施す。無文の空間は幅広の部分を磨くが、21・25のような狭い部分は丁寧にナデるだけである。胎土にはことのほか砂粒を多く混入し、また極めて微量であるが石英粒も含まれている。

個体03(26~35) 同一個体と認められた破片は12点で前記2個体と比べると遙かに少ない。また口縁部の破片を含まず、口唇部の形状・意匠文の上端等は不明である。ただ胴部は26・29の傾斜から緩い屈曲を持ち、胴部下半でやや膨らむものと考えられる。意匠文には繊細さがなく、ひとつのパターンが大形化するとともに、構成要素も簡略化される方向にある。無文となる空間は部分的に磨きが施されるが、多くは雑な調整で砂粒の動きが観察できる。繩文はL¹で粗く、節内の繊維も見ることができる。内面は剥落する部分もあり、外面同様砂粒の動きが観察でき、磨きが施されている破片はない。胎土には砂粒を多く混入し、また微細な石英粒・長石粒もかなり目立つ。

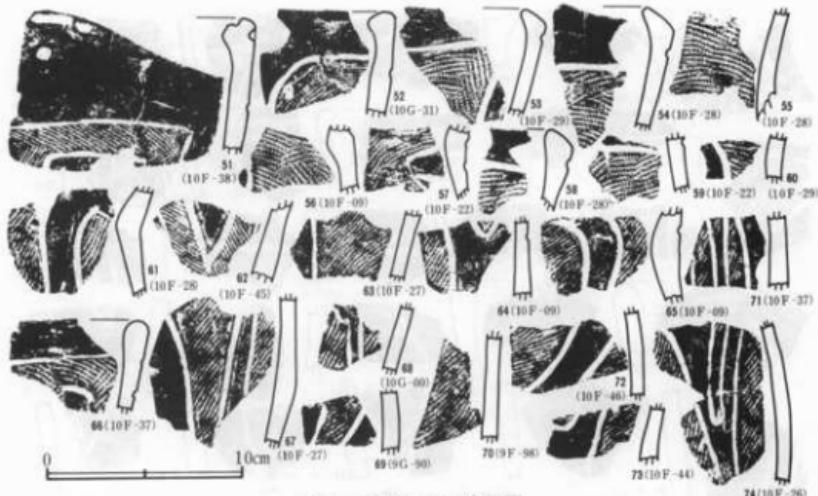
個体04(36~39) 同一個体と認められた破片は僅か5点である。器形は胴部中位でカーブが緩やかに大きな屈曲を呈し(39)、胴部下半も大きくなっているが、やや丸味を持っている(37)。口縁部は直線的に開き、端部を丸く納めている。意匠文は36が反転したJ字文で、感覚的にはかなりシンプルで、意匠文が崩れ出す前の段階で、中島氏の言うJ字文の1次反転である。沈線は太く明瞭で、意匠文内の繩文はL¹である。器面は内外面とも入念に磨かれていて、内面は口縁部が横位、胴部は縦位に行っている。胎土は砂粒が多いが、器面の調整が良いため粗さはなく、焼成も良好である。

個体05(40~46) 口縁部の破片を含む個体である。口縁部は内溝し、内面に肥厚している。基本的に平縁であるが、41には小突起があり、2ないし4ヶ所に同様の突起が設けられていたと推定できる。胴部は42のようにあまり大きな屈曲ではなく、意匠文も上下に連続するようである。意匠文の構成は41に窓状区画に似た区画があるが、40を見る限り反転したJ字文と思われる。沈線は深く明瞭で、区画内の繩文は細かくL¹である。口唇部から内面にかけて横位に磨き、意匠文も空間も胴部上半は磨いている。

個体06(47~50) 破片数も少なく、また9F-89グリッドから殆どが出土している。胴部は緩く屈曲するようだが全体の器形は明らかではない。意匠文は相当崩れてしまっているよう、各区



第52図 8群1類土器拓影図



第53図 8群1類土器拓影図

画の幅がかなり狭くなっている。しかし施文は実に丁寧に行われ、そのことは沈線・無文となる空間のみならず、縄文が意匠文に対して直交するように転がしていることからも分かる。内面も横位にかなり丁寧に磨き、砂粒の混入が多い割には堅緻な感を与える。

個体07(51・52・61~65) 破片数は少ないが、かなり散在した状況で出土している。器形は口縁部が直線的に開き、胸部になだらかな屈曲を有するもので、口縁は緩い波状となる。波頂部は外面に円形刺突が、内面に円形刺突を伴う沈線を配し、内側に肥厚している。意匠文はJ字文系のようであるが、全体を復原することはできない。沈線は明瞭で、区画内の縄文はL^Rである。胎土には細砂粒を多く混入し、また石英粒も若干含まれる。

個体08(53~60) やはり破片数は少ないが10F-28グリッドを中心にかたまっている。いずれも細片であるため、全体を窺うことができないが、55のように僅かに屈曲を有している。口唇部は内側に大きく肥厚し、緩い波状を呈するようである。意匠文を復原することはできないが、縄文帯が幅広でJ字状の展開が予想できる。区画内の縄文はL^Rで、無文となる空間に磨きは施されていない。胎土には砂粒を多量に含み、長石粒がかなり目立つ。

個体09(66~74) 破片数は10点ほどであるが、かなり散在して出土している。口縁部の破片は1点だけで(66)、端部は丸く納めている。意匠文全体は復原できないが、67・74等は縄文帯が比較的狭く、またやや入り組んだもので、J字文系の崩れた意匠文と考えられる。沈線はやはり明瞭で、区画内の縄文はL^Rである。内面は口縁部で横位、胸部が縦位に磨く。胎土は細砂粒を多く混入するが、その他目立った混和剤はない。

第54図はその他の破片である。全体に緩いカーブを描いてキャリバー形となるものが多いよ

うで、大きく屈曲する破片はない。75～87は口縁部で、77・80・81等緩やかな波状を呈するものもある。波頂部の装飾は80に僅かに沈線が見られ、口唇と意匠文を繋いでいる。口縁部には統て無文帯を廻らせ、端部は76・80・83・84・86は丸く納めるが、内側に肥厚するものが多く、75・77・87は特に大きく、75では端部に沈線を廻らせており。意匠文は口縁部で殆ど同じ展開をなし、基本的にJ字文を中心としてスペード文を組入れたものである。J字文自体は80でしか確認できないが、反転したJ字文で、口縁部の無文帯がそのまま意匠文内の無文空間へと続いている。しかし、75～79・82・87のスペード文は反転しておらず、また縄文帯の幅も狭くX字状の展開を示すものではない。但し、87だけはスペード文が反転しており、X字状となるかもしれない。縄文は全てL⁸_Rで、82・86のようにかなり細かいものもある。区画する沈線は太く明瞭なものが殆どであるが、80だけは器面がかなり入念な磨きのため、沈線も不鮮明となっている。器面は統ての破片が磨きを施しており、内面も横位に磨いている。胎土には砂粒の混入が多く、微細な長石粒についてはその量に違いがあるものの、ほぼ例外なく含まれており、また81・82・85・87には僅かに黒色を呈する雲母粒が含まれている。

88～107は胴部の破片である。意匠文については口縁部と大きく異なるところはないようであるが、96を見ると屈曲部の上下でやや構成が異なるようである。全体的には、特に縄文帯の幅も広くなく、むしろ96・101のように狭いものが多く、構成もやはりJ字文系の意匠文の一部と考えられる。98も崩れているように見えるが、中野僧御堂遺跡や東庄内B遺跡等で見られ、決して例外的なものではない。また103には紐状隆帯が付されている。縄文は103がR⁸_Lである他はL⁸_Rとなる。区画する沈線はやはり深く明瞭で、無文となる空間も口縁部ほどではないが磨きを施している。なお内面は約半数が磨いていない。胎土には砂粒の混入が多く、ほぼ例外なく微細な長石粒を含み、100・101・103は特に顕著である。また、92・96・101・105にはごく僅かに雲母粒を含んでいる。

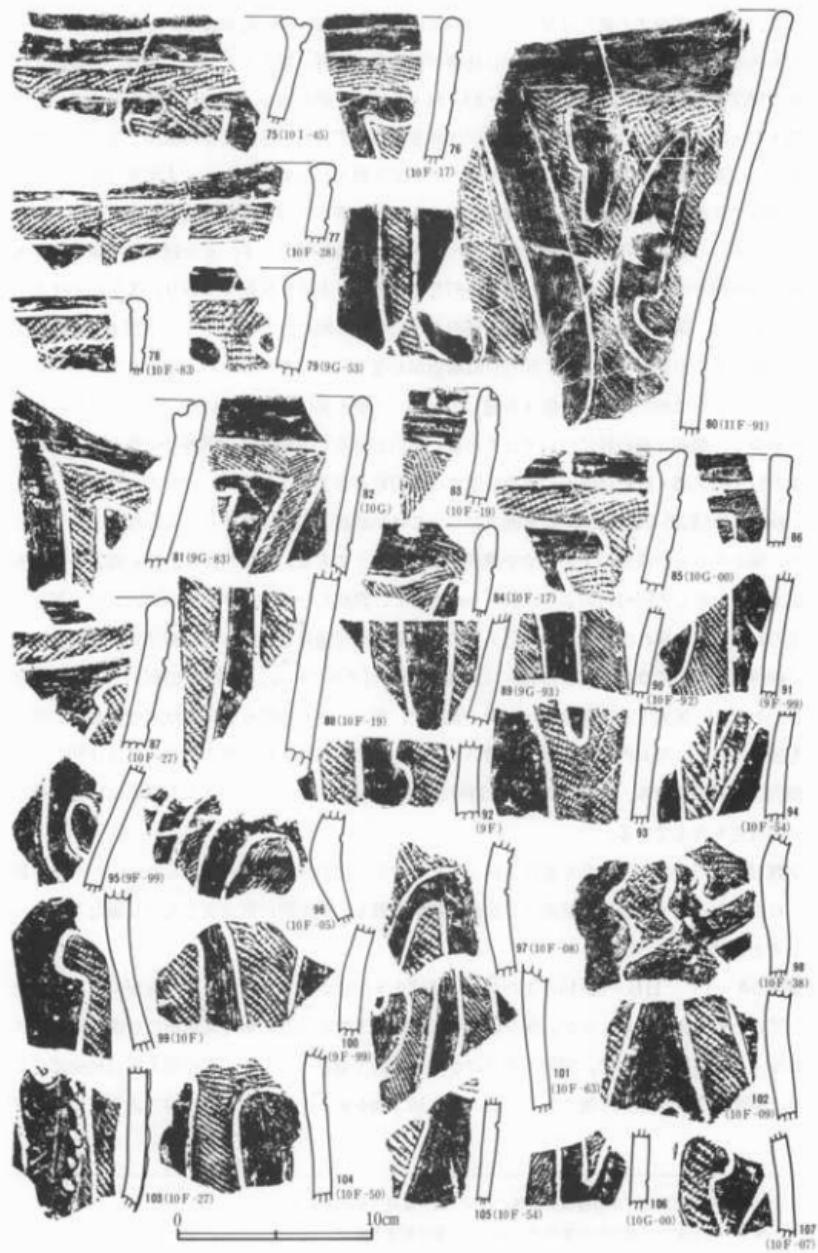
2類(第55～58図) 列点文を意匠文内に施すものを一応のメルクマールとしたが、列点文が施されなくなったり、斜位に交差する沈線を施す土器も、時期的に列点文と大きな隔たりはないと考え同時に扱う。

個体OA(1) 11G-05-15にまたがってほぼ1ヶ所にわたって出土し、廃棄時の状況を保っていたと考えられる。なお、掘り込み等は確認できなかった。また廃棄時には既に用に供されなくなっていたもので、胴部下半だけが全周の約7/8を残して現存している。現存部上端は屈曲部であり、胴部の張りはあまり強くない。最大径は16.8cmを測り、やや小形の土器である。口縁部で

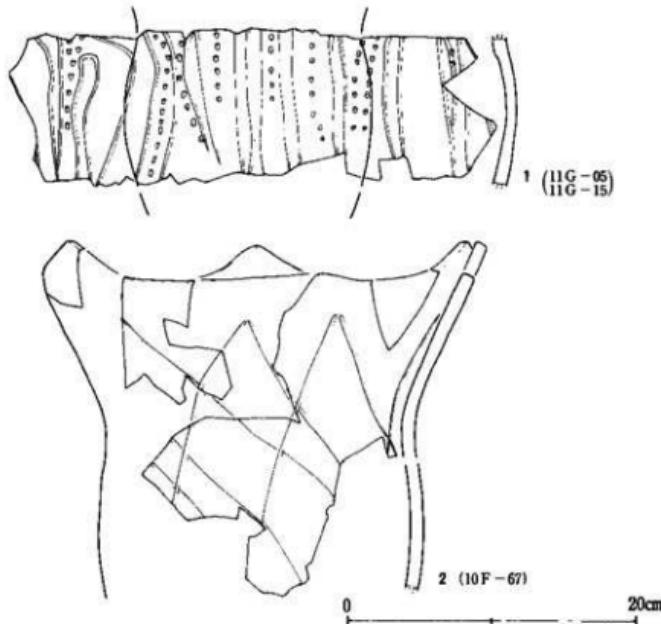
* 中村恵次他「中野僧御堂遺跡」1976 徳島県文化財センター

** 谷本锐次「東名阪自動車道」1970 三重県教育委員会

*** 「庚塚・上・雷遺跡」1980 徳島県埋蔵文化財調査事業団



第54図 8群1類土器拓影図



第55図 8群2類土器実測図

の意匠文の展開は不明で、現存部分では縦走する沈線と、同様の列点文が見られるだけである。ただ現存部の左端ではモチーフが分岐しており、上半ではJ字文系の意匠文が推定できる。沈線はやや雑に施され、また沈線周囲への粘土の盛り上がりが観察できる。器面は斜位の粗いナデで整えられ、無文部は僅かにナデの痕跡を消そうとしているが、充分ではない。内面も縦位の磨きが僅かに施されるが、粘土紐接合痕を窺うことができる。胎土には砂粒とともに微細な長石粒・雲母粒を少し含む。

個体OB(2) 10F-67グリッドで出土したもので、掘り込みは認められなかった。胸部下半を失し、口径30cm、現存高24cmを測る。口縁部は3単位の波状を呈し、あまり類例を聞かない。しかし器形は胸部で緩く括れる一般的なものである。口唇部は僅かに面を持ち、内側に若干肥厚している。器面は斜位に交差する沈線を施し、また口縁部にも無文帯を意識するが、文様帯とを区画する沈線はない。斜走する沈線は全周で9~10単位で構成され、あまり規則的なものではなく、交差する位置も様々である。器面は横位ないし斜位のナデで、部分的に磨きを施し、内面は口縁部に限って横位に磨いている。胎土はかなり多く砂粒を含むが、それ以外に目立った混和剤はない。

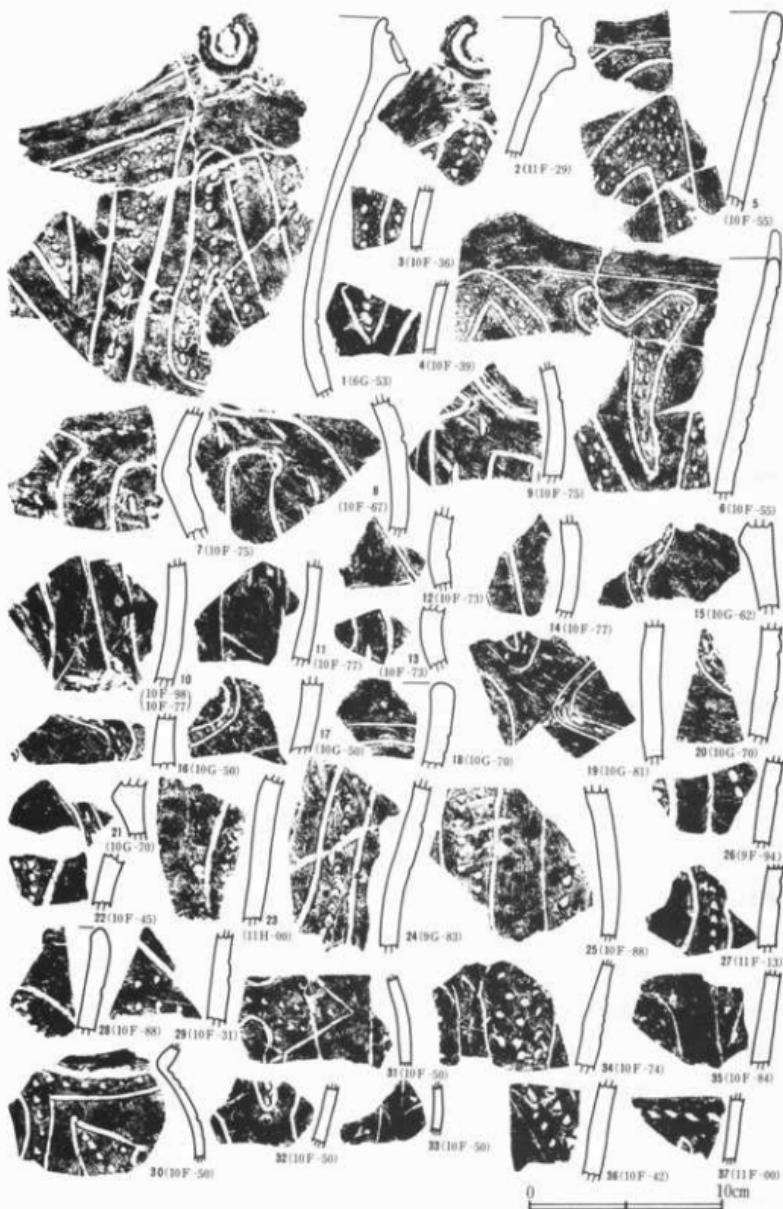
個体 OC(1~4) 破片数は多くないがかなり広い範囲に散っており、6 Gグリッドでも出土している。口縁部は比較的大きく外反し、恐らく4単位の波状となる。波頂部にはC字状の貼付文をあしらい、また端部は内傾している。胸部は緩いカーブを描き、極端な屈曲はない。口縁部の無文帯は、意匠文内の空間に続く部分があり、意匠文もかなり簡略化された様相を呈している。またスペード文は反転していないが、全体は反転したJ字文となる。列点文は比較的丁寧に施し、円形の刺突を密に施している。なお区画する沈線は1類に比べて浅いものである。列点文が施される空間には斜位の調整痕が明瞭に残されており、無文部分では磨きを加えて消している。胎土は砂粒の混入が著しく多く、微細な長石粒をはじめ種々の粒子が含まれている。

個体 OD(5・6) 破片数が少なく、総ての破片が10F-55グリッドから出土している。口縁部は山形の波状を呈し、端部は丸く納めている。また幅は狭いが無文帯を廻らせ、胸部の文様帯とを沈線で区画している。しかし意匠文は、列点文帯の幅が狭いながらもかなり簡略化されたもので、J字文系の意匠文であろうが、既にその原形を復原することはできない。列点文は先端に細工を施した半載竹管を使用しており、さらに竹管の表裏を使い分け、区画毎に違う表出となっている。沈線はかなりしっかりと描かれていて、沈線周囲に若干粘土の盛り上がりが観察できる。胎土はやはり砂粒の混入が多く、微細な長石粒・雲母粒が特に目立つ。

個体 OE(7~14) 8点の土器片があるが接合せず、また口縁部の破片も含まれていない。器形は完全には復原できないが、胸部の屈曲はかなり明瞭で(7)、胸部下半も割と丸味を有している(8・9)。意匠文も全容はつかめないが、J字文を基本としてやや崩れたものになっており、列点文も単なる刺突でなく1cm前後の沈線となっている。列点文が施される空間は斜位の調整痕が明瞭で、無文部分については粗い磨きで消している。胎土は比較的堅緻で、僅かに微細な長石粒が含まれている。

個体 OF(15~21) 口縁部の破片は1点だけで、器形を復原することはできない。口縁部は僅かに内湾し、また、内側に若干肥厚している。胸部の屈曲は15・21のように外面ではあまり極端ではないが、内側では明瞭な綾を形成している。意匠文は部分的にしか残されていないが、列点文の幅が非常に狭くなり、またその構成も著しく崩れてきており、原形を窺うことはできない。列点文は半載竹管の刺突で、原体もかなり細いものを使用している。無文となる空間はかなり幅広であり、空間というよりはむしろ器面に刺突を組入れた沈線を描くといったほうが正しい。なお器面には斜位の調整痕が明瞭に残され、内面は横位に入念に磨いている。

個体 10(22~29) 破片は9点しかないが、かなり散在して出土している。口縁部は28の1点だけで、端部は丸く納めるが、やはり内側に僅かに肥厚している。口縁部の無文帯はそのまま意匠文内へ繋がっていくが、他の破片では、意匠文も直線的な部分しか残されておらず、全体の構成は全く不明である。列点文は半載竹管を使用し、個体ODの如く表裏とも使用している。



第56図 8群2類土器拓影図

沈線は比較的明瞭であるが、周囲に粘土の盛り上がりが観察できる。

個体11(30~33) 破片数は6点で、総て10F-50グリッドで出土している。器形は球形に近い胸部から口縁部が強く屈曲して立ち上るもので、口唇部は欠失している。口縁部はあまり長く伸びるものではないようで、無文となっている。意匠文は基本的にJ字文であり、恐らくスペード文を組入れた構成となろう。なお沈線は浅く施されている。

個体12(34~37) 破片数は少ないが、かなり散在している。殆ど接合せず、また胸部の破片だけであるため、器形及び意匠文の構成を復原することはできない。沈線も浅くかなり雑に描いており、34・36のように1区画内に複数列の列点文を施している。

個体13(38~40) 破片数は4点で、総て10F-29グリッドから出土している。口縁部は欠失しているが無文帯を避け、意匠文はかなり幅広の単純な構成となり、区画内に列点文を密に充填している。胎土は他の個体に比べて粒の大きい長石粒・石英粒を混入するが、焼成は良好で器面の荒れもない。

個体14(41~46) 細片ばかりであるが、胸部に緩い屈曲を持ち、胸部下半はやや丸味を帯びるものである。意匠文はJ字文系であるが原形を留めず、また列点文も消失している。胎土には砂粒を多く混入している。

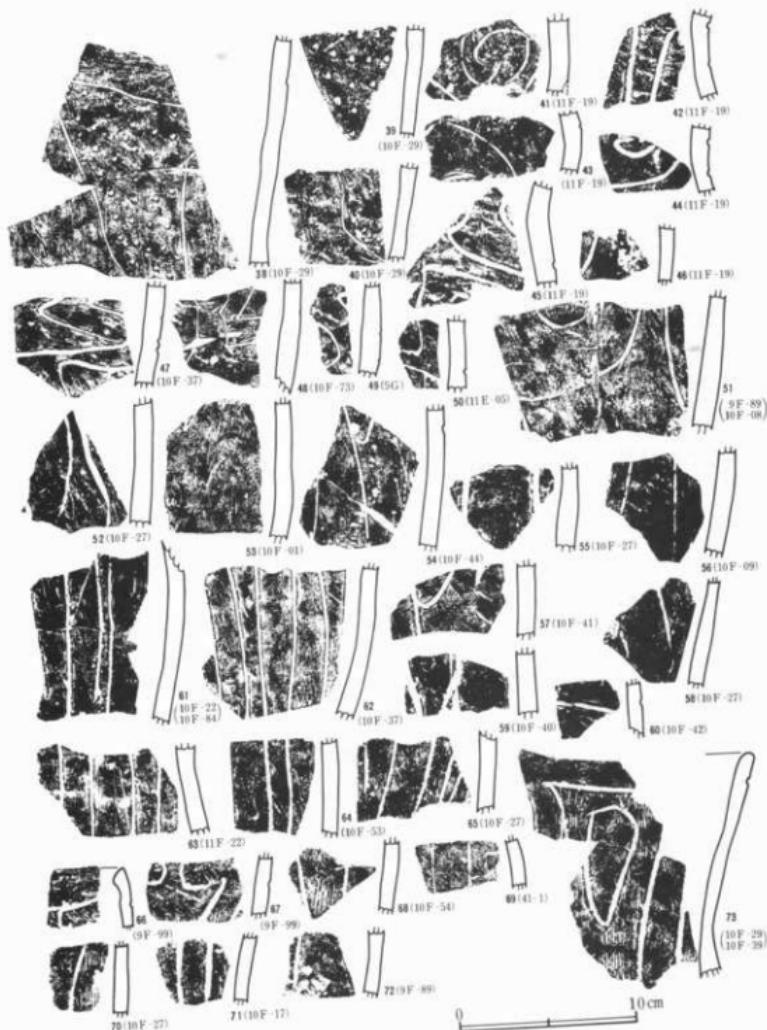
個体15(47~50) やはり細片であるが、個体14同様意匠文は沈線だけで描かれ、列点文は消失している。沈線の施文もかなり雑で、先端が鋭利な工具を用いている。胎土は微細な長石粒がかなり目立つ。

個体16(51~60) 破片数は15点でかなり広い範囲に散っている。口縁部の破片は含まれていないが、現存する破片からは、胸部での屈曲は殆どなく、口縁から底部にほぼストレートに至るものと考えられる。意匠文を復原することはできないが、やはり列点文は施されていない。器面はかなり雑ではあるが、沈線区画の内外を問わず縦位に磨き、内面も同様である。胎土は細砂粒を混入し、また僅かに長石粒も含まれている。

個体17(61~65) 破片数は6点で、口縁部は含まれていない。現存部分では総て直線的に垂下する沈線が施されるだけで、これらの沈線の上端の意匠は不明である。沈線自体は丁寧に施文するが、周囲の粘土の盛り上がりはかなり顕著になる。また全面に斜位の調整痕が明瞭に残されている。胎土は細砂粒・長石粒を僅かに混入する。

個体18(66~72) 破片数はかなり多いが殆ど接合せず、また各破片は著しく摩滅している。口縁部は1点で、僅かに内湾し内側に大きく肥厚している。意匠文の全体も見えないが、67に反転したスペード文が見える。意匠文内は列点文ではなく、条線様の沈線を充填している。胎土は砂粒の混入が多く、その他に目立った混和剤はないが、焼成が不良で遺存状態は悪い。

個体19(73) 口縁部は波状を呈し、端部を丸く納めている。意匠文は個体18同様条線様の沈線を充填している。意匠文内の主要な空間には磨きを施しているが、充填部に囲まれた区画は調



第57図 8群2類土器拓影図

整痕がそのまま残されている。胎土には長石粒を多く含んでいる。

第58図にはその他の破片を一括した。基本的に個体資料を補足する程度のものである。94～95は沈線区画の意匠文内に列点文を充填している。このうち74～77は口縁部で、端部は丸く納めるものが殆どであるが、77のように内側に肥厚するものも含まれている。意匠文は4点とも同様な展開をするようで、74・75には反転していないスペード文が見え、主要な部分はJ字文となる筈である。77を除いて列点文は細かく施され、76・77は半載竹管の内側を使用している。器面は拓影からも観察できるが、横位の調整痕が明瞭に残され、無文の空間については磨きを加えて消している。内面も横位の磨きを施し、77は特に入念に行っている。胎土は細砂粒の混入が多く、微細な長石粒もかなり目立つ。

胴部についてはややバラエティーがあり、78・79・81・82・83・84のようにJ字文が配されるものの他に、80・85のX字状となるものもある。しかし胴部下位では殆どが直線的に垂下し(87・88)、数は少ないが86のように底部の無文帯とを区画するものもある。列点文は基本的に円形の刺突だが、80・85のように沈線に近いものもある。なお89・90はかなり密に刺突を施し、三十稻場式の影響も考えられる。福島県下では綱取I式で既に伴うことが知られ、関東地方でも称名寺I式の新段階には伴っているようである。ただ本例は沈線の区画が見え、個体13の例もあることから取り敢えず2類に含めた。

94・95は意匠文内に繩文と列点文の両者を充填している。量的には少ないものの多くの遺跡で見ることができ、中野僧御堂遺跡の例は充填繩文があるものの意匠文は著しく崩れており、その構成も称名寺II式としたほうが妥当のようである。ただ大木10式のなかにも両者を併用する例があり、この関係と共に一概に時期を決定することはできない。

96～98は意匠文内の列点文が消失したものである。96は口縁部で、端部に面を構成している。意匠文は全く原形が復原できないほどに崩れ、胴部の破片についても同様である。列点文があるものに比べ、沈線脇の粘土の盛り上がりが目立つようになる。

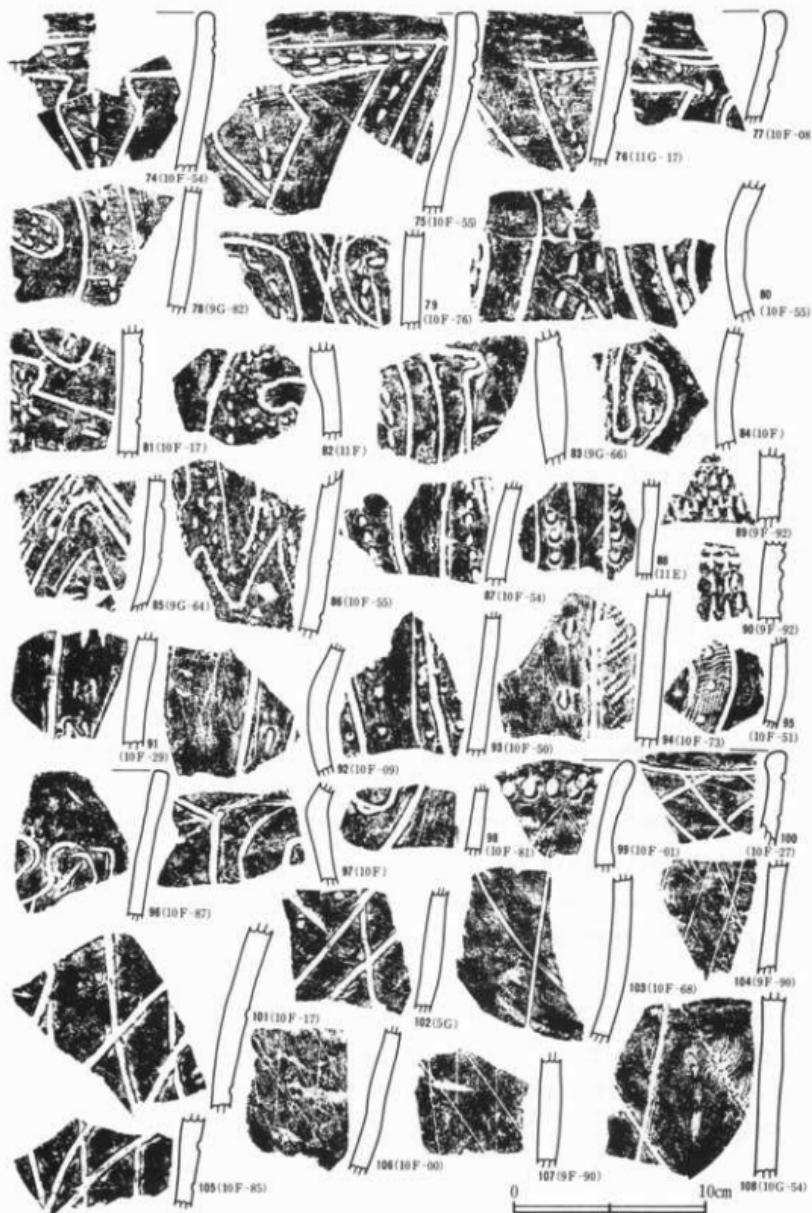
99～102は斜位に交差する沈線を施すものである。口縁部は99・100の2点を示したが、99は緩い波状を呈している。ともに口縁部とそれ以下を区画し、99は円形の押圧、100は沈線で行っている。沈線はごく太いものと、ごく細いものの2者があり、108はさらに条線文が加えられている。沈線の施文に関しては特に規則性は認められず、交差の仕方も様々で、101・102・105は特に粗雑である。胎土はかなり多く砂粒を混入し、また共通して微細な雲母粒・長石粒を含んでいる。

* 田中耕作「所謂『三十稻場式土器』の成立について」『信濃』37-4 1985

道上遺跡(芳賀英一「国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告書III」1985 福島県教育委員会)

3類土器の中にも施文法が酷似する例が見られる。

** 「真野ダム関連遺跡発掘調査報告V」1984 福島県教育委員会



第58図 8群2類土器拓影図

3類(第59・60図) 条線文が施される土器であるが、称名寺式土器に本来含まれるものと、網取I式のカテゴリーに含まれるものがある。しかし部分的な破片で両者を区別することができず一括した。

個体1A(1) 11G-05・15から出土したもので、胴部下半がほぼ遺存している。しかし掘り込み等は確認できなかった。現存部分は最大径32cm、底径9.1cm、現存高29cmを測り、恐らく50cm以上の高さがあった大形の土器と推定できる。条線文は蛇行しており、6本単位である。しかし、この6本の間隔が部分的に違っており、左端の1本がかなり開く部分がある。施文具は半載竹管を束にしたものであろうが、あまり強く結束していなかったようである。底部付近並びに内面は縦位の磨きを施すが、あまり丁寧なものではなく、また器面の荒れも著しい、胎土はかなり砂粒を多く混入するが、その他に目立った混和剤は含まれていない。

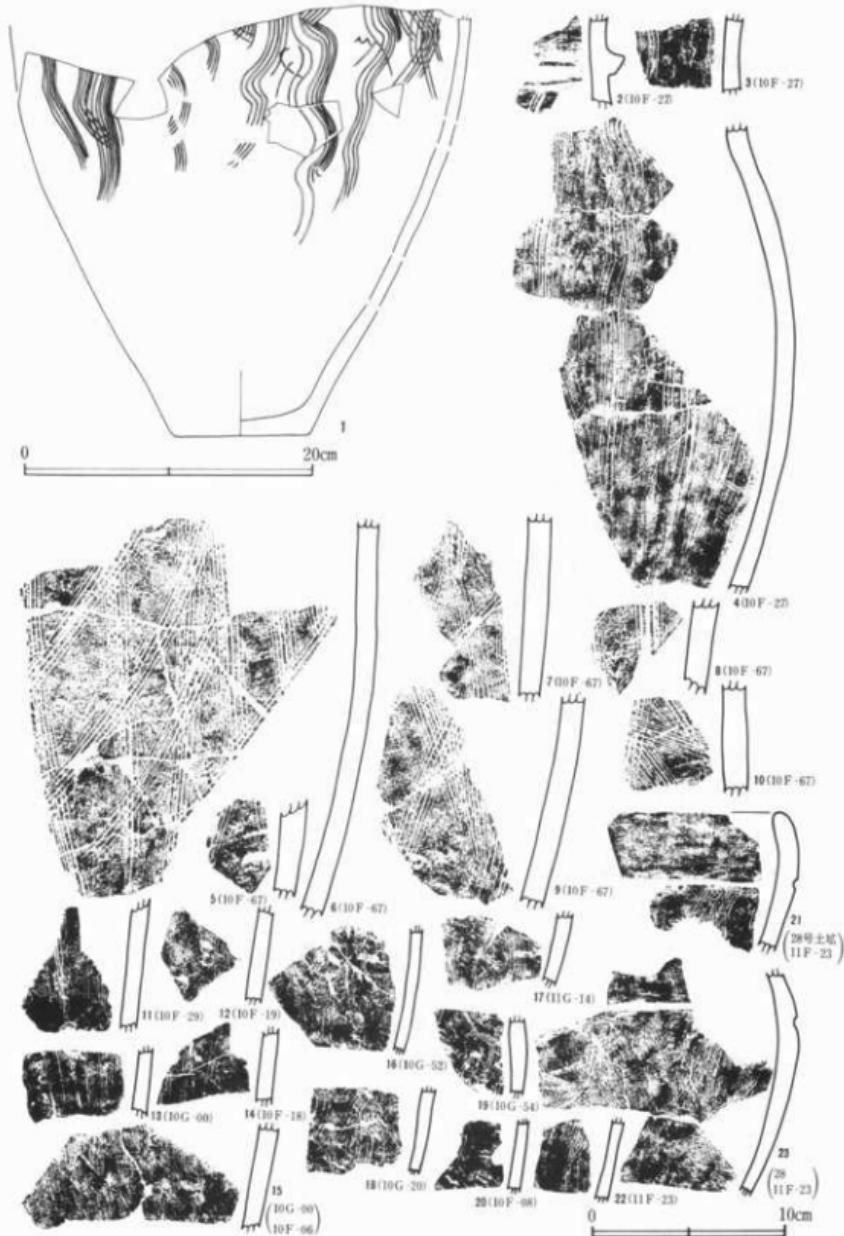
個体1B(2~4) 破片数は10点で、殆どが10F-27グリッドで出土している。口縁部は隆帯区画の無文帶が廻らされ、隆帯より下位に条線文が施される。条線文は8本単位で、若干蛇行しているが個体1Aほどではない。器面は粗く磨いた後に施文を行い、内面は上半で器壁が荒れるが、下位では丁寧に磨いている。

個体1C(5~10) 破片数は40点ほどで、殆どが10F-67グリッドで出土している。6は少し接合したが、それでも全体を窺えるものではなく、また各破損部は摩滅している。条線文は8本単位で、直線的に描き、斜位に交差している。外面は横位に調整痕が僅かに残され、条線文を施す前に一度ナデを施している。内面は6の上部が横位、それ以外は縦位の磨きを施している。胎土は細砂粒を多く混入し、やや脆弱である。

個体1D(11~15) 破片数は少なく、またあまり広い範囲に散らばることもない、總て胴部下半の破片であり、全体形を復原することはできない。条線文も現存部分では直線的に垂下するが、口縁部から直線的であったとは断言できない。また単位もよく分らず最大でも8本、もしかすると2~4本かもしれない。器面は底部に近いこともあり条線文を描く前に平滑にナデして、僅かに磨きも加えている。胎土は砂粒・石英粒を多く混入している。

個体1E(16~20) 破片数が少なく殆ど接合しない。条線文は片側を支点とした極端な蛇行をし、6本単位である。器面は内外面とも調整痕が明瞭に残るが、外面は条線文を施した後に、磨きを加える部分がある。他の個体に比べてやや薄手で、粘土紐接合部を刻んでいる。胎土には長石粒を多く含んでいる。

個体1F(21~23) 破片数は10点ほどで、28号土壚に包含されていたものもあるが僅かであり、また極端に離れた位置から出土したものもある。口縁部は内湾し、沈線で区画した無文帶を廻らせている。条線文は6本単位で、大きな規則性は認められないが、曲線的に縦・横に施している。器面は条線文を施した後に磨き、内面は入念である。胎土は細砂粒・長石粒を多く含み、やや脆弱である。



第59図 8群3類土器拓影図

第60図にはその他の破片を一括した。24~26は口縁部に隆帯区画の無文帶を廻らすものである。口縁部は直立しない僅かに内傾し、端部は丸く納めている。また24には口縁と直交する隆帯が付されている。器形としては大烟貝塚における綱取I式のa類型であり、胸部文様に条線文を施すものも相当量認められる。隆帯は24・26の断面形が丸く、25はかなりシャープである。条線文のいずれの破片もごく一部しか残されていないが、3点とも曲線であり、25が太く4本単位、24・26はそれぞれ6・8本単位となる。器面は内面及び、口縁部無文帶体から隆帯にかけて磨く。胎土は3点とも長石粒を多く含んでいる。

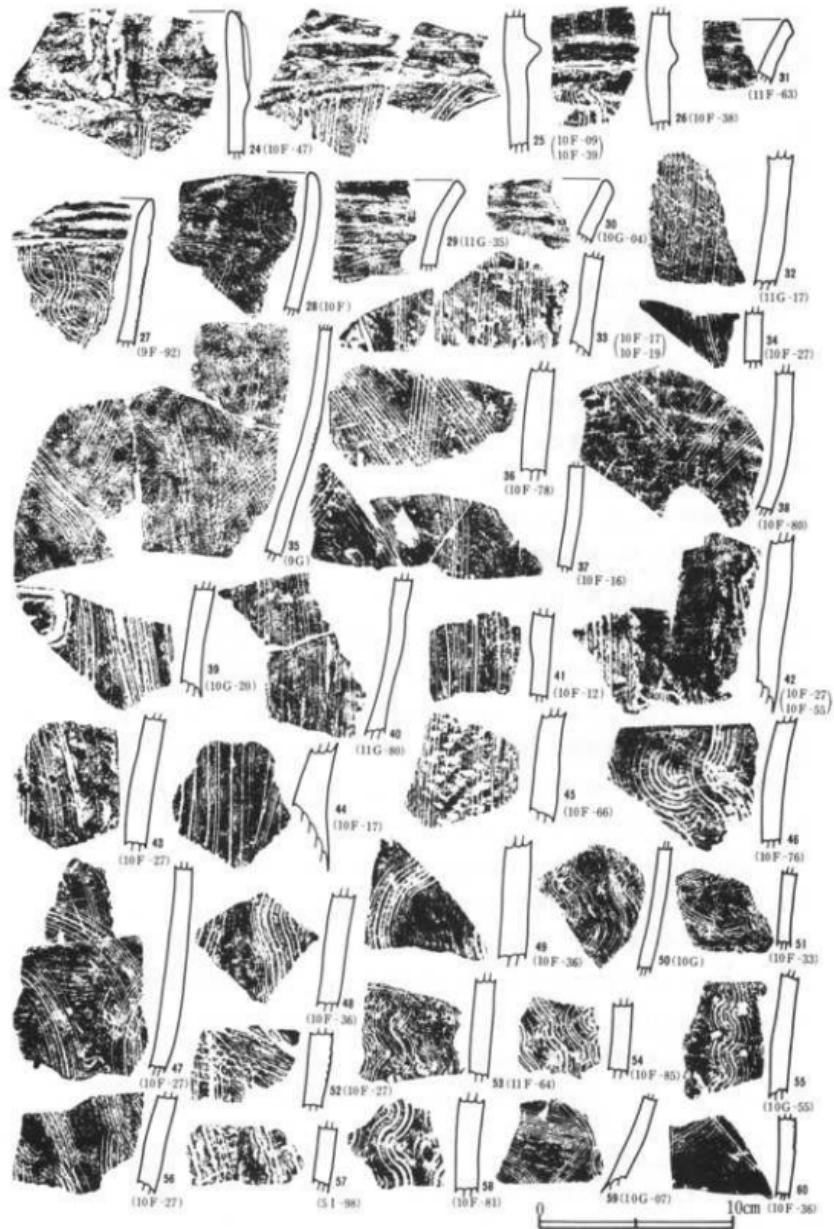
27は沈線区画の無文帶を口縁部に廻らすものである。無文帶の幅は前者に比べて狭く、また調整も難である。条線文は蛇行しながら交差するもので、立体的な効果を狙っている。28~30は口縁部に区画された無文帶を持たないものである。端部は28が丸く、29~31は外側に面を構成する。条線文はともに6本単位で、28が蛇行、29~31が直線に施している。なお28の器面は条線文施文後に磨きを施している。また内面は3点とも横位に磨いている。胎土は27がかなり砂粒を多く混入し、長石粒・石英粒もかなり目立つが、他は比較的精緻である。32以下は胸部の破片で、口縁部の形状は不明である。胸部の形状もあまり大きな屈曲はなく、44を見てもカーブは緩やかである。32~45は直線的な条線文で、35~38のように交差させるものが主体的である。条線は6ないし8本単位が殆どであり、少なからず周囲への粘土の盛り上りが観察できる。単位の間隔が広いものは条線施文後に磨きを行い、42は大幅に施文が消されている。またこれらの中には33・39のように太い沈線で意匠文を描くものがあり、ともに列点文が充填されているようである。部分的な破片のため意匠文と条線文との関係は明らかにできないが、少なくとも個体18のような充填文として条線文を施したものではない。あまり類例を知らないが、沼尾原遺跡[•]で条線文中に紐条隆帯を付したものがあり、条線文を地文として意匠文の展開が有り得ることを示唆する。

46~60は曲線的な条線文である。基本的に46のように比較的短い間隔で蛇行するものが多く、46・53~55・58では施文具の側縁を支点とした回転により表出している。しかし中には48・49のように大きく蛇行するものや、47・56・59・60のように横にも大きく展開するものもある。しかしいずれの場合も特に大きな違いではなく、しいて言えば57が押し引きによる表出を行っている。器面は平滑であるが、条線文の空間を磨くのは間隔の広い49だけで、内面も50・53・55~57は磨きを施していない。胎土は砂粒を多く混入し、僅かに長石粒も含むが、極だって粗いのは55・57の2点だけである。

* 馬目順一「大烟貝塚調査報告」1975 いわさき市教育委員会

** 森下松寿也「沼尾原遺跡」1980 茨城県沼尾原遺跡発掘調査会

また時期的に堀之内I式に入る可能性が高いが、同遺跡で条線地に意匠文を描くものがある。



第60図 8群3類土器拓影図

4類(第61図1～5) 三十稻場式土器である。流入経路については意見もあるが、網取式土器にも伴うことが知られ、或は網取式土器の南下とともに持たらされた可能性も否定できない。

1は三十稻場式に特徴的な蓋形土器である。全周の $\frac{1}{4}$ 程度の遺存で口径は10.5cm、器高は上端につまみが付くようで明らかではない。天井部はほぼ直線的で、端部に稜をもって内傾する。また、2個1対となる環状把手が付されている。やや背が高くなり始めるようだが、口縁はめぐれ上がるような波状とはならず、平縁である。器面は口縁部の近くに沈線区画の無文帯を廻らすが、その他の部分は全て刺突文で覆い、全体に及ぶような区画文は発達していない。胎土は雲母粒・石英粒を若干混入するが、かなり堅緻である。

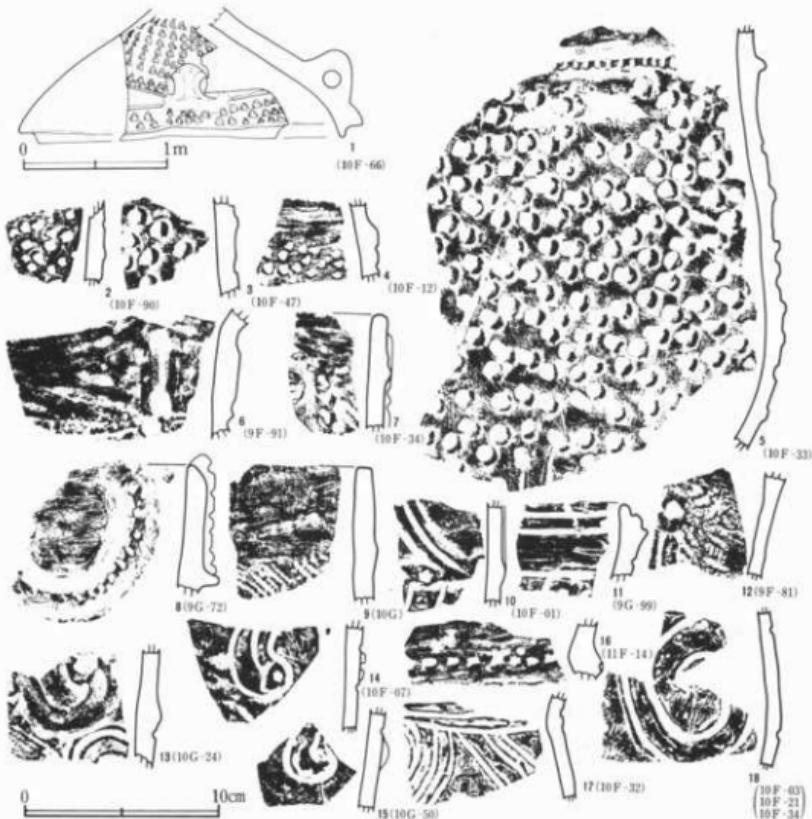
2～5は深鉢形土器である。口縁部は消失しているが、4・5のように隆帯区画の無文帯を廻らせ、外反すると考えられる。また5は隆帯にスリットがあり、恐らく橋状把手が付くものである。さらに5は胸部下位から底部に向けて大きく湾曲している。器面は全面刺突文で覆い、沈線による区画文はない。また2・4の刺突は大きく、製作者は右ききで刺突後そのまま引いている。そのため刺突右側に大きな粘土の盛り上がりができる。器面はいずれも斜位の調整痕が明瞭に観察できるが、内側は横位の磨きを施している。胎土は他の8群土器と肉眼で区別できるものではないが、多くの個体に見られた長石粒は殆ど含まれていない。

6～18は以上の1～4類には含まれないが、時期的に一致すると考えられるものである。基本的には網取式土器の影響が強く認められるが、本遺跡の場合1・2類としたものについても僅かながら網取式土器の影響は窺うことができ、ここに示したのは具体的には称名寺I・II式のカテゴリーに含めることができないものである。6～11は口縁部の破片で、区画された無文帯を廻らせている。11は端部に沈線を廻らせ、やや新しい様相を呈しているが、6・8・10は口縁端部と胸部文様帯を繋ぐ隆帯を施し、8・10はC字状を呈する。隆帯頂部は8がスリットを、10は沈線を組入れている。胎土は砂粒の混入が多く、6・9が顕著である。また、7は目立った混和剤はないが、共通して微細な長石粒を含み、6・10は僅かに雲母粒も含まれている。胸部の破片については口縁部の形状が不明で、前述のような口縁部が伴うものは判然としない。但し、いわき市愛谷遺跡で提示された資料の中にはこのようなJ字文系の意匠は見られず、なすな原遺跡や北の内遺跡を見ると、38号土塗出土土器のようなものが多い、意匠文は殆どJ字文を基本としている。J字文自体はかなり簡略化されており、14・15・17は3本単位の沈線で描かれている。また17・18は沈線周囲への粘土の盛り上がりが著しく、条線工具の刺突を地文としている。これらは本遺跡でも38・41号土塗出土土器が酷似し、3本単位の沈線によって

* 関 稔之「耳取遺跡」1971 見附市教育委員会

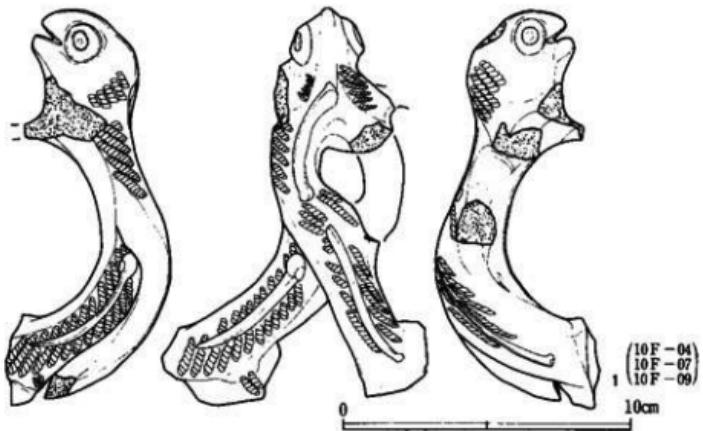
** 馬目順一「福島県いわき市愛谷遺跡出土品」「シンポジウム堀之内式土器資料集」市川考古博物館

*** 小淵忠秋他「なすな原遺跡」1984 なすな原遺跡調査団



第61図 8群土器拓影図

意匠文を描いている。3本単位の沈線は堀之内I式にも多用されるが、直接関係付けるには疑問も残る。本例などは列点文からの変化が考えられ、堀之内I式初頭の単沈線の存在を考えるならば、堀之内I式の3本単位の沈線とは空白期間が存在する。なお13だけは意匠文に隆帯を伴っており、図示した中では古い様相である。胎土は特に変わることはないが、14・15は長石粒を含んでいない。12もJ字文の可能性はあるが、円形貼付文とそれに繋がって沈線区画の磨消帯があり、網取II式とすることができます。16は一見口縁部と区画する隆帯のようでもあるが、断面を見ても分かるように胴部の屈曲部の破片である。内面はかなり明瞭に屈曲の状況を窺うことができるが、外面は竹管刺突を伴う隆帯によってあまり急な感じを受けない。このように器面を上下に区分するのは、頸部と表現できる屈曲をもって大きく口縁が開く器形に見られ、胴部にはやはりJ字文系の意匠文が施される。



第62図 8群土器把手実測図

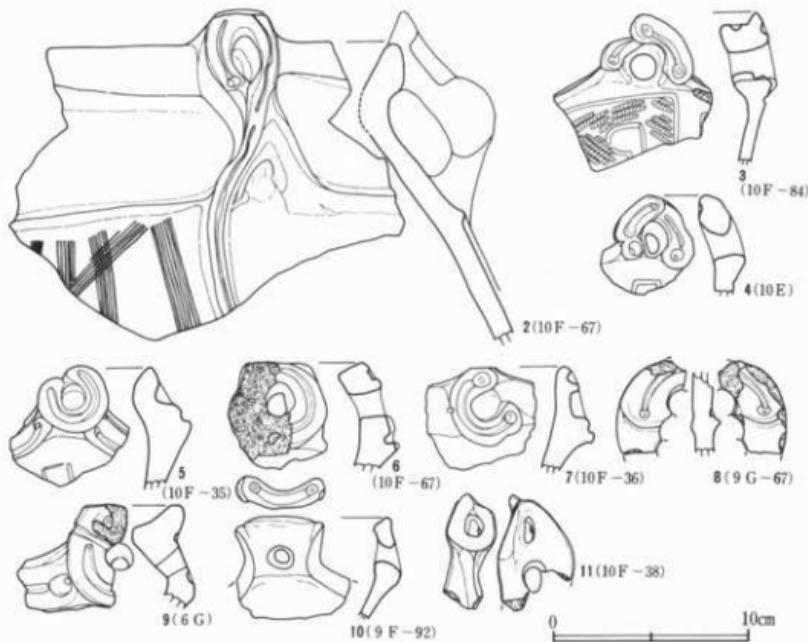
第62・63図は8群土器に伴う把手を一括した。1は動物を形どったものである。竹管刺突を伴う円形の貼付文で目を表現し、口は目の近くまで伸びたかなり大きいものである。口の形状からは嘴を表現したものとは理解し難く、視角的には爬虫類という印象を受ける。しかし頭部は幅よりも頸長があり、比較的偏平に表現される爬虫類の頭とはやや趣を異にする。口の表現は沈線で行われ、小林西の前遺跡や北の内遺跡の出土例と共に通する。目の表現は称名寺II式後半から堀之内I式初頭にかけて多く見られる貼付文で、沈線とともに該期の特徴を良く表わしている。顔全体の形状は、頭頂部に棱があり、側面観はやや丸い。また下顎より上顎が大きく、上顎からそのまま頭部へ至る。正像は土器の内側に向き、下顎の下はすぐに土器内面となる。頭部から下はC字状隆帯の延長の如きで、X字条に交差させている。土器本体の器形が分からぬが、口縁部は内湾しているようで、そうなると把手と器面との間にかなりの間隙があったと推定でき、恐らく第63図2のような断面となるであろう。なお、ほぼ全面にしのぎの繩文を施している。

近接する前後の時期に比べると鳥類・爬虫類を表現した把手が顕在化している。このような現象は上守秀明氏の指摘のとおり、把手形態への符合の容易さだけに起因するものではなく、精神的側面における観念の表現として捉えられる。

* 「昭和60年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨」1986

** 栃木県教育委員会「北の内遺跡」1979

*** 上守秀明「市原市高滝柏野遺跡出土の鳥頭形把手」『研究連絡誌6』1983 勅千葉県文化財センター



第63図 8群土器把手実測図

2はC字状隆帯の組合せによりX字状に交差する把手となっている。その様相は基本的に1と同様な構成となり、器面との間に約2cmの間隙があり、把手の全長も10cmを超える大きなものである。口縁部は大きく括れ、胸部はかなり膨らんでいる。恐らく1も同様な器形と考えられ、把手の接合部の状況が酷似している。口縁部は隆帯区画の無文帯を廻らせ、胸部は直線的な条線文を施している。口縁部無文帯及び内面は丁寧に磨いている。

3～9はC字状の隆帯を装飾の基本とした把手で、1・2のように器面から大きく突出するものではない。胸部の文様構成にかなりの差はあるが、器形は共通して口縁上端が内傾するか直立している。この点が単に口縁が波状となる土器との大きな違いである。端部には4・5・9のように太い沈線を廻らすものもあるが、4の意匠は充填繩文があり、口縁部の沈線をもって一概に時期を決定できない。なお把手中央に孔を有し、殆どが貫通している。10・11は幾分形状が異り、10は把手上端にC字状の意匠を配し、外面には際だった装飾はない。口縁部はやはり端部が内傾し、またかなり大きな波状を呈している。11は粘土紐を絡み合わせたようなもので、表面は丁寧に磨いている。なお口縁部から上方に大きく突出しており、現存部に口縁部は含まれていない。

9群(第64図、図版45・46)

時期的には8群に統くもので、堀之内I式のカテゴリーに含まれる。後述するが、第102図に示した出土範囲から8群とは区別できるものである。

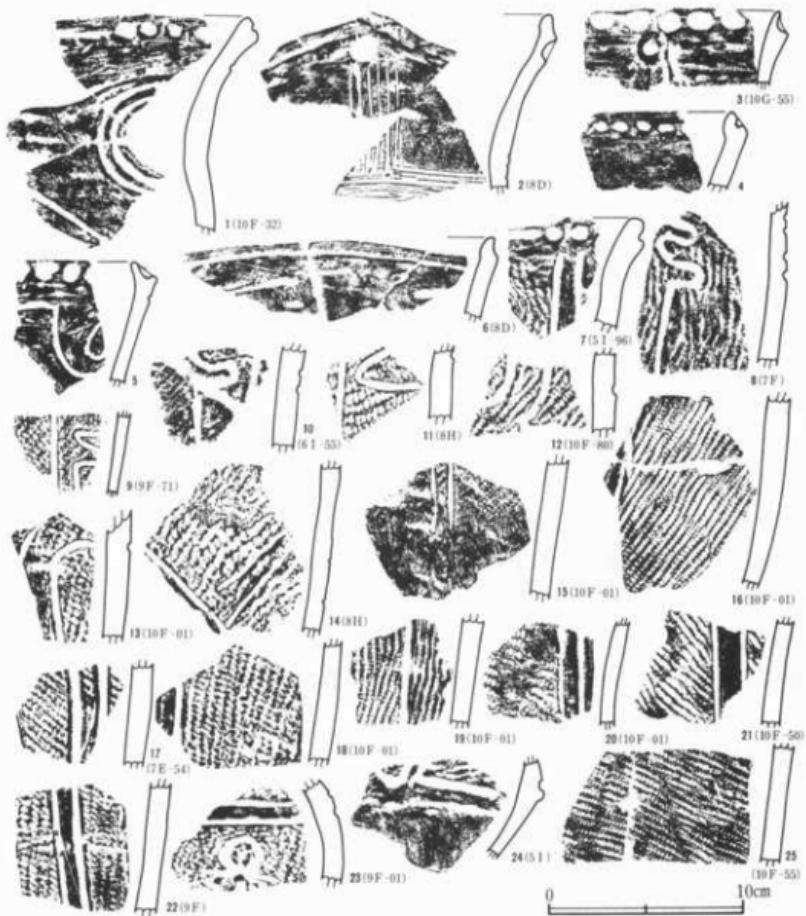
1～6は胸部上位に大きな屈曲を有し、口縁部が大きく開くものである。いずれの例も端部が僅かに屈曲し、1・2・6が沈線、3～5は円形の刺突を施している。器面は屈曲部から上が無文となるのが普通で、1にしても僅かであるが無文帯として認められるものである。また2・3は円形の貼付文と縦位の沈線が施されるが、通常4単位でこのような施文が行われることが多い。但し5は無文帯を構成せず意匠文が展開しており、41号土塗出土土器にかなり近いものと思われる。胸部の状況は全く分らないが、多くの場合1に部分的に見える渦巻状の意匠文が施され、38号土塗出土土器や第61図に示したようにJ字文に由来するものである。胎土は細砂粒を含むが8群と比較して堅緻である。7～22は堀之内式土器にごく一般的に存在する深鉢形の土器である。口縁部は7だけであるが、口唇部に1条の沈線を廻らせ、小さく波状を呈する部分に円形の刺突を配している。中心となるモチーフは3本単位(現存2本)の縦位の沈線で、沈線間は地文の繩文を消している。モチーフは8～10に藤手状に沈線を配し、ともに単沈線である。その他の破片は2本単位の懸垂文で、上部はやはり藤手状になると思われる。基本的には単沈線で、モチーフ間を斜位に繋ぐ沈線も見られない。なお20～22は沈線間を磨消しており、綱取II式の影響を窺うことができる。繩文は17・20・21がR^LであるほかはL^Rである。胎土は共通して細砂粒を混入し、また微細な長石粒も僅かに含まれる。23・24は大きく湾曲しており、浅鉢形になる。23はスペード文のような意匠が見られ、その上部に施される2条の沈線間は、磨きにより繩文を消している。やはり綱取II式の影響を窺うことができる。24は胸部下部にかかる破片で、文様帯と底部に至る無文帯を隆起によって区画している。繩文はともにL^Rである。

第65図に示したのは器面を繩文で覆うもので、一応9群に伴うものと考えているが、8群に伴うものと区別することはできず、8・9群を一括した。

個体20(1～6) 破片数は12点で出土地点は9群と重なる。口縁部の破片が殆どで、直立気味の口縁の端部に円形の押圧文を連ねる。器面は全面繩文を施し、原体は摩滅が著しく断言できないが、L^Rの可能性が高い。胎土は砂粒の混入が多く、また長石粒・石英粒も極端に多い。なお破損部分の摩滅も著しく、脆弱である。

個体21(7～14) 破片数は17点で、かなり広い範囲に散っている。あまり接合しないが、直線的に開く浅鉢形となる。口縁端部は内傾し、その部分に太い沈線を1条廻らすほかは綱文

* 鈴木徳雄氏(『シンボジウム堀之内式土器』1982 市川考古博物館)の指摘のとおり、器面装飾の本科により相対的な新旧関係を示すと考える。あまり厳密な区分ではないが、主要なモチーフは単沈線→集合沈線→充填沈線という変化がたどれる。



第64図 9群土器拓影図

で覆う。縄文はL(上R下)で、底部から1cm程度は横位に磨いている。内面は口縁から底部に至るまでに実に丁寧で磨き光沢がある。胎土は比較的精緻で、特に目立った混和剤もなく、仕上がりも美麗である。しかし焼成の具合により、器面は褐色であるものの、断面は灰色であり堅緻ではない。

個体22(16~20) 破片数が多いが、殆どが細片で図示したのは5点である。8・9群に含めることに疑問もあるが、可能性の高いものと判断した。口縁部は細片であるが18があり、16と組み合せてみると沈線区画の無文帯であることが分かる。胴部は全面縄文で覆うが施文は荒く、

胎土がかなり柔らかい時点での施文である。また16を見ても分るように、縄文は縦位・横位の回転により綾杉状の効果を出している。内面の調整は雑で、粘土紐接合痕をかなり明瞭に残している。胎土も粗く微細な石英粒・長石粒そして赤色のスコリア粒を多く含んでいる。

個体23(21~23) 破片数は11点で、総て5 Iグリッドから出土している。口縁部は遺存していないが、胴部上位で緩い屈曲があり、丸味を持って底部に至る。個体22同様底部から1cm程度は無文となり、横位にナデている。縄文はR^Lで、全面縦位に回転している。内面は底部に至るまで横位のナデで、砂粒の動きも観察できる。胎土は細砂粒を多く混入し、微細な長石粒も目立つ。

個体24(24~27) 破片数は少なく、出土地点も近い。全体形は不明だが、全面に縄文が施されていたと思われる。縄文は粗くL^Rで、筋が崩れている部分もある。内面は縦位の砂粒の動きが観察できるが、その上を平滑にナデしている。胎土は微細な長石粒を多く含んでいる。

個体25(28~31) 破片数は4点であるが、同じグリッドから出土したものはない。縄文は特異な表出であり、原体L^Tを横位に施した後に再度原体を部分的に押圧している。内面は総て縦位の丁寧な磨きを施している。胎土は細砂粒を若干混入するが、比較的精緻である。

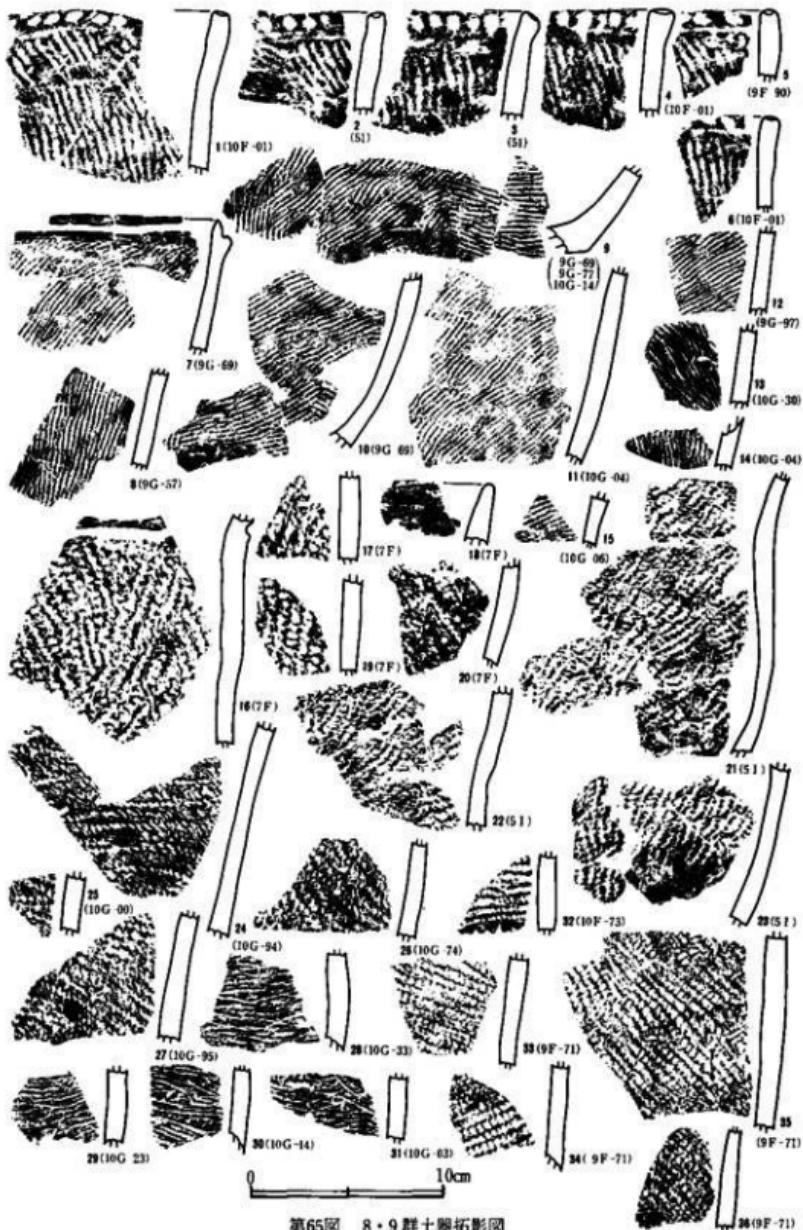
個体26(33~36) 破片数は少なく、総て9 F-71グリッドから出土している。いずれも胴部中位以下と考えられ、内面の調整は総て縦位に行われている。原体はR^Lで、個体22同様あまり乾燥が進まないうちに施文している。胎土は長石粒・雲母粒を多く混入している。

個体27(32) 1点しか図示しなかったが、破片数は7点あり、かなり散在している。縄文はL^Rで、筋はやや不鮮明である。

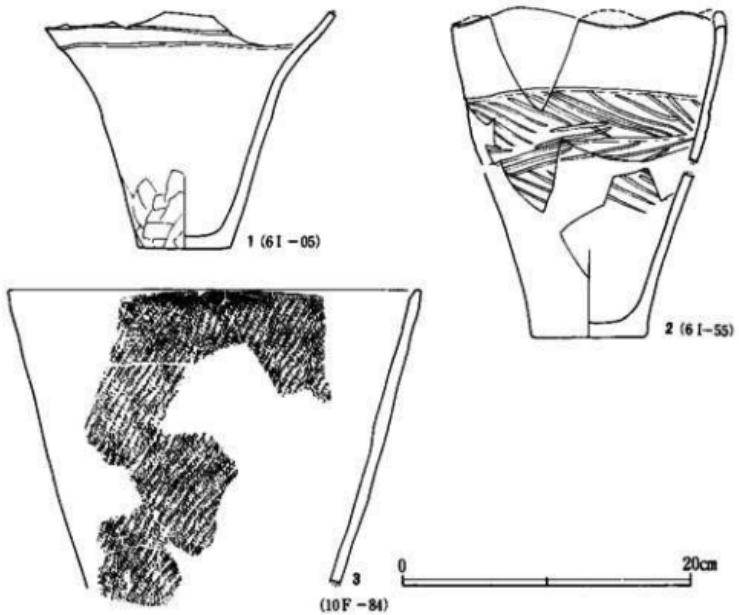
10群(第66・67図、図版47)

加曾利B式土器を一括した。このうち第66図は全体形を覆うことができるものである。1は口縁部を欠失しており、底径6.3cm、現在高16.3cmを測る。器形は口縁部文様帯の下位から急激に大きく開き、内面の状況からやや内湾する口縁部を復原できる。文様帯は2条の沈線が残されるだけで、全体の構成は明らかではない。ただこの2条の沈線間やそれ以下の胴部についても研磨は施されていない。なお胴部下位には不定方向のケズリが施されている。内面は開き始める付近から上位に横位の磨きが施され、それ以下は縦位のナデである。胎土は比較的精緻であるが、僅かに微細な雲母粒を含んでいる。

2は欠損する部分も多いが、ほぼ全体形を知ることができる。器形は直線的に開く深鉢形で、口径21cm、器高22.5cm、底径8cmを測る。口縁部は5単位の緩やかな波状を呈し、端部は丸く納めている。器面は沈線区画の無文帯の下に文様帯を配する。文様帯は沈線を羽状に施しており、区画は存在しないものの沈線の方向は3段となる。また文様帯の下端も区画されることなく、自然と底部に至る無文帯へと繋がる。また施文以前にかなり雑な調整を全面に施し、口縁部の無文帯だけに磨きを施している。内面は口縁部を横、それ以下を縦位に磨いている。 3



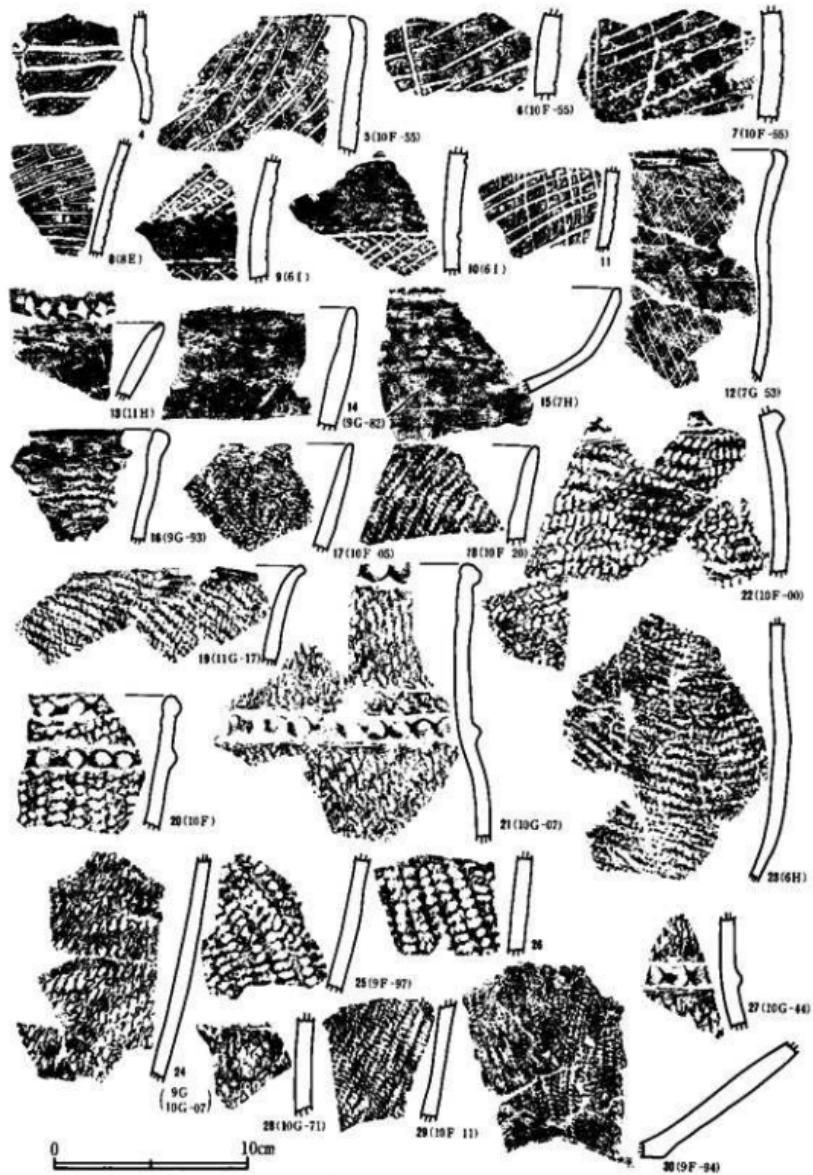
第65圖 8・9群土器拓影圖



第56図 10群土器実測図

は全周の $\frac{1}{4}$ 弱しか遺存していない。器形は直線的に開く深鉢形で、推定口径29cmを測る。器面は全面し縞文が施され、内面上半及び口唇部に入念な磨きを施す。胎土には微細な長石粒を多く含むが、あまり粗いものではない。

第67図はその他の破片である。4~12は所謂精製土器と呼ばれる類である。4はやや太い沈線に縦位のアクセントを付け、沈線間に縞文を施している。沈線上位は平滑であるが、特に研磨を施したようなものではなく、沈線の引き方とともに粗雑さは免れない。しかし内面はかなり丁寧に磨いている。胎土は細砂粒を若干混入し、またごく僅かに微細な螢母粒を含んでいる。5~12は斜位に交差する沈線を施すもので、9・10・12に見るように胸部上半に無文帯を配することが非常に多い。5~7は同一個体で、口縁部は端部に面を有し、内側に突出している。沈線は断面がシャープで、施文は目立った規則性もなく粗雑である。また6・7には縦位の沈線が施されている。胎土はかなり粗く、大粒の長石粒を極めて多量に含んでいる。8~12は比較的精緻な作りで、やはり沈線の粗雑さはあるが12の沈線は細く美麗である。12は口縁部内側に幅1cm程度の太い凹帯を廻らせ、内外面とも良く磨いている。他はやはりシャープな沈線であるが、間隔は密である。13~15は無文で、13・14はあまり深くならない鉢形、15は皿に近い

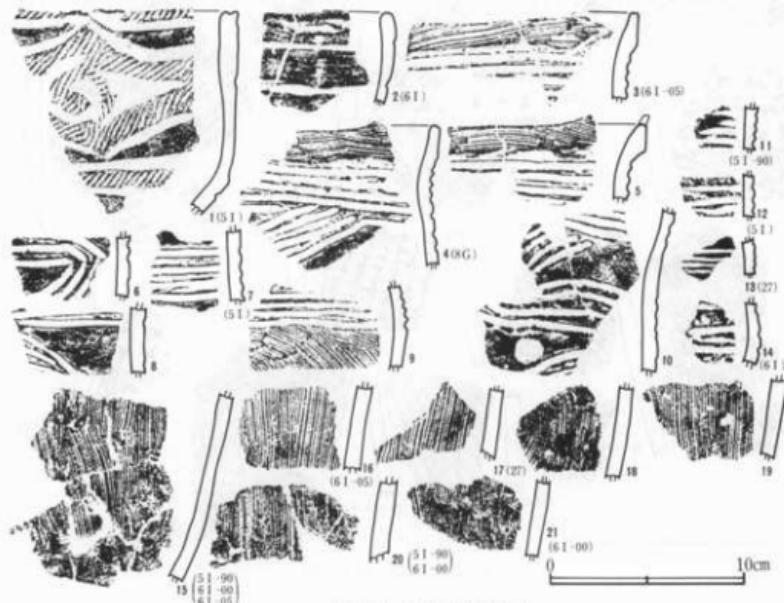


第67図 10群土器拓影図

ものとなる。13はあまり丁寧な磨きは施されず、口唇部内面にスリットがある。14・15は内外面ともに丁寧に磨かれており、14には僅かな光沢がある。また15の口唇部にも棒状工具の押圧があるようだが、摩滅が著しく殆ど残されていない。

16～29は所謂粗製土器で視覚的には美麗に飾られないものである。16～19は口縁部の破片で、紐状隆帯がないものである。時期的には紐状隆帯を廻らすものより古い傾向がある。口縁部の形状は様々で、17・18はかなり薄く納めるに対し、19は端部で大きく外反し、16は肥厚して無文帯を廻らせている。器面は全面繩文で覆われるようで、16・19がL($\frac{R}{R}$)、17・18はR($\frac{L}{L}$)となる。胎土は17・18が非常に似ており、砂粒・長石粒を多く混入する。また19は堅緻であるが、粒径2mm前後の礫を多量に含んでいる。

20～29は紐状隆帯が付されるもので、可能性の高いものも含めた。20・21は口縁部の破片で、幅は違うがそれぞれ2条の隆帯が廻らせてある。20の器面の状態が良くなく判然としないが、21の隆帯は指頭による押圧であることが分る。内面は両者ともかなり太い凹線を2条廻らせ、また丁寧に磨いている。繩文は殆どがかなり粗く筋も大きいもので、25・26は特に大粒である。原体はL($\frac{R}{R}$)が多く、R($\frac{L}{L}$)は23・25・26である。胸部の破片についても、内面を丁寧に磨くものが多く、縦位を行っている。胎土は砂粒の混入が多いが、焼成は良好で堅緻である。30は底部の破片で、胸部がかなり大きく開いている。浅鉢形を呈するものであろうか。



第68図 11群土器拓影図

11群(第68図、図版48)

晩期の土器を一括した。1は口縁部の破片で、鉢ないし台付の鉢になると思われる。口唇部は若干肥厚するが丸く納められ、小さなコブ状の突起が付けられる。文様は大柄な影刻的三叉文と“の”字状文・弧線文を組合せ、磨消繩文により装飾的効果を高めている。無文空間ないし三叉文・沈線内部は磨きこそしないが平滑にナデしている。内面は前浦式土器に比較的多く見られる沈線はないが、荒海貝塚6群V類や、西広貝塚D4区VII類に酷似している。2も口縁部で、やはり端部が肥厚している。繩文施文はなく、またやや内溝しており、姥山III式に比定できる。

3～12・15～21は同一個体である。胴部中位に緩い屈曲がある深鉢形を呈し、器面の構成も上下に大きく2分される。口縁部は突起状の波状を呈し、4単位以上の可能性が高い。端部は面を有し、また幅1～2cmが稜を持って肥厚させ、その部分に刷毛目を施している。口縁部の文様帶は4本単位の沈線で、擬似的な工字文・三角連繩文を描く。胴部下半は口縁部同様の刷毛目で、斜位から縱位に施している。内面は横位のナデで、砂粒の動きが観察できるものである。また下には炭化した有機物が夥しく付着している。胎土は細砂粒を多く混入するが、焼成が良いため仕上りは堅緻である。荒海貝塚6群X類と比較すると沈線の間隔が幾分密であるが、全体の構成は殆ど変らず同時期と考えられる。13・14も一見浮線文のようであるが、やはり同じようなものであろう。

土器片鍤(第69図)

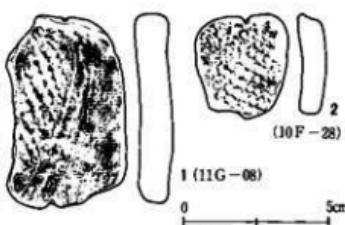
2点が出土している。ともに殆ど欠損がなく、成作時の形状を保っている。1は微隆帯で区画された懸垂文があり、L型を縦位に回転している。2についても繩文は複節で、ともに素材となった土器片は加曾利E式である。素材の採り方は破損状況にもよるのだろうが、本来の土器の部分として1は縦長で4方向に紐掛溝を配し、2は横方向に紐掛溝を付ける。重量は1が38.2g、2は12gを量る。

石器(第70・71図、図版48)

出土点数は少なく、全体的な傾向として磨石の類が圧倒的多数を誇り、打製石斧は皆無であった。しかし、磨石・石皿・敲石は總て欠損しており、破損後の使用が観察できるものもあるが、廃棄の対象になっていた可能性は高い。

磨製石斧(1～3) 3点とも大きく破損している。

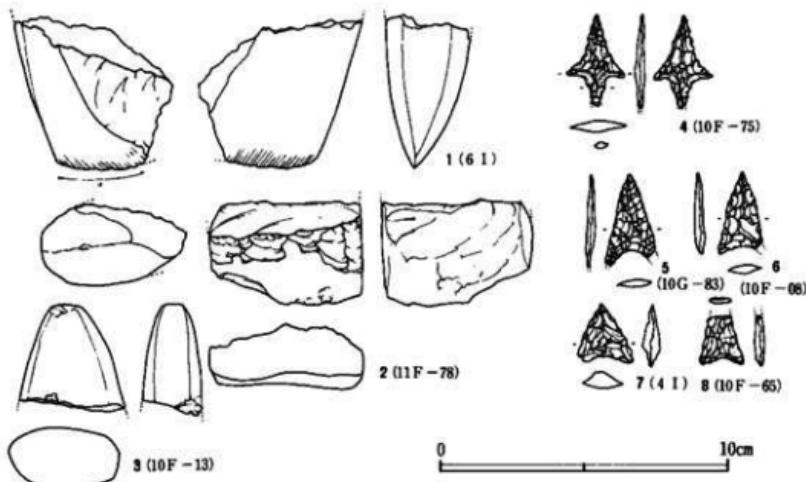
1・2は刃部で1には刃毀が認められる。石材は2



第69図 土器片鍤実測図

* 西村正衛「千葉県成田市荒海貝塚(第1・2次調査)」「石器時代における利根川下流域の研究」1984

** 市毛黙他「西広貝塚」1977 上総国分寺台遺跡調査団



第70図 石器実測図

・3が砂岩、1は緑色片岩である。

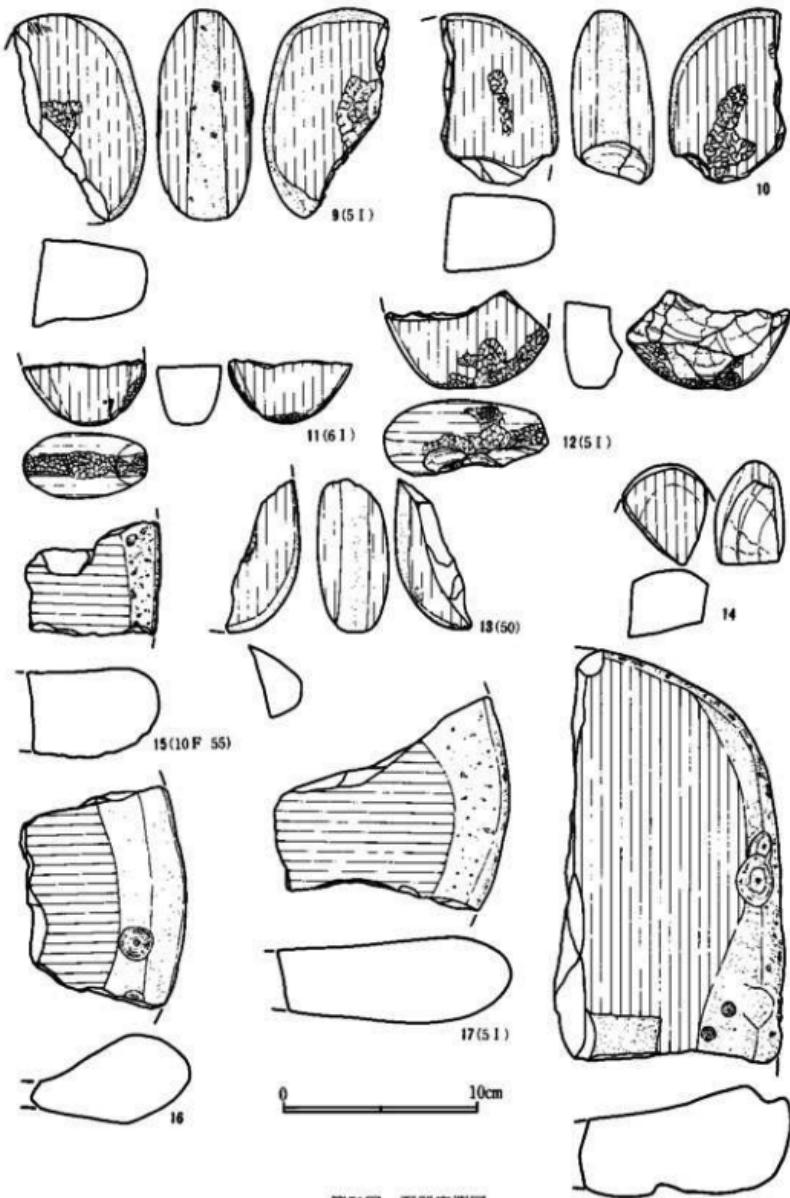
石鏃(4～8) 4が凸基、5～8は凹基有脚となり、4は所謂飛行機鏃と言えるものである。

5・6は脚を、8は先端を欠損している。断面を見ても分かるように薄く仕上げられるが、7だけは中央の肉厚の部分を剥離することができなかったようである。重量はそれぞれ、1.0g・1.05g・1.1g・1.3g・0.6gを量る。石材は絶てチャートとなる。

敲石(9～13) 絶て磨石の機能を併せ持つており、部分的にも敲打痕が認められたものを敲石とした。前述したように絶て欠損しており、本来は円形ないし梢円形の比較的偏平な形状を呈していたものである。平坦な面は磨石として使用され、また周縁も整形が加えられ、このための摩滅は表示しなかった。敲打の位置は9・10・13が中央、11・12は周縁に集中している。なお10は破損後も使用に供しており、破損部はかなり摩滅している。石材は11が砂岩である他は安山岩となる。

磨石(14) やはり破損しており、現存部に敲打痕は認められない。本来の形状を考えるとやや肉厚で、素材に対して特に整形は行っていない。石材は安山岩となる。

石皿(15～18) いずれも部分的な破片で、18を除いて本来の形状を復原することはできない。石材にもよるのだろうが15は極めて滑らかな面を形成し、中央が大きく抉れている16がさほど平滑ではないことから、使用頻度を考えるよりは使用方法によるものと考えるのが妥当のようである。16・17は両面を使用しており、また16・18には円形の凹みがあり、18は裏側にも及んでいる。18はある程度全体の形状を窺うことができ、幅20cm前後の長方形を呈していたものと推定できる。



第71図 石器実測図

第3節 古墳時代

古墳時代の遺構は、台地先端の51グリッドにおいて2軒の住居跡を検出しただけである。遺物は2軒の住居跡とその周辺から出土しており、また2軒の住居間での接合も少なくない。住居間の接合を見ると、ともに廃棄された可能性の高いものであり、2軒の住居跡がほぼ同時に廃絶に至った可能性を指摘することができる。なお遺物は一括して扱うこととする。

27号住居跡(第72図、図版13・14・49)

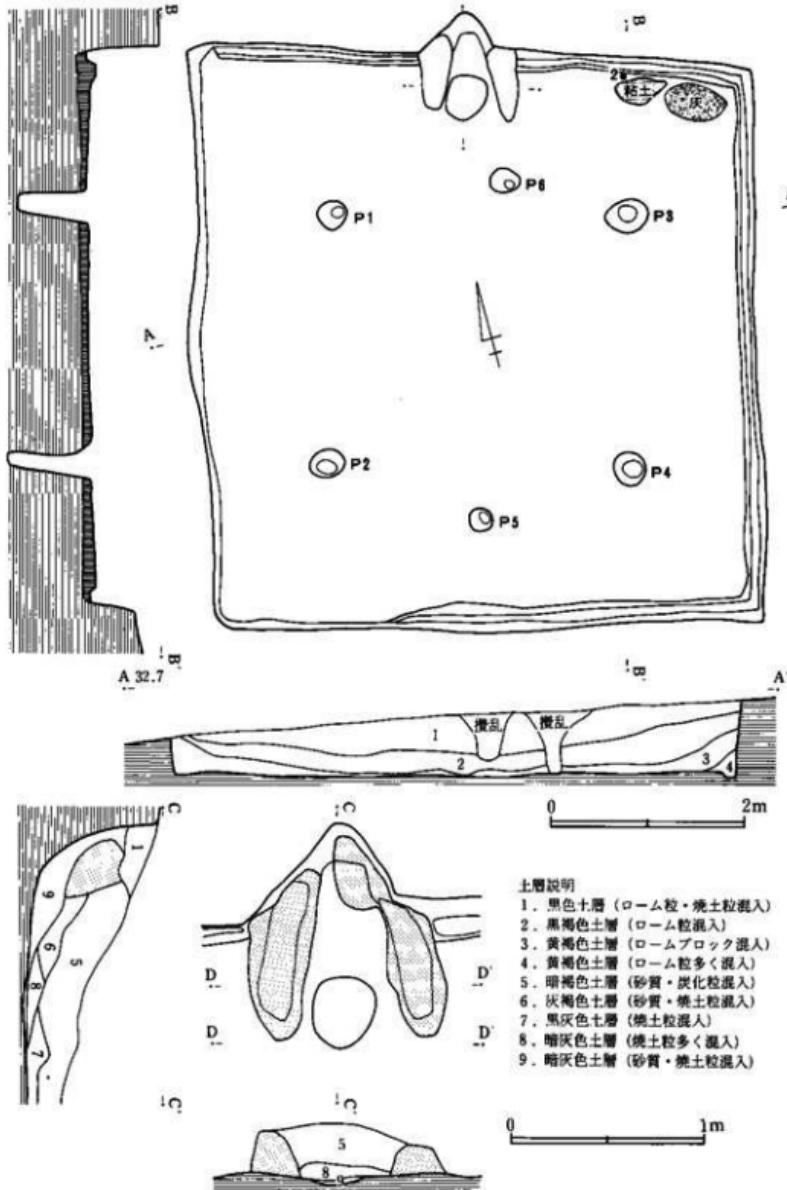
調査区北端で検出した住居跡である。規模は $6.0 \times 5.8m$ を測り、かなり整った方形を呈している。主軸方向はN-20°-Eを指し、住居北壁にカマドが設けられている。確認面からの深さは、地山面の傾斜により部分部分で若干の相違があり、カマドの右側が最も深く80cmを測る。逆にカマドと対峙する壁は30~40cmと浅い。覆土は上層に植物根の擾乱を受けるが、基本的な層序は崩されることはなく、下層で粒径1~3cmのハードローム塊をやや多く含み、また上層では焼土粒・炭化粒の混入も見られる。掘方底面は殆ど床面同様に平坦であり、10cm前後の厚さの貼床を構築している。また壁溝は貼床内に設けられ、カマド周辺では断面図B-B'でも観察できるように、壁溝手前に堤を有する。柱穴は6ヶ所に検出されたが、P1~P4を主柱穴として捉えることができ、P5・P6とは規模、深さとともに異なる。P1~P4は直径約40cm、床面からの深さは60~70cmを測る。なお床面でその他の施設は確認できなかったが、カマド右側の床面から約3cm上位で、粘土・灰の堆積が見られ、平面図にもその範囲を示してある。

カマドは北壁の中央に設けられ、約1mの幅を有する。煙道部は三角形で、壁外に約40cm張出している。立ち上りは急角度で、天井部が僅かに遺存している。袖は灰白色の粘質土に砂粒を多く混入したもので構築し、袖の内法は火床部で40cmを測る。

遺物は殆どが覆土中から出土し、床面ないし床面直上から出土したものはあまり多くない。また図示したものの殆どが31号住居跡と接合関係を持っている。なお大形の甕、瓶は含まれていなかった。

31号住居跡(第73図、図版14・49)

27号住居跡の南側に隣接して検出した住居跡である。規模は $6.3 \times 6.2m$ と27号住居跡と殆ど同じ規模を有し、プランはやはり整った方形を呈している。主軸方向はN-40°-Eを指し、住居北側にカマドが設けられている。地山面が西に向けて緩やかに傾斜しているため、西壁はやや不明瞭な部分もあり、壁高も10cmと低いが、他の壁は遺存も良好で、確認面から40cm前後の深さを測る。覆土は住居東側で植物根の擾乱が著しいが、全体の層序を崩すほどのものではない。覆土はプライマリーな堆積で、全体的にローム粒を多く含み、下層では粒径が1~1.5cmとなる。床面は殆ど平坦であり、掘方との間にあまり大きな間隙がないものである。床面に残された施設は柱穴だけで、壁溝は確認できなかった。柱穴は5ヶ所に検出され、基本的な4本の他



第72図 27号住居跡実測図

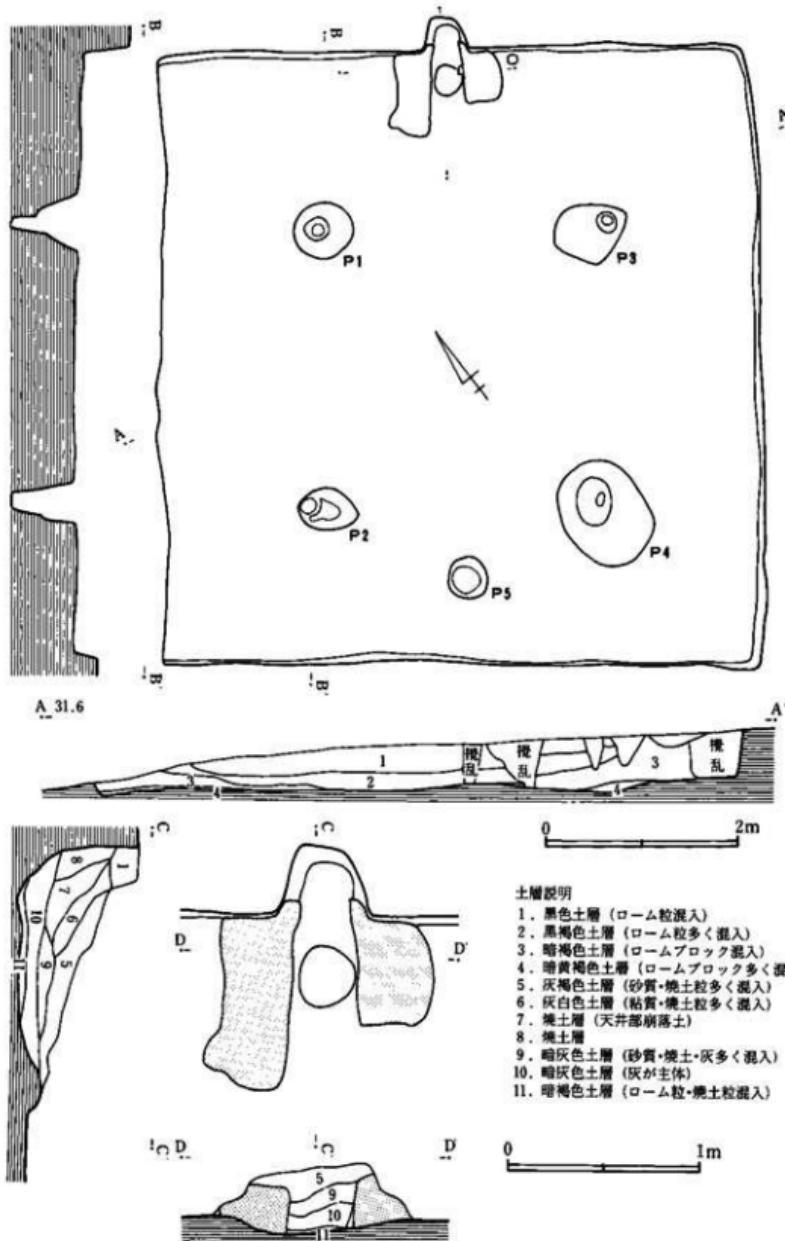
にカマドに対する壁の近くにやや小さいピットがある。柱穴は4ヶ所とも2段に掘り込まれ、床面での直径は60cm前後とかなり大きなものである。深さも60~70cmとしっかりしており、底面での直径は10~15cmを測る。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、約1.1mの幅を有する。煙道は27号住居跡が三角形であるのに対し、略方形に掘り込まれており、壁外に約40cm張り出し、かなり急角度に立ち上っている。袖は砂質の粘土を用いてかなり堅緻に構築されているが、天井部は殆ど失われ、最上層に僅かに砂粒・粘土粒を混入している。しかし縦方向の土層断面からもこの層の流出が著しいことは窺うことができる。なおカマド内の土層は灰・焼土を多く含み、特に3層は灰が主体となる。さらにカマド周辺の住居跡覆土にも少量ではあるが焼土の混入が認められた。火床部はカマドのほぼ中央に位置し、床面の状況からも火床の位置を窺うことができる。この部分での内法は35cmを測る。

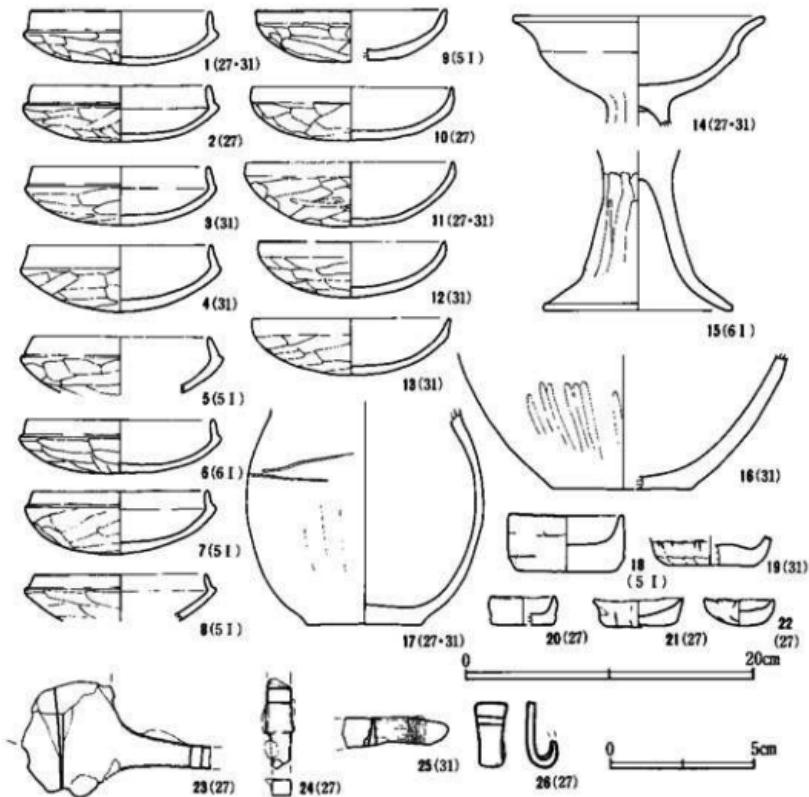
遺物は27号住居跡同様、殆どが覆土中からの出土であり、明確に本住居に伴うと考えられるのはカマド内と袖右側から出土した2点だけである。なお、前述したように27号住居跡との間に接合関係をもつものが多い。

遺物 27・31両住居跡出土の遺物と共に、住居外出土の同時期の遺物も含めて紹介する。本遺跡において該期の住居跡はこの2軒だけであり、当然住居外出土の遺物もこれらの住居と関係を有していた筈である。しかしながら、ここに残されていた遺物を見ると、器種として壺が圧倒的に多く、調理に直接関わる壺・甌は皆無に近い状況である。両住居跡間の接合関係からみて、この2軒がほぼ同時に廃絶に至り、遺物は住居廃絶時に用に供されなくなったものを廃棄したと考えられる。

1~13は壺である。器形としては受部を表現するものとしないものとに分けることができる。前者は1~8で、法量的にもあまり大きな違いを持っておらず、口径は12~13cmの間に収まり、器高も4cm前後である。技法としても殆ど変わるものではなく、底部に横位ヘラケズリを施し、内面も4を除いて磨いている。胎土は砂粒をかなり多く混入することが一般的であるが、3・4・6は長石粒がかなり目立つものである。後者は9~13で細部を除いてやはり大きな違いは持っていない。口径は13~15cmを測り前者と比較して僅かに大きい。調整は基本的に前者と変らず、内面も例外なく磨いている。胎土は同様に砂粒を多く混入するが、長石粒が目立つものではなく、10だけに微細な雲母粒がみられる。14・15は高壺である。別個体であるが時期的に大きな開きはなく、壺部径が裾部径を上まわっている。壺部は緩い稜を形成して口縁部が大きく開き、ヨコナデで調えている。内面は遺存状態が良くないが、粗雑なナデの上を磨いており、体部外面は縦位のヘラケズリを施している。また外面は赤色塗彩が施されている。脚部は円筒状を呈し、裾部は急角度で開いて端部をヨコナデで調えている。脚部の調整は縦位のヘラケズリで上から下へ行っている。なお外面には赤色の塗彩が施されている。胎土は両者とも砂粒が



第73図 31号住居跡実測図



第74図 27・31号住居跡出土遺物実測図

の混入が多いが、15はより粗く長石粒もかなり目立つ。16・17は甕である。16はかなり大形の甕で、底径9.6cmを測る。遺存状態はあまり良好ではなく、調整も不鮮明な部分が多いが、外面には縦位の細かいヘラミガキが観察できる。内面は横位のヘラナデである。胎土には石英粒並びに微細な雲母粒を混入している。17は小形の甕で、胴部は比較的丸味を帶んでいる。胴部は縦位のヘラケズリの上をナデしており、また底部にかかるて僅かに横位のヘラミガキを施している。また実測図に示したように、胴部中位に横位の沈線様のものが見られるが、意識的に付けられたものとするのは疑問である。内面は横位のナデで整え、かなり平滑となるが、頸部及び底部はやや雑な調整である。なお底部には極めて僅かではあるが布の圧痕が残されている。18~22はミニチュアの土器である。いずれも成形並びに器面の調整は粗雑で、18・19の2点は粘土紐接合痕が残されるが、他は粘土塊をつまみ上げたものである。器面の調整も18・19にはヨコナ

でないしヘラケズリが施されるのに対し、20~22は指頭の調整である。胎土は共通して砂粒の混入が多く、19・22に雲母粒が、18にはやや大粒の礫が含まれている。

23~26は鉄製品である。23は器種不明の製品で、断面方形の柄の先が薄く広げられている。24は鉄鐵の関部の破片、25は刀子の破片である。26も用途不明の製品であり、2~3mmの厚さの板をU字状に曲げている。

第2表 古墳時代土器観察表

27~31号住居跡

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径					
1	坏	12.5	3.7	—	内面ミガキ	砂粒多い	良 好	褐色	
2	坏	12.4	3.9	—	内面ナデの後にミガキ	砂粒多い	良 好	赤褐色	
3	坏	12.2	4.6	—	内面ミガキ	長石粒多い	不 良	暗褐色	
4	坏	12.7	4.5	—	内面平滑なナデ	長石粒多い	不 良	黒褐色	
5	坏	12.2	—	—	内面全面ミガキ	精緻	良 好	褐色	
6	坏	13.1	4.6	—	内面ミガキ	長石粒	不 良	赤褐色	
7	坏	12.3	4.2	—	内面平滑なナデ	砂 粒	良 好	赤 色	
8	坏	12.0	—	—	内面ミガキ	細 砂 粒	良 好	赤褐色	
9	坏	13.4	—	—	内面ミガキ入念	砂 粒 多 い	良 好	暗赤褐色	
10	坏	14.1	3.6	—	口唇端部磨滅 内面ミガキ	微細な雲母粒	良 好	明褐色	
11	坏	14.6	4.3	—	内面ミガキ	砂 粒 多 い	良 好	内面黒色	内黒処理
12	坏	13.2	3.6	—	口唇端部が磨滅 内面ミガキ	長石粒多い	やや不良	内面黒色	内黒処理
13	坏	14.0	3.8	—	口唇端部が磨滅 内面ミガキ	細 砂 粒	良 好	褐色	
14	高坏	17.2	—	—	内面鋸歯状ミガキ	長石粒多い	やや不良	外面赤色	赤色塗彩
15	高坏	—	—	13.0	外面縦位ヘラケズリ	長石粒多い	良 好	赤 色	赤色塗彩
16	壺	—	—	9.6	外面縦位のヘラミガキ	石英粒 雲母粒	やや不良	褐色	
17	壺	—	—	8.2	底部に布庄裏	細 砂 粒	やや不良	暗褐色	
18	ミニチュア	8.1	3.9	7.0	外面に接合痕を残す	1mm前後の礫 多い	良 好	黄褐色	
19	ミニチュア	—	—	6.2	外面に接合痕を残す	微細な雲母粒	良 好	明褐色	
20	ミニチュア	4.3	2.0	4.0	指頭調整	砂 粒 多 い	良 好	赤 色	赤色塗彩
21	ミニチュア	6.1	1.9	5.0	内面ヘラナデ	砂 粒 多 い	やや不良	灰褐色	
22	ミニチュア	4.7	1.8	—	指頭調整	雲母粒	良 好	赤褐色	

第4節 歴史時代

1 住居跡

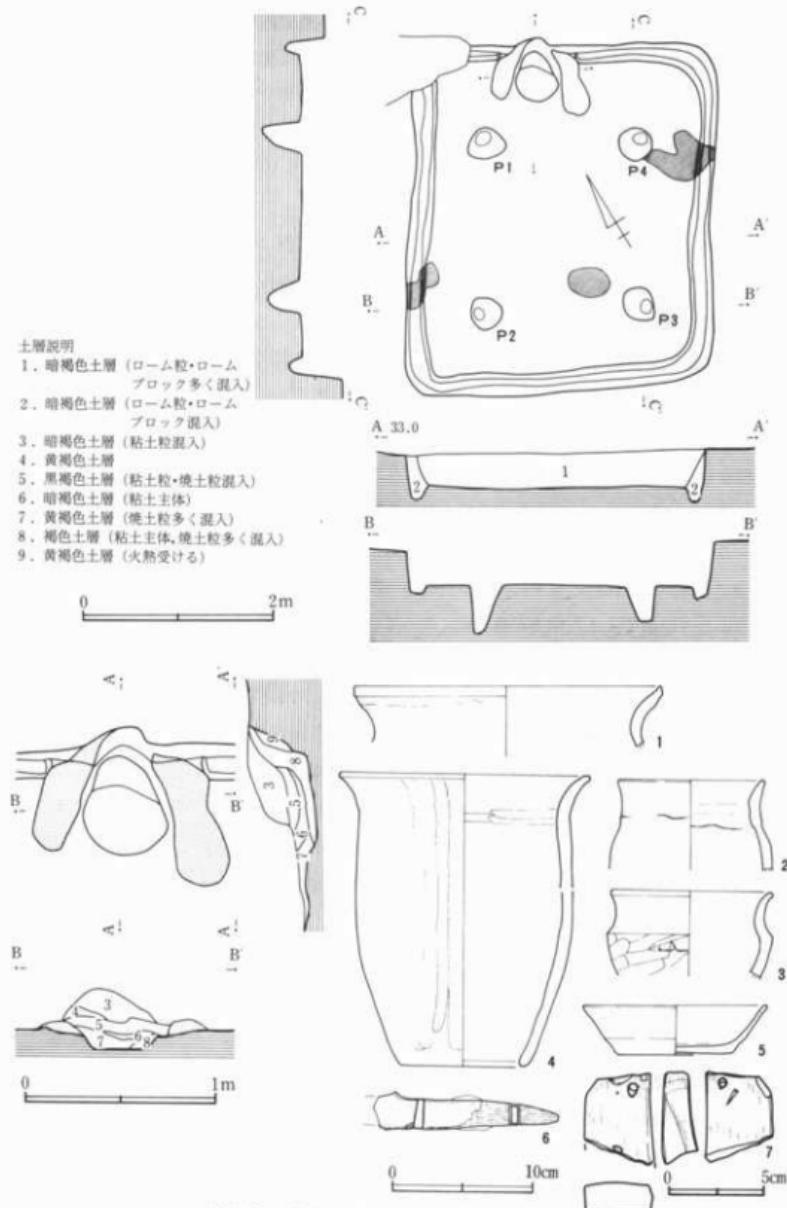
1号住居跡（第75図、図版15）

調査区西側9Eグリッドで検出した住居跡である。規模は3.6×3.1mを測り、南北にやや長い方形のプランを呈している。主軸方向はN-30°-Eを指し、住居北壁にカマドが設けられている。確認面からの深さは40cm程度で、遺構の遺存状態は比較的良好である。覆土は基本的に2層に分層し、壁際に僅かな自然堆積が見られるが、主体をなす1層はローム粒・ロームブロックを多量に含み、短期間に埋め戻しと理解できる。また、平面図にトーンで範囲を示したが、床面近くに粘土が堆積している。これらも床面との間に5cm前後の間層があり、1層と共に混入したと思われる。床面はかなり平坦で、住居中央がかなり堅致になっている。壁溝はかなり明瞭で、カマド部分を除いて壁を全周している。床面から10~15cmの深さが確認され、幅も15~20cmを測る。柱穴は4ヶ所で、その配置は住居の対角線上にきれいに揃っている。個々の柱穴は床面での直径40cmを測り、深さはP1が60cmであるのに対し、P2~P4は40cm前後と浅いものである。但しP2については植物根の擾乱があり、本来の形状を保っているか判断しかねる。

カマドは北壁の中央から僅かに西側に寄った位置に構築され、上面での観察ではP1を覆う位置まで構築材の流出が確認できた。実際カマドの遺存状態はかなり悪く、袖も下部が約10cm残存するに過ぎない。ただカマド下の掘り込みが以外と深く、或は天井部自体もそれほど高い位置になかったのかもしれない。袖部は壁からハ字状に開き、火床部での内法は50cmを測る。煙道部は壁外へあまり大きな張り出しを持っておらず、三角形に約10cm掘り込まれる。煙道部の立ち上りは比較的急角度で8層が煙道から流入した土層と考えられる。カマド内の堆積土は下部にかなりの量の粘土・焼土を含み、6層が天井部の崩落土と考えられる。7層についてはやはり焼土粒を多く含むが、床面側からの流入としてよい。

遺物は遺構の遺存状態がかなり良好であるのに対し、量的にかなり少なく、また本住居に伴うと考えられる遺物は皆無である。

遺物 1~3は甕である。いずれもかなり部分的な破片で、破損したものを本住居に廻棄したものである。1は大形の甕で、口縁部が緩く外反している。ヨコナデで整えられるが外面に接合痕が僅かに残り、あまり著しく接合痕が残った部分には再度粘土をかぶせている。2・3は小形の甕で、器形に大きな違いが見られる。2はあまり屈曲がない器形で、口縁部はヨコナデで整えられるが、内外面ともに接合痕がかなり明瞭に残されている。3はかなり浅い器形と考えられ、かなりシャープな棱を有して口縁部に至る。外面にはやはり接合痕が残されるが、胴部はヘラケズリが全面に及んでいる。胎土は3点とも非常に粗く、また共通して微細な長石粒



第75図 1号住居跡及び出土遺物実測図

を多量に含んでいる。4は本遺跡において非常に数少ない瓶である。やや小形の製品で、口縁部は短く外反しヘラケズリが口縁部にまで及んでいる。内面は基本的に横位のナデでかなり平滑に調えられ、頸部にやや強い調整を加える。5は須恵器の壺でやや身が低いものである。焼成が頗る悪く、調整がかなり不鮮明な部分もあるが、体部にヘラケズリは施されておらず、底部に限ってヘラ切り後周縁に一定方向のヘラケズリを施している。内面の身込みの部分をやや強くおさえ、またそれと対応する外面も僅かに湾曲している。ロクロ回転方向は右で、胎土には微細な雲母粒を多量に含んでいる。6は刀子の破片で、刃部は殆ど遺存していない。茎部は断面方形で刃部に近い部分では台形となる。7は磁石で、孔を持っている。

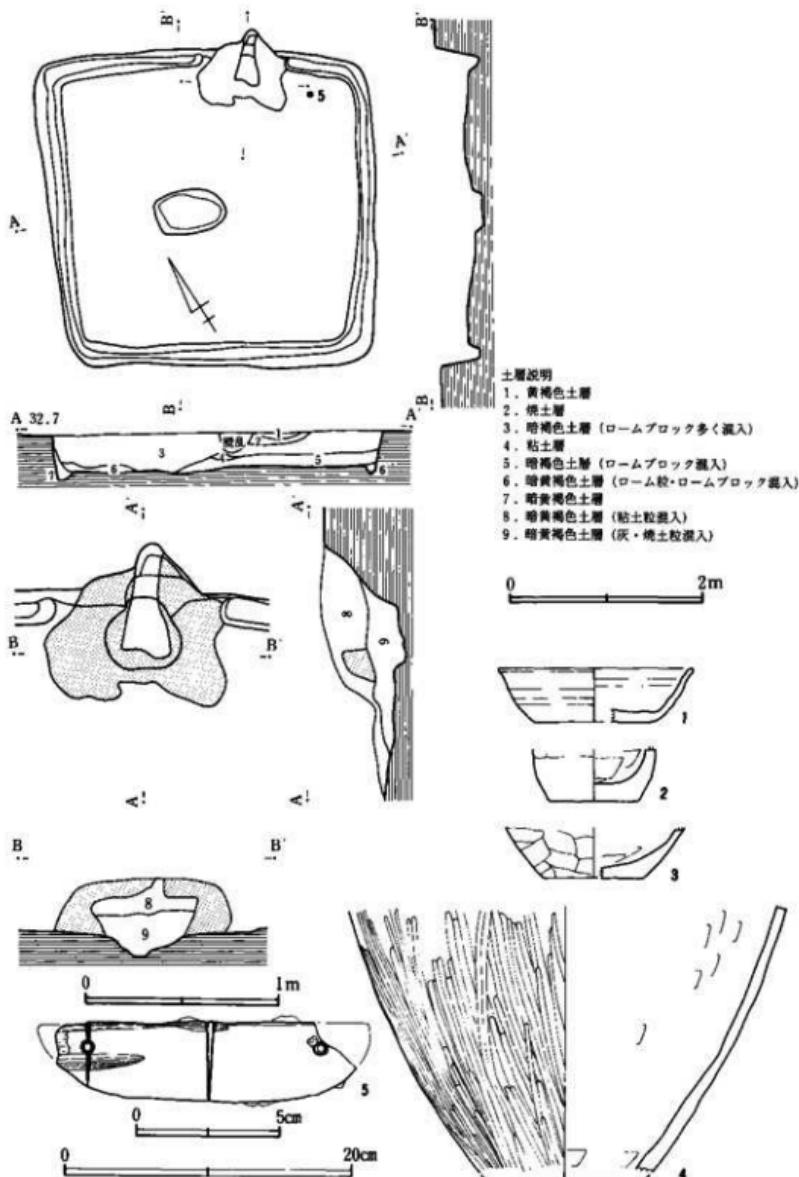
2号住居跡(第75図、図版15)

1号住居跡の北側約4mに位置し、ほぼ同じ方向で構築されている。規模は3.5×3.3mを測り、かなり整った方形のプランを呈し、北壁にカマドが構築されている。確認面からの深さは30~40cmで、部分的に植物根の擾乱を受けるが、床面に達するものはない。覆土は全体的にローム粒ないしロームブロックを多く含み、あまり長い時間をかけないで埋め戻している。特に3層は覆土の大部分を占め、当初別遺構の存在を予想させたが、断面図からも分るように極端にロームブロックが多い部分であった。なお、最上部の1・2層について住居埋没との同時性は証明できないが、住居の廃棄に関わる行程の一部を指す可能性も無視できない。床面は住居中央がかなり堅緻で、また中央が幾分低くなっている。壁溝はカマドを除いて全周し、住居内側の立ち上りもかなり明瞭に検出できた。また、住居中央には75×45cmの浅い掘り込みがあり、住居内における何らかの施設であるが、用途は不明である。なお柱穴は住居内に存在していない。

カマドは北壁のやや東に寄った位置に構築されている。遺存状態はかなり良好で、炊口の天井部が残存している。袖の形状はやはり壁からハ字状に開いており、開口部は現状で25cmを測る。火床部での内法はかなり広く55cmを測り、高さは底面から天井部の下面まで30cmを測る。煙道は壁外へ約30cm張り出し、三角形となり、立ち上りは比較的緩やかである。カマド内の堆積土はかなりの厚さで灰を多量に含む層があり、住居廃絶時に灰をかき出さなかったようである。

遺物はやはり少なく、本住居に直接伴うと考えられるものはない。穀穫具についても完形に近い状態ではあるが、その出土状況は北側から落込んで、住居内の堆積土に刺さったと理解できる。

遺物 1は須恵器の壺である。体部は若干内湾気味に立ち上り、外面にヘラケズリは施されていない。内面は身込みの部分をかなり強くおさえ、また口唇部内側が異常に摩滅している。底部はヘラ切り後全面を一定方向にヘラケズリしている。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は実に良好でかなり堅緻な仕上りとなっている。2はミニチュアである。外面に接合痕を残し、内面はヘラナデで調える。全体に調整は粗雑で、器面は凹凸が著しく、外面には爪跡が残る。な



第76図 2号住居跡及び出土遺物実測図

お、底部には木葉痕がある。4は大形の甕である。胴部上半及び底部を欠失しているが、底径は11cm前後と推定できる。外面は胴部中位から底部にかけて、やや細かい縦位のヘラミガキを比較的丁寧に施している。内面は横位のヘラナデで底部近くで入念に行なっている。なお、胎土には大粒の長石粒・石英粒をかなり多量に含んでいる。5は穂積具である。両端を欠損しているが、全長は21.5cmと推定でき、幅2.65cmを測る。刃部は図の中央から左側にかけて約2.5cmに研ぎ直しが観察でき、右利きの使用者の場合、図示した方向の使用が窺われる。目釘は両側とも遺存しており、それぞれ両端から18mm、背から8mmにほぼ中心がくる。背の厚さは2.8mmで、重量は現状で20.22gを量る。

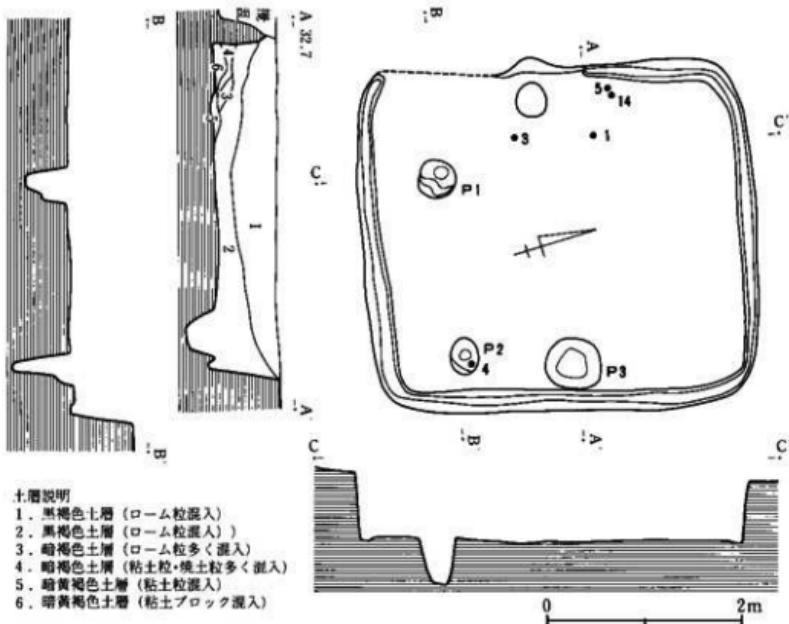
3号住居跡（第77・78図、図版16・50・51）

調査区の西端8Dグリッドで検出した住居跡である。西側に擾乱を受けるが、全体の内容は概ね把握することができた。規模は4.1×3.6mを測り、僅かに南北に長い方形のプランを呈している。主軸方向はN-70°-Wを指し、西壁にカマドが設けられている。確認面からの深さは60～70cmを測り、擾乱を受けた部分を除けば遺存状態はかなりよいものと推定できた。覆土は1・2層が大部分を占め、共にローム粒の混入はかなり多い。断面図を見る限り、明確な埋め戻しの形跡を窺うことはできない。3～6層はカマド構築材の流出で、いずれも粘土塊を多量に含み、また4層には焼土粒も多く混入している。壁溝は西壁で擾乱を受けるが、本来はカマドを除いて各壁に巡っていたことは確実とみられ、幅は20cm前後で一定しており、床面からの深さは北壁でかなり明瞭であるのに対し、他の壁では僅かに窪む程度にしか確認できなかった。床面におけるその他の施設は3ヶ所のピットがある。P3はカマドと対峙する壁のほぼ中央に沿った位置に構築され、出入口に伴う施設と考えられる。P1・P2については柱穴の可能性も考えられるが、対する北壁側に設けられており、疑問も残される。

カマドは西壁の中央に構築されている。覆土を掘り下げている段階では、周囲にカマド構築材の流出が観察できたが、実際西壁に擾乱を受けたこともあり、カマド本体の構築物は殆ど失われていた。ただ、床面において火床を認めることができ、平面図のその範囲を示しておいた。煙道は殆ど壁外へ張り出さず、壁の上場だけが僅かに膨らむ程度である。従って、立ち上がりも壁の角度と大きく変わることはなく、かなり急角度となる。

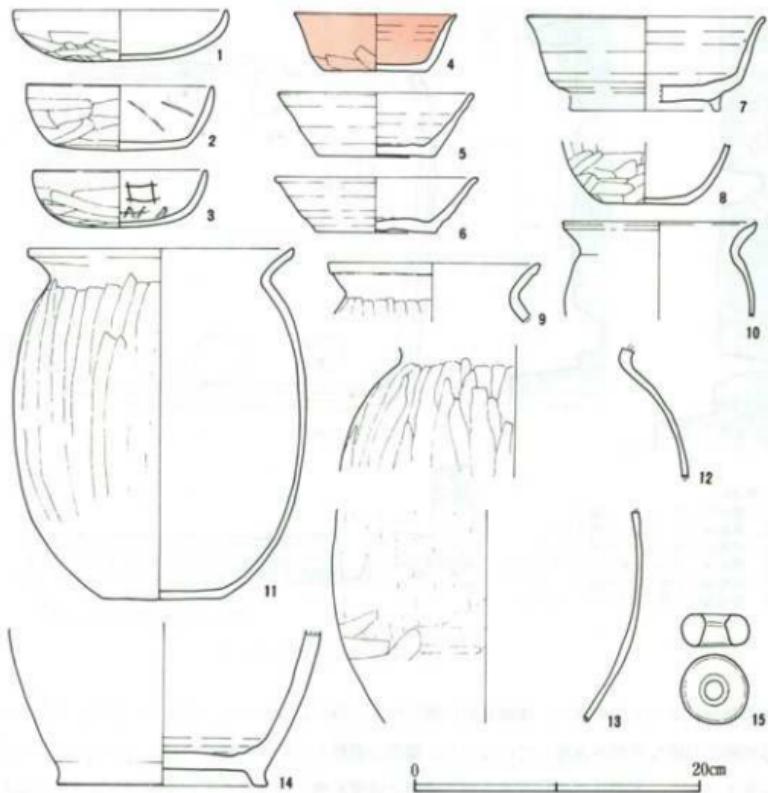
遺物は比較的多く出土し、カマド周辺から出土した坏は本住居に伴う可能性がかなり高い。また、第93図に示した須恵器の大甕も本住居から出土した部分がある。本住居から出土した部分は口縁部であり、他に8Dとしてあるものも本住居に包含されていると考えてよい。しかし、胴部の大部分は9F及び9F内の遺構から出土しており、口縁部も含めてグリッドの遺物として一括した。

遺物　1～3はロクロ未使用の坏で、器形には3点とも相違が見られる。1は3点の中では最も大振りであるが身が低く、また明確な底部を持たないものである。口縁部は端部が直立し、



第77図 3号住居跡実測図

その部分にヨコナデを施す。体部外面は横位ないし斜位のヘラケズリを施し、前述したように器形的に明確な底部を表現していないが、器面の調整としては接地面に対しヘラケズリの方向を変えている。内面は平滑にナデるが、底面に油煙か漆と目される光沢を帯びた黒色の付着物があり、器面が剥離している部分にも本来付着していたようだ。胎土は他の2点と比較してやや粗く、長石粒とともに粒径1mm程度の礫も含まれている。2はかなり立った体部を持つもので、器形的にも調整の面からも底部を認識することができる。口縁部は直立し、端部をヨコナデで調える。体部は横位ないし斜位のヘラケズリを施し、底部は周縁を除き一定方向のヘラケズリである。内面は平滑にナデた後にかなり粗雑ではあるがヘラミガキを加えている。但し、底面とは遺存状態が大きく異り、底部破損後異なった状況下に置かれていたようである。胎土は1にかなり近い。3はかなり丸味を持った体部で、底部全面と体部の大部分にヘラケズリを施す。先の2点と異り、器面の調整からは体部と底部の違いを見ることはできない。口縁部はヨコナデで、内面は底面に達するが、外表面はさらにナデを加えている。内面は2と同様約1/2ずつ遺存状態が大きく異り、遺存状態が悪い部分は剥落が著しい。なお、遺存状態がよい部分で僅かにヘラミガキを観察することができ、同時に線刻も観ることができる。胎土は砂粒を多く混入するが、他の2点に比べて目立った混入物はない。4～6はロクロ使用の坏である。4だ



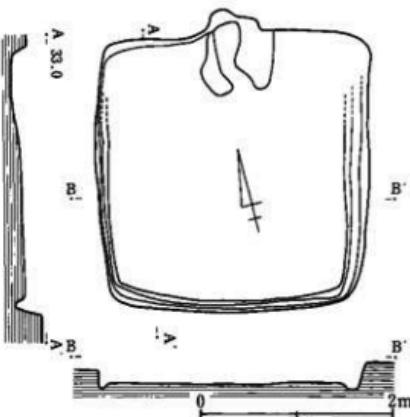
第78図 3号住居跡出土遺物実測図

けが土師器で5・6に比べて体部がかなり立っている。体部下端は手持ちでヘラケズリを行い、さらにナデを加えているためヘラケズリは不鮮明である。底部は静止糸切り後意識的な調整を行っていないが、糸切り痕も不鮮明である。内面は口縁部がかなり摩耗していて、同様の壊を重ねていたと理解できる。また、内面は全面赤色塗彩され、外面にも塗彩されていたようであるが、外面はかなり濃厚に油煙が付着しており、明らかではない。胎土は比較的堅緻であるが、微細な長石粒を多く含んでいる。5・6は須恵器であるが、ともに焼成が悪く、酸化焰焼成となる。器形・技法の細部について若干の相違点が見られる。6がより大振りで体部の開きも大きく、身も低い。切り離しは両者ともヘラ切りで、5は切り離し後全面一定方向のヘラケズリ、6は周縁部だけに留めている。このことと対応するように、6は体部にヘラケズリを施さず、5に回転ヘラケズリが見られる。なお、内面は共通して身込みの部分を強くおさえるという特

微を持っている。胎土は両者長石粒とともに雲母粒を非常に多く含んでいるが、5はさらに石英粒もかなり多い。7は高台付の壺である。比較的深い身を持ち、屈曲部も緩やかな製品だが、内外面とも摩耗が著しく、特に高台・稜線等の僅かに出た部分が顕著であり、高台は殆どなくなってしまっている。通常の使用の状況においてこのように摩耗するものかデータがないが、少なくとも同一規格に近い製品の積み重ね、ないし積み重ね時の振動を考えない分けにいかない。調整は体部下端及び底部に回転ヘラケズリを施し、ロクロ回転方向は右である。胎土は5・6と比較すると精緻であるが、やはり微細な長石粒を多く含み、また黒色の粒子もやや目立つ。8～13は壺である、大小2タイプがある。このうち8～10は小形の壺である。9・10は口縁部の形状に若干の相違が認められるが、いずれも部分的な破片であり、本住居跡に直接関わる可能性は低い。口縁部の調整はともにヨコナデで、端部は9が丸く納めるのに対し10は外面に沈線様の屈曲を持つ。胴部は縦位のヘラケズリで、下部では恐らく8のように横位のヘラケズリが加わると考えられる。また、10はヘラケズリをナデで綴て消している。胎土は共通してかなり粗く、8・10に長石粒を、9にはさらに雲母粒が含まれている。11～13は大形の壺で、11がほぼ完形となる。11は短く外反する口縁部をヨコナデで調え、端部は直立している。胴部は11・13と同程度の膨らみを持ち、12だけがかなり大きく膨らんでいる。器面は基本的に縦位のヘラケズリで、13は下部に横位のケズリが見られるが、3点ともヘラケズリの上に僅かにナデを加えている。内面の状況は12・13と遺存状態が悪く、基本的にナデを施しているのであるが明瞭ではない。なお、11の内面は壺として使用されたとは考えられない程遺存がよい。胎土はやはりかなり粗く、12・13に微細な長石粒を、11にはさらに雲母粒が僅かに含まれる。14は長頸瓶であろうか。高台は短く断面方形で、体部との接合後に再度ロクロナデを施している。体部は僅かに湾曲するが、高台径並びに器厚を考えるとかなり大形の製品であり、体部上半から頸部にかけての様子が簡単に想像できない。体部下位にはヘラケズリが施されていたようで、砂粒の動きが観察できるが、再びロクロナデを施した上で、ヘラケズリの稜線を追うことはできない。底部も全面回転ヘラケズリであるが、これもあり強いものではないようだ。なお、ロクロ回転方向は右である。胎土には細砂粒・微細な長石粒を僅かに含むが、比較的堅緻である。15は土製品であるが用途が不明であり、かつ類例も知らない。形状は実測図のとおり環状を呈し、中央に孔が貫通している。孔は表裏?で径が異なり、いずれも僅かに摩耗しているようであるが、径が大きい方が明瞭である。また、径が小さい方の面は孔の周囲が均等に摩耗しており、反対面には見られない。しかし摩耗の状況は、前述した土器には及ばない程度であり、極端に激しい摩擦を考えることはできない。摩耗が特に著しいのは孔の屈曲部であり、この孔に棒状の挿入具を差し込んで回転運動を行った可能性は高い。さらに、製品の周縁の摩耗がないことから、回転するのは棒状の挿入具であったと考えられる。胎土は黒色の粒子を僅かに混入するがかなり精緻で、焼成もよい。

5号住居跡（第79図、図版16）

1号住居跡の東約8mで検出した住居跡である。規模は2.8×2.8mを測り、正方形のプランを呈している。主軸方向はN-20°-Eを指し、北壁にカマドが設けられている。確認面からの深さは20cmと浅く、確認面においてカマドの輪郭を窺うことができた。ローム層中への掘り込みが浅いため、土層断面の観察は充分ではなく、断面図は掲載しなかった。覆土はかなりロームの混入が多く、色調は黄褐色を呈し、またロームブロック・粘土粒・焼土粒も多く含んでいる。床面は遺存状態が悪く、南北方向の断面図からも分かるように、住居北側がかなり低くなっている。この部分では壁溝も消失している。北壁を除いた各壁には壁溝が巡り、幅は東壁で幾分広いようであるが概ね10cm以下である。なお、柱穴は住居内に設けられていない。



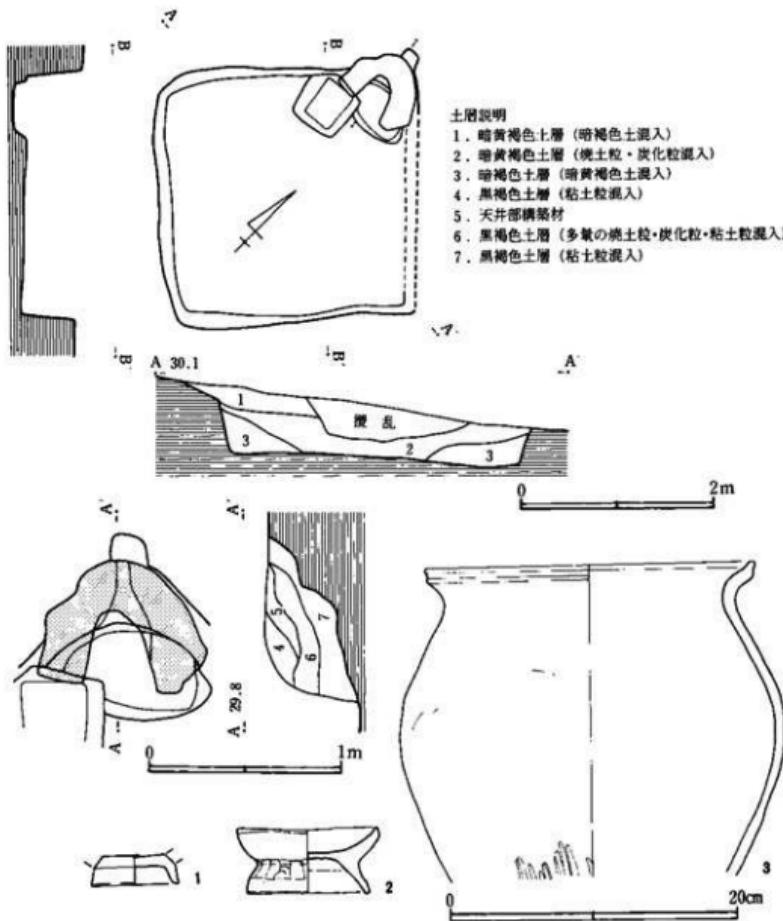
第79図 5号住居跡実測図

カマドは北壁の中央に設置されている。遺存状態は決してよくないが、袖部は構築材が堅固であるためかろくじて残存している。カマド全体の幅は70cm程度で、袖の内法は20~30cmを測る。煙道は3号住居同様あまり壁外へ張り出さず、三角形に約30cm出ている。よって煙道の立ち上りも、住居の壁に近い角度となる。

遺物は実に少なく、住居に直接伴うものは皆無である。なお、本住居から出土した須恵器の壊の破片は2号住居跡の1と接合した。

6号住居跡（第80図、図版17・51）

調査区内に北側から入り込む深い谷に面した位置で検出した住居跡である。規模は2.7×2.6mを測り、方形のプランを呈しているが、北東側の壁が大きく擾乱を受けている。また、土層断面図でも分るように壁の立ち上りの周囲も緩やかに傾斜しているが、この傾斜が斜面上位でより大きいことから、住居の施設として断定する根拠が乏しい。住居構築の方向は、長軸というほど軸長に差がないが、一応N-45°-Eを指し、カマドは北コーナーに設けられている。確認面からの深さは斜面上位の壁高が50cmを測り、斜面下位では擾乱により床面も本来のレベルを保っていないため、具体的な数値は求められないが、20cm程度しかないのであろう。覆土の状態は住居中央に大きな擾乱を受けるが、床面にまで達するものではない。覆土の大部分を占める2層は焼土粒・炭化粒を含み、自然の流入とは考えられないが、基本的に1・2層とも斜面



第80図 6号住居跡及び出土遺物実測図

上位から堆積したものである。床面では壁溝及び柱穴は検出できず、住居の施設としてはカマド手前の方形の掘り込みだけである。この掘り込みは70×55cmの規模があり、カマド袖と殆ど接している。深さは床面から12cmを測り底面も平坦で、貯蔵穴というよりはむしろカマドに附隨する作業用の施設と考えられる。

カマドは隅カマドで北コーナーに設置されている。地形的には斜面下位に当るが遺存状態は良好で、天井部も部分的に崩落を免れていた。袖及び天井部の構築材は白色の粘土を主体とし、

砂粒を多く混入したものである。火床での袖の内法は40cm前後で、また底面から天井部内側までの高さは20cmを測る。煙道は住居コーナーを約30cm掘り込んでいるが、縦位の土層断面図からも分るように、壁外へ張り出した部分は立ち上りに段ができる、角度も緩やかになっている。なお、カマド内の覆土は殆どは煙道から流入したようである。

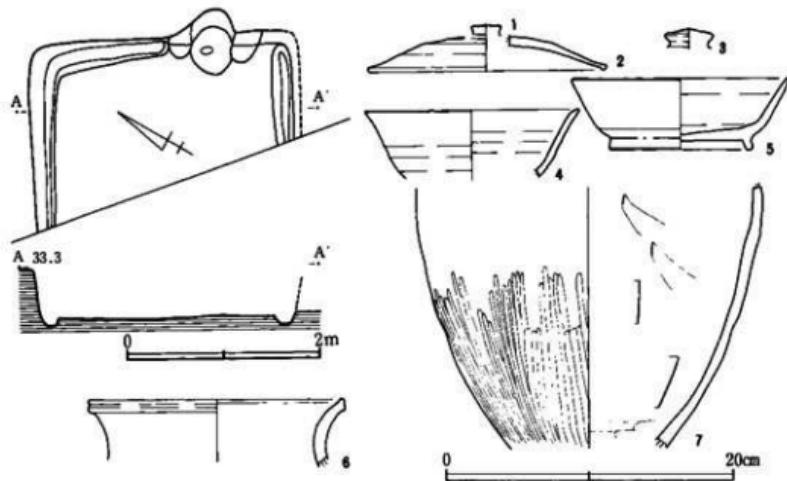
遺物はやはり少なく、3点を図示したが2を除いて部分的な破片である。

遺物 1は須恵器壺或は皿の高台の部分である。体部とは接合部できれいに剥がれたようで、破損部を整形して壺のミニチュアとして再利用している。高台としては径が小さく、底部は回転ヘラケズリで、高台接着後に再度ナデを施している。胎土は比較的大きい長石粒を多く含み、また微細な雲母粒も僅かに見られる。ロクロ回転方向は右である。2は器形の概念としては高台付の壺に含まれるものである。足高高台の出現するような時期であるならば、調整を別として類似する製品も皆無とは言えないが、該期としては例外的な存在である。体部はかなり湾曲を持って立ち上り、端部が僅かに直立する。高台はハ字状に開き、径・高さとも体部に近い数値を測る。外面は体部が横位、高台が縦位のヘラケズリを施し、さらにヘラミガキを行っている。また体部内面も同様にヘラミガキが施されている。なお、底面に黒色の付着物がある。高台内面はヨコナデで整えられ、体部に接合後さらに調整ナデを行う。高台端部は無調整で、葉脈のはっきりした木葉痕が残る。胎土は微細な雲母粒を僅かに含むが、堅緻である。3は壺である。口縁部は短く外反し、ヨコナデで整えられる。端部は直立し、3号住居跡12と同様沈線様の窪みを持ち、内側の段はさらに明瞭である。胴部は上位に最大径が位置し、器面は平滑なナデとともに、下位には縦位のヘラミガキを施している。胎土は微細な雲母粒及び大粒の石英粒を非常に多く混入している。

10号住居跡(第81図、図版17・18・51)

調査区の南端12Eグリッドで検出した住居跡である。西側は既に造成工事のため削平され、床面積の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。規模は南北2.8mを測り、方形プランを呈している。主軸方向はN-65°-Eを指し、カマドは東壁に設けられている。確認面からの深さは50cm前後を測るが、南側の壁は殆ど削平され、壁溝の存在が確認できるだけである。覆土は西側造成地の法面工事の際にかなりの擾乱を受け、殆ど本来の状況を残していないかった。しかしながら床面は予想以上に遺存しており、全体に平坦かつ堅緻であった。壁溝は現存部分でカマドを除いて巡っており、幅は北壁が狭いが他は15~20cmと比較的幅広である。なお、現在の床面で柱穴は存在しない。

カマドは東壁に設置されているが、南東コーナーにかなり近い位置であり、右側の袖は殆どコーナーに接している。袖の構築材は白色粘土に砂粒を多く混入したもので、現状では壁から30cmほどの長さしかない。また、覆土中に流出した構築材の範囲もあまり広いものではない。袖の方向は右側の袖が住居の軸方向と比較してかなり内側に向いていて、或はカマド自体も住

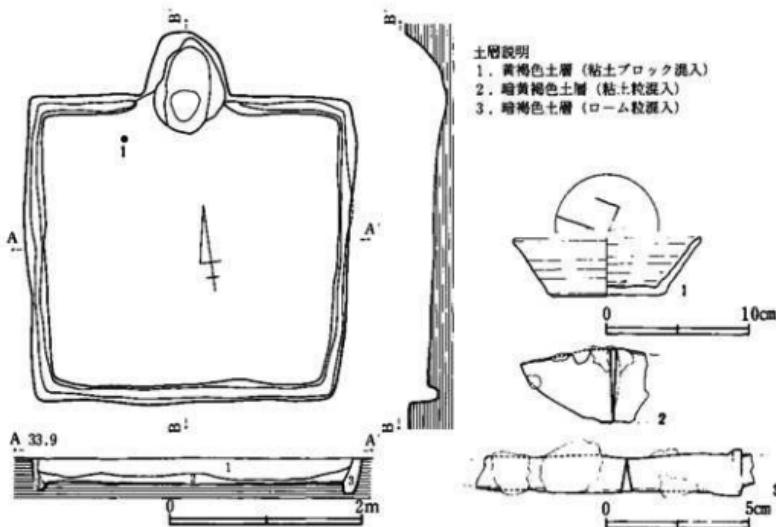


第81図 10号住居跡及び出土遺物実測図

居内側に向いた構造かもしれない。天井部は全く遺存しておらず、火床部での袖の内法は45cmを測る。煙道は15及び35号住居跡ほどではないが、本遺跡においては壁外への張り出しが大きいと言え、約30cmを測る。

遺物はやはり少なく、直接本住居に伴うものはない。

遺物 1～3は須恵器壊蓋である。1・2は別個体かもしれないが、胎土・焼成は非常に似ている。2は天井部にやや丸みを持つもので、端部はかなり短いが、内傾している。ヘラケズリは天井のほぼ $\frac{1}{2}$ まで達し、ロクロ回転方向は右である。胎土は1とともに長石粒を非常に多く含んでいる。つまみは大小あるが基本的には同じ形態で、中央が端部より僅かに出ている。4は須恵器の壊である。焼成が不良で調整も不明瞭ではあるが、現存部分にヘラケズリは施されていない。体部は下端に若干丸味を持つが、高台の存在は明らかではない。5は須恵器の高台付の壊である。体部は直線的に立ち上がり、下端に回転ヘラケズリを施す。なお、胎土には大粒の石英粒を僅かに含む。6・7は壺である。口縁部は6号住居跡3と同様に端部が直立するもので、やはり沈線様に窪んでいる。但し、内面の段はあまり明瞭ではない。6の胸部の破片は恐らく最大径がかなり上位に位置するもので、胸部の張りもあり大きいものではない。外面の縦位のヘラケズリを全てナデで消し、さらに縦位のヘラミガキを行っている。また、粘土紐の接合部分が想像できるほどに器面の凹凸があり、このことは内面についても同様である。内面は横位ないし斜位のヘラナデで、底部との接合部では粗雑さは免れないが入念に行っている。これは、底部接合後にその上部に再度粘土をかぶせており、それを消すことを目的としている。胎土は雲母粒及び大粒の石英粒を多量に含んでいる。



第82図 15号住居跡及び出土遺物実測図

15号住居跡(第82図、図版18・51)

調査区内では最高所に構築された住居跡であるが、東側の谷とも遠からぬ距離である。規模は $3.4 \times 3.1\text{m}$ を測り、方形のプランを呈している。住居の主軸方向はN-15°-Eを指し、カマドは北壁に設けられている。確認面からは深さは20cm前後で、カマド周辺が全体的に僅かに低くなっている。覆土は壁際に所謂三角堆積様の土層が見られるが、明らかに角度が急であり、1・2層とは異なった堆積要因が考えられる。1・2層はほぼ水平に堆積しており、1・2層堆積時に3層部分に遮蔽物の存在が予想でき、3層の壁溝の内側の立ち上りと一致することも偶然とは思えない。壁に施された構造物が遺存していたと考えるならば、1・2層は住居廃絶後かなり短期間に形成されたと見ることができる。壁溝はカマドを除いて全周しておらず、深さ・幅についてはそれぞれバラツキもあるが、整った断面径を呈している。なお、床面に柱穴は設けられていない。

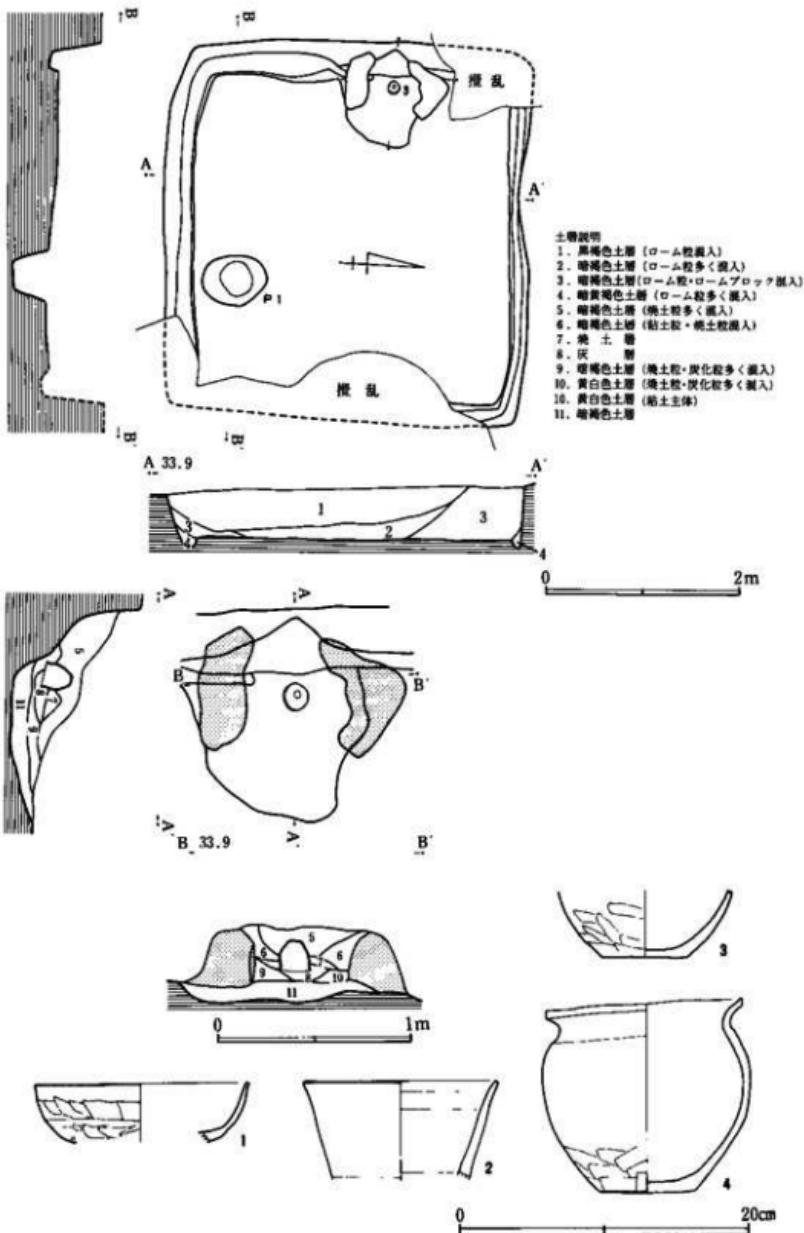
カマドは北壁の中央に設置されている。隅カマドの構造を採用する35号住居跡を除けば、本遺跡において最も大きく煙道が壁外へ張り出している。カマドの構造は崩落が著しく、断面観察でも充分把握することができなかったが、構築材はあまり広く流出しておらず、カマド本体の大部分は張り出しの中に収まっていたようである。実際、張り出しの壁には構築材が部分的に残っている。また、煙道の立ち上りは断面図からも分るように、かなり緩やかな角度である。遺物 1は須恵器の壺である。体部は直線的に立ち上り、内外面とも調整痕が明瞭がある。内

面は本遺跡でかなり多く見られるように、身込みの部分を強くおさえる。また、底部内面に線刻があるが、遺存部分が少ないため意味不明である。底部はヘラ切り後周縁に回転ヘラケズリで角度を付け、底部は全面一定方向のヘラケズリである。胎土は大粒の礫母粒を多く混入し、非常に特徴的である。鉄製品は2点を図示した。2は切先だけが遺存しており、鎌であろうか。刃部の幅は現存部最大23.5m、背の厚さは3.15mを測る。3は刀子で切先及び柄を欠損している。刃部の幅は最大18.9m、峰の幅は3.9mを測る。関は刃部より僅かに幅広で、両関となる。

17号住居跡(第83図、図版18・19・51)

15号住居跡同様調査区内の最高所に構築された住居跡である。住居東側は近年に行われた大規模な擾乱があるが、かろうじて北東コーナーは遺存しており、東西軸長も復原可能である。規模は3.9×3.8mを測り、プランは方形を呈する。主軸方向はN-80°-Wを指し、西壁にカマドが設けられている。比較的近い方向を指す住居は3号住居跡が上げられ、西壁にカマドが設けられるのはこの2軒だけである。確認面からの深さは40~50cmを測り、床面は南東コーナーが幾分低くなっている。覆土は所謂三角形堆積が壁際に見られ、他の土層もプライマリーな状況を示す。具体的にはローム粒の混入が多く、3層ではハードローム塊も含まれ、単純に周囲から自然に土砂が流入したものではない。基本的には住居北側から主体的な堆積が見られる。壁溝はカマドを除いて全周しているが、全くカマドを除外したものではなく、左側の袖の下にまで及んでいる。断面形、特に住居内側への立ち上りは明瞭で、底面の幅は北壁で10cm以下と狭い他は15~20cmとかなり広いものである。なお、床面に柱穴は設けられていないが、南壁近くでピットを検出した。床面での形状は70×50cmの楕円形であり、長軸が南壁と直交する。深さは床面から40cm程度であるが、ピット周囲の床面自体がやや低くなっている。可能性として出入口施設を上げることができる。

カマドは西壁に設置され、僅かに北西コーナーに寄った位置にある。遺存状態は比較的良好と言えるが、天井部は崩落している。袖は幅が広いため、かなり短い印象を受けるが、60cmほどの長さがあり、内法は50cmを測る。煙道は基本的に三角形に掘り込まれるが、壁外へは全く張り出さず、現在視覚的に捉えられるのは壁の中程までである。よって当然のことのようだが、煙道の立ち上りも断面図で見るようになら急角度を持っている。カマド内の堆積土は2層が天井部の崩落のようで、それより上位の1層は焼土粒の混入が多いものの、住居覆土と殆ど変わらない。また、横断面では天井部崩落土の上にかなり純粋な灰が堆積している。縦断面では天井部崩落土の下に位置し、層が逆転しているようであるが、カマド上面から流入したもので、カマド廃棄時にカマド上部に覆いかぶせたようである。さらに、より明白な形でカマド内に甕を逆位にはめこみ、カマドの機能を封じ込めている。このようにカマド内に甕・高坏・坏等を逆位に入れる例は少なからず知られており、住居廃棄に伴う儀礼的な行為を示すものと考えられる。



第83図 17号住居跡及び出土物実測図

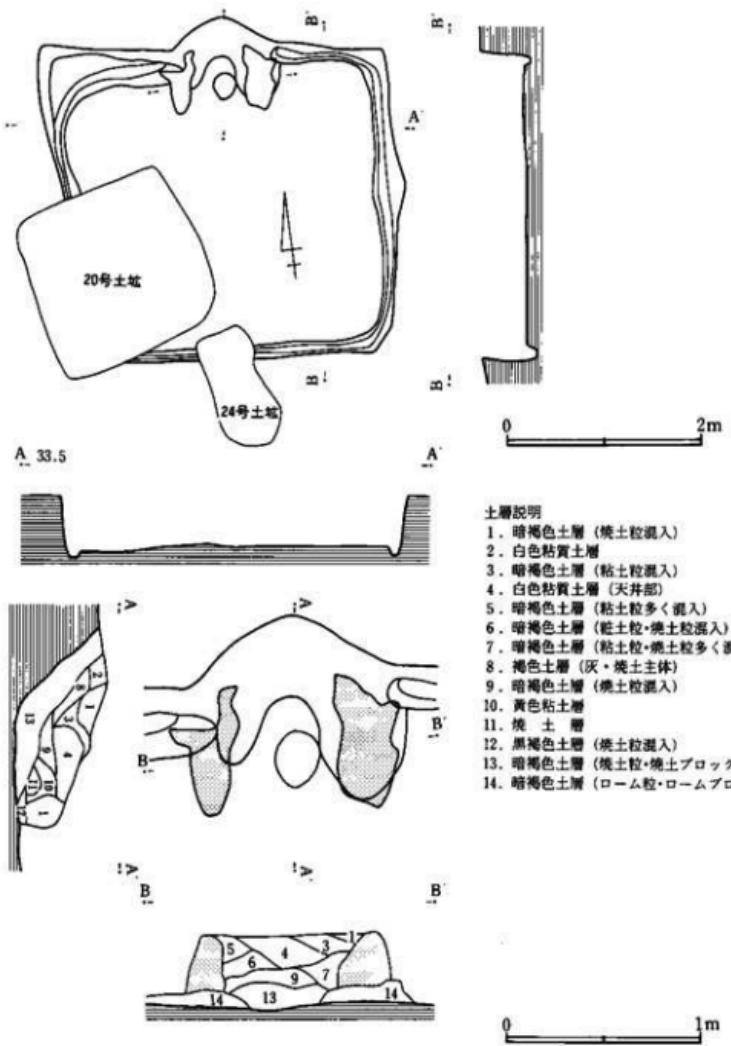
遺物はカマド内の壺の他に煙道にも壺の破片が置かれているが、この壺は図示するには至らなかった。

遺物 1はロクロ未使用の壺である。底部は欠損しているが、器形的には底部の明確な区画はない。体部は比較的丸みを持ち、ヘラケズリがかなり上位にまで及んでいる。ヘラケズリを施した後に接合痕が消えていない部分があり、その部分を再度ナデしている。なお、体部下端から底部にかけてヘラケズリを総てナデで消している。胎土は非常に粗く、砂粒とともに長石粒・雲母粒を混入している。2は須恵器の鉢で、高台が付くと考えられる。内面の状況からほぼ底部に近い部分まで遺存しているようだ、7.5~8cm程度の器高が復原できる。体部は直線的に開き、口径の割に身は深い。現存部分にヘラケズリは施されておらず、ロクロナデは非常に丁寧である。胎土は僅かに微細な長石粒を含み堅緻で、焼成も良好である。なお、口唇部内面は摩滅している。3・4は壺でいずれも小形となる。4はカマド内に伏せられていたもので、完形である。口縁部は短く外反し、端部が直立する。胴部は球形に近く、下位に横位のヘラケズリが観察できるが、他の部分も縦位のヘラケズリが施され、それを総てナデで消している。また外面には二次的に火熱を受けた痕跡があり、非常に脆弱となっていることから、製品自体使用に供されていたもので、本住居で使用されたものとも考えられる。胎土は微細な雲母粒を僅かに含み、長石粒は非常に多い。

19号住居跡(第84・85図、図版19・20・52)

21号住居跡の南側に隣接して構築された住居跡である。20・24・25号の3基の土塙が重複するが、いずれも本住居より新しく、25号土塙については本住居跡の床面にまで達していない。20・25号土塙は住居の壁並びに床面を破壊している。住居跡の規模は3.5×3.1mを測り、やや不整な方形のプランを呈している。主軸方向はN-20°-Eを指し、北壁にカマドが設けられている。確認面からの深さは約50cmを測り、覆土は土塙が住居のかなりの部分を占めているため、充分な観察ができなかつたが、一応第90図に示しておいた。その状況は、上層でローム粒を若干含み、下層では焼土粒が加わる。また、壁際にはソフトロームを主体とする三角堆積が見られるが、これだけの内容では一概に自然堆積と言うことはできない。床面は概ね平坦ではあるが、カマド周辺が僅かに高く、北西コーナーが最も低い。壁溝はカマドを除いて全周していたようだ、全体的に幅は10cm以下であるが、北西コーナーでは大きく住居内へ広がる。なお、柱穴は床面で検出することができなかつた。

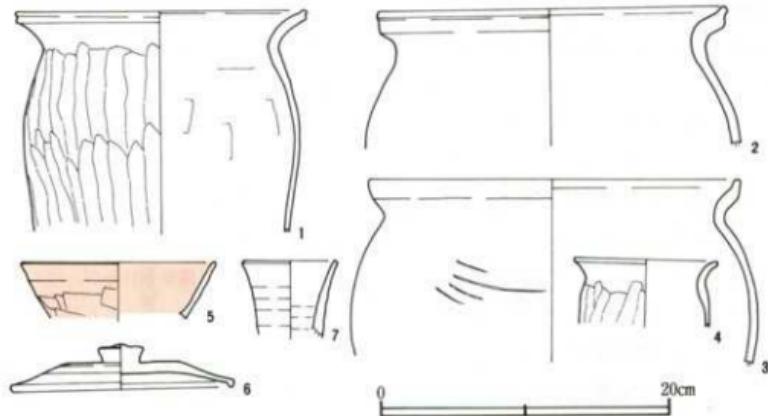
カマドは北壁の中央に設置されている。遺存状態は比較的良好であるが、構築材はかなり広い範囲で覆土中へ流出しており、天井部は殆ど崩落していた。袖は白色の粘土で構築され、外側に黄色の粘土を貼り付けている。袖の構築に際して床面を若干掘り残し、さらにハードロームを主体とした基底部を設ける。袖の内法は約50cmを測り、断面図からも分るようにハードロームで設けた基底部よりやや幅広である。煙道は壁外へ約30cm三角形に張り出し、縦位断面の



第84図 19号住居跡実測図

とおり立ち上りは比較的緩やかとなる。カマド内の覆土は13層が煙道から主体的に流入したものであり、2・4層が天井部の残存と見られる。

遺物は住居の残された部分が少ないため必然的に多くなく、本住居に直接伴うものは少ない。大形の壺3点は欠損部分もかなり多いが、カマド手前の床面にかなり近いレベルから出土して



第85図 19号住居跡出土遺物実測図

いる。基本的にはカマド構築材の流出土内であり、住居廃絶に比較的近い時期のものであろう。

遺物 1～3は大形の甕である。器形的には2様であり、胸部の形状に最大の相違がある。1はあまり大きく膨らまない胸部を持つものである。2・3に比べて口縁部の外反が大きく、端部が直立している。胸部の調整は縦位のヘラケズリ後に僅かにナデを施すが、ヘラケズリを消してしまうほどではない。内面は横位のヘラナデで平滑となる。これに対して2・3は口縁部が短く、胸部も全くヘラケズリを残さないまでにナデを行っている。胸部は1と比べてかなり張りがあり、最大径は口径を遙かに凌いでいる。器形以外には胎土に大きな違いが見られ、2・3は共通して雲母粒とともに大粒の石英粒を非常に多く含んでいる。これはこの2点に限ったことではなく、本遺跡の胸部が張る大形の甕はほぼ例外なく同様の混和剤を使用している。4は小形の甕の中でも法量が小さいものである。胸部の調整は縦位のヘラケズリ後にナデを加える。胎土は長石粒を多く含むが、胸部は非常に薄く仕上げられている。5は土師器の壊である。体部はロクロナデで直線的に立ち上り、かなり上位まで手持ちでヘラケズリを行っている。なお、器面は内外面とも赤彩が施される。6は壊蓋である。天井部は平坦で、端部からの角度を考えると見た目ほど高さはない。端部は直立しないし僅かに内傾し、天井部のヘラケズリはかなり低い位置まで施される。つまみは口径の割に大きく、端部はシャープで中央が幾分高い。胎土は微細な雲母粒と粒径が2mm近い石英粒を僅かに含む。なお、ロクロ回転方向は右である。7は長頸瓶の口縁部で頸部はあまり大きく開かず、ロクロナデは内面がより強く、凹凸も明瞭である。

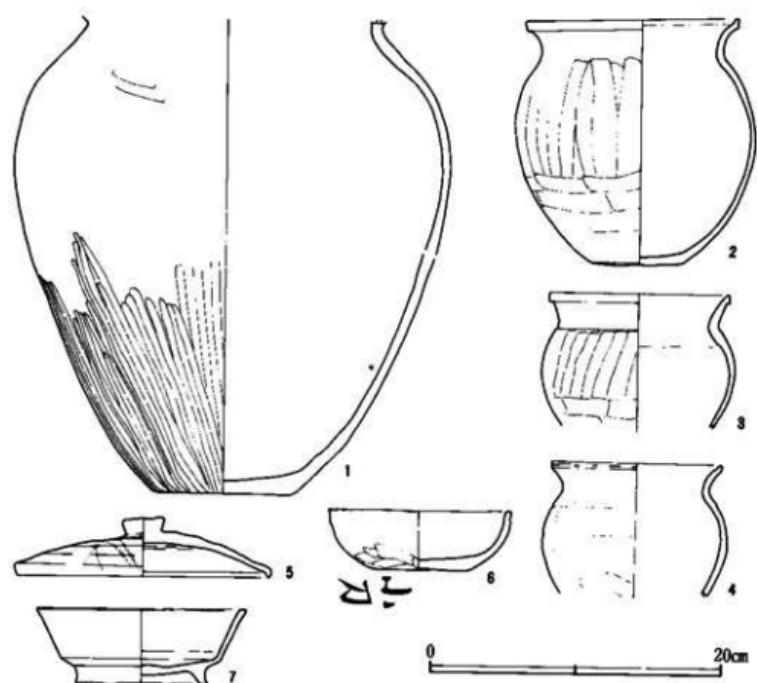
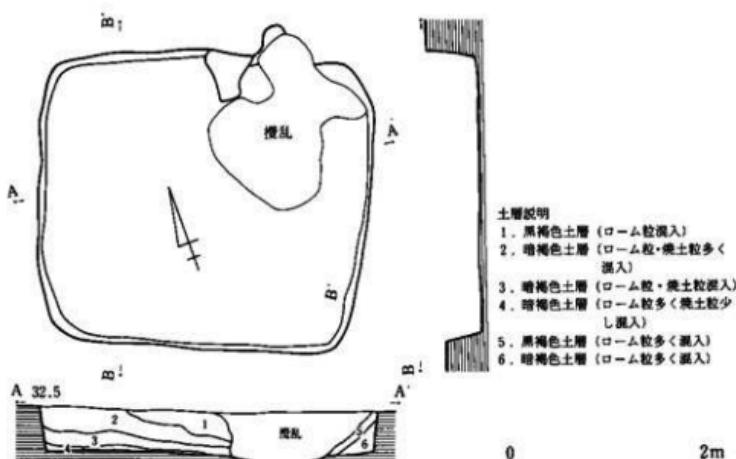
21号住居跡(第86図、図版20・52)

19号住居跡の北側に隣接して構築された住居跡である。規模は $3.4 \times 3.0\text{m}$ を測り、方形のプランを呈している。主軸方向はN-30°-Eを指し、北壁にカマドが設けられている。確認面からの深さは約50cmを測るが、カマドから北東コーナーにかけて床面に達する擾乱を受ける。覆土は全体的に焼土粒及びローム粒を含むが、これらの粒子の混入の割合で分層が可能である。これらはほぼ水平に堆積し、東側は擾乱によって不明な部分も多いが、比較した場合に西側からの堆積が勝っている。ただ西壁際での2~4層の状況は住居中央と殆ど変らず、水平な堆積のまま壁に接し、壁に沿って流入した様子はない。床面は概ね平坦に構築されるが、敢えて言うならば北壁側が僅かに高いようである。床面において柱穴は検出できず、また6号住居跡との2軒だけが壁溝を確認できなかった。

カマドは北壁に設置されているが、前述したように殆どが擾乱を受け具体的な記述はできない。しかし、一見して分るように北東コーナーにかなり寄って位置しており、左側の袖と煙道の一部がかろうじて残されている。煙道は壁外へ約30cm張り出し、恐らく三角形に近い形状を呈していたと推定できる。

遺物は決して多くはないが、7の高台付环がカマド左側の床面上から出土し、本住居跡の時期決定の材料となり得る。また、5の蓋も擾乱坑にかかっていたが、位置的にはカマド前面であり充分なものであろう。この他図版に示したように若干の間層はあるものの2・6も北西コーナーから出土している。

遺物 1は大形の甕である。口縁部を欠損し、胴部も上位は $\frac{1}{2}$ 程度しか遺存していない。器高は恐らく35~37cmと考えられ、胴部最大径がかなり上位に位置する。外面は全くヘラケズリの痕跡が見えないまでにナデを施し、肩部にヘラ当て痕がかなり明瞭に観察できる。中位以下は縦位の細かいヘラミガキを行うが、底部近くでは特に器壁の荒れが著しく、あまり鮮明ではない。内面は全面横位のナデで平滑となるが、外面のヘラミガキより少し上位から水平に器面が荒れている。胎土は前述したように雲母粒とともに石英粒を多量に含んでいる。2~4は小形の甕である。法量としては2がやや大きく、3・4は殆ど同じ大きさで3点とも球形に近い胴部を持つ。2・4はほぼ完形で、法量の違いがあるものの器形・調整ともに類似点が多い。口縁部は端部が直立するが、3に比べ非常にだらしく、ヨコナデについても同じことが言える。胴部の調整は3点とも上半が縦位、下半が横位ないし斜位のヘラケズリで、またヘラケズリ後にナデを施している。胎土はともに粗く、微細な雲母粒が目立つ。5は須恵器の坏蓋で完形である。天井部はあまり高くなく、 $\frac{1}{2}$ 以上にヘラケズリを施している。端部は丸みを持って内傾し、稜となる部分が僅かに摩滅している。つまみはあまり肩の張らないもので、中央部分も高くない。胎土は長石粒が目立つが焼成とともに良好で、内外面とも火棒が残る。6はロクロ未使用の坏で完形である。体部は湾曲が強く、調整は口唇部がヨコナデ、体部下端に手持ちでヘ



第86図 21号住居跡及び出土遺物実測図

ラケズリを行い、さらに内外面とも僅かにヘラミガキを施す。体部外面には「小刀」と読める墨書きがある。器物として考えるならばまさに字のとおりである、「和名妙」に「刀」として「大刀」(太知)・「小刀」(加太奈)を率く。しかし、坏ということからむしろ人名が適当かと思え、例えば『下総国倉麻郡意布郷戸籍』^{*}に見える「女藤原部小刀自賣」や『下総国葛飾郡大嶋郷戸籍』^{**}に見える「女孔王部小刀自賣」のように可能性が窺える。しかし、「賣」は女性を指す語であり、同様の名を上げるならば「安刀自賣」・「長刀自賣」・「家刀自賣」・「大刀自賣」等のように〇十刀自賣であり、女子名とするのは無理であろう。7は高台付坏で酸化焰焼成である。体部は直線的に開き、しっかりした高台が付く。切り離しはヘラ切りのようで、屈曲部以下に回転ヘラケズリを行なう。外面は高台を付けた時点でロクロナデを行い砂粒の動きも消されるが、高台内面は最終的に一定方向にヘラケズリを施している。胎土には長石粒・雲母粒・石英粒を僅かずつ含む。ロクロ回転方向は右である。

35号住居跡(第87図、図版21・53)

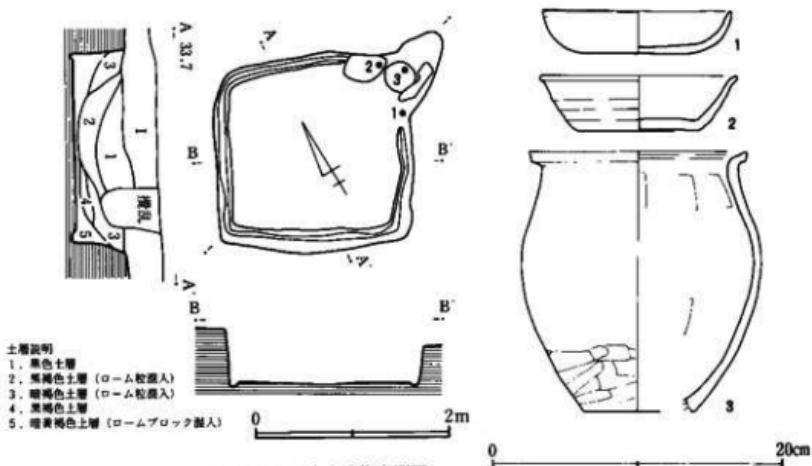
該期の住居からはかなり離れた調査区北端に構築された住居跡で台地先端に位置し、三方に谷を臨んでいる。規模は2m四方の方形のプランで、本遺跡で最小規模の住居である。軸方向はN-25°-Eを指し、北東コーナーにカマドが設けられている。確認面からの深さは台地上位で約50cmを測り、若干擾乱を受けるが床面まで達していない。覆土は最下層の5層にロームブロックを混入するが、量的には少ないので壁からの崩落と考えてもよい。他の土層もローム粒の混入が少なく、堆積状況もレンズ状に互層となり、唯一自然堆積の可能性が窺える。床面は面積が狭いこともあり平坦であるが、やはりカマド前面が僅かに高い。壁溝はカマドを除いて全周し、幅は底面で5cm、深さも床面から5cm程度である。なお、床面で柱穴は確認できなかった。

カマドは北東コーナーに設置され、本遺跡では6号住居跡との2軒だけが隅カマドとなる。遺存状態はかなり悪く、僅かに袖部が残されているだけである。現状では右側の袖の殆どが掘方内に取り、また煙道も6号住居跡と比べて大きく壁外へ張り出している。煙道の立ち上りは約45°を測る。

遺物はやはり少なく、図示した3点はカマド内及びカマド脇から出土したものである。3点とも完形で、位置関係は坏がカマドの両脇に1点ずつ、カマド内に甕が置かれる。この状況はかなり意識的なものであり、甕については底部が欠損している。カマド内にこの底部となるような破片ではなく、底部だけを持出したようである。本来底部は剥がれやすい部分であるが、破損部の様子は明らかに内側から底部を抜いたものである。これは甕への転用を意味するものでな

* 「正倉院文書」「下総国倉麻郡意布郷養老五年戸籍」

** 「正倉院文書」「下総国葛飾郡大嶋郷養老五年戸籍」



第87図 35号住居跡及び出土遺物実測図

く、底部を抜くことにより壺としての機能を剥奪し、間接的にカマドの廃絶を意味している。

遺物 1はロクロ未使用の壺である。底部は丸く身も低い製品で、本遺跡では比較的古い様相を呈している。外面はヘラケズリ後ナデを施し僅かにヘラミガキも行っている。内面は殆どヘラミガキが行われず、底部に僅かに見られるだけである。口唇部内面にはススが付着し焼芯の痕跡は残るが、器面には油煙の付着は全く見られない。胎土には石英粒及び赤色のスコリアを若干含むが、割と精緻である。2は須恵器の壺であるが、焼成が非常に悪く、色調も赤褐色を呈している。体部はおおよそ直線的に開くがやや丸みを持ち始め、底部との境も少しだらしなくなる。外面はかなり凹凸をつけた調整で、口唇部を外反させる。これに対して内面は平滑であるが、身込みの部分はやはり強く押さえている。遺存状態も良くないため体部下端の調整は鮮明ではないが、ヘラケズリは行っているよう、手持ちで施したのではないかと思われる。底部はヘラ切り後全面一定方向にヘラケズリを行う。胎土は特徴的で雲母粒並びに長石粒を多く含み、粒径が大きく特に長石粒は最大3mm程度のものを見る。なお、ロクロ回転方向は右である。3は小形の壺で、前述したように底部を抜いている。口縁部はじつに短く、ほぼ水平に開いて端部が直立し、端部だけにヨコナデを施す。胴部は口縁部よりやや大きく、最大径は胴部中位に位置するが、器形としてはあまり丸みを持ったものではない。調整は縦位のヘラケズリを悉くナデで消し、下位には横位のヘラケズリを加える。内面は全面横位のヘラナデで、僅かにヘラ当て痕を残す。底部は内面の調整後に貼り付けられ、接合部に再度ナデを施す。胎土は雲母粒並びに長石粒を非常に多く含み、2と同様粒径もかなり大きい。ただ雲母粒の量は明らかに3のほうが多い。

2 土 坡

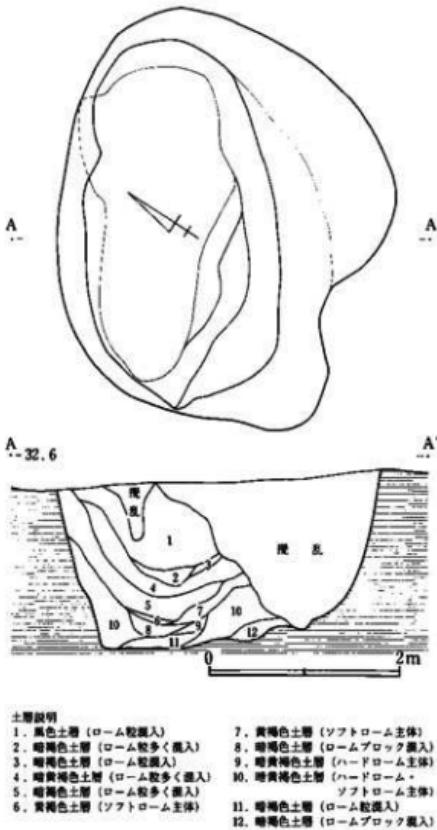
7号土坡（第88図、図版21）

5号住居跡の北側に隣接して構築された土坡である。南側にかなり大きな擾乱を受け本来のプランを復原することはできないが、5号住居跡と重複するほどの規模は有していないようである。長軸方向については擾乱で破壊されることはなく、本来の規模を保っており、確認面で4.1mを測る。短軸は底面で1.4m前後であり、確認面では恐らく3m前後であったと推定できる。長軸の方向はN-40°-Eを指し、底面のプランから橢円形を呈していたと思われる。確認面からの深さは最も深い北側で1.6mを測り、断面図からも分かるように底面は北に向って下っている。

覆土は殆どの土層にローム粒ないしロームブロックが含まれるが、底面に近い位置に堆積する10層がハードロームを主体とし天井構造を持つ土坡であったことが窺われ

る。底面の状況から擾乱を受けた側に開口部が位置し、それを裏付けるように北側は部分的にオーバーハングする箇所がある。天井部の崩落は開口部側から始まり、その時点では土坡内に他の土層の堆積はない。覆土の堆積は天井部が完全に崩落しないうちに開始し、9・11層が流入している。残された天井部もその後すぐに崩落し、それ以降の土層は両方向から流入している。

底面には土坡の性格を特徴付けるような施設はなく、またプランもかなり不整なもので、土層断面には表れていないが、或は改築があったのかもしれない。構築時期については共伴する遺物がなく、具体的な時期を決定できない。ただ、本遺跡では中世の遺物は殆ど見られず、竪穴住居跡に近い時期、即ち8世紀第3四半世紀から第4四半世紀の構築の可能性も否定できない。



第88図 7号土坡実測図

9号土塙（第89図）

調査区西端で検出した土塙で、若干斜面にかかる位置あったと思われるが、現状は北側が削平され遺構の全体形を窺うことはできない。本来は略円形のプランを呈していたよう、現存部での最大長は2.3mを測る。壁のカーブから推定すると直径は3.5m前後であろう。確認面からの深さは最深部で1.1mを測り、底面は皿状で平坦ではない。そうなると土塙の中央はさらに深かつたとも考えられる。覆土は暗褐色を呈する単一の土層で構成されるが、遺構確認面においてソフトローム層との間にあまり大きな違いはなかった。

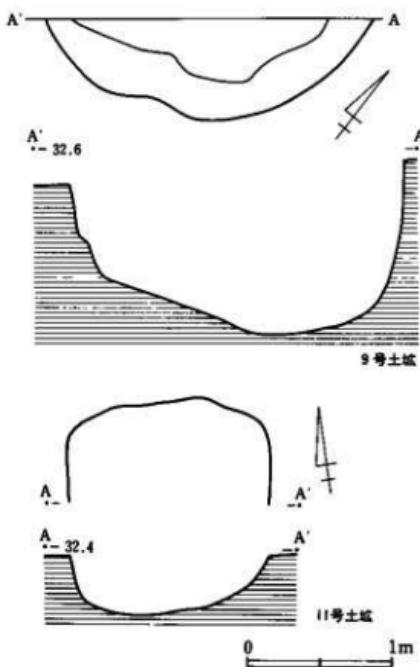
遺物は直接遺構に伴うものではなく、また図示できるほどのものもない。ただ僅かではあるが甕・須恵器壺の破片が含まれており、壺は底部糸切り後全面回転ヘラケズリを施したものである。

11号土塙（第89図）

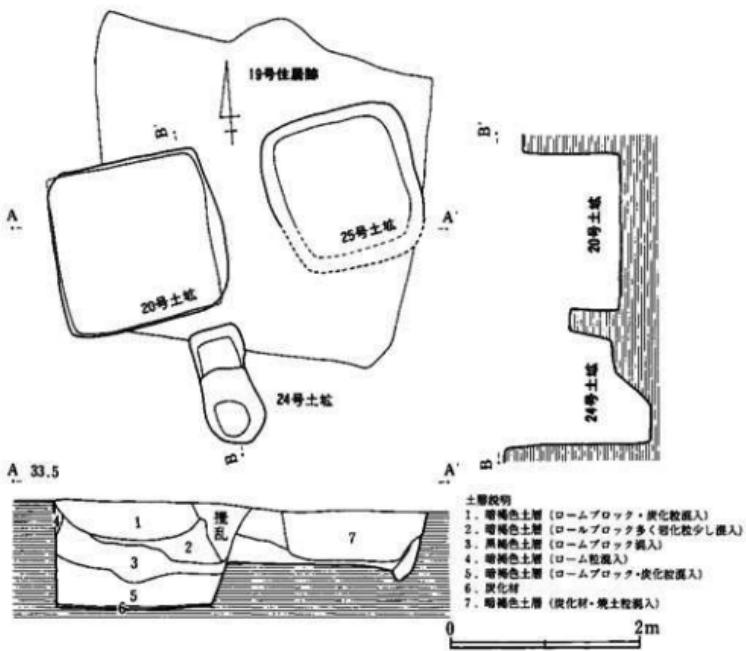
調査区の北端で検出した土塙で、後述する32・34号土塙と近い位置にある。南側は確認トレンチで崩壊してしまったが、遺構確認面においてその存在を確認することはできず、土層断面の観察によって存在を知った。実際調査できた北側半分についても、平面的には全くプランを確認することができなかった。残存部分から推定できる本来のプランは略方形を呈し、軸長は1.4mを測る。確認面からの深さは最深部で40cmを測り、底面は凹凸がありレベル的にも一定ではない。覆土は断面を見れば暗褐色土の粒子を含むことが分るが、前述したようにソフトローム層と肉眼で極端な相違が見られず、単一の土層である。

20号土塙（第90図、図版21）

24・25号土塙とともに19号住居跡と重複している。3基とも19号住居跡より新しい構築で、20・25号土塙は近世の炭焼窯である。規模は1.8m四方で極めて整った正方形のプランを呈している。確認面からの深さは1.1mを測り、各壁は殆ど垂直に立ち上る。なお、北西コーナー及び対角の南東コーナーは若干入り込み、北西コーナーは焼土が堆積している。底面にはほぼ一面



第89図 9・11号土塙実測図



第90図 20・24・25号土塙実測図

に僅かながら炭が残されており、覆土中にも多量の炭を含んでいる。さらに覆土にはロームブロックを多く含み、操業後に埋め戻したのであろう。但し、壁は土器焼成坑のように強い火熱を受けた痕跡はない。

24号土塙(第90図)

19号住居跡の南壁と重複している。規模は $1.3 \times 0.6\text{m}$ を測り、確認面では略方形のプランを呈している。底面は2段に構築され、深い部分は確認面から 1.5m を測り、浅い部分は20号土塙とほぼ同じレベルとなる。特に時期を決定するような遺物は出土していないが、長軸方向が20・25号土塙と一致し、また20号土塙に接するように構築されていることから、或は炭焼窯に伴う施設かもしれない。

25号土塙(第90図)

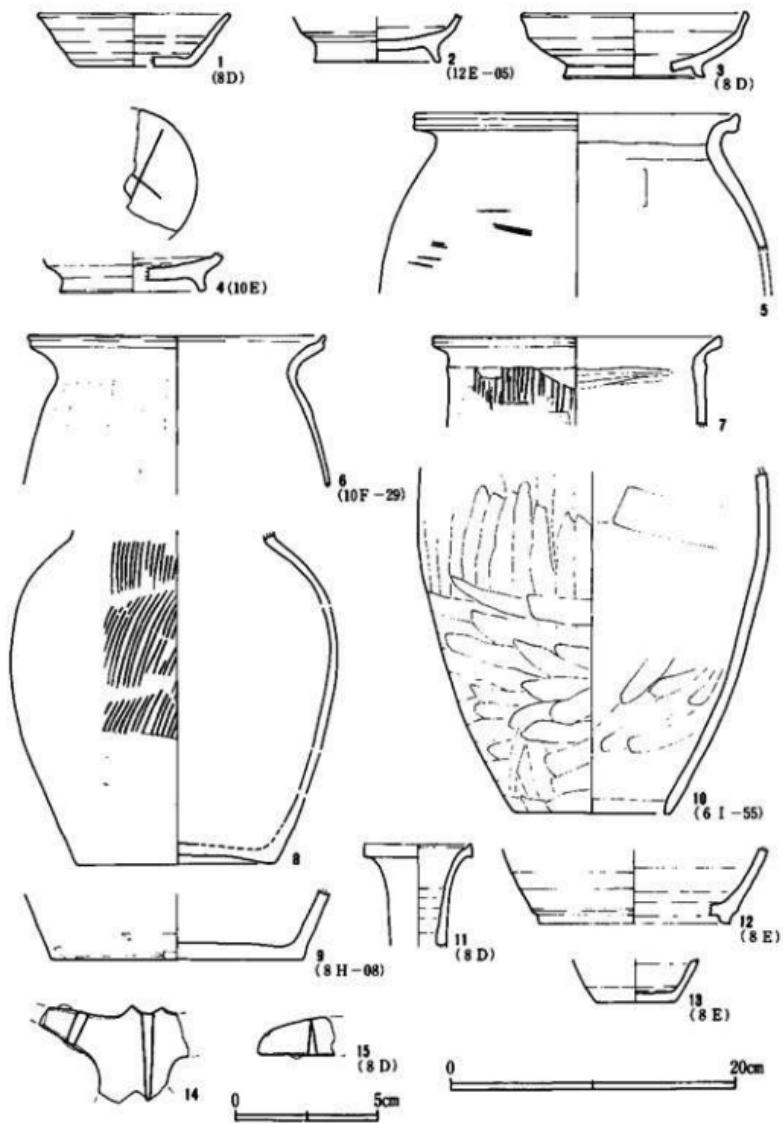
20号土塙とほぼ並行して構築され、同様に炭焼窯である。規模はやや小さく 1.6m 四方であり、壁の立ち上りも20号土塙に比べてやや開く。確認面からの深さは約 50cm を測り、底面一面に薄く炭が堆積している。覆土にも多量の炭が混入し、また焼土も若干含まれる。壁等の状況を見るとあまり操業の跡は覗えない。

3 グリッド出土の遺物

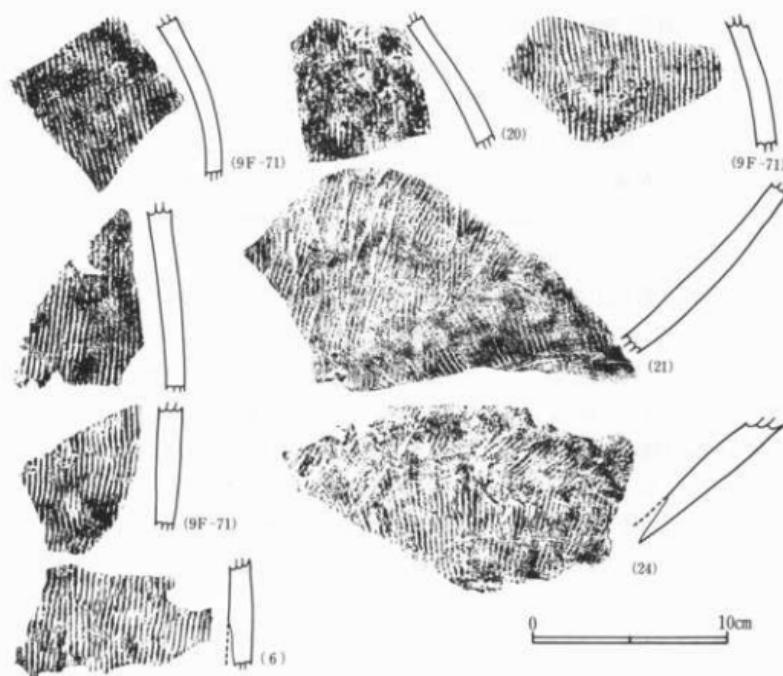
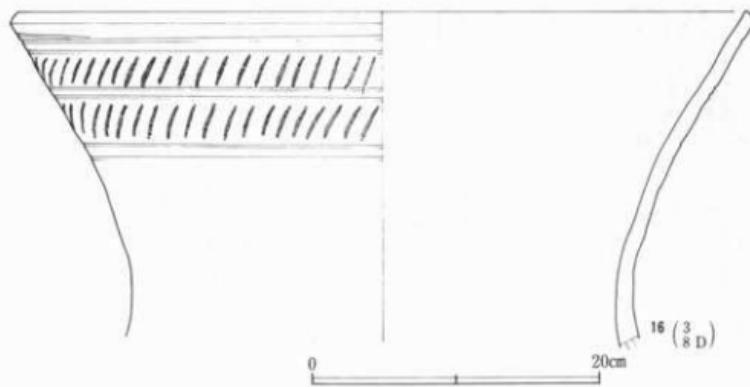
遺構外から若干の遺物が出土しているので紹介しておきたい。これらは遺構外から出土したことによる特別な意味を持たないものが殆どであるが、5や8のようにある程度復原できるものもあり、これらは意図的な廃棄が窺われる。また、第92図のようにあまり接合はしないものの同一個体が攪散している例や、細片だけで図示しなかつたが、同じく須恵器のかなり大きい壺の破片が6Eの斜面にかかって集中して出土した例がある。

土器(第91・92図、図版53)

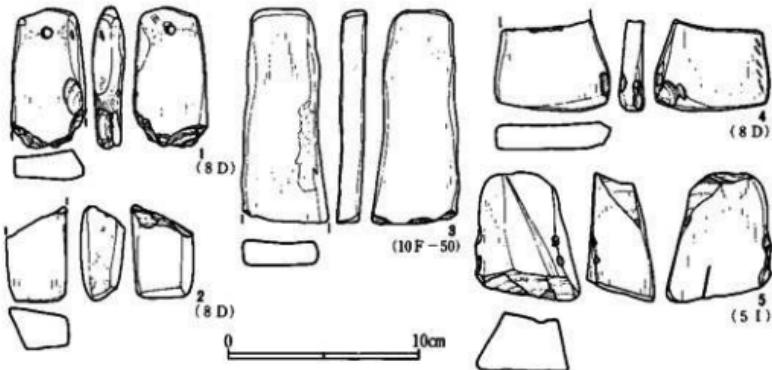
1は須恵器の平底の壺である。体部は直線的に立ち上り、下端に回転ヘラケズリを施すが、底部との境はかなり丸みを帯びる。内外面とも調整痕が比較的明瞭に残され、身込みの部分は強く押えている。体部はヘラ切り後ヘラケズリを行なうが、遺存状態が悪く方向は判別できない。胎土は微細な雲母粒と長石粒が多く含んでいる。2～4は須恵器の高台付壺ないし盤である。2・4は壺となり、2にはやや薄手の高台が付く。いずれも体部の様子は復原できないが、高台からあまり距離を置かず体部が立ち上っている。底部はヘラ切り後全面回転ヘラケズリを行い、高台外側は高台接合時にナデを加える。なお、4は身込みの部分が沈線様に調整され、底面に「X」の線刻がある。3は高台付の盤である。口縁部は短く斜めに外反するもので、口縁部にかかる屈曲も少ない。身はやや高く、体部も一般的な製品と比べて立っている。胎土は砂粒を含むが精緻である。5～9は壺でそれぞれ異った器形、技法を用いる。5は口縁部が短く外反し端部を直立させ、胴部は大きく張るものである。外面はきれいにナデられ、肩部に横位のヘラ当て痕が付く。内面は横位のヘラナデである。胎土はやはり雲母粒・長石粒・石英粒を多量に含むが、粒径はさほど粗くない。6も胴部にナデを施すが、縦位のヘラケズリは明瞭に観察できる。胎土には目立った混和剤は含まれないがかなり粗く、その割りに胴部は非常に薄く仕上られている。8は口縁部を欠損する以外殆ど破片が揃っており、住居跡出土の土器を考えるとやや新しく位置付けられる。酸化焰焼成で、器形としては眺めに外反する口縁部を持つもので、最大径が胴部上位に位置している。調整は外面に叩き目を持ち、胴部下半に横位のヘラケズリを施す。底部は広く9も同様のものである。7は把手ないし底部孔がないと壺か瓶かは判別できない器形である。口縁部は短く横に外反するもので、端部は直立している。最大径は口縁部に持ち、胴部は直線的に底部にいたる。外面に叩き目を持ちかなり上位にまでヘラケズリが行われている。内面は頸部にやや強いヘラナデが施され凹凸が見られるが、胴部は平滑にナデされている。口唇部の状況は調整終了後に逆位に伏せられたことを物語り、或は瓶となるかもしれない。なお、酸化焰焼成である。10は瓶である。本遺跡では1号住居跡で1点出土している他は皆無に近く、本例はグリッド、それも遺構が全く存在しないグリッドから出土したにもかかわらず約1/3が遺存している。調整は外面上半が縦位、下半が横位のヘラケズリを施し、内面は横位のヘラナデである。なお、内面は底部孔の3cm上位から約10cmが器面の荒



第91図 遺物実測図



第92図 遺物実測図



第93図 磁石実測図

れが著しく、調理の際に食物が接した範囲を示している。この部分の容積は約520ccであり、現在で言えば3合弱となる。恐らく焼き上りの容積であろう。胎土は粗く長石粒・石英粒を多量に含んでいる。11・12は須恵器の長頸瓶の破片である。頸部は体部との接合部で剝がれ、7cmの長さがある。口縁部は滑らかに外反し、端部は断面三角形を呈して直立している。器面には全体に黒色の釉が薄くかかり、胎土は近県の製品には見られないほど精緻である。底部は断面方形の高台が付き、接合部の屈曲はあまり強くない。ロクロ回転方向は左である。13も須恵器で、小壺の底部であろう。胴下端に回転ヘラケズリを施し、底部はヘラ切り後やはり回転ヘラケズリを行う。第92図は須恵器の非常に大きな壺である。総て同一の個体で、口縁部は3号住居跡とその周辺から出土し、胴部は大きく離れて9Fで出土している。口径は50cmを超え、器高は1m近いものと考えられる。器面は大形のため凹凸も目立つが、口縁部はほぼ直線的に開き、端部は外側に面を持つ。上半には沈線区画の刷毛状工具の刺突文を2段に巡らせ、工具は16齒である。胴部は殆ど接合せず、器形を復原することはできないが丸底を呈するようである。外面は全面平行叩き目で覆われ、底部近くから斜位に行われる部分が見られる。内面はナデで当て板痕は全く観察できず、新しい様相が窺える。胎土は一見精緻であるが、粒の大きい長石粒・石英粒を含む。なお、内外面とも自然釉がかかり、厚い部分は淡緑色、薄い部分は黒色からセピア色を呈する。

鉄製品は2点が図示できた。14は火打具、15は刀子の切先である。

第94図は磁石を一括した。1だけが下げ磁石である。石材は1が粘板岩、2は凝灰岩、3～5は砂岩となる。なお、5には斜位に溝状の研磨痕がある。

第3表 歴史時代土器観察表

1号住居跡

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径					
1	甕	21.8	—	—	内面ヨコナデ後ヘラナ デ	長石 石英 粒粒	良 好	橙 色	
2	甕	10.0	—	—	内外面とも接合痕残す	砂 粒 多い 長石 石英 粒粒	やや不良	黒 色	
3	甕	11.4	—	—	接合痕残す 底部全面ヘラケズリ	長石 粒多い	やや不良	暗褐 色	
4	甕	17.9	(20)	9.0	外面全面ヘラケズリ	石英 粒	良 好	赤褐 色	
5	甕	13.1	3.5	8.1	ヘラ切り後一定方向へ ラケズリ	微細な雲母粒	不 良	灰褐 色	

2号住居跡

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径					
1	甕	13.7	3.7	8.5	ヘラ切り後一定方向へ ラケズリ	堅 砂	良 好	黒灰 色	
2	ミニチュア	—	—	6.2	接合痕残す	砂 長石 粒粒	良 好	黄褐 色	
3	甕	—	—	6.8	底部全面ヘラケズリ	堅 砂	良 好	赤褐 色	
4	甕	—	—	18.0	縦位ヘラミガキ	長石 石英 粒粒	良 好	明褐 色	

3号住居跡

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径					
1	甕	15.1	3.5	—	体部ヘラケズリ	長石 粒	良 好	掩 色	
2	甕	13.1	4.6	9.8	内面粗雑なミガキ 底部全面ヘラケズリ	長石 粒	不 良	赤褐 色	
3	甕	12.2	3.9	—	内面ヘラミガキ	砂 粒	良 好	褐 色	線刻アリ
4	甕	11.3	4.0	7.2	静止糸切り	微細な長石粒	良 好	外面黑色	赤色塗彩
5	甕	13.8	4.4	8.0	ヘラ切り後全面回転ヘ ラケズリ	長石 粒粒	不 良	灰褐 色	
6	甕	14.5	3.8	8.7	ヘラ切り後周縁回転ヘ ラケズリ	長石 粒粒	不 良	黄褐 色	
7	高台甕	16.7	(6.6)	(10.7)	体部下端から底部回転 ヘラケズリ	微細な長石粒	良 好	灰 色	
8	甕	—	—	3.8	下部横位ヘラケズリ	砂長石 石英 粒粒	遺存悪い	暗褐 色	
9	甕	14.9	—	—	縦位ヘラケズリ	砂 長石 粒粒	良 好	赤褐 色	
10	甕	13.3	—	—	ヘラケズリをナデで消 す	砂 長石 粒粒	良 好	赤褐 色	
11	甕	16.4	24.0	7.9	ヘラケズリ後ナデ	長石 粒粒	良 好	明褐 色	
12	甕	—	—	—	ヘラケズリ後ナデ	砂 長石 粒粒	良 好	暗褐 色	
13	甕	—	—	—	縦位ヘラケズリ・下位に 横位ヘラケズリ	砂 精緻な長石粒	やや不良	赤褐 色	
14	長頸瓶	—	—	14.6	高台接合後再度ロクロ ナデ	砂 精緻な長石粒	良 好	灰褐 色	

6号住居跡

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径					
1	壺／皿	—	—	6.0	底部回転ヘラケズリ	長石 雲母 粒粒	やや不良	暗灰色	
2	高台壺	9.9	4.5	8.8	外面及び体部内面ヘラミガキ	微細な雲母粒	良好	赤褐色	
3	甕	22.8	—	—	腹部下半ヘラミガキ	雲母 長石 粒粒	良好	褐色	

10号住居跡

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径					
1	壺蓋	—	—	—		長石粒	良好	青灰色	
2	壺蓋	16.4	—	—		長石粒	良好	青灰色	
3	壺蓋	—	—	—		雲母粒	不良	灰白色	
4	壺	14.8	—	—	体部ヘラケズリなし	石英粒	不良	灰白色	
5	甕	17.7	—	—		長石粒多い	やや不良	暗褐色	
6	甕	—	—	—	腹部下位ヘラミガキ	雲母 石英 粒粒	やや不良	暗褐色	

15号住居跡

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径					
1	壺	12.9	4.0	7.3	ヘラ切り後全面一定方向のヘラケズリ	雲母粒	不良	灰褐色	線刻あり

17号住居跡

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径					
1	壺	14.6	3.9	—	体部ヘラケズリ、底部はナデで削す	長石粒多い	良好	暗赤褐色	
2	鉢	13.1	—	—	ロクロナデ	僅か 長石 粒	良好	灰黑色	
3	甕	—	—	5.9		石英粒多い	良好	暗褐色	
4	甕	13.5	13.0	6.6	腹部はヘラケズリ後ナデ	長石粒多い	良好	赤褐色	

19号住居跡

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径					
1	甕	20.0	—	—	胴部縦位ヘラケズリ後ナデ	砂粒	良好	暗褐色	
2	甕	24.0	—	—	内外面とも平滑なナデ	雲母英粒	良好	明褐色	
3	甕	25.6	—	—	内外面とも横位ヘラナデ	雲母英粒	やや不良	暗褐色	
4	甕	9.7	—	—	胴部縦位ヘラケズリ	長石粒	良好	暗褐色	
5	坏	13.3	—	—	体部下端手持ヘラケズリ	微細な長石粒	良好	褐色	赤影
6	坏蓋	15.3	3.2	—	天井部回転ヘラケズリ	大粒の石英粒	良好	灰白色	
7	長頸瓶	6.4	—	—		精緻	良好	灰褐色	

21号住居跡

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径					
1	甕	—	—	9.6	胴部下半ヘラミガキ	石英粒多い	良好	暗褐色	
2	甕	14.5	16.8	6.4	ヘラケズリ後ナデ	長石粒	良好	暗褐色	
3	甕	12.4	—	—	ヘラケズリ後ナデ	長石粒	良好	黄褐色	
4	甕	11.5	—	—	ヘラケズリ後ナデ	長石英粒	やや不良	暗褐色	
5	坏蓋	17.4	4.1	—		微長細石粒	良好	灰白色	
6	坏	12.6	4.1	6.6	体部手持ヘラケズリ	長石母粒	良好	暗褐色	「小刀」の墨書き
7	高台坏	14.3	5.0	9.0		長石英母粒	良好	褐色	

35号住居跡

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径					
1	坏	12.9	3.0	—	体部ヘラケズリ後僅かにヘラミガキ	石英粒	良好	褐色	
2	坏	13.3	3.8	8.4	ヘラ切り機全面一定方向ヘラケズリ	大粒の長石粒 石英母粒	不良	赤褐色	
3	甕	14.7	17.6	7.7		大粒の長石粒 石英母粒	やや不良	灰褐色	

グリッド

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径					
1	坏	12.0	3.4	7.1	底部一定方向へラケズリ	微細な長石粒	やや不良	黒灰色	
2	高台坏	—	—	8.8	底部回転へラケズリ	微細な長石粒	やや不良	灰白色	
3	高台盤	15.6	4.5	9.6	底部回転へラケズリ		良 好	灰 色	
4	高台坏	—	—	10.2	底部回転へラケズリ	長 石 粒	やや不良	灰 白 色	「×」の線刻
5	甕	22.4	—	—	外面ナデ	長 石 粒 母 粒	良 好	灰褐 色	
6	甕	20.6	—	—	縦位へラケズリ	砂 粒	良 好	黑褐 色	
7	甕／瓶	20.0	—	—	平行叩き目	赤色スコリア	良 好	乳 橙 色	
8	甕	—	—	13.8	平行叩き目	長 石 粒	良 好	乳 橙 色	
9	甕	—	—	17.3		赤色スコリア	やや不良	赤褐 色	
10	瓶	—	—	10.9		長 石 英 粒	不 良	赤 色	
11	長颈瓶	7.7	—	—		精 織	良 好	黑 色	
12	長颈瓶	—	—	13.4		砂 粒	良 好	灰 色	
13	小甕	—	—	5.6	底部回転へラケズリ	長 石 粒	やや不良	灰白 色	
16	甕		—	—		石英石 粒	良 好		

第3章 調査の成果 — 繩文時代の土器 —

1 土器廃棄の場として

本遺跡では面積的に狭いながら比較的良好な包含層の調査を行うことができた。これらは土器廃棄の場として捉えられ、所謂「土器塚」のごとき集積は認められなかったものの、繩文時代各期にわたる土器が含まれ、とくに後期初頭を中心とした資料は注目できる。出土状況からは層位的に分離できるものではなかったが、グリッドから出土した各期の土器の分布について概観してみたい。

1群土器 井草2式に比定できるもので、5I・10Hグリッドで出土している。このうち5Iグリッドで出土した土器を第45図に示したが、5Iグリッドで出土した土器はほとんどが同一個体に帰属すると考えられる。10Hグリッドで出土した破片を含めても、帰属する個体はごく少ないものである。1群土器については放置・置き忘れによるものと思え、意識的に廃棄されたものではないだろう。

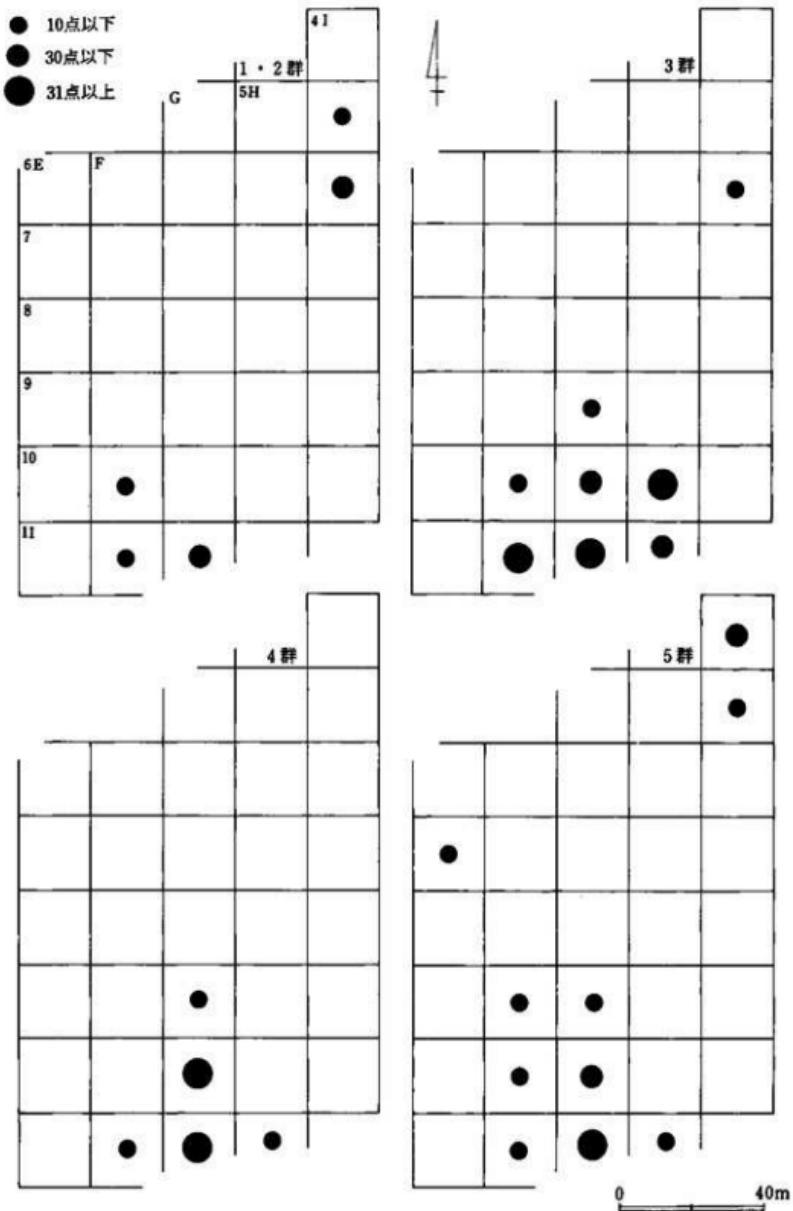
2群土器 比較的太い直線的な沈線文を特徴とするもので、破片総数は32点を数え、南側に支谷を臨む11Gグリッドでややまとまって出土している。他のグリッドでは5点以下と極端に少なく、帰属する個体数も1群土器と比較して明らかに多いが、それでも20個体までは考えられない。

3群土器 条痕文系の土器を一括してある。本遺跡でははじめて生業に密接な関わりを持つ炉穴という構築物が出現し、この台地を積極的に利用したことを物語っている。それ以前も陥り穴の存在はあるが、機能的にこれらを同一視できない。破片総数も急激に増加し200点近いもので、帰属する個体の同定も単純ではない。分布の中心はやはり調査区南側にあるが、該期の最大の炉穴である。12号炉穴の周囲はむしろ少なく、それより若干はなれた11F・11G・10Hグリッドで多く土器が出土している。なお、炉穴からは數個体分の土器が出土しており、破片も多いことから、炉穴廃絶後に廃棄の場として利用したと考えられる。

4群土器 黒浜式土器を一括したもので、該期の遺構は存在しない。破片総数は157点で、やはり調査区南側に集中している。具体的には11Gグリッドが卓越し、その状況は3群土器となんら変わることはない。個体総数は復原できないが、第48図の(1~11)・(12~17)の2個体が占める割合は高く、あまり多い個体数は期待できない。

5群土器 前期後半の土器を一括し、諸磯a・b、浮島I・II・IIIの各型式が含まれる。あるいは13号住居跡が該期の構築かと思えるが、13号住居跡周囲では該期の土器がほとんど出土していない。破片総数は112点で、分布の中心はやはり10G・11Gグリッドにある。また、やや距離をおいて台地北端の4Iグリッドでも目立った存在である。

6群土器 前期末から中期初頭にかけての土器であり、破片総数も数えるほどしかない。個体



第94図 時期別土器の出土量

総数も2個体で、7Eグリッドで1点、他は11Fグリッドから出土したものである。

7～9群土器 中期末から後期初頭にかけての土器であるが、細分した場合に不連続の部分もある。本遺跡では主体的な存在で、90%近い破片がこの時期の所産である。土器は遺跡全体に拡散しているが、その中でも10Fグリッドが超越しており、全体の約半数がこのグリッドから出土している。

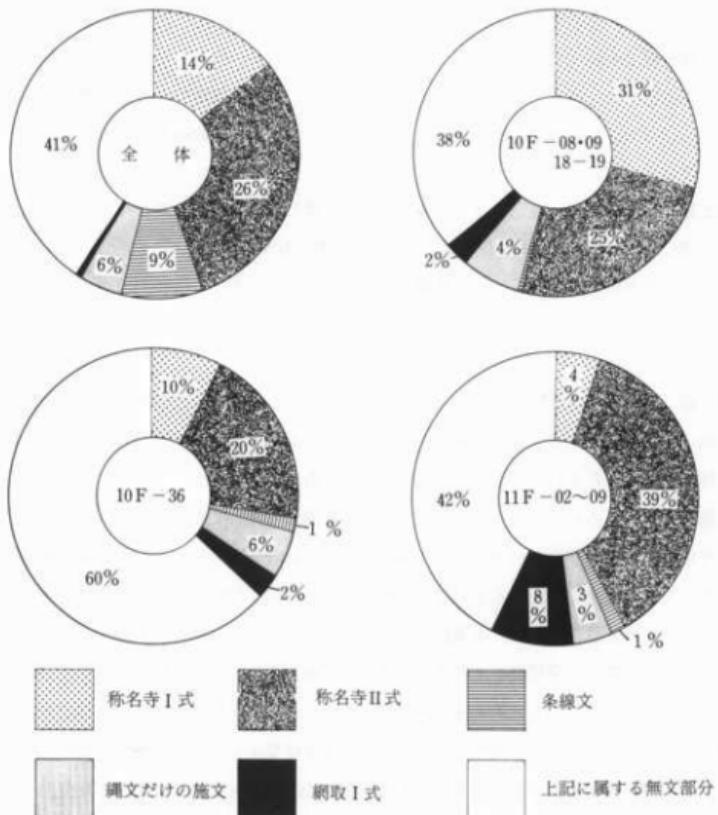
10群土器 加曾利B式に比定できるもので、9群土器と連続するものではない。破片総数は約300点を数え、ほぼ遺跡全面に広がっている。その中でもやはり10F・11Fグリッドが卓越しこの部分から約半数が出土している。帰属する個体数もかなり多く、第66図に示したように完形にちかい土器も含まれている。竪穴住居跡は発見できなかったが、近くに居住域があるのではないかだろうか。

11群土器 晩期の土器を一括してある。第68図には出土したほとんどの土器片を掲載したが、1を除いてほとんどが同一個体である。破片の分布は5I・6Iグリッドを中心となるが、同一個体でありながら8Gグリッドで出土したものもある。

土器の廃棄、あるいはその行為について既に多く論じられ「吹上パターン」・「平和台パターン」をはじめとする種々のパターンが提唱された。これらのパターンの設定は遺物・廃棄と両者を結ぶ人間の行為の関係の追求によって展開し、日常的な行動様式の中に土器廃棄という行為を復原しようと試みている。本遺跡の状況は時期によって量的相違はあるものの、共通して竪穴住居以外の特定な平坦地を土器廃棄の場として選定している。遺物の量的な違いは集団の在り方の差を反映していると思われるが、それにもかかわらず南側に小支谷を臨む台地最高所が共通して土器廃棄の場として選択されていたことは注目できる。また同時に、調査区北端の5Iグリッドに比較的遺物が集中する時期もあるが、この部分も半島状に突出した台地先端の最高所であることも忘れてはならない。それでは8群土器を例にとり、少し細かく観察してみたい。なお、本遺跡には該期の竪穴住居は構築されておらず、遺物の量からみても近隣の地に居住域があったものと考えられる。

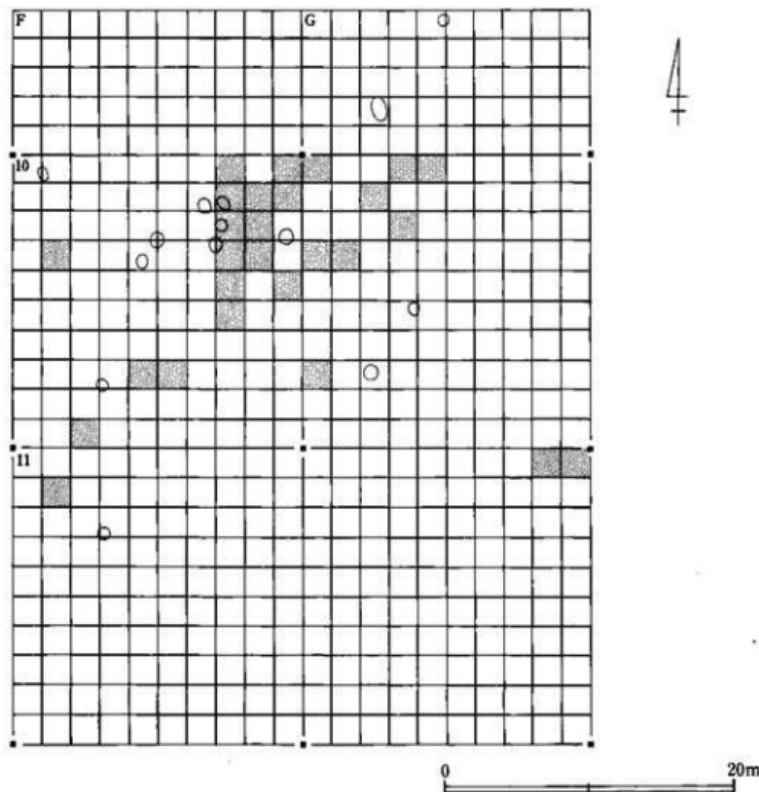
8群土器は施文の特徴から3類に分類した。從来の編年観を参照し、これらが称名寺I式・称名寺II式とそこに並行する土器であることは明らかである。これらを2mメッシュのグリッド単位の出土量を第97図以下に単純に破片数で示した。

8群1類としたものは充填縄文が顕著なもので、称名寺I式の範疇に納まるものである。包含層から出土した土器では完形ないし完形に近い土器は皆無であり、同一個体と認められた破片もあり接合しない。意匠文の様相から称名寺Ia・Ib式に比定できるものではなく、すべてIc式に納まるものである。分布の状態はかなり広範囲に散逸しているが、10G基準杭西側の10F-08・09・18・19のグリッドに集中する傾向があり、土器廃棄が人為的目的の下に行われたことを物語っている。この範囲は先行する7群土器の分布範囲(第96図)と重なり、量的に大きな



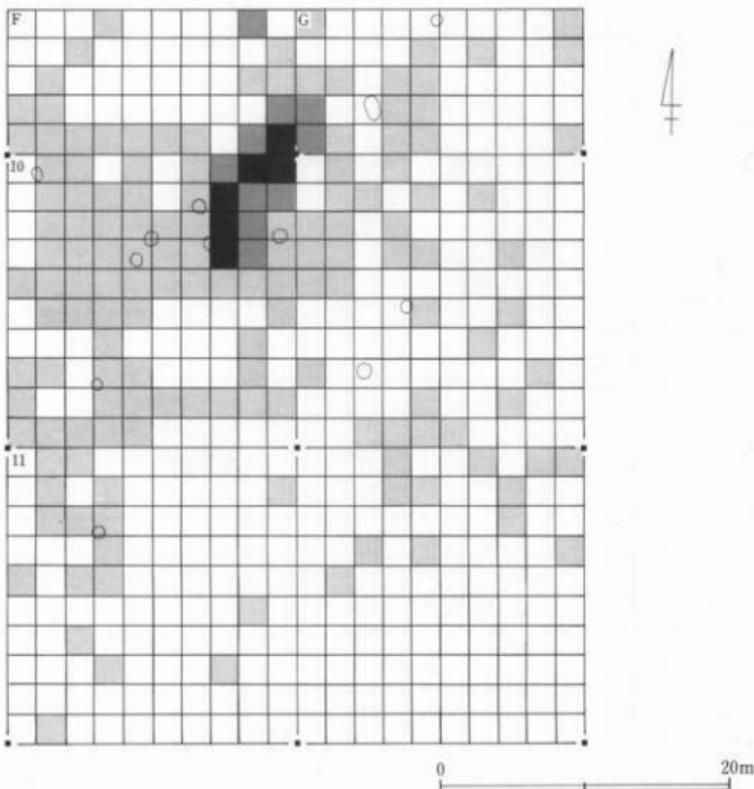
第95図 土器片の型式別比率

違いはあるものの、土器廃棄の行動様式が共通しているようである。実際には土器型式上両者に空白期間があり、この空白をどのように解釈すべきか、導きだすだけの資料が得られていない。また、7群土器は絶対的に個体数が少ないながらも、残された個体は比較的多く接合している。この点8群1類土器と様相に違いがあり、土器廃棄に至る過程の相違を表している。8群1類土器が8群土器全体に占める割合は14%とそれほど高いものではないが、とくに集中する10F-08・09・18・19グリッドでは8群2類土器を上回っている。分布範囲は略南北方向に若干長く、台地最高所でセンターと平行するものである。個体別資料の分散をみるとその状況はより具体的で、個体01・07・09など多くの個体が同様の広がりを示している。中には個体05



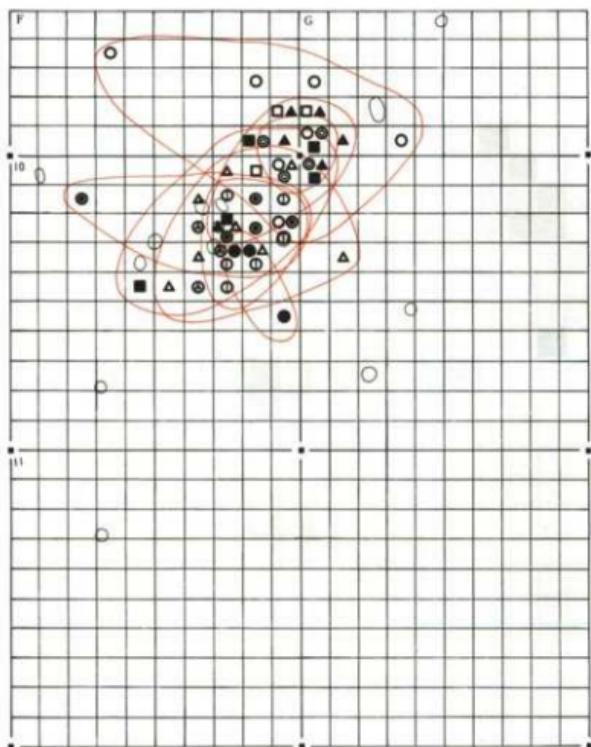
第96図 7群土器出土範囲図

・08のように略東西方向に散逸するものもあるが、傾向としては略南北方向を考えてよい。8群2類土器は充填繩文に代わり列点文が特徴的であり、称名寺II式と捉えられている土器である。称名寺II式の細分案が提出されている現在、これらを一括して扱うのも問題が残ると思え、本遺跡の状況でも意匠文の表現に違いが存在することは明白である。しかし、これらは継続的な段階差を示す程度のものであり、本質的に称名寺II式なのである。8群2類土器が8群土器全体に占める割合は26%で、無文の破片が半数近くであることを考えれば、その割合はかなり高かったものと考えられる。第55図には2個体の土器を掲載したが、これらは廃棄時にも未だ完形に近かったもので、8群1類土器には見られなかった現象である。その他の多くの土器は同一個体として設定できたものも多いが、ほとんど接合せず、8群1類土器の状況と大



第97図 8群1類土器出土範囲図

きな違いはないものである。分布の中心は10F-07~09・17~19グリッドと8群1類土器と重なる範囲に集中し、基本的な行動様式にも大きな違いはないようである。しかしながら、10F-31・67・80グリッドなどの離れた地点にも若干土器の多い場所があり、土器廃棄の範囲が拡大しているようである。土器の散逸の様子はやはり略南北方向で、全く地形と同じ方向性を有している。個体別資料の分布図をみるとその状況はより具体的に把握することができ、1類と比較して同一個体資料の散逸が大きく、方向も地形にさらに近くなる。これに対して第101図に示した個体別資料は時期的に8群2類土器と併行するものと考えられるが、その範囲はさらに拡大し、個体1E・20・24のように散逸方向が8群2類土器で一般的であった方向と90°異なるものも多く見られる。また、個体1Aが個体0Aと同グリッドから出土していることも偶然とは思



○ 個体05



□ 個体06



● 個体08



△ 個体07



■ 個体09



○ 個体01



▲ 個体02



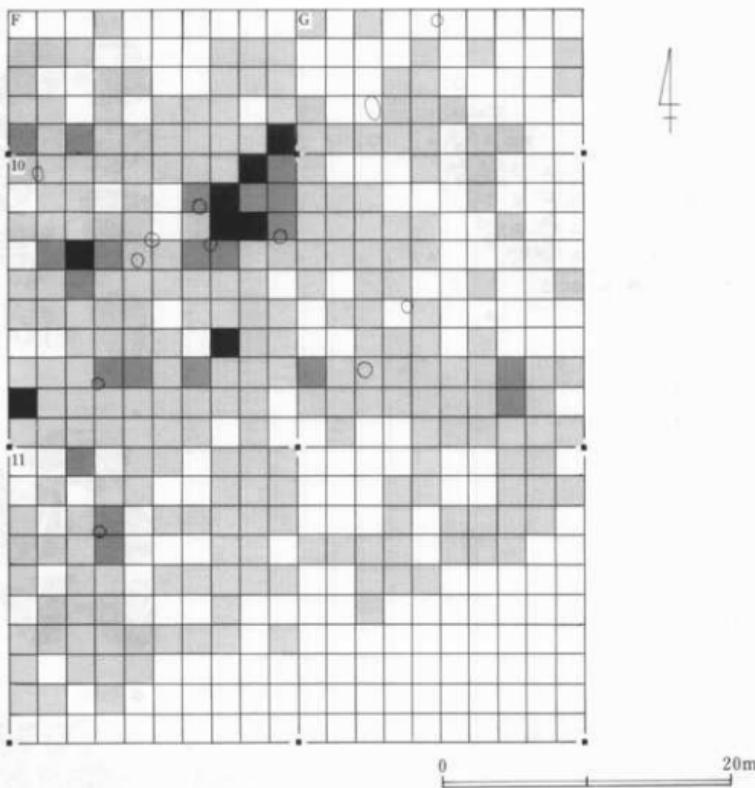
● 個体03



● 個体04



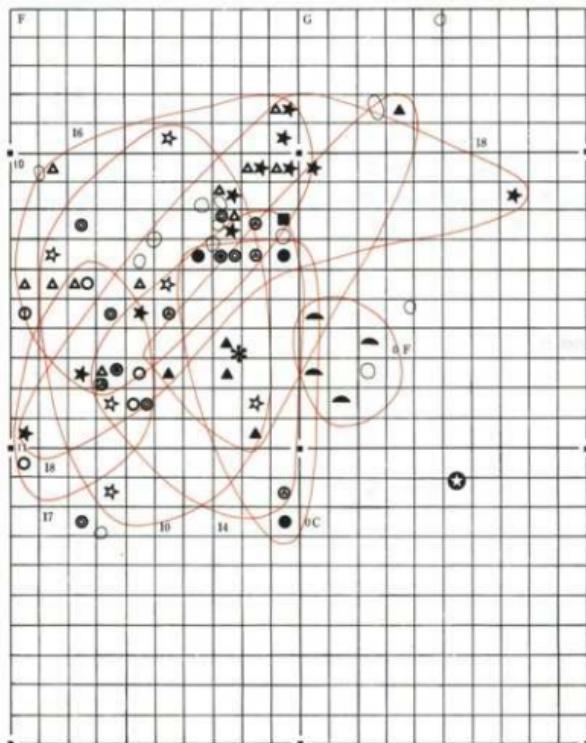
第98図 8群1類土器個体資料出土位置



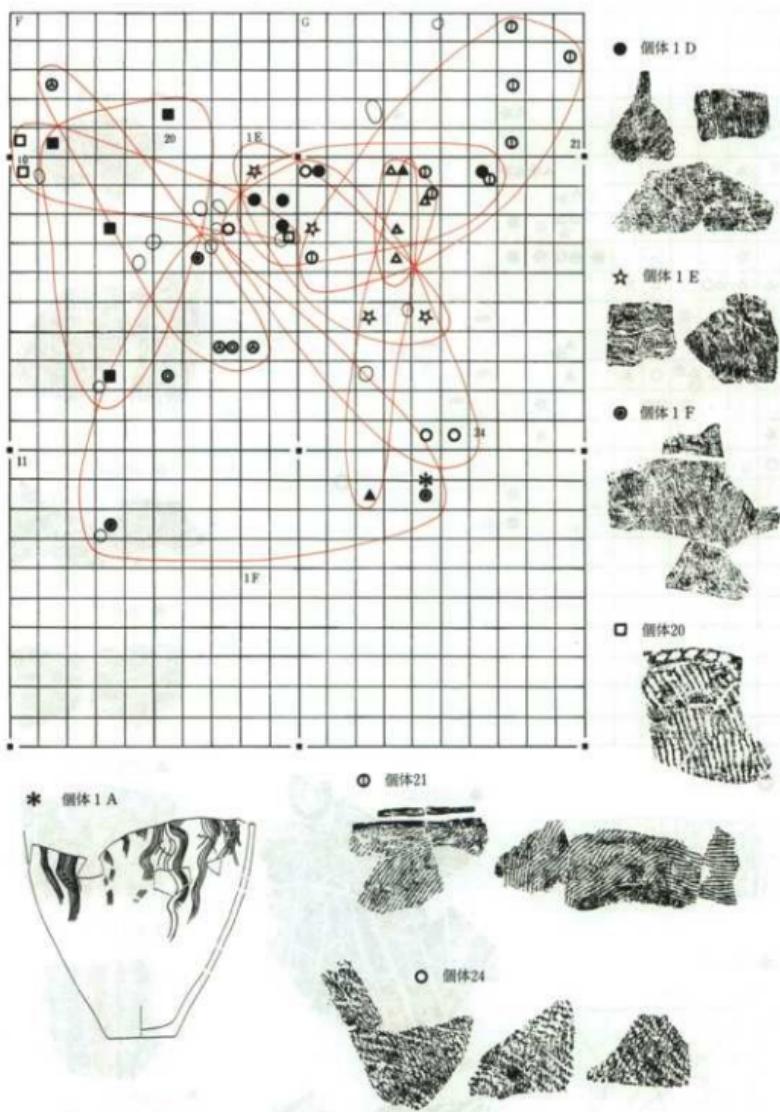
第99図 8群2類土器出土範囲図

えない。この両者の分布範囲は後続する9群土器（堀之内I式土器）の分布範囲と重ならず、むしろ9群土器は8群土器がとくに集中する地点を避けており、8群土器に見られるような集中地点がない。廃棄された遺物が原位置を保っているとは思えないが、8群土器廃棄後に後述する土塹が構築されており、あるいは9群土器廃棄に際して土塹を避けたものかもしれない。この間にも土器廃棄の意識に変化があったものと思われる。さらに、9群土器は8群土器と比較して量的に激減し、8群土器の延長線上に9群土器が廃棄されたのではないようである。

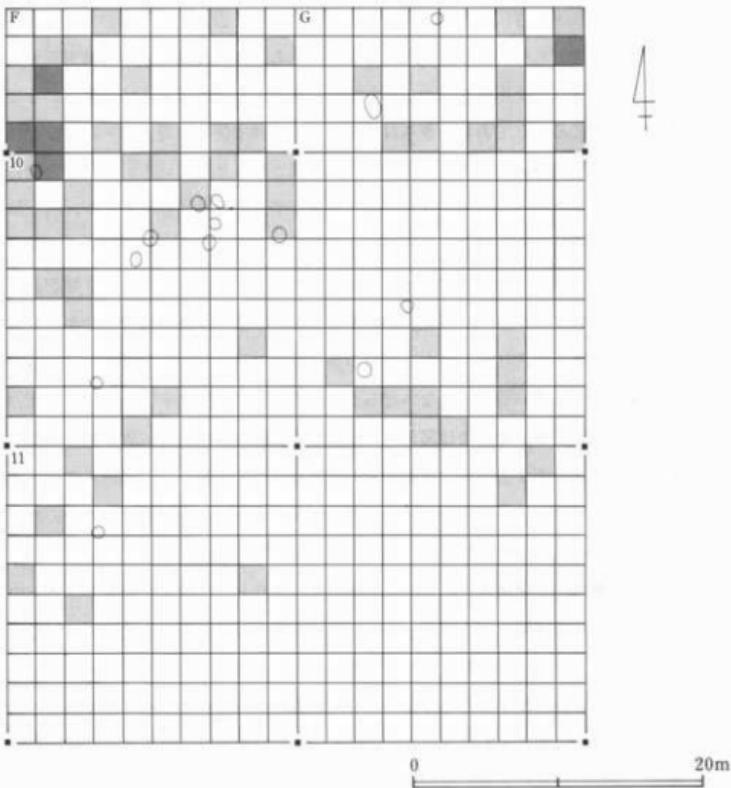
以上のことを簡単に整理すると、(1)本遺跡では台地最高所に土器廃棄を行っている。集落を構成する各々の機能が把握できていない状況では、別に土器廃棄の場が存在することも考えられるが、台地最高所というのは一般的な在り方ではない。この限りではないが、従来平和台パターンとして紹介されている遺跡の状況は台地斜面や台地上の凹地に集中的に廃棄する例が



第100図 8群2類土器個体資料出土位置



第101図 8群3類・9群土器個体資料出土位置



第102図 9群土器出土範囲図

多い。長野県扇平遺跡や茨城県沼尾原遺跡のように廃棄された土器があまり接合しない遺跡も多いのではあるが、扇平遺跡は浅い谷に廃棄の場が形成され、廃棄時において相当の散逸があった可能性がある。沼尾原遺跡では地点貝塚を伴い、また竪穴住居跡も構築されている。ただ報文ではグリッド出土土器として扱われ、具体的な出土状況の提示がなく、これらの遺物が目的をもった廃棄にあたるかどうか判然としない。(2)土器廃棄の場が主に形成された時期は称名寺I式から称名寺II式にかけてである。7群以前の土器は炉穴に伴う3群土器、個体数が極端に少ない1・6群土器を除くと分布範囲が8群土器とほぼ重なっている。(3)完形ないし完形に近い土器は皆無に近く、個体資料の分散が略南北方向を主体としながらも略東西方向への広がりもあることから、後世の大きな擾乱を考えるよりも廃棄時に既に破片となっていたものがほとんどであろう。(4)また、同一個体においても20m以上離れた地点から出土している場

合があり、廃棄時にわざわざ広範囲に散布した可能性がすべて否定できるものではないが、むしろ二次的な廃棄の場として捉えるのが妥当のようである。二次廃棄とは中野修秀氏が指摘するように、一次廃棄された不用品を決められた場所へ捨て去る行為、あるいは散らかっている前住者の不用品を捨てることである。さらに中野氏は、屋内で使用した土器・石器などは破損後住居周囲へ一次廃棄され、その後一定の捨て場へ廃棄されるとしている。本遺跡の場合も上記の(3)・(4)の状況からこのようなプロセスを想定することは可能であるが、同一個体の破片があまりにも散逸し、また接合するものが少ないと、廃棄の様子があまり単純だったとは思えない。同一個体の散逸の状況は1・2・3類ともそれぞれ異なり、3類が最も散逸している。1類についても比較的狭い範囲に納まるものの、ほとんどが接合しなかった点は共通している。同一個体の散逸状況の拡大は廃棄の多次元化を意味し、この台地上に居住域がないこととも密接に関係しているのではないだろうか。中野氏が指摘するように、住居周囲への一次廃棄を認めたとしても、そこには部分的に破損した土器がそのまま放置され、廃棄の場への二次廃棄でも、ほぼそのままの形で移動するのではないだろうか。この台地上に居住域がないことを考えれば、居住周囲→集落内の特定な場→廃棄の場という廃棄のプロセスの想定も可能である。しかし、居住域が確定できない状態では推論の域を出ないものである。

石器についても集落内で使用されたものは、破損後不用品として廃棄の対象となるものである。居沢尾根遺跡・新山遺跡でも土器とともに石器が廃棄されている。本遺跡では石器の出土量が相対的に少なく、使用時期を限定することはできないが、その中でも磨石・石皿類の出土が比較的多い。石鎌を同一視することは避けても、磨製石斧を含めてすべてが欠損品であり、10F・10Gグリッドに土器とともに廃棄されている。磨石・石皿は外的生産性を持たないものであり、住居と密接な関係がある石器であり、土器とともに廃棄されることに大きな問題はない。ただ、8群土器がほとんど出土していない5Iグリッドでも10F・10Gグリッドと同程度出土している。

2 土塹と土器廃棄

土器廃棄の場と重なって14基の土塹が構築されている。土塹の規模・形態に大きな隔たりはなく、すべてが径1m前後の円形を呈し、特定の意識に基づいて構築されたようである。この土塹内からも8群土器が出土し、土器廃棄と遠からぬ時期の構築であることは明らかである。ほとんどの土塹は意識的な埋め戻し作業によって機能を全うし、もしくは機能を開始し、遺物と埋め戻し作業の関わり方の相違から遺物も異なった意味をもっている。前節で述べたように9群土器がこれらの土塹を意識的に廃棄の場から除外したのであれば、土塹としての機能は埋め戻し後も継承していたことになる。遺物の状態は概ね次のような状況を考えることができる

* 中野修秀「土器捨て場考(1)」『日本考古学研究所集報VI』1984 日本考古学研究所

(1) 埋め戻し作業の途中で完形の土器を埋納するもので、38号土塗出土の土器は完形であった可能性がある。もし完形でなかったのであれば、次の(2)に該当することとなる。1以外にも破片は相当量含まれており、埋め戻し作業中の混入と意識的な埋納を区別することはできなかった。第27図に示した土器は非常に大形で、日常の生活に必要不可欠となるようものではなく、むしろ特殊な用途を意識して成作されたものと思われる。8号土塗出土の1も法量として同程度の土器であるが、 $\frac{1}{2}$ 以上を欠損しておりここに該当しない。

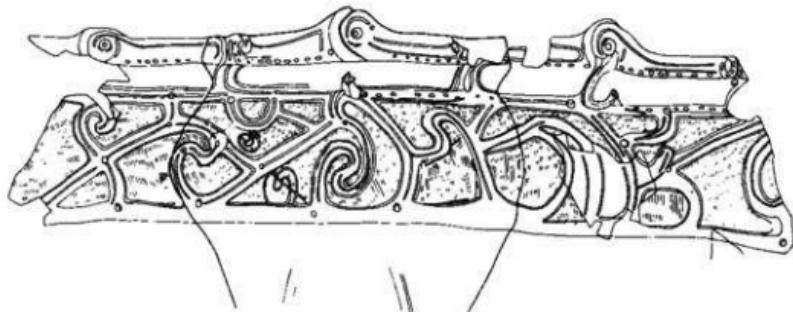
(2) 埋め戻し作業の途中で破損して使用に供されなくなった土器を埋納するもので、8・28・40・41・48・52号土塗が該当する。ほとんどが $\frac{1}{2}$ 以上を欠損しており、出土状況からもこれらが完形であったとは考えられない。なお、先の38号土塗を含め、40号土塗は埋め戻し作業がやや進行した段階で、これらの遺物を集中的に埋納している点は注意が必要である。

(3) 埋め戻し作業の途中で既に周囲に廃棄してあった遺物が混入したと考えられるもので、18・30・42・44・45・47・51号土塗が該当する。出土した遺物は意識的に埋納されたものではなく、遺物と土塗の関係を積極的に語ることはできない。

以上の様相を呈するが、(2)で掲げた40号土塗では土器とともに同一個体から作成された3点の土器片錠が出土している。土器片錠自体は欠損しているものが2点含まれ、また出土状況も底面に置かれたものではなく、多くの土器と混在していた。

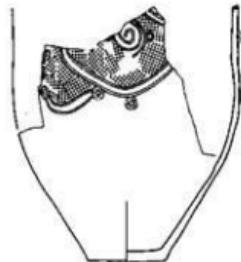
ここで示した(1)・(2)の土塗から出土した土器は破片も含め8群土器が含まれるもの、38・40・41・48・52号土塗からは、土器廃棄の場ではほとんど見られなかった様相をもつ土器が出土している。以下個別に検討を加えてみたい。

38号土塗 非常に大形の土器で、器形としては称名寺II式土器のカテゴリーを脱したものである。器面は口縁部・頸部・胴部文様帯・胴部下半の4帯から構成され、同様の器面構成は堀之内I式土器の中に見ることができる。口縁部は4単位でC字状の隆帯を配置し、なすな原遺跡出土土器と酷似する。胴部文様帯は上下を区画して開放せず、低平な隆帯を伴った3本単位の沈線によって大きな意匠文を描く。また、意匠文内には刺突文が充填され、文様施行行程も相



変わらず沈線→刺突文というものである。意匠文自体は大形化し、同時に空間部分も拡大するという矛盾が起こり、描線と意匠文の逆転を導いている。なすな原例も3本単位の沈線・円形貼付文を用い、意匠文に古い様相を残すものの、やはり同様の状況を窺うことができる。廻り地A遺跡SI094出土の土器も3本単位の沈線で意匠文を表出するが、完全に描線が文様表出の主体となり、地文部分は意匠文の拡大の結果キャンバスとなっている。この時点での文様施文行程は縄文→沈線の順序に転換している。3本単位の沈線は円形貼付文とともに網取I式土器にみることができ、ここに示したような土器を介して壠之内I式土器へ受け継がれていくのではないだろうか。

40号土塚 口縁部を欠損するため器面全体の構成は分からぬが、意匠文の展開は権現原遺跡出土土器や高井東遺跡P8出土土器と類似する。権現原遺跡例は口縁部に無文帯・C字状隆帯を配し、網取I式土器の強い影響を窺うことができる。本例も円形貼付文が特徴的で、意匠文の構成からも少なからず網取I式土器の影響が認められる。沈線は基本的に2本単位で、縄文部分の拡大の結果描線主体の意匠文となるが、施文行程は沈線→縄文である。なお、2本単位の沈線間を無文としていることは注目できる。



41号土塚 あまり接合しなかったが、同一個体と認められる破片が多くたため取り上げた。器形は胴部に屈曲をもつもので、器面は口縁部・胴部の上下・底部の4帯から構成されると推定できる。しかし、38号土塚例による頭部の無文帯ではなく、無文となるのはおそらく口唇部と底部となり、器面には大きく意匠文が展開する。器形としては称名寺II式土器の中に胴部の屈曲の大きいものが出現し、それを受け継いだものである。意匠文の表出は基本的に3本単位の沈線で行われ、円形貼付文も伴っている。縄文は施されておらず、意匠文・無文部分の拡大により意匠文は大きく崩れ、描線が文様構成の主体的な存在となっている。無文部分の拡大は網取I式後半から顕著に観察できるが、網取I式土器においては同時に意匠文の縮小という形でバランスを保とうとしている。しかし、本例をはじめ群馬県荒砥二之堀遺跡第33号住居跡・下北原遺跡7号埋甕などは両者が同時に拡大した結果、本来意匠文の一部であった沈線が文様構成の主体的な役割を果たすようになる。



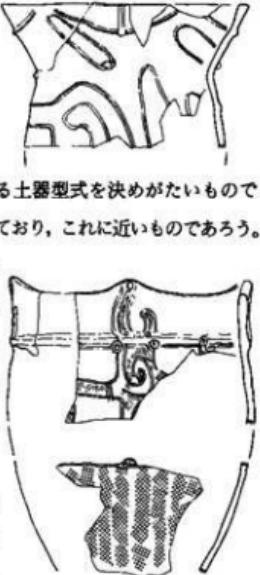
48号土塚 胴部上半が大きくくびれるもので、器形としては41号土塚出土土器に近いものである。器面は口縁部・胴部・底部の3帯から構成され、口縁部は隆帯区画の無文帯となる。このような区画は網取I式土器の影響を窺うことができるが、器形は類例がないものである。胴部

は微隆帯による意匠文が展開し、中期末に特徴的な注口土器の文様表出法を想起させる。本資料は口縁部の遺存度が低く、注口土器と決め付けることはできず、また、中期末に見られるような有穴鉢付土器でもない。丹野雅人氏が注口土器を集成しておられるが、口縁部が内溝するものがほとんどで、西山太郎氏が掲げられている器形の分類にも加わらない。所属する土器型式を決めがたいものであるが、48号土塗からは列点文を伴う称名寺II式土器が出土しており、これに近いものであろう。

52号土塗 屈曲の少ない深鉢形土器で、器面は口縁部と胴部上下の3帯から構成されている。口縁部は4単位の波状で、隆帯区画の無文帯にC字状の隆帯を加え、綱取I式土器の影響が大である。胴部上半は細沈線を充填するJ字文で、沈線→細沈線という施文行程を保っているが、無文帯の拡大、意匠文の縮小が窺える。このように綱取I式に非常に近い構成ではあるが、意匠文内に充填された半截竹管使用の細沈線は綱取I式土器に本質として認めるることはできず、やはり称名寺II式の列点文から転化したものと捉えたい。胴部の上下は明瞭に区画され、これもあり類例がないが、綱取C貝塚第3群土器や中野僧御堂遺跡41号土塗出土土器を類例として捉えたい。綱取C貝塚例は全面に繩文を施し、中野僧御堂例は上部の意匠文に列点文を伴う充填繩文で、胴部下半を条線文で覆う。なお、本例は縦位施文の繩文で覆っている。この他に52号土塗からは列点文が消失し、意匠文がかなり拡大した土器も破片ではあるが出土している。

以上のことと意匠文に着目して整理してみると、意匠文のポジ・ネガの逆転の中からしだいに意匠文の拡大により文様構成のバランスを失ってくる。この間に称名寺II式に特徴的であった列点文も消失するものが現われ、描線が文様表出の主体となる。描線は3本単位の沈線が導入され、円形貼付文も多くみられる。そして施文行程の転換により充填繩文から地文へ変化し、繩文地の堀之内I式土器へ繋がるのである。もちろんこれは称名寺II式から堀之内I式土器へ至る過程の一側面に過ぎず、器形あるいは器種における変化も重要なメルクマールを示している。

すなわち、土器廃棄の場と重複して構築された土塗から出土した土器の中には、土器廃棄と時間的ズレを認めることができる。山梨県駅迎堂遺跡、長野県居沢尾根遺跡の場合も、使用中の遺構と重複して土器を廃棄することなく、範囲の重複があったとしても時間的先後関係があったとするのは妥当である。しかし、本遺跡の場合僅かな先後関係を認め得るもの、ほぼ連続しているものであり、土器廃棄の場としての意識がことごとく消失したとも思えない。そ



* 丹野雅人「注口土器小考」「研究紀要III」1985 東京都埋蔵文化財センター

** 西山太郎「微隆起線文土器群の変遷と分布」「研究紀要10」1986 財千葉県文化財センター

の理由として次の2点が上げられる。

(1) 土塙が集中する場所は土器の廃棄量も多く、占地が共通しており、土塙構築に際して廃棄されてあつた土器を排除した形跡がない。

(2) 続く堀之内式土器の廃棄も細部において範囲のズレはあるが、台地全体から見ればほとんど同じ占地である。

このように考えると、これらの土塙は廃棄もしくは廃棄に類する行為を目的として構築されたもので、決して貯蔵穴というような機能は当てはまらない。但し、(1)で示した土器廃棄は先にも述べたように土器廃棄の場で見られない様相の土器が土塙から出土しており、土器廃棄と土塙構築の間に先後関係を認めた場合には、この場における土器廃棄は停止したと言える。土塙からの土器の出土状況からは土塙が土器廃棄を目的として構築されたとするのに無理があり、38号土塙出土の土器や、埋め戻しが行われていることから土塙墓と考えるのが自然ではあるが、これを否定する資料は得られていない。

第4表 遺構一覧表

No.	種別	時代	頁	備考
1	住居跡	奈良	106	B 9E
2	住居跡	奈良	108	9E
3	住居跡	奈良	110	重複 8D
4	陥し穴	繩文	49	9E
5	住居跡	奈良	114	7と重複 9E
6	住居跡	奈良	114	7E
7	土 塙	近世	128	5と重複 9E
8	土 塙	繩文	28	10E
9	土 塙		129	11C
10	住居跡	奈良	116	12E
11	土 塙		129	4I
12	炉 穴	繩文	17	53・55と重複 11H
13	住居跡	繩文	13	33と重複 10I
14	陥し穴	繩文	49	A・B 2基の重複
15	住居跡	奈良	118	9H
16	炉 穴	繩文	25	10H
17	住居跡	奈良	119	10G
18	土 塙	繩文	32	9H
19	住居跡	奈良	121	20, 24, 25と重複 9F
20	土 塙	近世	129	19と重複 9F
21	住居跡	奈良	124	9F
22	陥し穴	繩文	49	11F
23	—	—	—	欠番
24	土 塙	近世	130	19と重複 9F
25	土 塙	近世	130	19と重複 9F
26	住居跡	繩文	15	8E
27	住居跡	古 墳	100	5H
28	土 塙	繩文	32	11F

No.	種別	時代	頁	備考
29	陥し穴	繩文	51	7E
30	土 塙	繩文	34	9G
31	住居跡	古 墳	100	6H
32	—	—	—	欠番
33	陥し穴	繩文	51	13と重複 11I
34	—	—	—	欠番
35	住居跡	奈良	126	5J
36	陥し穴	繩文	51	5J
37	炉 穴	繩文	27	5I
38	土 塙	繩文	34	10G
39	陥し穴	繩文	51	5I
40	土 塙	繩文	38	10G
41	土 塙	繩文	40	10F
42	土 塙	繩文	42	10F
43	土 塙	繩文	42	10F
44	土 塙	繩文	42	10F
45	土 塙	繩文	43	10F
46	陥し穴	繩文	54	10F
47	土 塙	繩文	44	10F
48	土 塙	繩文	45	10F
49	陥し穴	繩文	54	10F
50	陥し穴	繩文	54	10F
51	土 塙	繩文	46	10F
52	土 塙	繩文	47	9G
53	陥し穴	繩文	54	12と重複 11H
54	炉 穴	繩文	27	10H
55	陥し穴	繩文	54	12と重複 11H

写 真 図 版



航空写真





1. 13号住居跡全景



2. 26号住居跡全景



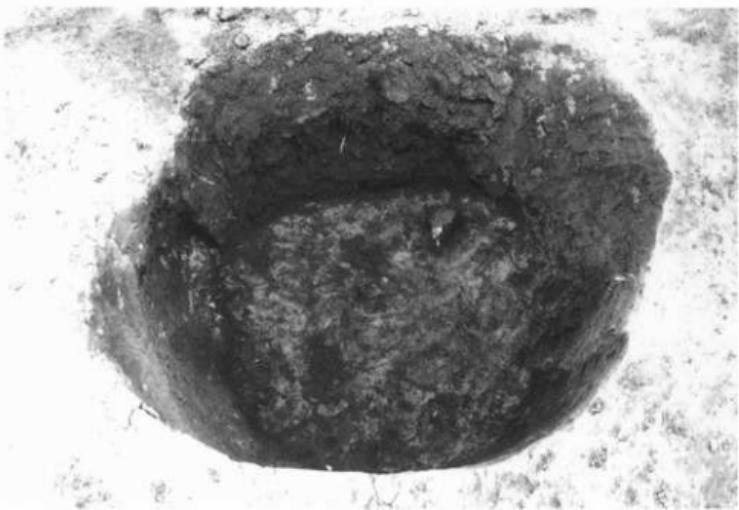
3. 12号炉穴全景



1. 16号炉穴全景



2. 54号炉穴全景



3. 8号土塙全景



1. 18号土块全景



2. 28号土块全景



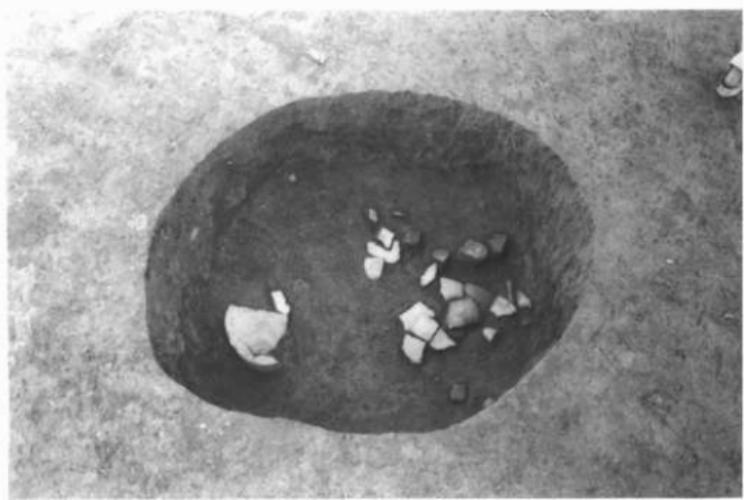
3. 30号土块全景



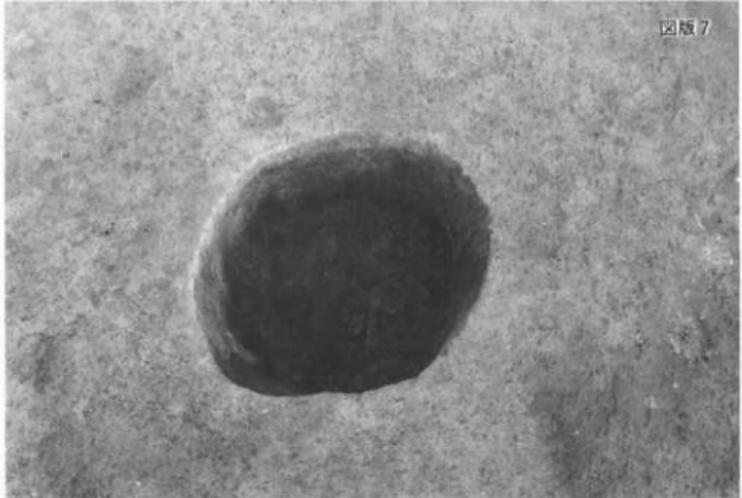
1. 38号土坑遗物出土状况



2. 38号土坑全景



3. 40号土坑遗物出土状况



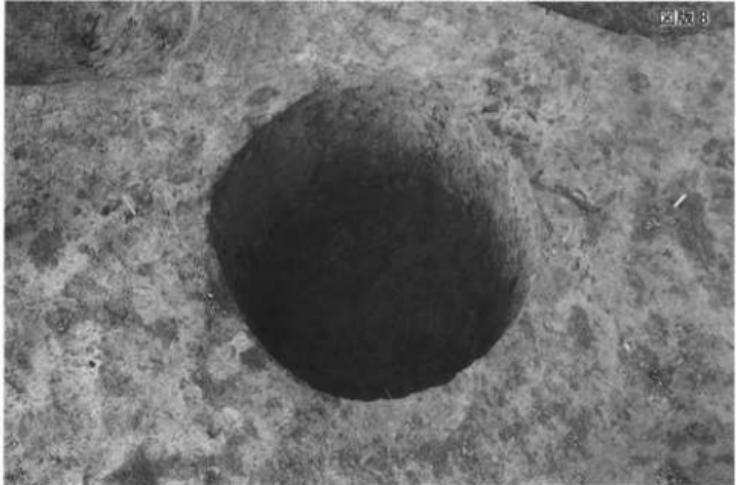
1. 40号土塙全景



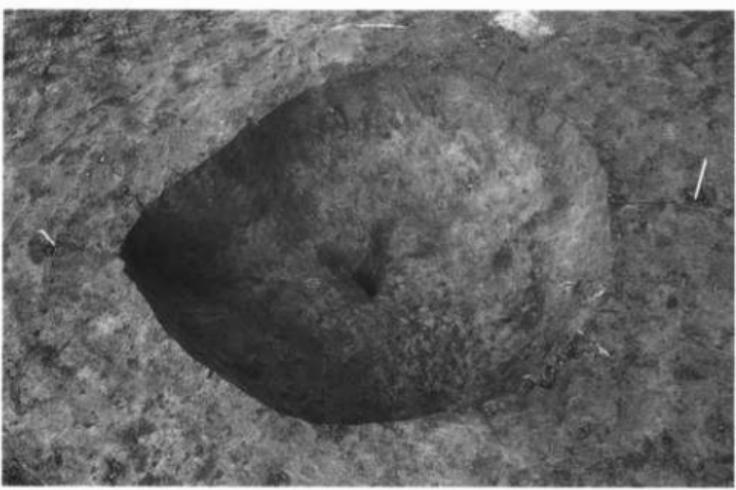
2. 41号土塙全景



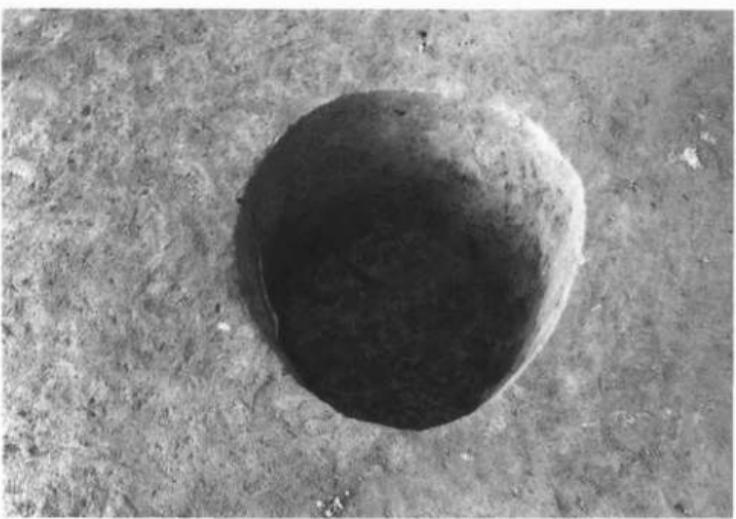
3. 42号土塙全景



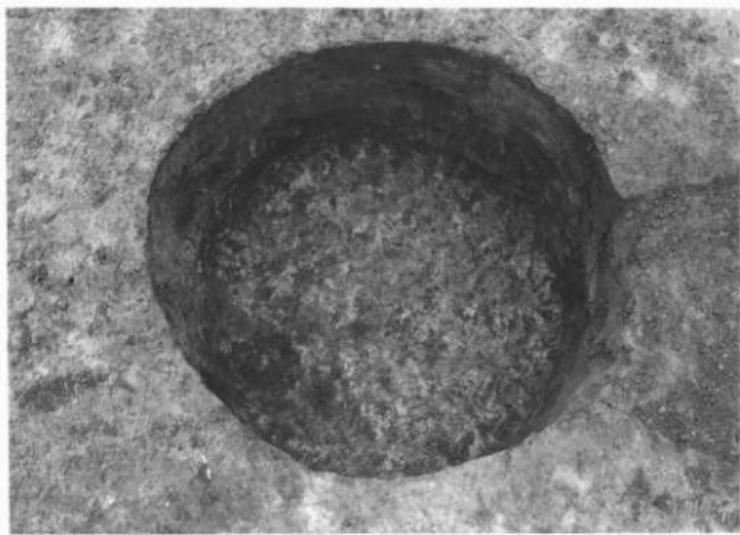
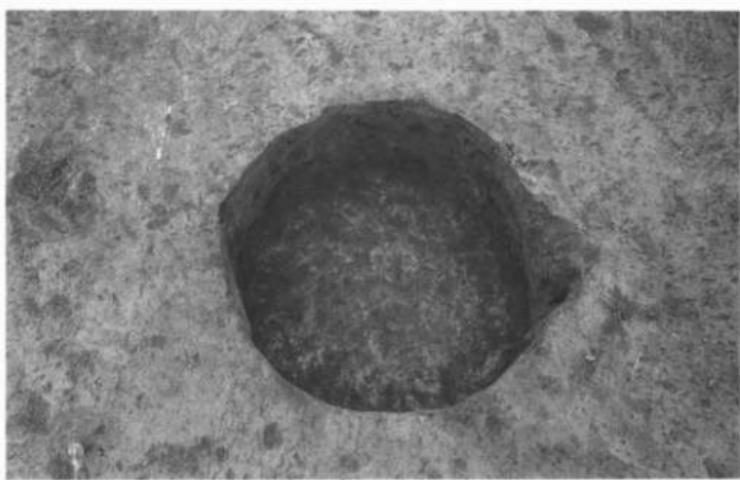
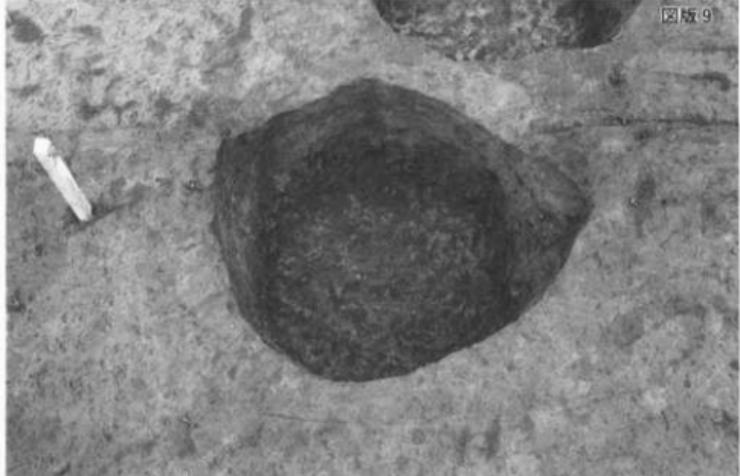
1. 43号土坑全景



2. 44号土坑全景



3. 45号土坑全景





1. 22号土塚全景



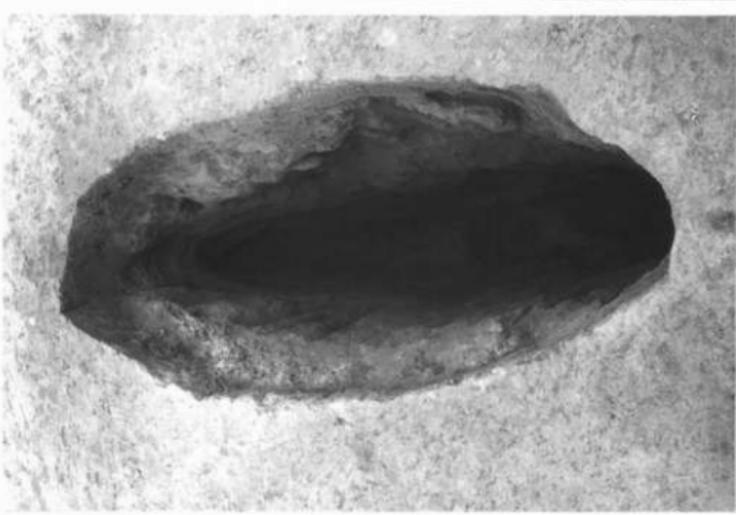
2. 29号土塚全景



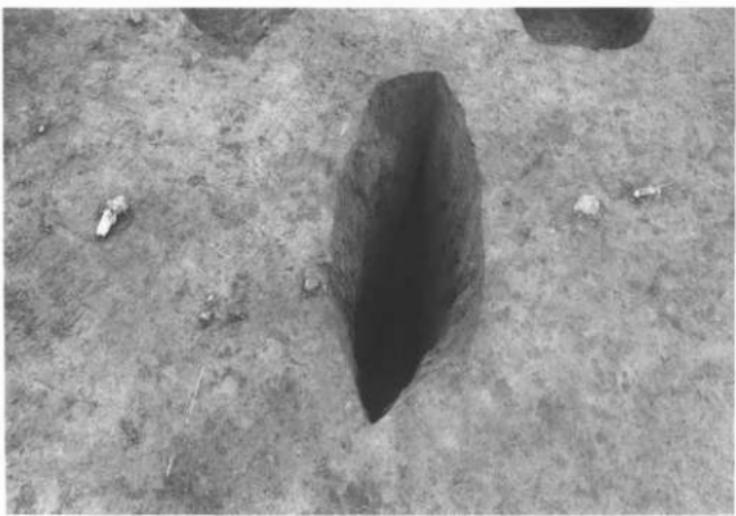
3. 36号土塚全景



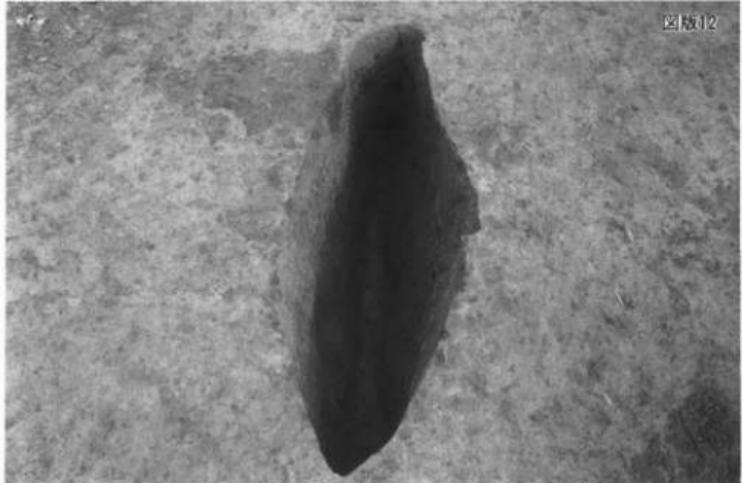
1. 39号土坑全景



2. 46号土坑全景



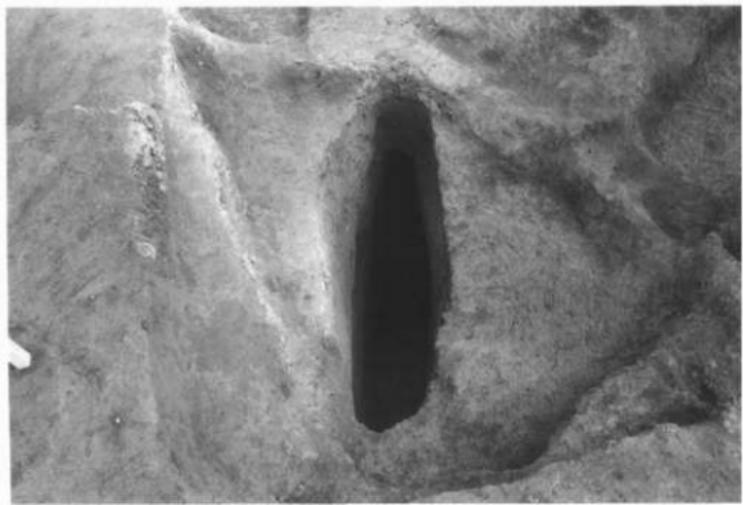
3. 49号土坑全景



1. 50号土塚全景



2. 53号土塚全景



3. 55号土塚全景



1. 27号住居跡全景



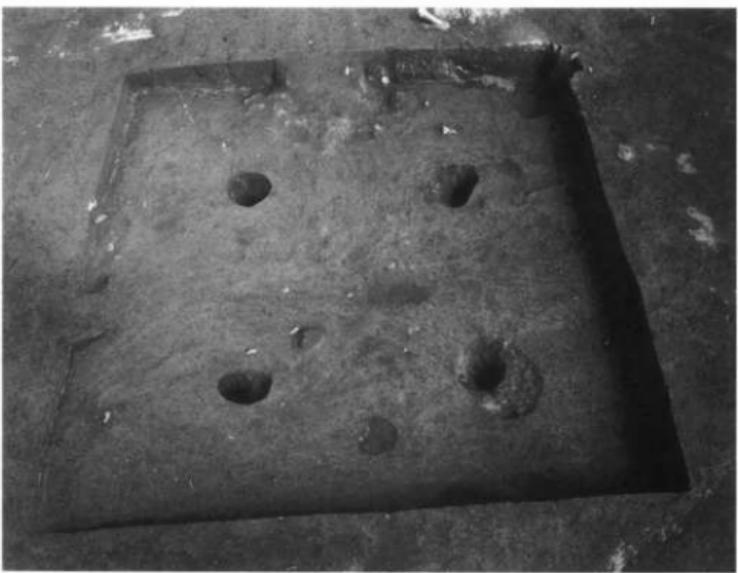
2. 27号住居跡
遺物出土狀況



3. 27号住居跡
遺物出土狀況



1. 27号住居跡のカマド



2. 31号住居跡全景



3. 31号住居跡のカマド



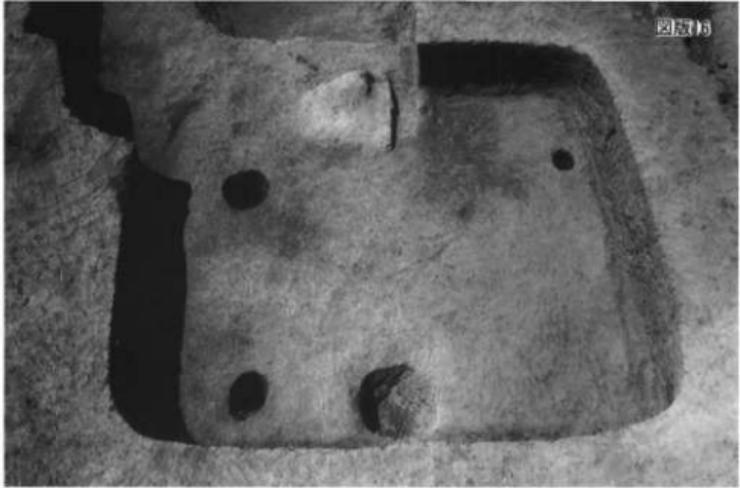
1. 1号住居跡全景



2. 2号住居跡全景



3. 2号住居跡のカマド



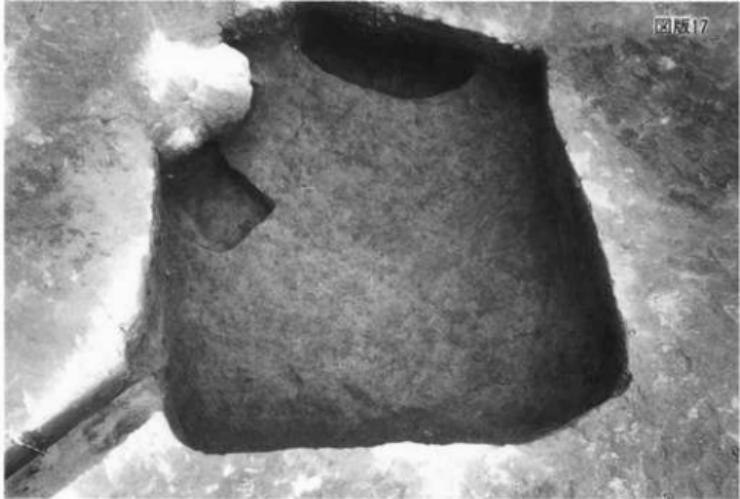
1. 3号住居跡全景



2. 3号住居跡
遺物出土状况



3. 5号住居跡全景



1. 6号住居跡全景



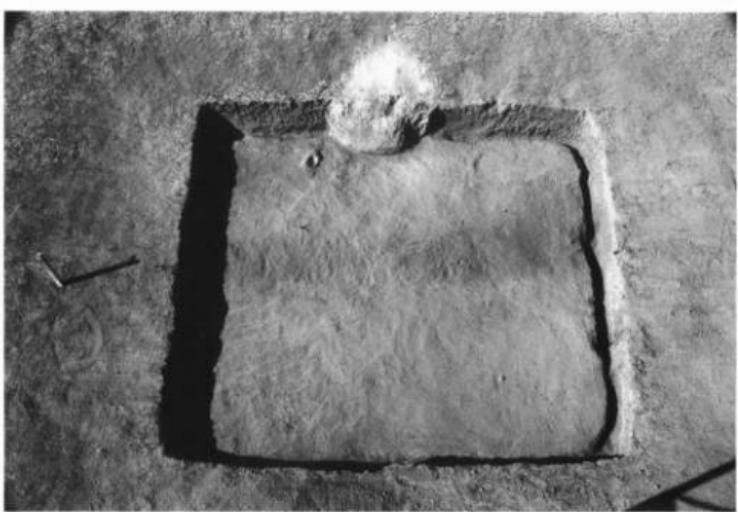
2. 6号住居跡
遺物出土状況



3. 10号住居跡全景



1. 10号住居跡のカマド



2. 15号住居跡全景



3. 17号住居跡全景



1. 17号住居跡のカマド



2. 19号住居跡全景



3. 19号住居跡遺物出土状況



1. 19号住居跡のカマド



2. 21号住居跡
遺物出土状況



3. 21号住居跡遺物出土状況



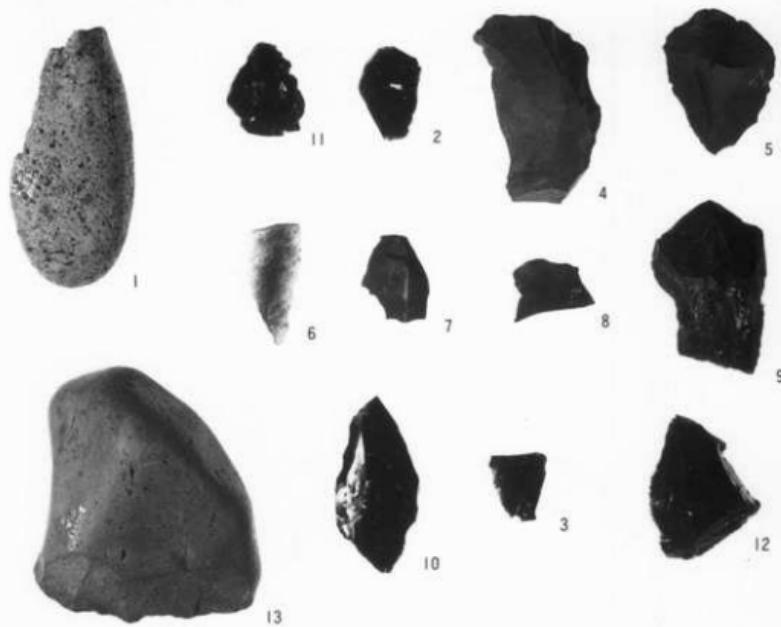
1. 35号住居跡全景



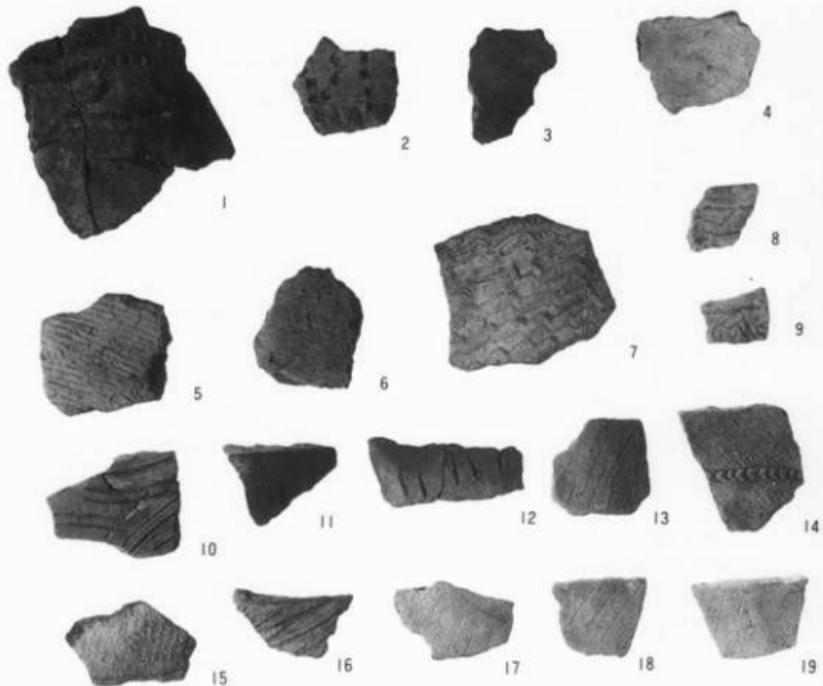
2. 7号土塙全景



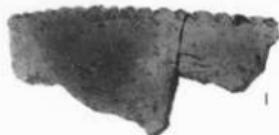
3. 20号土塙全景



1. 先土器時代石器



2. 13号住居跡出土土器



1



3



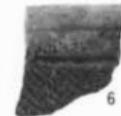
2



4



5



6



7



8

1. 26号住居跡出土土器

2. 12号炉穴出土土器



1



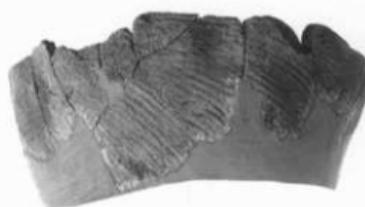
2



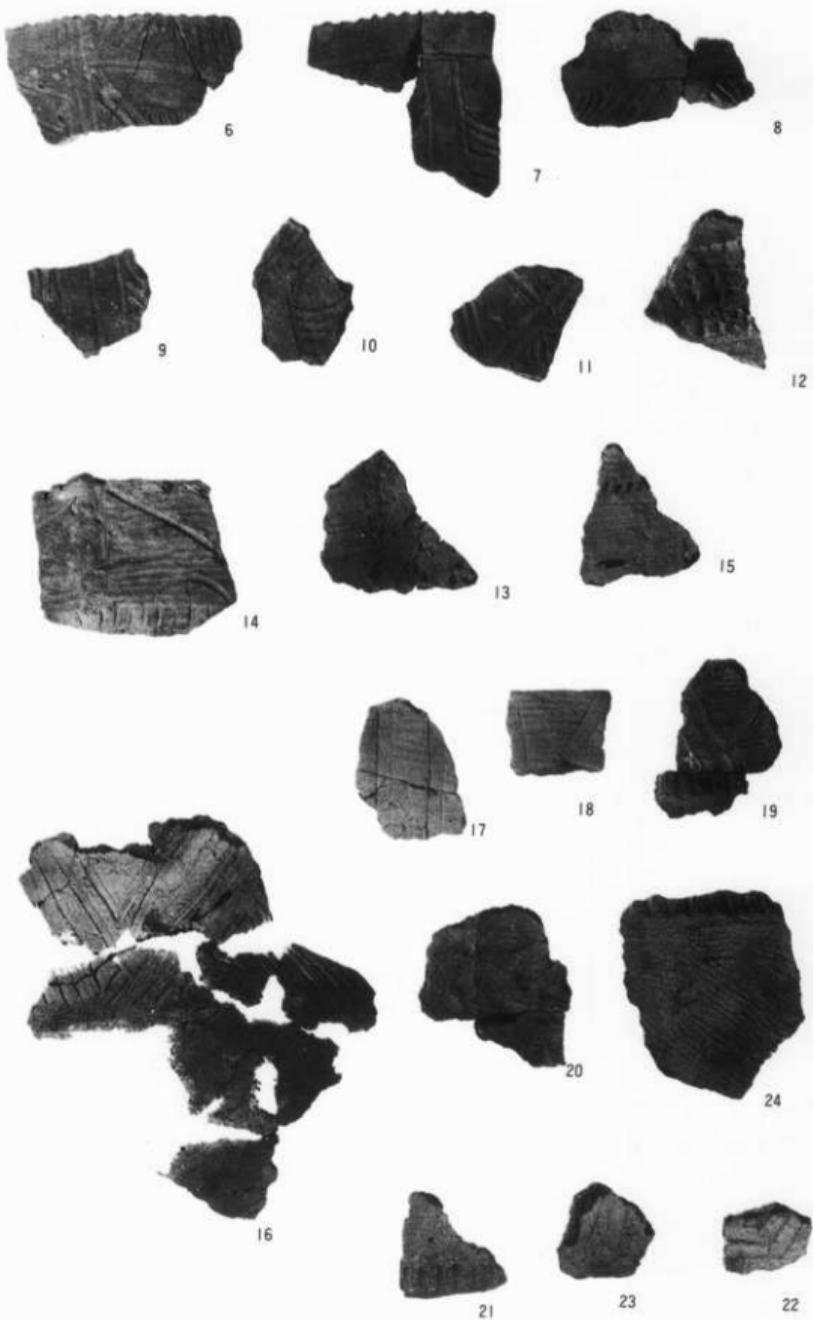
4



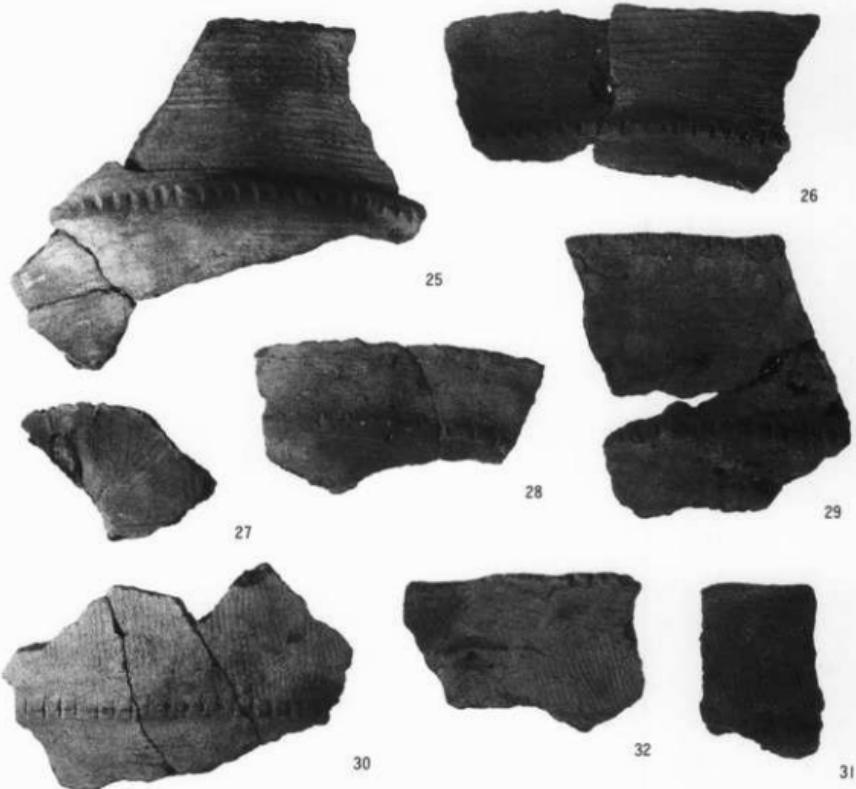
3



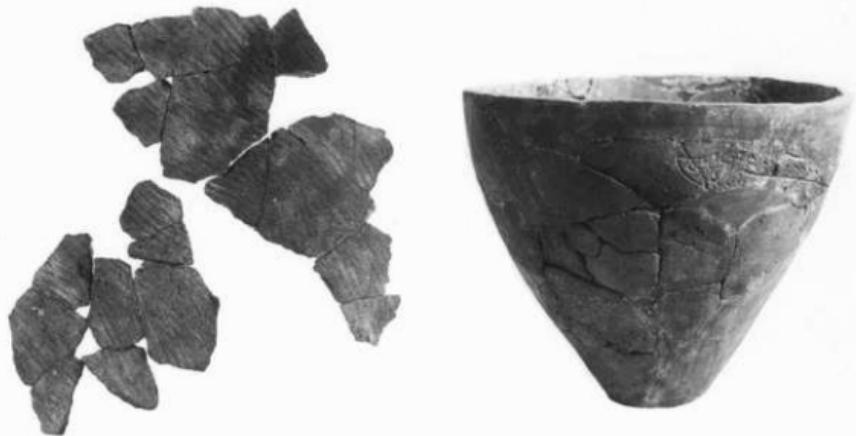
5



12号炉穴出土土器

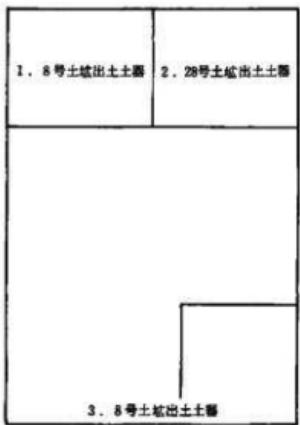


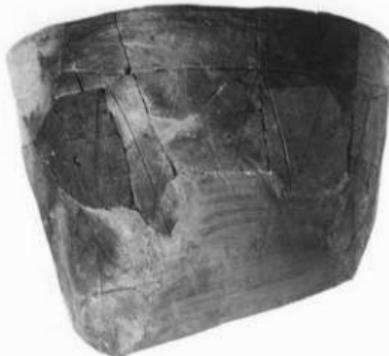
1. 12号炉穴出土土器



2. 16号炉穴出土土器

3. 8号土坑出土土器

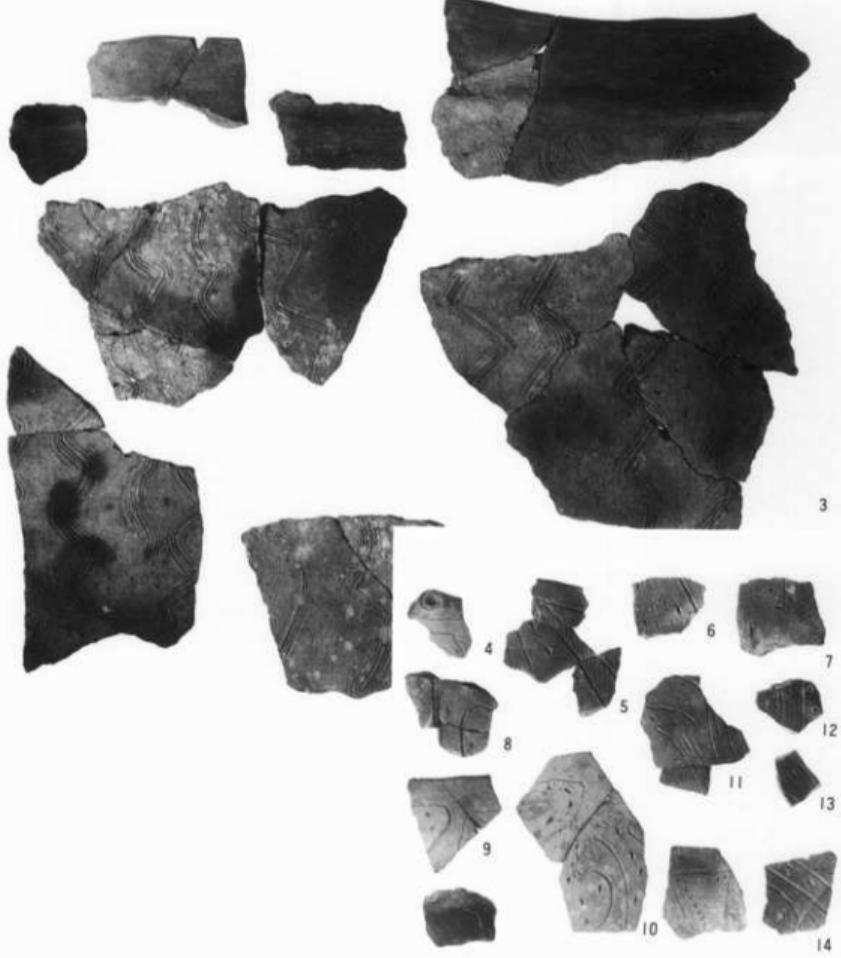




2

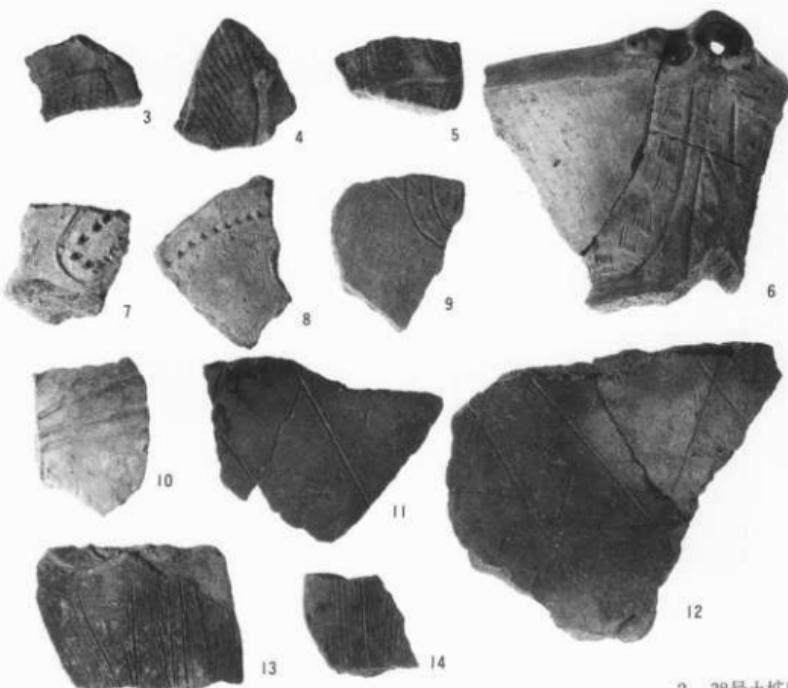


1





1. 38号土塙出土土器

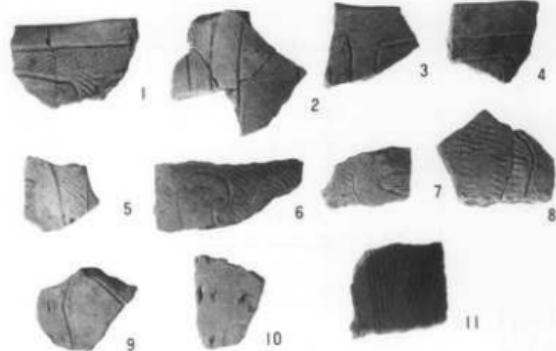


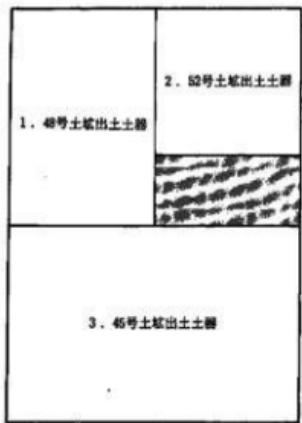
2. 38号土塙出土土器





12







1



2



3



1



2



3



4



5



6



7



8



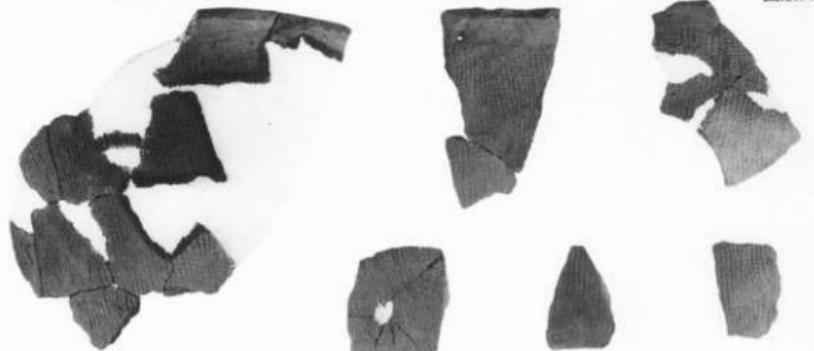
9



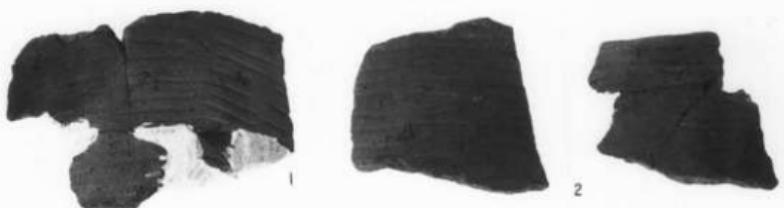
10



11



1群土器



2

5

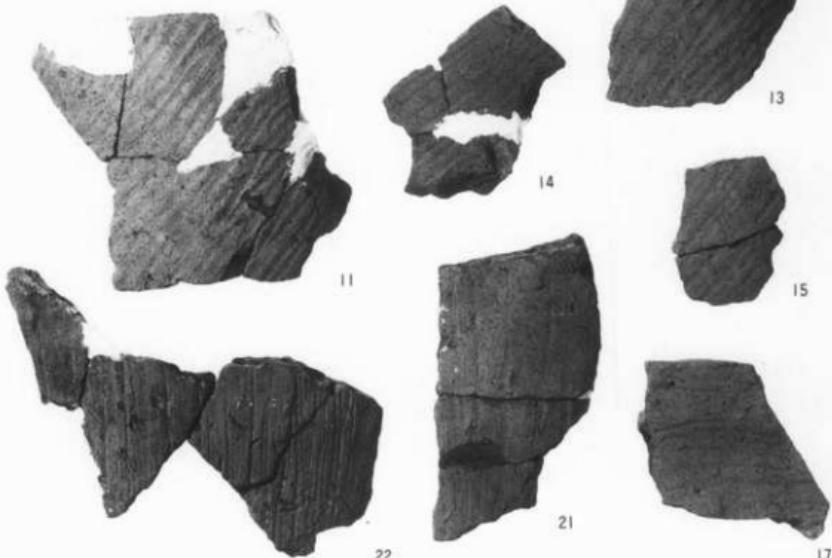


4

9

12

13



11

14

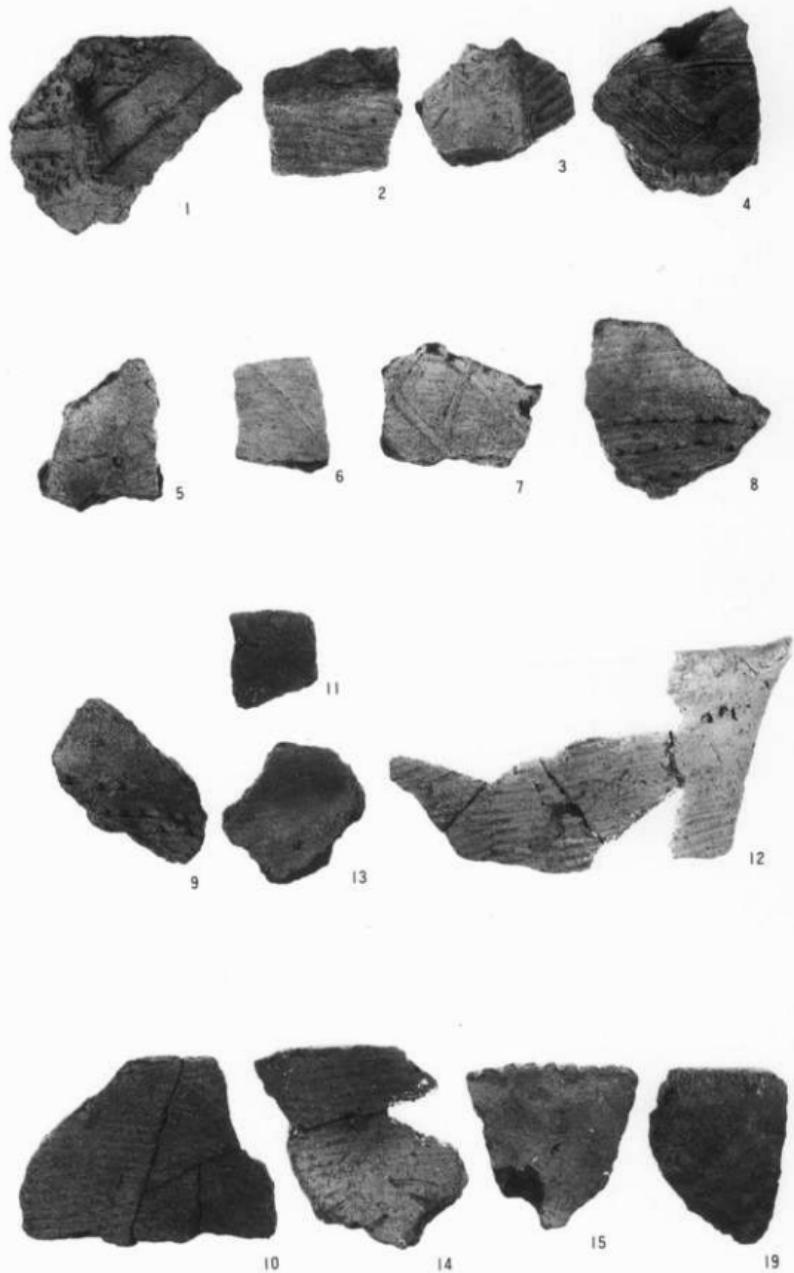
15

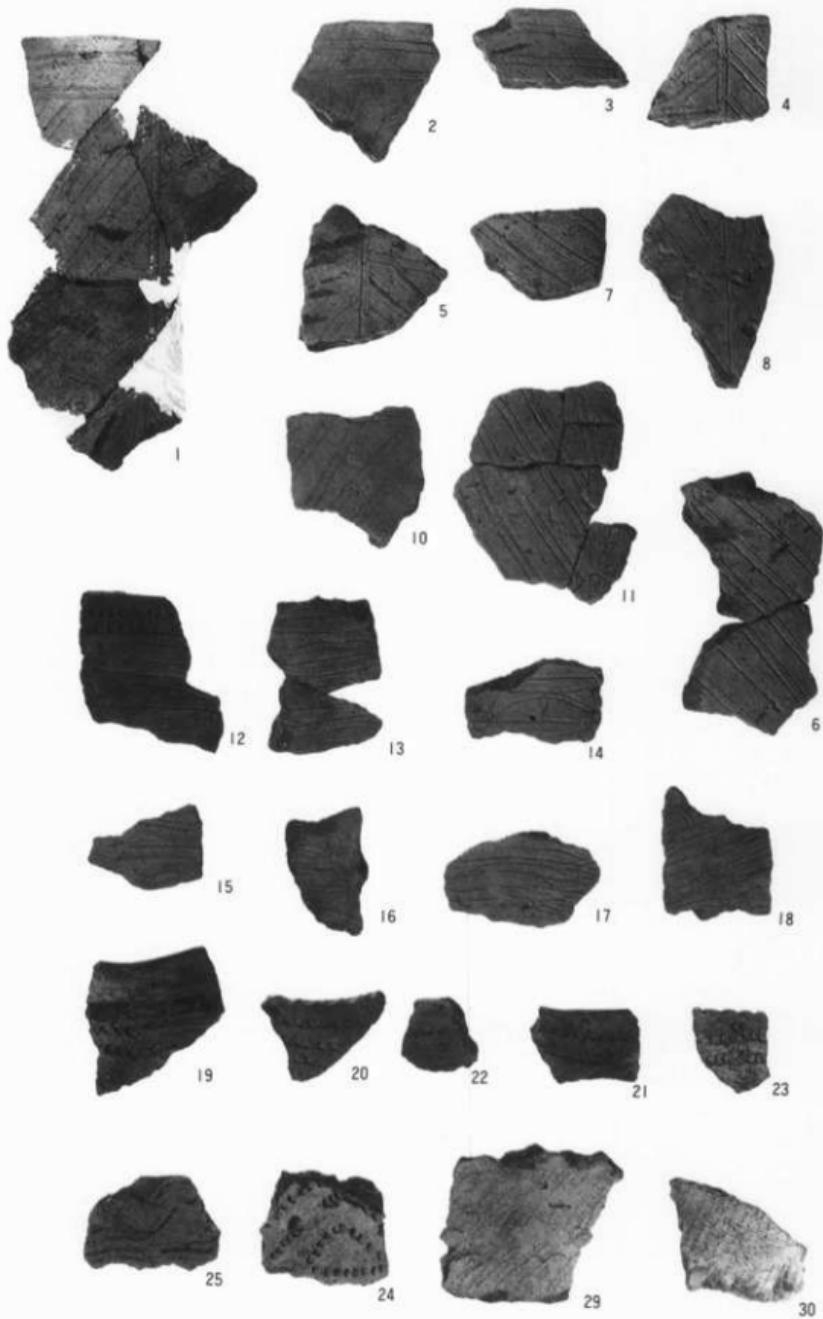


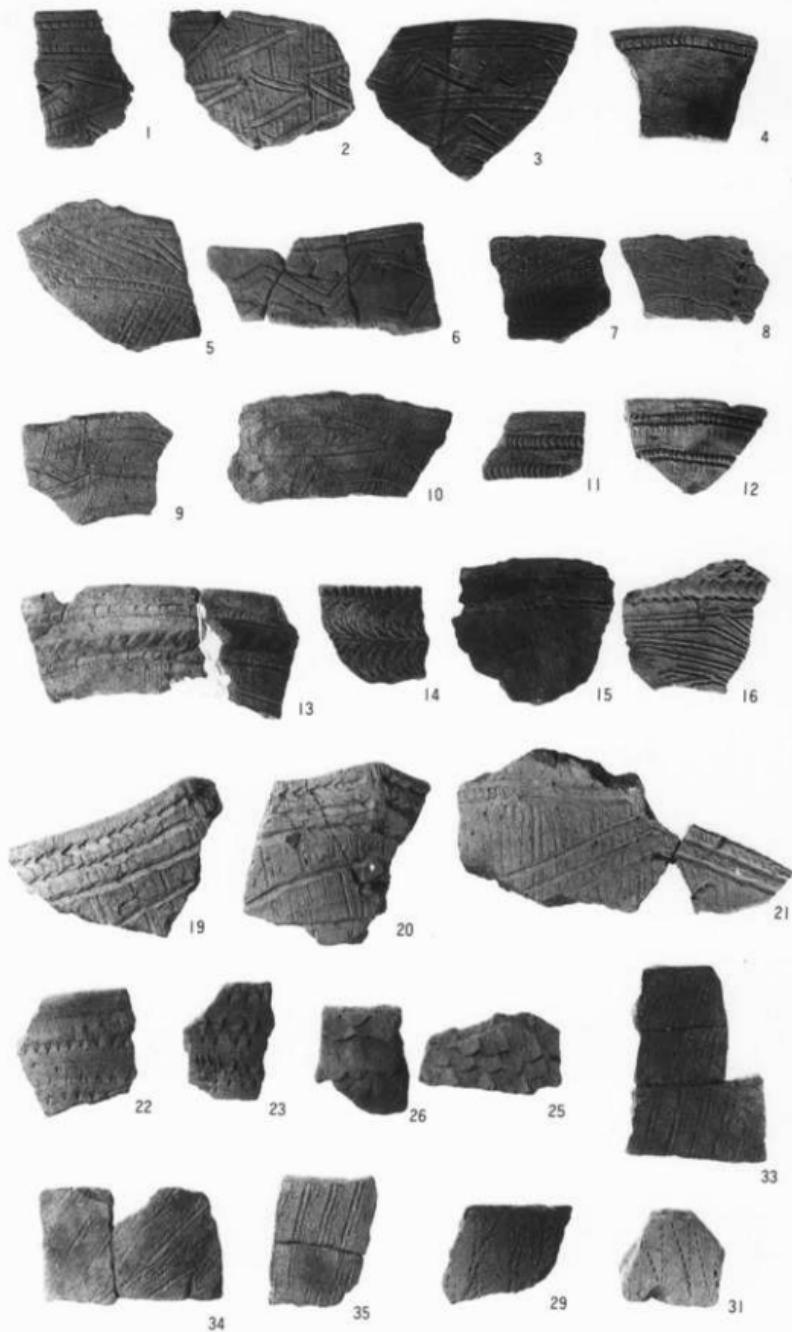
21

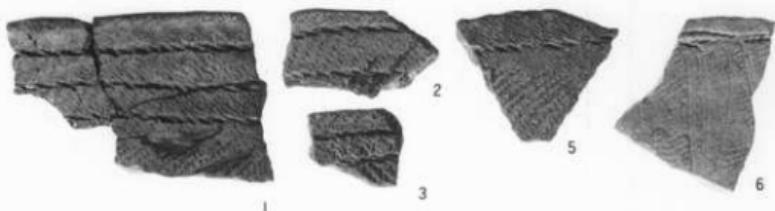
17

2群土器





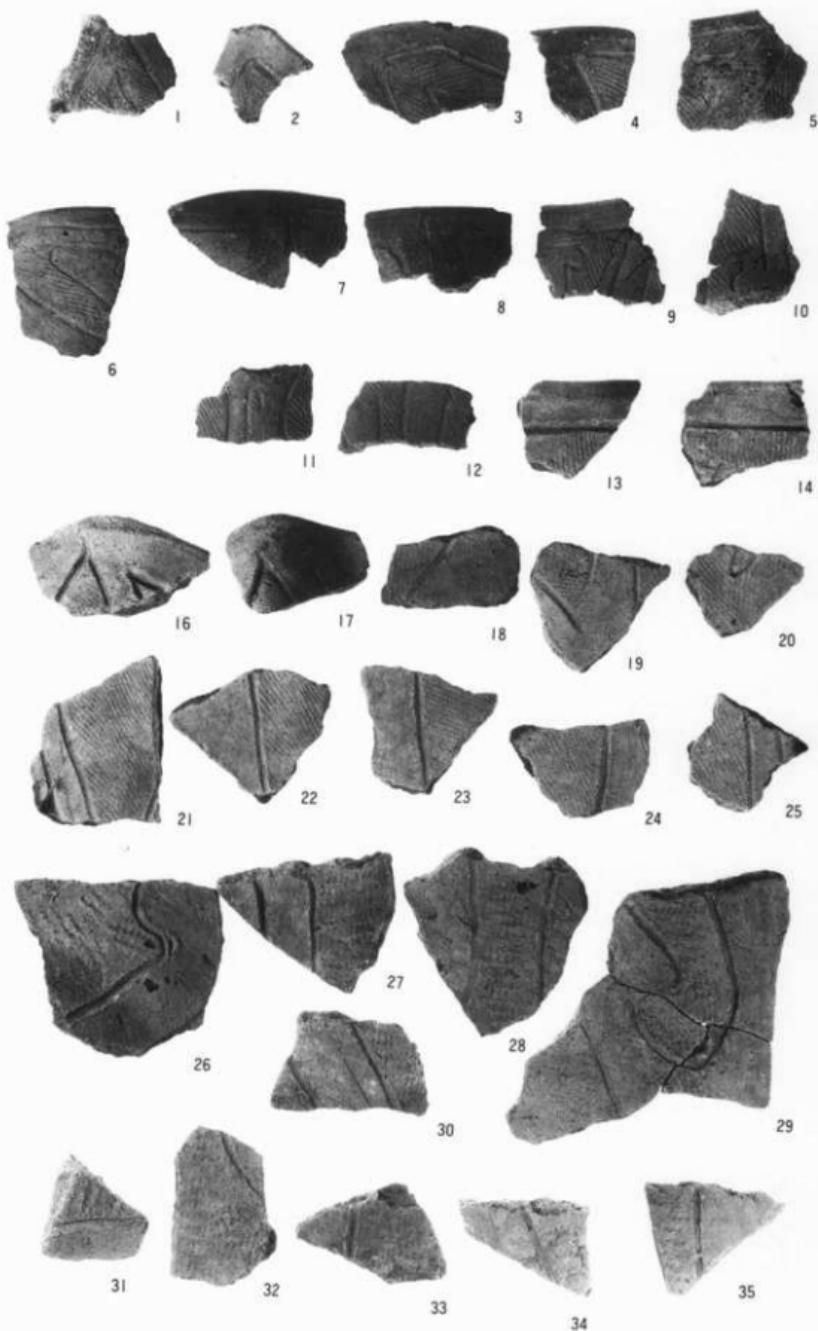


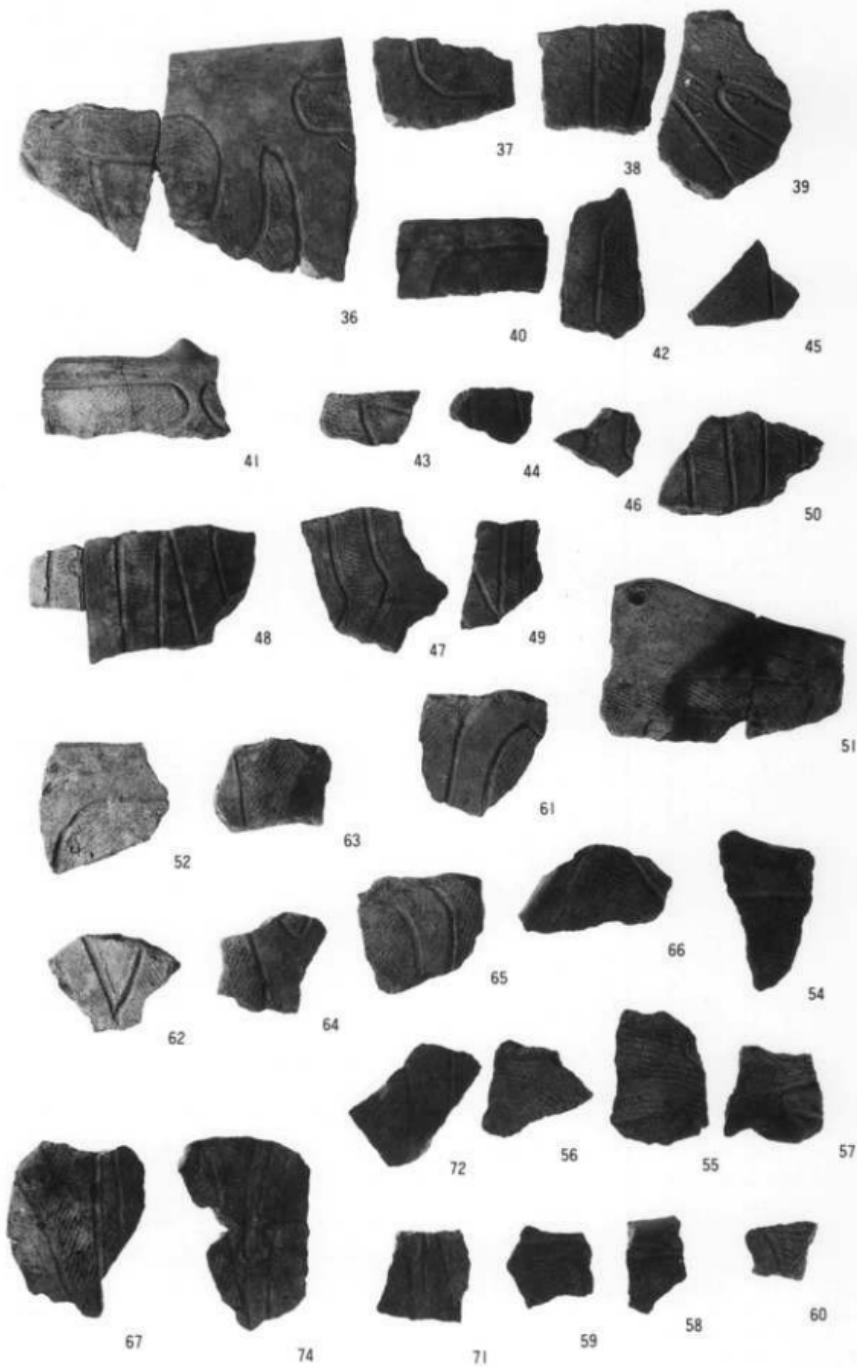


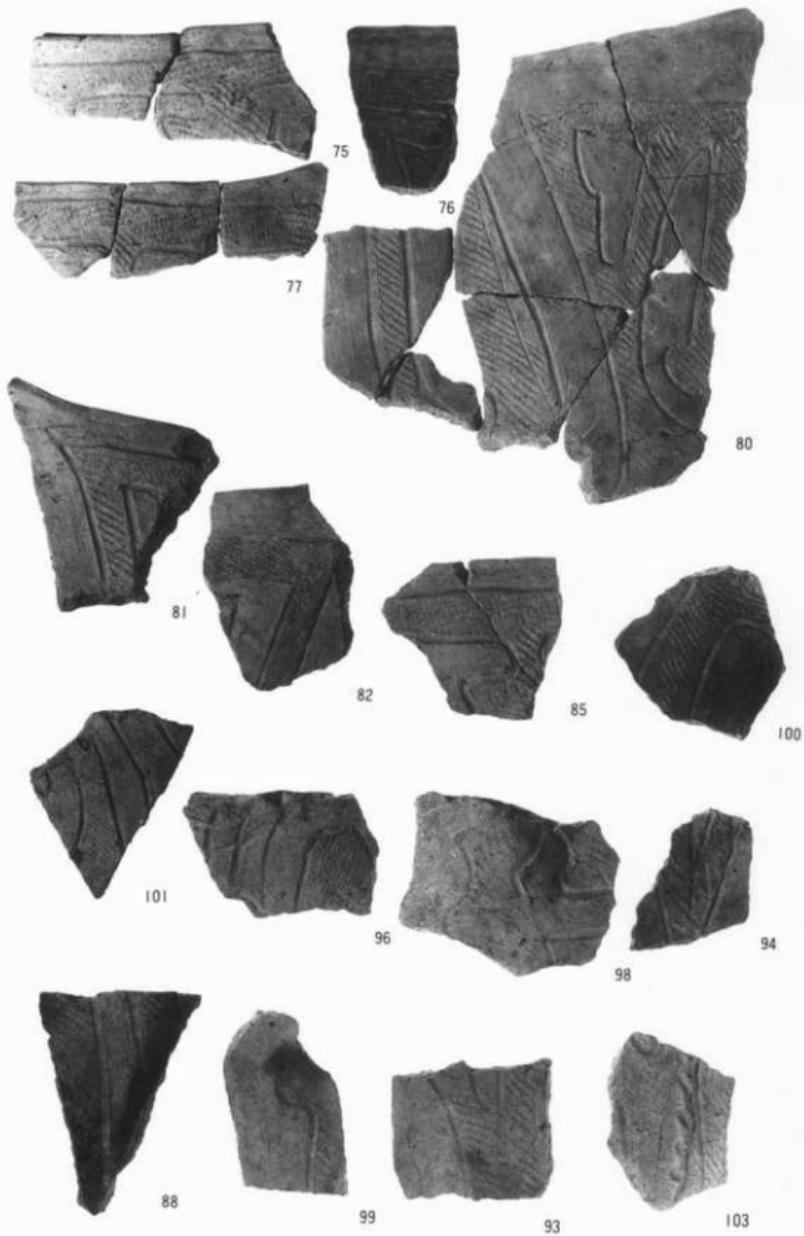
6群土器



7群土器

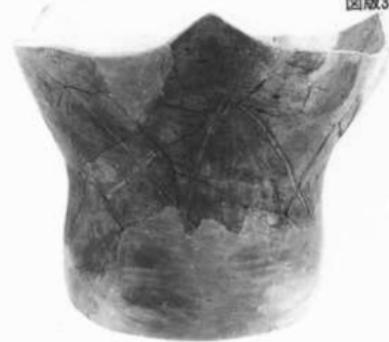




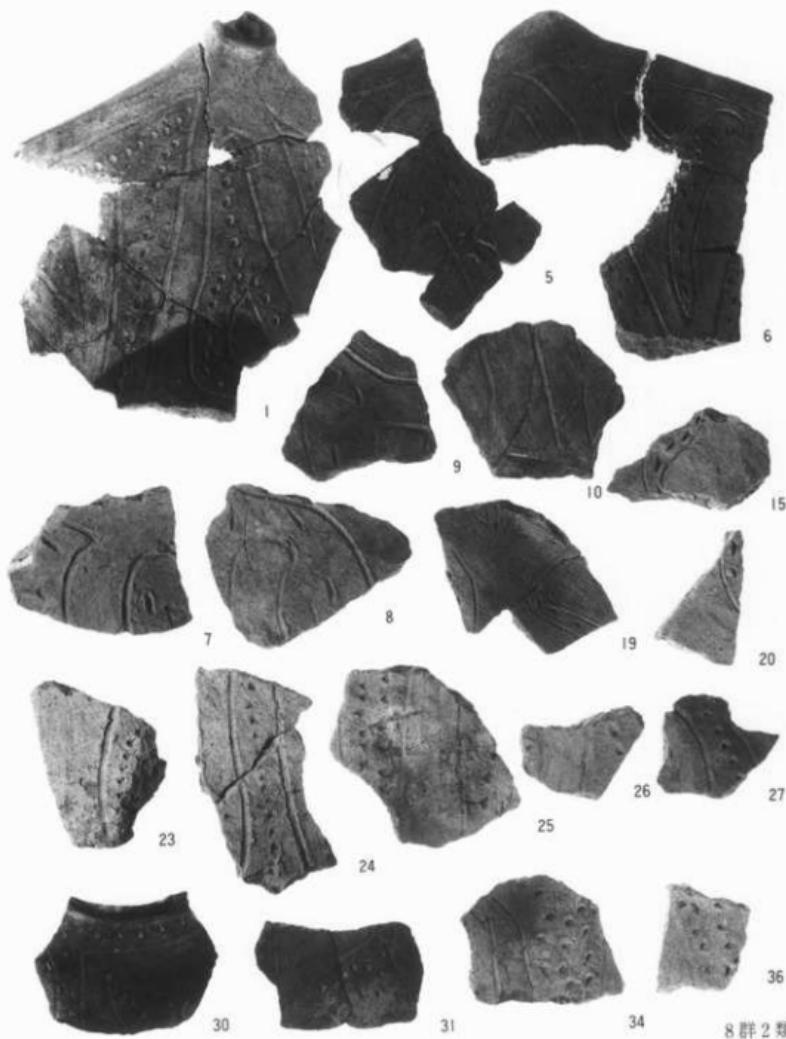


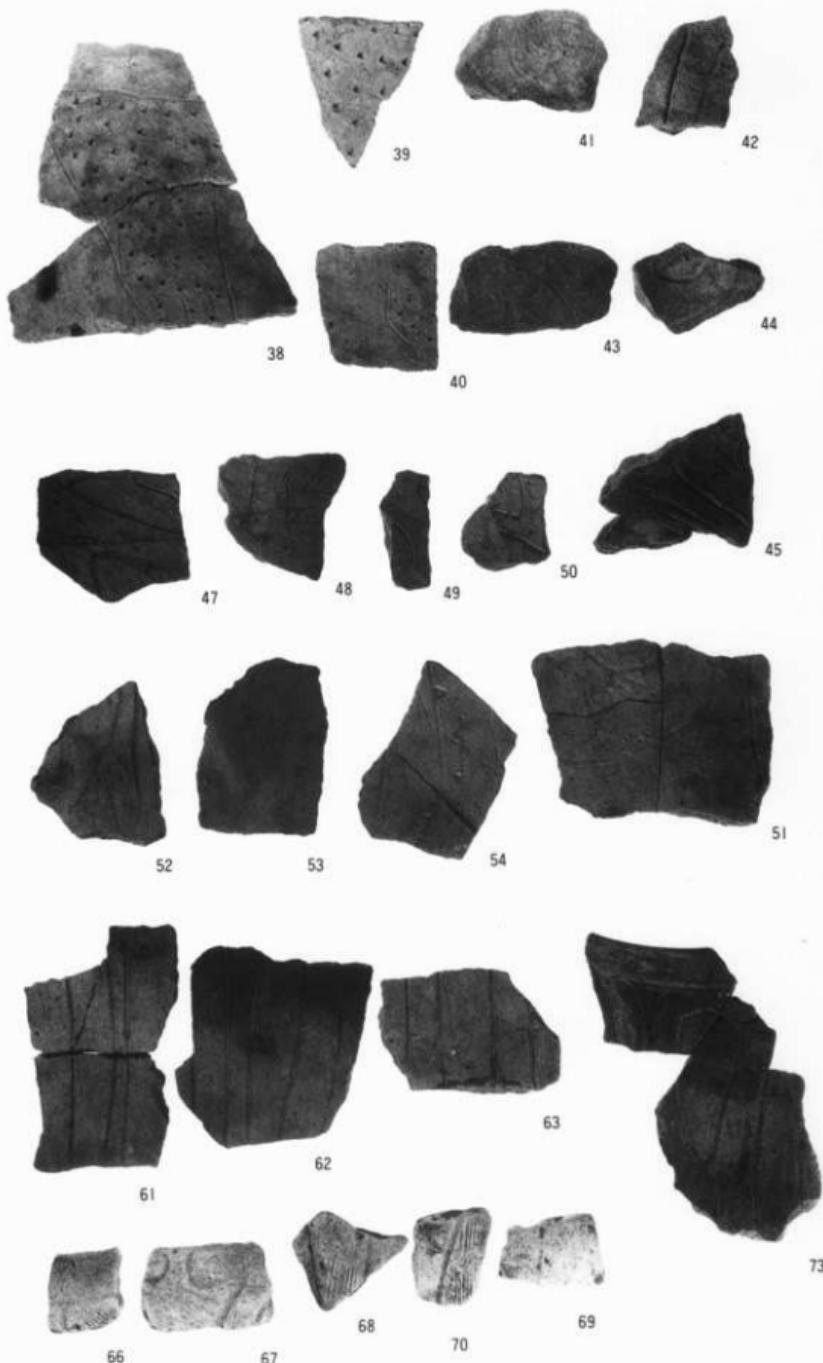


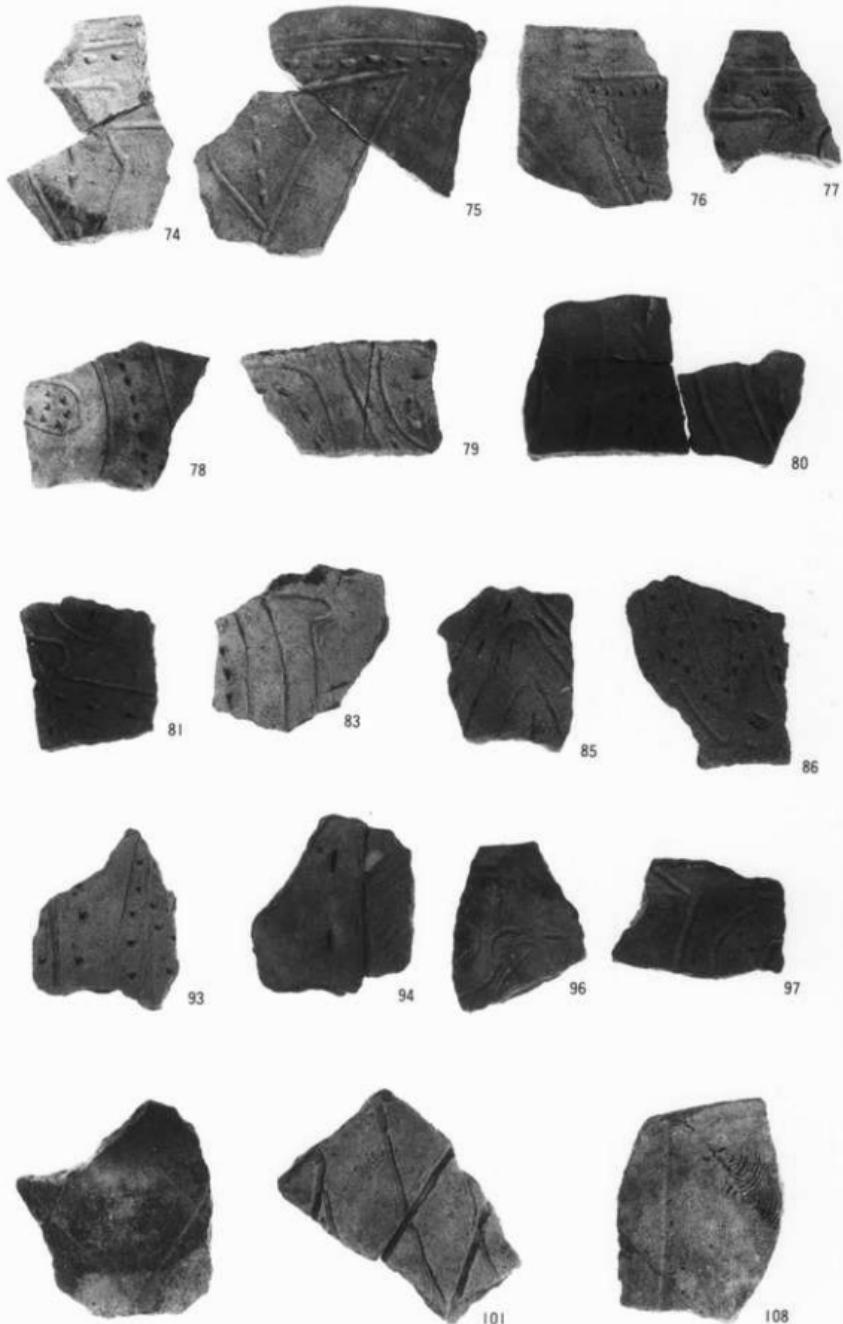
1



2









1



6



4



9



15



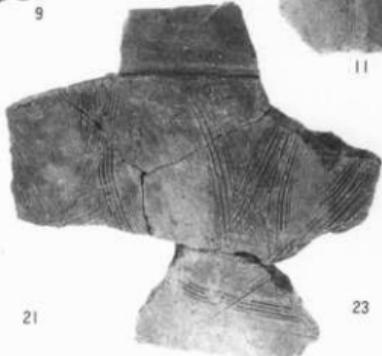
13



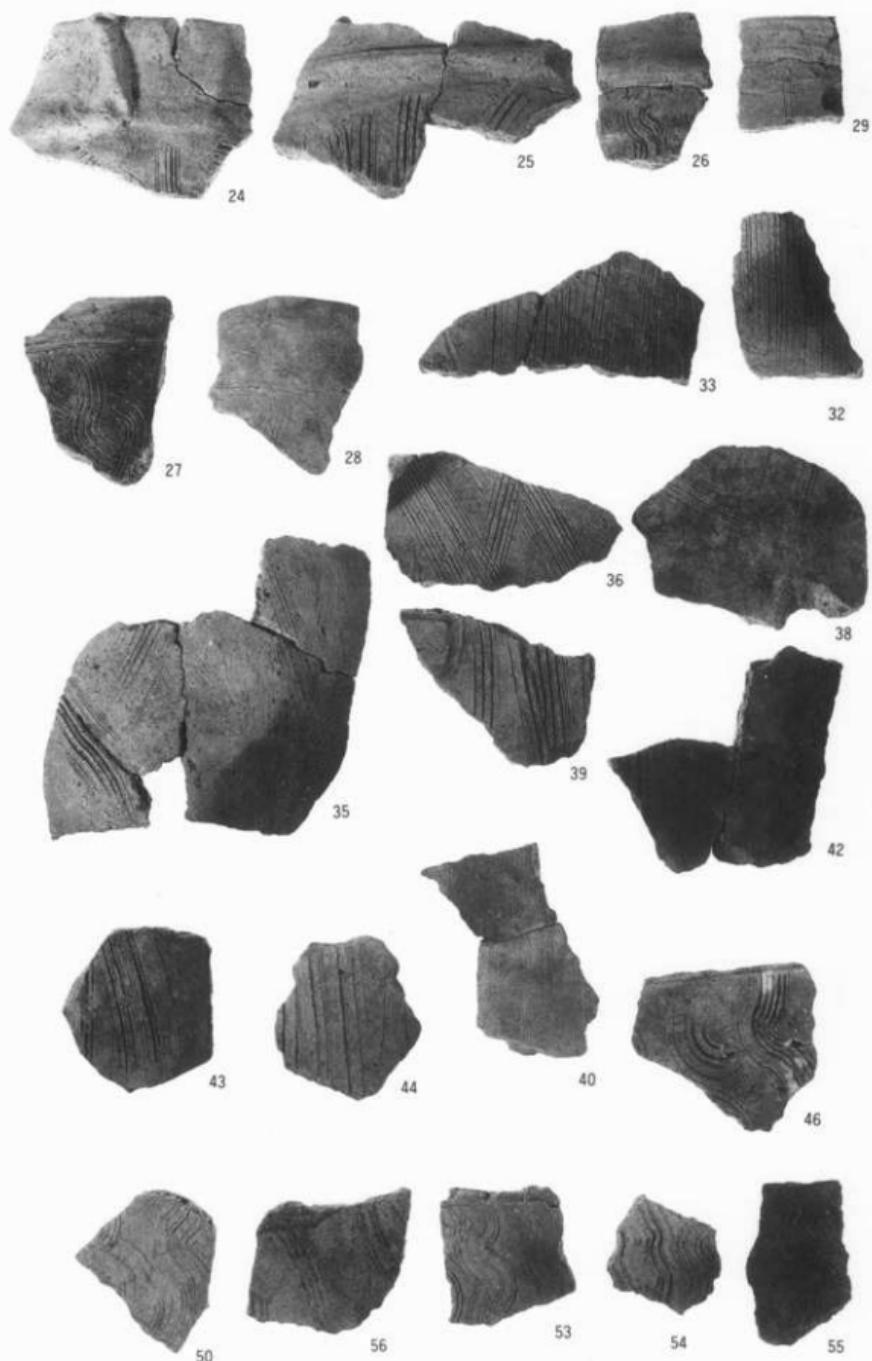
7

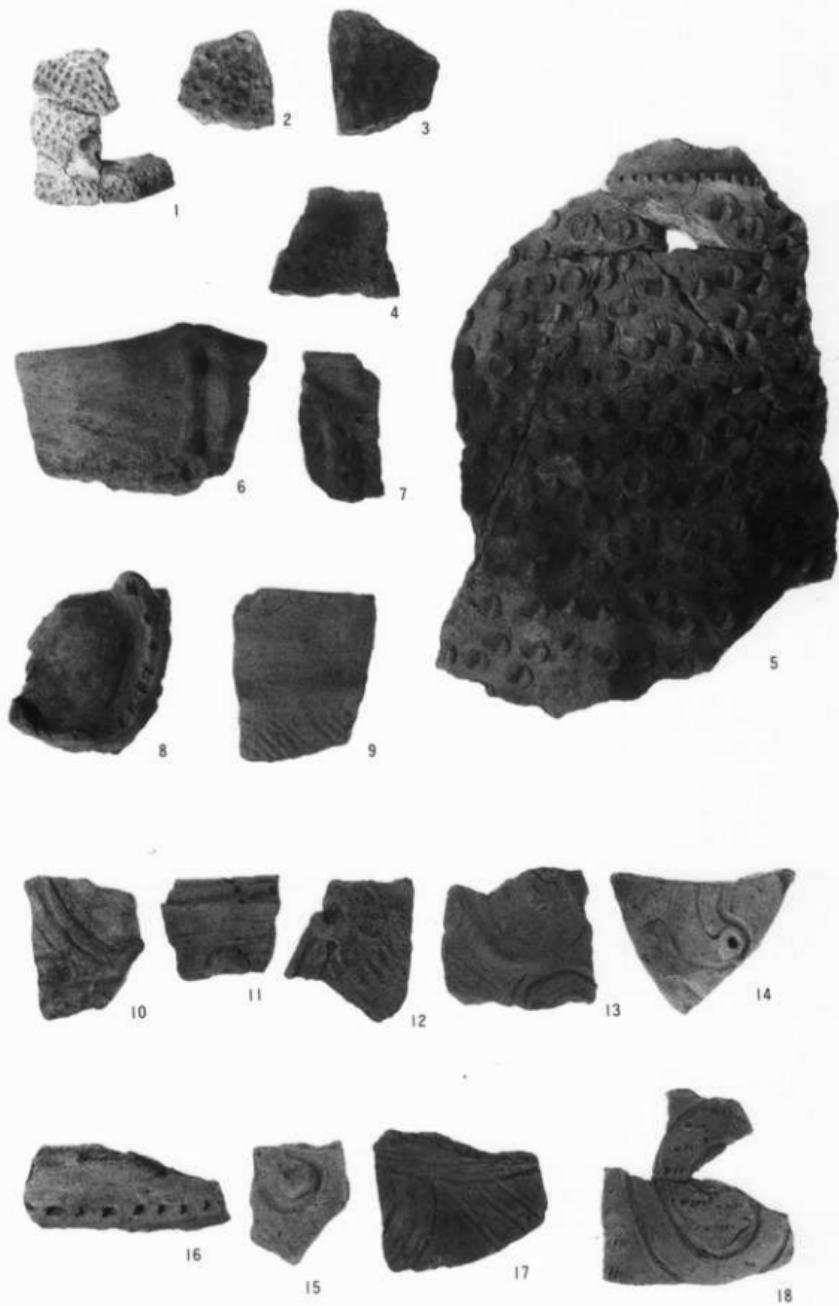


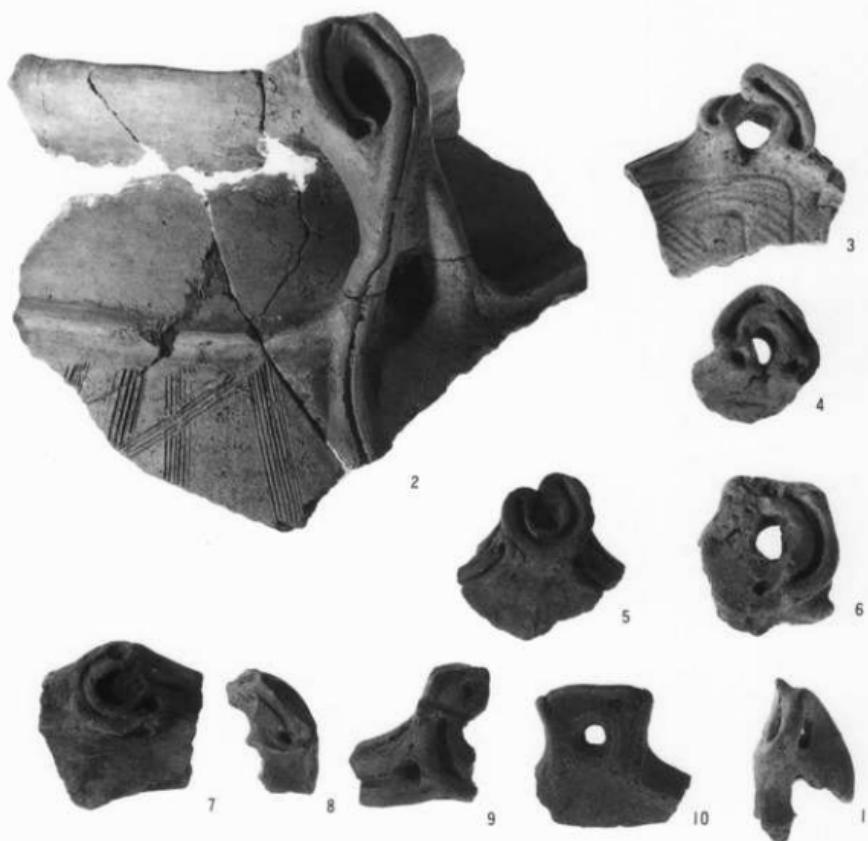
21



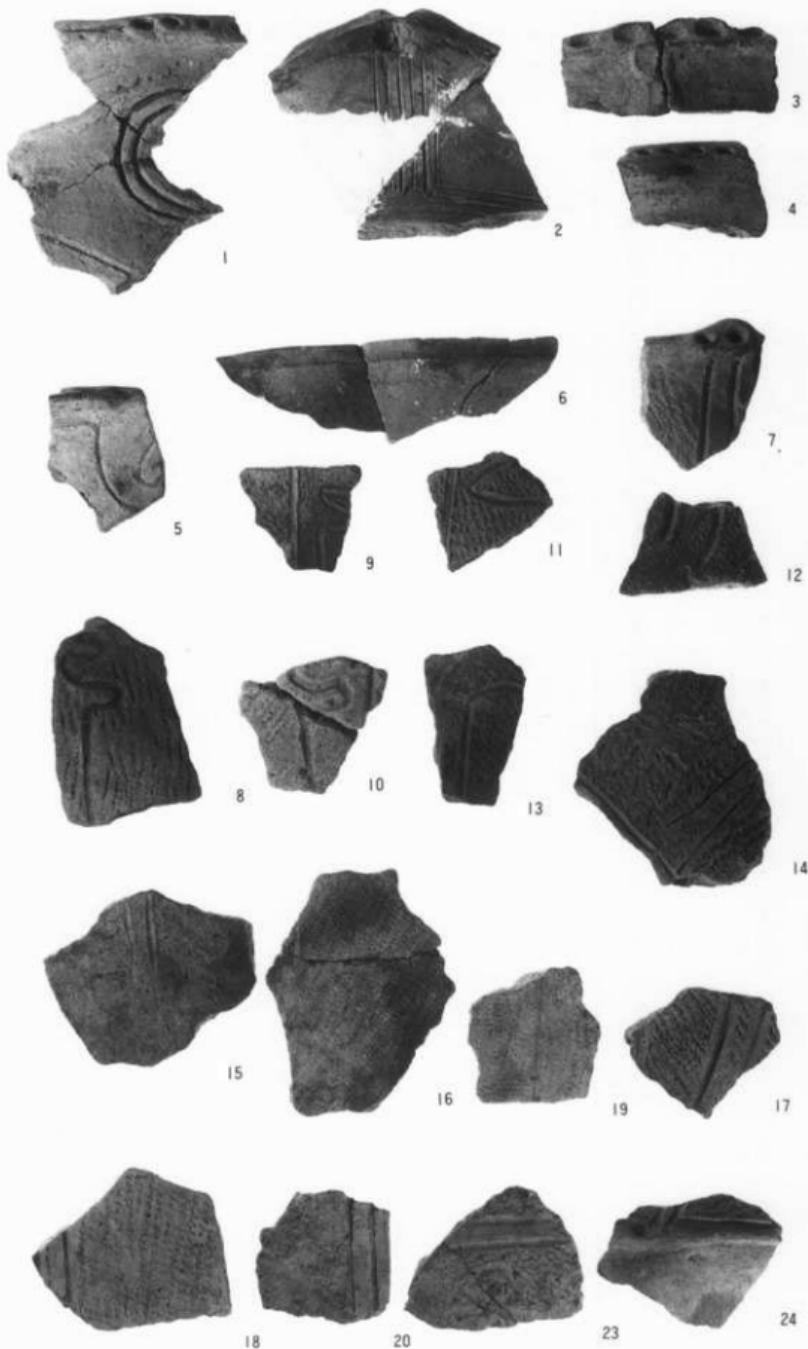
23

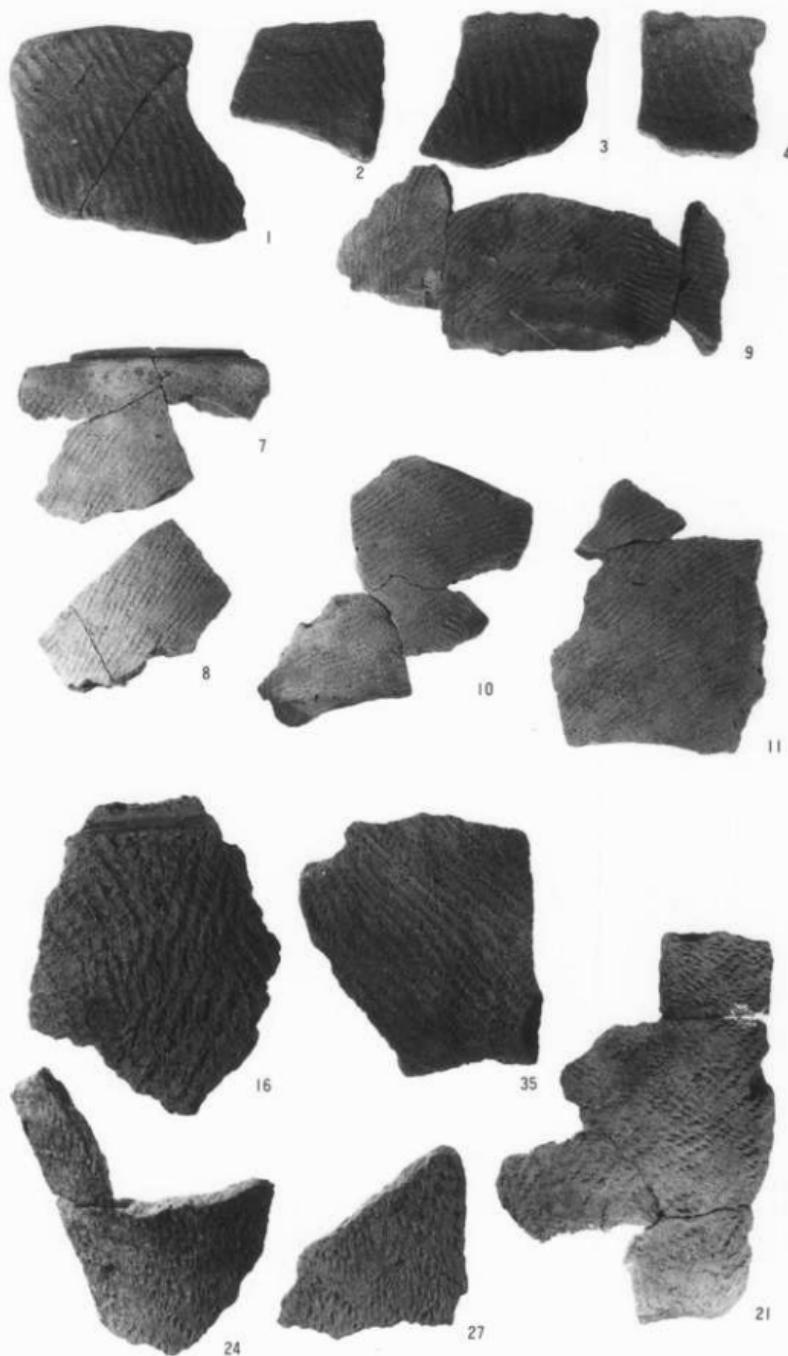


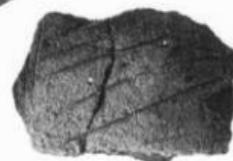




8 群土器把手







5



7



9



10



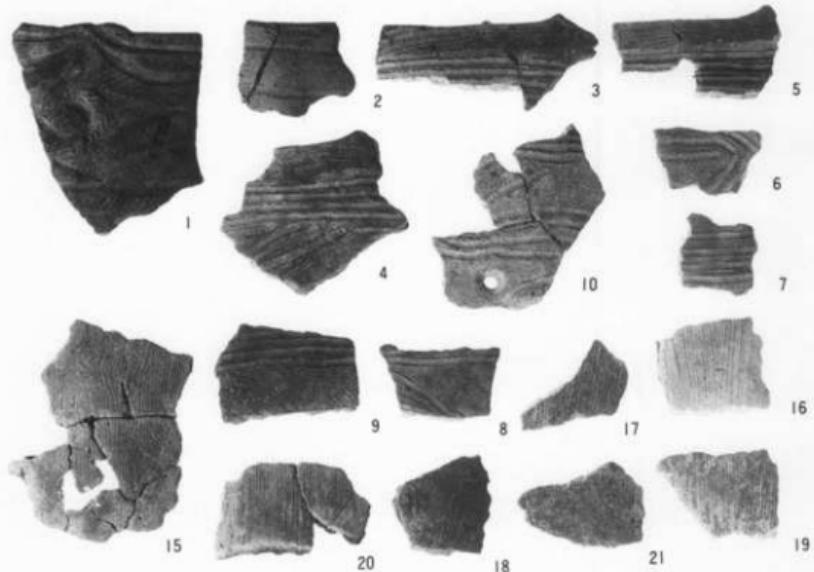
21



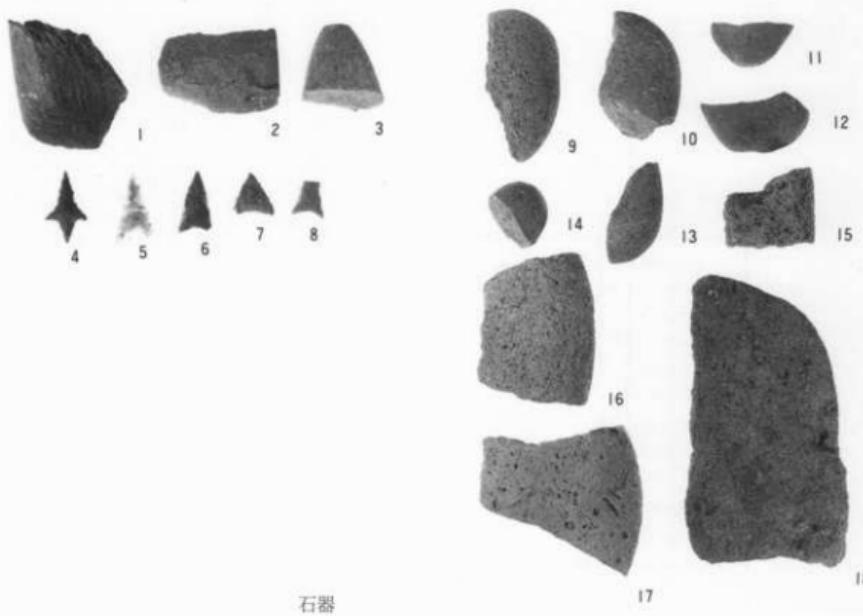
12



2

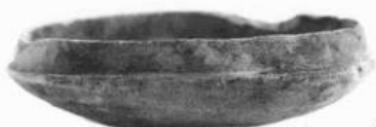


11群土器



石器

27号住居跡	31号住居跡
61グリッド	31号住居跡
27号住居跡	31号住居跡
27・31号住居跡	
31号住居跡	61グリッド
ミニチュア	



2



7



6



12



10



13



14



15



16



18



19



21



20

1号住居跡	3号住居跡
	3号住居跡
2号住居跡	
3号住居跡	
	3号住居跡
3号住居跡	
	3号住居跡



5



1



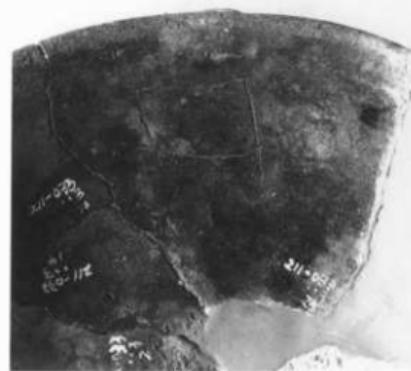
4



3



2



4



5



6



8

3号住居跡	3号住居跡
	3号住居跡
10号住居跡	6号住居跡
	10号住居跡
17号住居跡	15号住居跡



9



11



14



6

2



4



4



1

19号住居跡	
	19号住居跡
21号住居跡	
	21号住居跡
21号住居跡	
	21号住居跡
21号住居跡	
	21号住居跡



6



1



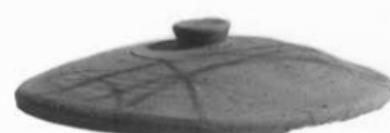
1



2



4



5



7



6

35号住居跡	
35号住居跡	35号住居跡
グリッド	
グリッド	グリッド
グリッド	グリッド
鉄製品	磁石、土製品



1



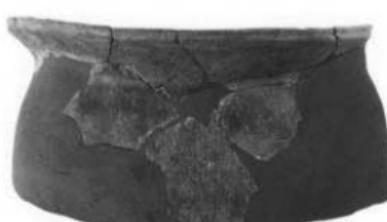
2



5



3



6



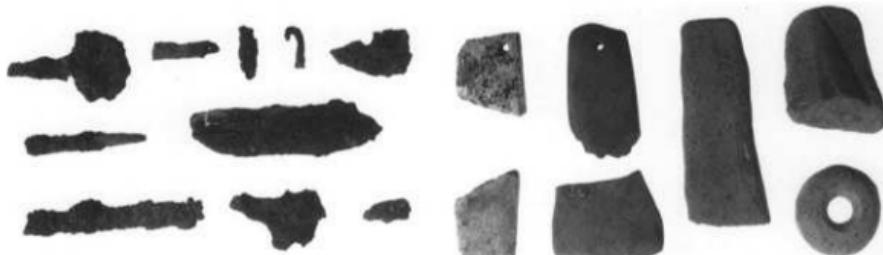
11



8



16



成田新住宅市街地内埋蔵文化財調査報告

山口雷土遺跡

昭和62年11月30日 発行

発行 千葉県企業庁

千葉市長洲1丁目9番1号

編集 財団法人 千葉県文化財センター

千葉市葛城2丁目10番1号

印刷 (有)みつわ軽印刷社

千葉市新港213-5

山口雷土遺跡 正誤表

104頁 第74図 14(27・31)
15(6 I) } を下図に訂正

